福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集

入部（いるべ） Ⅳ

1993

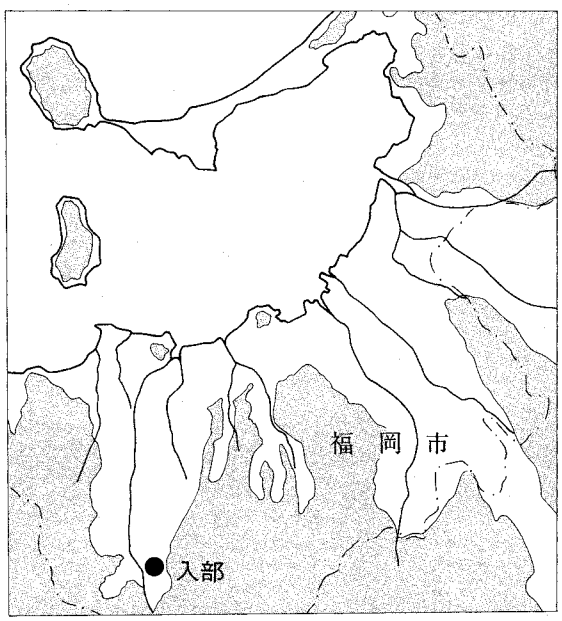
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第343集

IRU　　BE

入　部　Ⅳ

1991年度調査概要
岩本遺跡群第２次発掘調査報告
安通遺跡群発掘調査報告



1993

福岡市教育委員会

1991年度入部圃場整備地内調査地点上空から早良平野北部を望む

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。これを保護し未来へ伝えていくことは、云うまでもなく行政の務めであります。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

本書は昭和62年度から実施されてきた早良区入部地区の県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、平成3年度の調査概要と岩本、安通の2遺跡群の調査成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部で県営圃場整備に伴い発掘調査してきたうち，1991年度の調査概要，岩本遺跡群第2次調査および安通遺跡群の報告を掲載したものである。

1．東入部での県営圃場整備に伴う発掘調査の成果については以下の3冊が刊行されている。本書は4冊目に当たることから引続き書名を『入部IV』とした。この入部そのものは遺跡名を表すものではない。

『入部Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集　1990
『入部II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集　1991
『入部III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集　1992

1．本書で報告した遺跡群の調査細目は下表の通りである。

調査番号	遺跡名	遺跡略号	調査原因	所在地	調査面積	調査期間
9073	岩本2次	IWM-2	圃場整備	早良区大字東入部1929他	2421㎡	1990.12～1991.2
9164	安通1次	YDR-1	圃場整備	早良区大字東入部1966他	13051㎡	1991.6～12
9102	（入部）	－	詳細分布	早良区大字東入部地内	(17.3ha)	1991.4～5

最下段の詳細分布はIIで記す試掘調査に相当する。

1．本書では各遺跡群ごとに遺構を0001からの4桁の番号，遺物を001からの3桁の番号で通した。また遺構についてはSB（掘立柱建物），SD（溝），SE（井戸），SK（土坑），SX（その他の遺構）の略号を用い，番号の前に付けた。ピットに関しては特に略号は用いず，番号の後にピットとそのまま記した。

1．本書に用いた方位は磁北である。

1．現場での実測は濱石哲也，長家伸，池田祐司，榎本義嗣，英豪之，黒田和生が行い，また作業員の方々の協力を得た。現場写真は濱石，長家，池田，榎本が撮影し，航空および空中写真は(有)空中写真企画による。

1．本書作成にかかる遺物の実測・製図などは，執筆部分をそれぞれの担当者が行った。ただし岩本遺跡群では担当者の他遺物実測を英豪之，黒田和生が，また製図を村上かをり，野村智栄，樋口久子，亀井律子が行った。また安通遺跡群では製図を担当者の他村上，野村，樋口，戸畑智恵子，太田次子が行った。製図の全体的な調整，仕上げは村上が行った。

1．遺物写真は岩本遺跡群を菅波正人が，安通遺跡群を榎本義嗣が撮影した。

1．本書の作成に当たっては先に挙名した他，松尾真澄，有馬千恵美，大友和子，上田保子，緒方まきよ，前田みゆき，西島信枝の協力を得た。

1．本書に関わる図面，写真，遺物など一切の資料は，福岡市埋蔵文化財センターに収蔵，保管される予定である。

1．本書の執筆は濱石，長家，池田，榎本，屋山があたり，担当部分は本文目次に記した。また大澤正巳先生から鉄滓の調査報告を頂き，付論として掲載することができた。

1．本書の編集は濱石と榎本が行った。

本文目次

序
例言
本文頁
I　はじめに……（濱石哲也）1
II　1991年度調査概要……（濱石）3
1　調査組織……3
2　調査経過……3
3　調査遺跡群……6
III　岩本遺跡群第2次調査報告……9
1　遺跡の概要……（濱石）9
2　縄文時代の遺物……（池田祐司）9
3　弥生時代の遺構と遺物……（濱石）11
1）竪穴住居……11
2）掘立柱建物……32
3）土坑……33
4）甕棺墓……44
5）その他の遺構と遺物……44
6）小結……50
4　古墳時代の遺構と遺物……（長家伸）51
1）竪穴住居……51
2）土坑……85
3）その他の遺構と遺物……86
4）小結……86
5　平安～鎌倉時代の遺構と遺物……（濱石）87
1）掘立柱建物……87
2）土坑……92
3）溝……104
4）小結……105
IV　安通遺跡群調査報告……107
1　遺跡の概要……（榎本義嗣）107
2　1区の調査……（屋山洋）107
1）概要……107
2）遺構と遺物……107
(1)柵……107

(2)掘立柱建物 ……109
(3)井戸 ……111
(4)土坑 ……112
(5)溝 ……115
(6)その他の遺構と遺物 ……115
3　2区の調査 ……（屋山）119
1）概要……119
2）遺構と遺物……119
(1)溝 ……119
4　3区の調査 ……（池田）121
1）概要……121
2）遺構と遺物……121
(1)竪穴住居 ……121
(2)土坑 ……130
(3)その他の遺物 ……130
5　4区の調査 ……（池田）131
1）概要……131
2）遺構と遺物……131
(1)掘立柱建物 ……131
(2)土坑 ……136
(3)溝 ……138
(4)製鉄関連遺構 ……138
(5)ピット出土の遺物 ……140
(6)その他の遺物 ……142
6　5区の調査 ……（榎本）143
1）概要……143
2）古墳時代の遺構と遺物……143
(1)竪穴住居 ……143
3）中世の遺構と遺物……147
(1)掘立柱建物 ……147
(2)土坑 ……149
(3)溝 ……157
(4)製鉄関連遺構 ……160
7　小結 ……（榎本）162
付論　安通遺跡出土鉄滓の金属学的調査 ……（大澤正巳）163

図版目次

巻頭図版　1991年度入部圃場整備地内調査地点上空から早良平野北部を望む
図版１　１．清末遺跡群第３次調査全景　　２．東入部遺跡群第２次調査８区全景
図版２　岩本遺跡　１．全景（南から）　　２．全景（東から）
図版３　岩本遺跡　１．全景（上空から）　２．東北部（上空から）
図版４　岩本遺跡　１．西北部（上空から）２．東南部（上空から）
図版５　岩本遺跡　１．SC0508（西から）　２．SC0511・0512(東から)
図版６　岩本遺跡　１．SC0513（南から）　２．SC0514(南から)
図版７　岩本遺跡　１．SC0515（南から）　２．SC0518（北から）
図版８　岩本遺跡　１．SC0519（北から）　２．SC0520（北から）
図版９　岩本遺跡　１．SC0521（北から）　２．SC0522（北から）
図版10　岩本遺跡　１．SC0523（南から）　２．SC0526（西北から）
図版11　岩本遺跡　１．SC0528・0529周辺（北から）　２．SC0528・0529（北から）
図版12　岩本遺跡　１．SC0534（南から）　２．SK0204（南から）
図版13　岩本遺跡　１．SK0427（東から）　２．SK0434（西から）
図版14　岩本遺跡　１．SK0451（北から）　２．SX0533（北から）
図版15　岩本遺跡　１．SC0501（北から）　２．SC0502（西北から）
図版16　岩本遺跡　１．SC0503（南から）　２．SC0503・0527（東から）
図版17　岩本遺跡　１．SC0504（西から）　２．SC0505（北から）
図版18　岩本遺跡　１．SC0503・0505･(南東から)　２．SC0506（南から）
図版19　岩本遺跡　１．SC0507（東から）　２．SC0507炉（炭化物除去後）
図版20　岩本遺跡　１．SC0509（北から）　２．SC0510（南東から）
図版21　岩本遺跡　１．SC0516（南から）　２．SC0516炉
図版22　岩本遺跡　１．SC0517（北東から）２．SC0507・0509・0517・0524・0525（北から）
図版23　岩本遺跡　１．SC0524・0525（北から）　２．SC0532（西から）
図版24　岩本遺跡　１．SK0205（西から）　２．SK0365（北から）
図版25　岩本遺跡　１．Ⅰ群掘立柱建物全景（南から）　２．SB0211（北から）
図版26　岩本遺跡　１．SB0212（西から）　２．SB0213（西から）
図版27　岩本遺跡　１．SB0214（南から）　２．SB0215（南から）
図版28　岩本遺跡　１．Ⅱ群掘立柱建物全景（東から）
　　２．SK0001（西から）　３．SK0002（南から）
図版29　岩本遺跡　１．SK0003（南から）　２．SK0004（南から）
　　３．SK0005（北から）　４．SK0006（南から）

5．SK0007（西から）　6．SK0008（南から）
図版30　岩本遺跡　1．SK0009（南から）　2．SK0011（東から）
3．SK0021（南から）　4．SK0201（東から）
5．SK0203（東から）　6．SK0433（東から）
図版31　岩本遺跡出土遺物Ⅰ
図版32　岩本遺跡出土遺物Ⅱ
図版33　岩本遺跡出土遺物Ⅲ
図版34　岩本遺跡出土遺物Ⅳ
図版35　安通遺跡　1．1区全景（南東から）　2．1区SE0016（西から）
図版36　安通遺跡　1．1区SK0015（東から）　2．1区SK0017（西から）
図版37　安通遺跡　1．1区SX0001（北から）　2．1区SX0006（西から）
図版38　安通遺跡　1．1区SX0010（東から）　2．2区全景（南から）
図版39　安通遺跡　1．3区全景（北から）　2．3区SK0401（西から）
図版40　安通遺跡　1．3区SC0400（西から）　2．3区SC0400（西から）
図版41　安通遺跡　1．4区全景（南から）
2．4区掘立柱建物群（SB0581～0584）（東から）
図版42　安通遺跡　1．4区掘立柱建物群（SB0581～0584）（北から）
2．4区SK0411（北から）　3．4区SK0412（北から）
4．4区SX0481（南から）
図版43　安通遺跡　1．5区全景（北から）　2．5区SC0606（東から）
図版44　安通遺跡　1．5区SB1201（上空から）　2．5区SB1204（南から）
図版45　安通遺跡　1．5区SK1007（西から）　2．5区SK1154（東から）
3．5区SD0607土層（西から）　4．5区SD0610（北から）
図版46　安通遺跡　1．5区SX0601（南から）　2．5区SX0602（西から）
3．5区SX0603（北から）　4．5区SX0604（東から）
図版47　安通遺跡出土遺物Ⅰ
図版48　安通遺跡出土遺物Ⅱ
図版49　安通遺跡出土遺物Ⅲ
図版50　安通遺跡出土遺物Ⅳ

挿図目次

本文頁
第1図　入部圃場事業地の位置と早良平野の遺跡（1/50000）……2
第2図　入部圃場整備年次事業地と遺跡群（1/10000）……4

第３図　1991年度圃場整備事業地と調査区（1/2500）……折り込み
第４図　縄文時代出土遺物実測図（1/2, 1/3, 1/4）……10
第５図　弥生時代遺構配置略図（1/400）……11
第６図　SC0508実測図（1/60）……12
第７図　SC0512・0513実測図（1/60）……13
第８図　SC0514実測図（1/60）……15
第９図　SC0508・0513・0514出土遺物実測図（1/2, 1/4）……16
第10図　SC0515実測図（1/60）……17
第11図　SC0518実測図（1/60）……18
第12図　SC0515・0518出土遺物実測図（1/2, 1/3, 1/4）……19
第13図　SC0519・0521・0523・0530・0531実測図（1/60）……21
第14図　SC0519・0523・0530出土遺物実測図（1/2, 1/4）……22
第15図　SC0528・0529実測図（1/60）……23
第16図　SC0528・0529出土遺物実測図（1/2, 1/4）……24
第17図　SC0534実測図（1/60）……26
第18図　SC0511・0520実測図（1/60）……27
第19図　SC0522・0526実測図（1/60）……28
第20図　SC0511・0520・0526出土遺物実測図（1/2, 1/4）……30
第21図　SB0210実測図（1/100）……31
第22図　SB0210出土遺物実測図（1/4）……32
第23図　SK0204・0427・0434・0451・0458・0463実測図（1/40）……34
第24図　SK0204・0434・0444出土遺物実測図（1/2, 1/4）……35
第25図　SK0451・0458・0464出土遺物実測図（1/4）……36
第26図　SK0464・0469・0470・0487・0490・0551・0590実測図（1/40）……38
第27図　SK0469出土遺物実測図（1/2, 1/4）……39
第28図　SK0644・0710・0737・0747・0754・0759・0762実測図（1/40）……40
第29図　SK0551・0569・0585・0590・0619・0644・0710・0711出土遺物実測図（1/2, 1/4）
……42
第30図　SK0749・0754出土遺物実測図（1/4）……43
第31図　SX0533実測図（1/40）……44
第32図　SX0533甕棺実測図（1/8）……44
第33図　0328・0471ピット遺物出土状況実測図（1/20）……45
第34図　ピット出土遺物実測図Ⅰ（1/4, 1/6）……46
第35図　ピット出土遺物実測図Ⅱ（1/4）……47
第36図　出土弥生時代石器実測図（1/2, 1/3）……48

第37図　古墳時代遺構配置略図（1/400）……51
第38図　SC0501および出土遺物実測図（1/60, 1/4）……53
第39図　SC0502および出土遺物実測図（1/60, 1/4）……55
第40図　SC0503および炉跡実測図（1/60, 1/20）……56
第41図　SC0503出土遺物実測図Ⅰ（1/3, 1/4）……58
第42図　SC0503出土遺物実測図Ⅱ（1/3）……59
第43図　SC0504実測図（1/60）……60
第44図　SC0504出土遺物実測図（1/4）……61
第45図　SC0505実測図（1/60）……62
第46図　SC0505出土遺物実測図（1/3, 1/4）……63
第47図　SC0506実測図（1/60）……64
第48図　SC0506出土遺物実測図（1/3, 1/4）……65
第49図　SC0507および炉跡実測図（1/30, 1/60）……66
第50図　SC0507出土遺物実測図Ⅰ（1/4）……68
第51図　SC0507出土遺物実測図Ⅱ（1/4）……69
第52図　SC0507出土遺物実測図Ⅲ（1/4）……70
第53図　SC0507出土遺物実測図Ⅳ（1/4）……71
第54図　SC0509および出土遺物実測図（1/60, 1/4）……73
第55図　SC0510および出土遺物実測図（1/60, 1/4）……75
第56図　SC0516および出土遺物実測図（1/60, 1/4）……76
第57図　SC0517実測図（1/60）……78
第58図　SC0517出土遺物実測図（1/3, 1/4）……79
第59図　SC0524・0525実測図（1/60）……80
第60図　SC0524・0525出土遺物実測図（1/4）……81
第61図　SC0527・0532実測図（1/60）……83
第62図　SK0113・0205・0262・0365・0745実測図（1/40）……84
第63図　SK0365, SX0635出土遺物実測図（1/4）……85
第64図　平安～鎌倉時代遺構配置略図（1/400）……87
第65図　SB0211・0212・0213実測図（1/100）……88
第66図　SB0214・0215実測図（1/100）……89
第67図　SB0216・0217・0218・0219・0220実測図（1/100）……90
第68図　掘立柱建物およびピット出土遺物実測図（1/2, 1/3）……91
第69図　SK0001・0002・0003・0004・0006実測図（1/40）……94
第70図　SK0005・0007・0008・0009・0010実測図（1/40）……95
第71図　SK0011・0012・0013・0014・0017・0018実測図（1/40）……96

第72図　SK0016・0021・0025・0026・0027・0029・0030・0042実測図（1/40）……97
第73図　SK0087・0137・0140・0148・0150・0184・0201実測図（1/40）……98
第74図　SK0203・0267・0278・0299・0302・0305・0433実測図（1/40）……99
第75図　SK0001・0002・0003・0004・0005・0011・0012・0015出土遺物実測図
（1/2, 1/3, 1/4）…100
第76図　SK0021出土遺物実測図（1/3, 1/4）……102
第77図　SK0137・0139・0278・0299・0433・0603出土遺物実測図（1/2, 1/3, 1/4）……103
第78図　SD0022・0202・0478出土遺物実測図（1/3, 1/4）……104
第79図　安通遺跡群1区遺構配置図（1/200）……108
第80図　SA0371実測図（1/100）……109
第81図　SB0372・0373・0374・0375・0376・0377実測図（1/100）……110
第82図　SB0372・0373・0375出土遺物実測図（1/3）……111
第83図　SE0016遺構, 出土遺物実測図（1/60, 1/3, 1/2）……112
第84図　SK0014・0015・0017・0021・0022・0025・0034・0309実測図（1/30）……113
第85図　SK0014・0015・0017・0021・0022・0034出土遺物実測図（1/3）……114
第86図　SX0001・0003・0004・0006・0007・0010・0013実測図（1/20）……116
第87図　SX0001・0003・0004・0006・0007・0010・0013出土遺物実測図（1/3）……117
第88図　安通遺跡群2区遺構配置図（1/400）……118
第89図　SD0381出土遺物実測図（1/3）……119
第90図　SD0382出土遺物実測図（1/3）……120
第91図　SC0400, 炉跡実測図（1/60, 1/30）……122
第92図　SC0400出土遺物実測図1（1/4）……123
第93図　SC0400出土遺物実測図2（1/4）……124
第94図　SC0400出土遺物実測図3（1/4）……125
第95図　SC0400出土遺物実測図4（1/4）……127
第96図　SC0400出土遺物実測図5（1/4, 1/2）……128
第97図　SK0401実測図（1/40）……129
第98図　その他の遺物実測図（1/3, 2/3）……130
第99図　SB0581実測図（1/100）……131
第100図　SB0581出土遺物実測図（1/3）……132
第101図　SB0582・0583実測図（1/100）……134
第102図　SB0582・0583・0584出土遺物実測図（1/3）……135
第103図　SB0584実測図（1/100）……136
第104図　SK0411・0412・0537・0567, SX0480・0481実測図（1/40）……137
第105図　SK0411出土遺物実測図（1/3, 1/4）……138

第106図　SK0412・0537, SX0480・0481・0567出土遺物実測図（1/4）……139
第107図　ピット出土遺物実測図（1/3）……141
第108図　その他の遺物実測図（1/3, 1/2, 1/1）……142
第109図　SC0606実測図（1/60）……144
第110図　SC0606出土遺物実測図1（1/4）……145
第111図　SC0606出土遺物実測図2（1/2, 1/4）……146
第112図　SB1201・1202・1203・1204実測図（1/100）……148
第113図　SB1203出土遺物実測図（1/3, 1/4）……149
第114図　SK0608・0609・0613・0614・0618・0620・0621実測図（1/20, 1/40）……150
第115図　SK0625・0627・0638・0641・0646・0652実測図（1/40）……151
第116図　SK0656・0679・0685・0696実測図（1/40）……152
第117図　SK0766・1007・1016・1027・1034実測図（1/40）……153
第118図　SK1070・1096・1154実測図（1/40）……154
第119図　SK0608・0613・0614・0618・0638・0646・0679・1007・1154出土遺物実測図（1/3）……155
第120図　SD0607土層断面, SD0610実測図（1/40）……157
第121図　SD0607・0610・1006出土遺物実測図（1/3）……158
第122図　SX0601・0602・0603・0604実測図（1/20）……159
第123図　SX0601・0602・0604・0605出土遺物実測図（1/3）……161

表目次

第1表　入部地区圃場整備事業地内発掘調査年度別一覧……1
第2表　1990・1991年度調査遺跡群一覧……6
第3表　掘立柱建物一覧……91
第4表　土坑一覧I……92
第5表　土坑一覧II……93
第6表　土坑出土土師器小皿・杯法量一覧……106

付図

付図1　岩本遺跡群第2次調査遺構配置図（1/100）
付図2　安通遺跡群3・4・5区遺構配置図（1/200, 1/300）

I　はじめに

福岡市早良区大字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に示されたのは1985年（昭和60年）のことである。それは約100ヘクタールの耕地を対象とし、1987年度から８ケ年にわたって圃場整備を行うという計画であった。

埋蔵文化財課では事業地内のほぼ全域にわたり重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の８遺跡群と拝塚古墳が分布することを確認した。しかしそれまでに調査されたのは、四箇東と清末の２遺跡群の一部にしかすぎず、遺跡群の全域が事業地内に含まれる重留、岩本、東入部についてはその広がりを類測する以外はほとんど情報を持ち合わせていなかった。

そこで埋蔵文化財課は1986年３月に事業地内の遺跡群と拝塚古墳を試掘調査した。その結果、遺跡群では溝、柱穴などを、また拝塚古墳では周溝と葺石を検出した。出土遺物からすると弥生時代と中世を主体としたかなり密度の濃い遺跡群が、事業地のほぼ全域に広がっていることが改めて確認された。

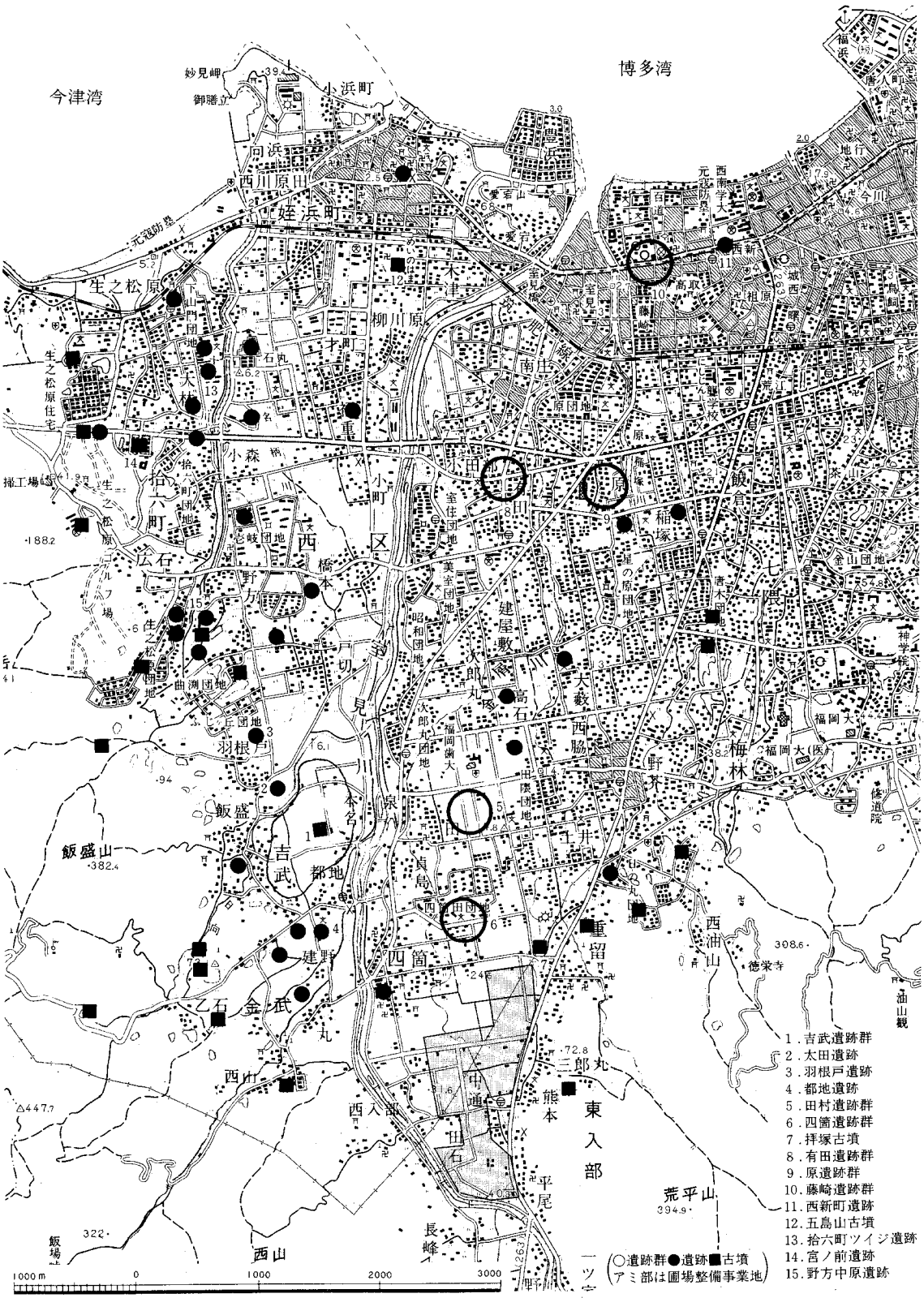
埋蔵文化財課ではこの試掘調査の結果などをもとに事業者と協議をもち、翌年度から工事が遺構に及ぶ箇所について発掘調査で対応することとした。実際の発掘調査は1988年１月に開始し、以後今年度まで６ケ年にわたって調査を継続してきた（第１表）。

調査年度	事業面積	調査対象面積	本調査期間	対象遺跡群
1987	5.0ha	12,500m²	1988.1.6～1988.3.31	四箇東
1988	15.2ha	15,000m²	1988.6.21～1989.4.7	重留
1989	15.9ha	16,200m²	1989.8.1～1990.3.26	重留（２次）・岩本・四箇船石
1990	15.2ha	22,294m²	1990.7.18～1991.3.8	清末(2次)・岩本(2次)・四箇船石(2次)・東入部
1991	21.7ha	34,381m²	1991.5.13～1992.3.5	清末（３次）・東入部(2次)・安通
1992	14.0ha	13,832m²	1992.5.20～1993.	東入部（３次）

第１表　入部地区圃場整備事業地内発掘調査年度別一覧

発掘調査は事業面積が多くなった1988年度以後、次の手順を踏んで行っている。まずその年度の事業地の試掘調査を行い、遺跡の範囲、性格、遺構面までの深度などを確認する。その結果に基き、遺跡範囲内の新設の構造物（用水路・排水路・道路）についてはすべて本調査、削りが遺構面に達する田面、あるいは表土（耕作土）直下が即遺構面となる田面については基本的に本調査とする。ただ田面に関しては事業者と田面高の見直しなど設計変更をはかり、調査対象面積を最小にする方針をとっている。これは文化財側が体制、期間、費用などの点から広大な面積への調査対応が困難であるところからきている。また調整および調査を円滑に行うため、事業者と設計や工事方法の変更についての協議事項を取り決めている。

本書では1991年度の発掘調査の概要と、1990年度に調査した岩本遺跡群２次調査、1991年度に調査した安通遺跡群についての本報告を行う。



第Ⅰ図　入部圃場事業地の位置と早良平野の遺跡（1/50000）

II　1991年度調査概要

1　調査組織

事業主体（県営入部地区圃場整備）

福岡県農林事務所農地整備鉱害課

福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市入部土地改良区

調査主体

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長　　折尾学

第１係長　飛高憲雄

第２係長　塩屋勝利

庶務　　中山昭則

調査担当　濱石哲也　長家伸　池田祐司　榎本義嗣

調査補助　林田憲三　英豪之　黒田和生　加藤隆也　屋山　洋

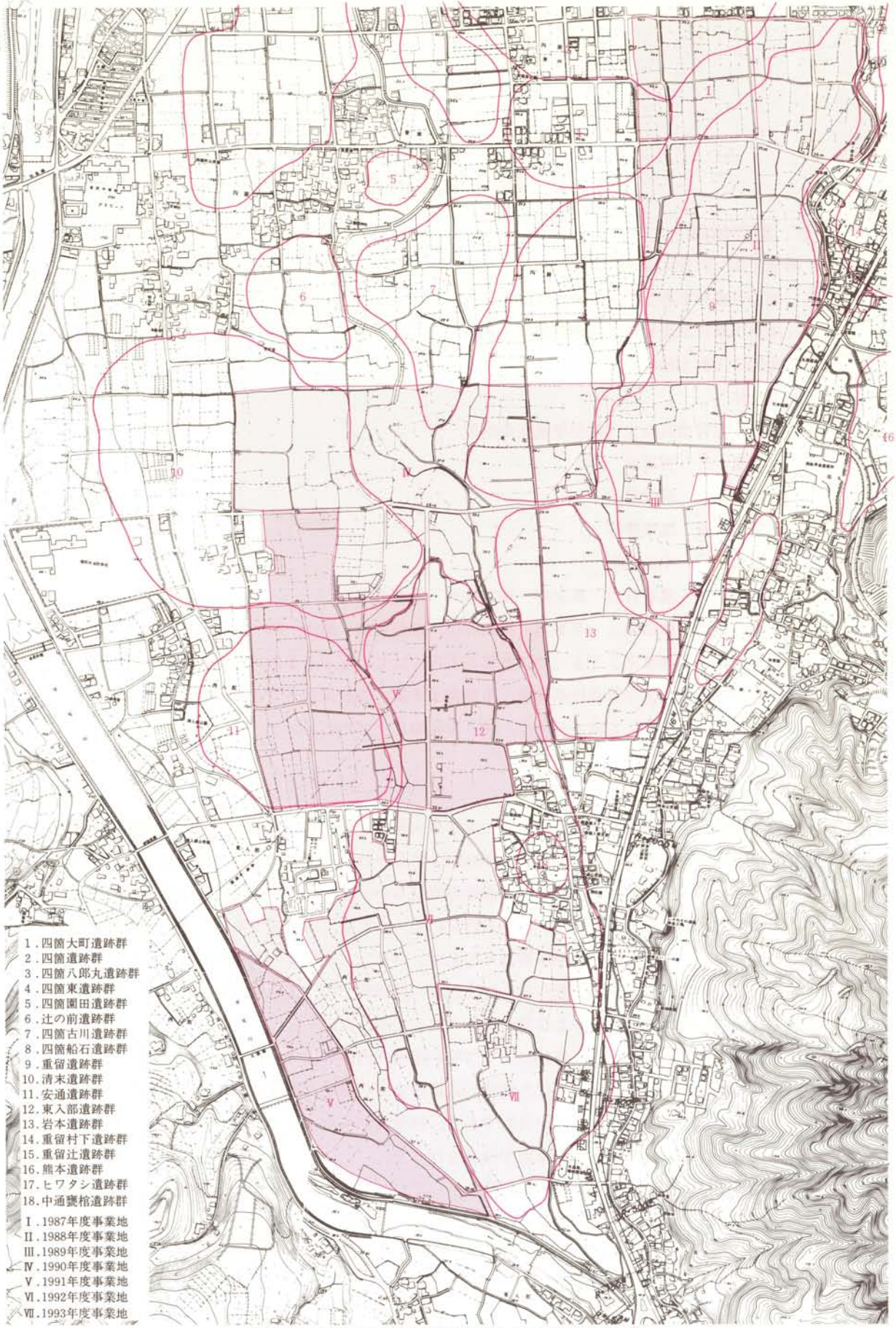
なお発掘調査が無事完了できたのは有田吉太氏をはじめとする多数の作業員の方々のご協力のたまものである。また県農林事務所、市農業土木課、改良区の方々、㈱岡崎産業、㈱西部産業には直接的にご指導、ご協力をえた。深くお礼申し上げたい。

2　調査経過

1991年度の圃場事業地は前年度の南側、大字東入部の中通工区（173000㎡）と事業地西南側、室見川沿いの大字西入部の西入部工区（44000㎡）に分かれ、事業面積はあわせて21.7ヘクタールに及んだ。西入部工区は分布調査での遺跡確認はなかったが、中通工区は昨年度からの続きである清末遺跡群、東入部遺跡群、岩本遺跡群の他、これまで未調査であった安通遺跡群が確認されていた。このうち東入部遺跡群はその立地、字名、また地元の人々の話などからして、濃厚な遺跡、遺物の広がりが予想された。また清末遺跡群では、前年度確認した中世居館の環濠がどれくらい南まで延びるかも注目したいところであった。

試掘調査　４月２日から５月10日まで圃場整備地内遺跡詳細分布調査として実施した。この調査は、遺跡の範囲、遺構の時代と性格、遺構面までの深さ、埋蔵状況などを把握し、圃場事業と埋蔵文化財の調整を計るのが目的である。機械（バックホー）を用いてトレンチを掘削し、写真撮影および遺構・土層の略測図作成を行った。

西入部工区では、12本のトレンチを開けた。いずれのトレンチも耕作土・床土下が砂礫の堆積となっており、室見川の旧河道あるいはその周辺の氾濫源と考えられた。トレンチ内からは



第２図　入部圃場整備年次事業地と遺跡群（1/10000）

第3図　1991年度圃場整備事業地と調査区（1/2500）

0　200m

中世の遺物が若干出土しただけで、遺構の検出はなかった。この結果から、西入部工区の発掘調査は不要と判断した。

中通工区では、北流する旧河川を想定して、主に東西方向のトレンチ62本を設定した。調査の結果、工区東端および中央に旧河川を確認するとともに、工区全体にわたって粗密の加減はあるものの遺構・遺物の出土をみた。先述した遺跡群ごとの試掘結果は次の通りである。

清末遺跡群では表土直下で土坑、溝、ピットなどを確認した。古墳時代の住居跡もあるが、大半は鎌倉時代に属し、前年度の居館跡に関係する遺構が連なるものと考えられた。また遺構のほとんどは表土直下に認められた。

安通遺跡群では土坑、溝、ピットなど鎌倉時代の集落跡を確認した。一部のトレンチには古墳時代の遺構もみられる。全体的に遺構の密度は濃い感じを与える。

東入部遺跡群は全体にわたって遺構の密度がきわめて濃い。南半部では表土直下で弥生時代の甕棺墓、住居跡、土坑、ピットなどを多数検出し、集落と墓地が一体となった遺跡である可能性が高かった。甕棺墓はトレンチ内だけで十数基確認し、対象地内では100基を越えるものと予想された。北半部では古代から中世の遺構、遺物を確認した。中世の遺物が大量に入る包含層も認められた。遺構、包含層の検出面は表土直下から深いところでも20cm程度でしかなかった。安通、清末遺跡群と旧河川を隔てて接する西部では、縄文時代終末の甕棺墓、鎌倉時代の土坑、溝、ピットなどがみられた。遺構のほとんどは表土直下であった。

岩本遺跡群の範囲は貞島川の氾濫源となっており、遺構も確認できなかった。また工事の施行方法がほとんど盛土であったため調査対象地から外した。

以上のように中通工区では旧河川を除いた大半の部分に縄文時代から中・近世に及ぶ遺跡の分布を確認した。それは工事の当初計画に照らし合わせると、発掘調査を要する面積は102400㎡で、工事区の60%にも達した。なお各遺跡群の広がりは第3図に示した。

本調査　埋蔵文化財課は、先の面積を年度内に発掘調査するのは従事職員数および期間の面から不可能であり、設計変更などにより調査対象面積を縮小するよう事業者側に要請した。その後県市農政、地元改良組合と数度にわたる調整会議をもち、7月には主に盛土などによる田面高の変更により、調査面積を34381㎡まで縮小した。事業者側はこれ以上の設計変更は困難であるとし、また埋蔵文化財課でも翌年の2月末までの調査期間であれば調査終了が可能と判断し、この新しい設計のもとで本格的に調査を進行することになった。

一方、これらの調整を待たず、構造物など設計変更が困難な部分について本調査を行うこととし、5月13日、東入部遺跡群6区の表土剝ぎを開始した。その後7区、安通遺跡群1区と進み、調査面積が確定した8月から東入部遺跡群8区へと入った。この地区は当初の予想を越える遺構の密度で、検出した160基近い弥生時代の墓地は区画をもつことが判明し、また副葬品の出土が相次いだ。新聞の記事に取り上げられたことも数度にわたった。埋蔵文化財課では墓地

の全貌がほぼ確認できた11月16日に現地説明会を開催し、遺跡と出土遺物を公開した。この8区の調査が終了したのは翌年1月であった。当初2人であった調査職員が8月下旬1人増え、10月中旬には脇山地区圃場遺跡調査が終了し、さらに職員1人と作業員が合流した。このため複数地区にわたって調査を展開し、年末までに安通遺跡群をほぼ終了するとともに、東入部遺跡群の9～15区の調査にも着手した。東入部遺跡群11～13区は中世の層が厚く、また遺構が錯綜しており、期間とのかねあいで調査は困難をきわめたが、田面のうち削平が及ばない下面部分を今後の調査に期すことで2月末には決着を見た。東入部遺跡群8区のめどがついた1992年1月、清末遺跡群の調査を開始し、遺構が比較的点在していたことなどから3月初めには調査を終了した。その後器材の撤収などを行い、3月5日に1991年度の発掘調査を完了した。

この調査期間中、県農林事務所、市農業土木課、地元改良組合、また年度後半には工事業者も入れ、月にほぼ一度の割合で工程会議をもち、発掘調査と工事の調整を計った。

3　調査遺跡群

事業地は福岡市の西南に広がる早良平野の南端部近くに位置する。この早良平野およびそれを取り囲む山陵には、旧石器時代から近世にいたる様々な遺跡群が分布している。1970年代後半以降は福岡市の著しい都市化により、この一帯も激しい開発が進行し、それに伴う遺跡の発掘調査も相当の件数に及んでいる。

本事業地内には重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の8遺跡群と拝塚古墳が知られており、1991年度はこのうち清末（第3次調査）、安通（第1次調査）、東入部（第2次調査）の3遺跡群が調査の対象になった（第2表）。ちなみに入部地区の圃場整備事業に伴う今後の発掘調査の対象遺跡は1992、1993年度の東入部遺跡群だけである。

1991年度に調査した遺跡群のうち今回報告するのは安通遺跡だけである。残りの2遺跡群についてはまだ整理の途についておらず、現条件下では本報告の時期はかなり先になるものと予想される。ここではこの未報告になる2遺跡についての概要を記しておく。

遺　跡　名	調査番号	調査区	調査対象面積	調査原因	備　　考	報告
四箇古川1次	9070	1・2	771m²	用・排・田	田面調査の江戸時代墓地を2区とする。	310集
四箇船石2次	9071	1・2	3,605m²	用・排・田		310集
清末2次	9072	1～9	10,044m²	用・排・道・田	4区田面は埋戻し保存。調査は中世遺構のみ。	310集
岩本2次	9073	－	2.421m²	用・排・田		本報告
東入部1次	9074	1～5	5,453m²	用・田		
清末3次	9163	10	4,492m²	用・排・道・田		
安通1次	9164	1～5	13,051m²	用・排・道・田		本報告
東入部2次	9165	6～15	16,271m²	用・排・道・田	8区墓地は埋戻し。12区は上面遺構だけの調査で下部は保存。	

第2表　1990・1991年度調査遺跡群一覧

調査原因の用…用水路，排…排水路，道…道路，田…田面の略。報告は福岡市埋蔵文化財調査報告書。

清末遺跡群第３次調査（図版１－１）　遺跡は事業地西北部の沖積地に立地し、第１次調査が1977年、第２次調査はこの圃場整備に伴い1990年に行った（報告は1992年、福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集）。今回の調査は第２次調査で居館を確認した４区の南側にあたる。検出したのは縄文時代遺物包含層、古墳時代集落、鎌倉時代集落、江戸時代集落である。

縄文時代の包含層は北側で確認し、後期の土器、石器がまとまって出土した。また南側では同時期の埋甕を２基検出した。古墳時代の集落は竪穴住居からなり、北側と東南側の２地点に分かれ、４～５棟ずつまとまる。時期は前期。住居内からは多くの土師器が出土した。鎌倉時代の集落は掘立柱建物、井戸、土坑などからなり、調査区のほぼ全域に広がる。南北に走る溝が中央を縦断し、前年度の大溝（SD0060）と接続する。また居館を囲む溝の南側部分を調査対象地外にもかかわらずトレンチを開けて確認し、居館規模が溝の内側で南北75m、東西35m、面積にして約2600㎡、800坪弱であったことが判明した。井戸を中心に土師器、輸入陶磁器などが出土した。江戸時代の集落は周溝をめぐらすもので、その中に井戸や一部建物礎石を確認したが、大半は調査区外にかかり、全容は解明できなかった。周溝からは多量の国産陶磁器類が出土した。

東入部遺跡群第２次調査（図版１－２）　荒平山の西麓から西北方向に舌状に延びる丘陵上に広がる遺跡群で、昨年度その北端部分で第１次調査を行った。今年度の調査地区はその南で、遺跡群全体としては中央から北半部にほぼ相当する。

６・７・９・10区は丘陵の北西から西縁にあたり、西側は旧河川へと傾斜し、安通遺跡群と相対する。遺構検出面は地山の礫の所がほとんどで、縄文時代終末墓地、弥生時代集落および古墳、中世の集落などを検出した。縄文時代の墓地は16基の甕棺墓と１基の土壙墓から構成され、一部の墓には副葬の小壺がみられた。古墳時代初頭の竪穴住居は焼失した痕跡が認められた。また古墳は横穴式石室をもつ円墳と考えられるが開田時に破壊され、玄室床面がかろうじて残存するに過ぎなかった。耳環、鉄製品、須恵器などが玄室及びその周辺から出土した。中世の集落は掘立柱建物からなるが、遺構の密度は薄い。

８区は丘陵中央のほぼ尾根線上から西側斜面にかけての部分にあたる。ここでは弥生時代集落・墓地、古墳、奈良時代集落などを確認した。弥生時代の集落は前期後半から中期にかけての円形竪穴住居を主体としたもので、調査区西から北方向に連なり、13区南側部分を合わせると全部で16棟検出した。試掘トレンチの状況からすると、西側の調査区外に住居の広がりが推測される。この他長方形竪穴住居や貯蔵穴などもある。

墓地は集落の東側に近接し、南北方向に約100mにわたって造られている。甕棺墓130基、土壙・木棺墓30基のあわせて160基からなり、その造築時期は前期後半から後期初頭に及ぶ。当初墓地は中央西側に造られ、中期前半にはその周囲をとりまくように拡大しているが、中期中頃には新たに南北２ケ所の方形区画墓（墳丘墓）が築造された。北側方形区画墓は南北16m、東西14

m、区画内には24基の墓が営まれ、南側方形区画墓は南北10m、東西11mで11基の墓を確認した。中期末以降の墓は区画の溝内やその周辺に散在する。なお区画をなす溝からは多数の祭祀土器が出土した。また160基の墓のうち人骨を残存するものはほとんどなかったが、墓地中央西側の957号木棺墓（前期末）から細形銅剣（30.0cm）、84号甕棺墓（中期初頭）から細形銅剣（31.6cm）、679号木棺墓（前期末）から磨製石剣片４、墓地中央東側の127号甕棺墓（中期前半）から銅釧10（外径6.5cm前後）、北側区画墓の104号甕棺墓（中期後半）から鉄素環頭刀子（26.0cm）、106号甕棺墓（中期後半）から鉄矛（43.0cm）、113号甕棺墓（中期後半）から鉄剣（35.0cm）と鉄鉇、114号甕棺墓（中期後半）から鉄刀？（26.0cm）が出土した。また南側区画墓からも鉄矛が出土している。

古墳は墳丘が残存せず、当初は予想もしなかったものであるが、木棺、小形竪穴式石室を主体部とする円墳各々１基、横穴式石室を主体部とする円墳２基を検出した。横穴式石室は石材の抜き跡や玄室の敷石でその形態をたどれるに過ぎなかったが、残りの２基の主体部はほとんど原形を保っていた。４世紀から６世紀末にかけて造築されたものである。古代～中世の遺構は掘立柱建物、土坑などであるが、その数量は少ない。また古墳時代以降、弥生時代の墓地と重複する遺構はほとんど見られなかった。

11・12・13区は８区の北に続く丘陵尾根線上にあたり、うち13区は上面では中世の集落が、下面では弥生時代の集落が８区から延びてきていた。また11区では縄文時代後期包含層、弥生時代中期初頭甕棺墓や古墳時代の竪穴住居など、第１次調査地点の南側への広がりを確認することができた。しかし12区を中心とした中世の遺構と遺物は予想をはるかに越えたものであった。11区及び13区の間には幅9.0mの大溝が東西方向に走り、それは試掘調査の結果を考慮すると内側で１辺74～75mほどの方形溝となり、12区はその内側部分であることが判明した。12区は足の踏み場もないほどの遺構と遺物の密集度で、土坑状の遺構が複雑に重複し、遺構の配置や性格を窺うのが困難な状況であった。鎌倉時代を中心とした居館、あるいは寺院と考えられるが、詳細は今後の整理に待ちたい。

14・15区は丘陵の東斜面上にあたる。弥生時代の遺構も若干見られたが、主に中世の集落であり、掘立柱建物、井戸、溝などを検出した。遺構の密度は薄かった。

なお８・11・12区の田面の発掘調査については工事削平が及ぶ部分までにとどめ、また８区の弥生時代の墓地部分は調査後埋め戻しを行い、今後に託した。

III　岩本遺跡群第2次調査報告

1　遺跡の概要

岩本遺跡群は早良平野の東南部、油山山塊に属する荒平山(標高394m)の西麓から西北方向に延びる低丘陵上にあり、南北約600m、東西約300mの広がりをもつ。遺跡の標高は北端で29m、南端で33mである。西側は貞島川を境に東入部遺跡群と対峙し、旧河川あるいは浅い谷を隔てて北は四箇船石遺跡群、北東は重留遺跡群が接近する。

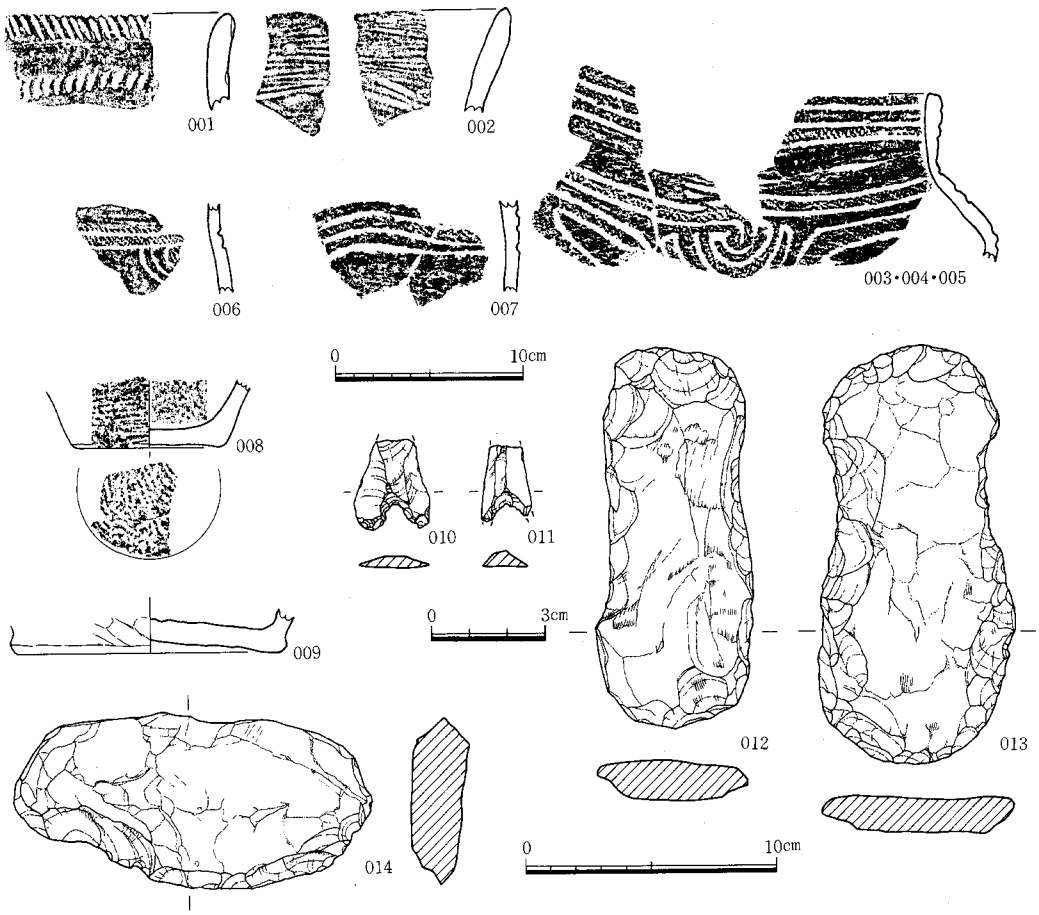
岩本遺跡群の最初の発掘調査は1989年度の圃場整備事業に伴うものである。この年度の調査は、重留（第2次)、四箇船石（1次）と岩本の3遺跡群にまたがっており、報告（福岡市教育委員会『入部II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集、1991）によれば第1、2、3－I～IV、4、5、6、7、9－I、12－I～IV、13、14地点が岩本遺跡群内での調査となっている。この調査により、遺跡群の大半の状況は確認されたといえよう。中世の集落が遺跡群の数地点にわたって確認されており、また弥生時代と古墳時代の遺構は遺跡群の北部に集中しているようである。1991年には遺跡群東南部の郵便局建築に伴う第3次調査が行われ、弥生中期の谷水田を検出している（福岡市教育委員会『岩本遺跡―岩本遺跡群第3次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第342集、1993)。

ここに報告する第2次調査地点は遺跡群の北西部に位置し、第1次調査の12－III、13地点と近接する。標高30.55m、西側と北側にむかい緩やかに下る。調査は構造物及び田面の切土部分を対象にし、発掘面積は2304m²であった。遺構はほとんど表土直下で検出し、地山は黄褐色砂質土が大部分を占めた。北側には地山上に弥生土器を大量に含む黒色土の2次堆積があり、また西南には段落ちの上に灰褐色砂質土が堆積し、その上面では中世遺構を確認した。

調査は対象地の表土をすべて機械（バックホー）で除去した後、作業員を入れて遺構検出を行った。遺構はその種類を問わずほぼ検出順に0001から0764まで番号を与えた(欠番あり)。ただ掘立柱建物は0210～0221、また竪穴住居は0501～0532のまとまった番号を付けた。ピットの番号は原則的に遺物を出土したものだけである。検出したのは弥生時代、古墳時代及び平安～鎌倉時代の集落跡が主で、縄文時代は遺物だけの出土である。以下、本書では各時代ごとにその遺構と遺物についての観察を行う。なおこの報告は田面切土部分のみに関わるものである。

2　縄文時代の遺物

001はわずかに外反する鉢で、内外面ともに細かい研磨調整を施す。口唇部には上から下へ細い刻み目を、口縁下には2枚貝による連続刺突文を施す。黄色を帯びた茶色を呈す。002はやや外反する深鉢の口縁部で内外面に横方向の2枚貝による条痕を施す。外面は茶褐色から暗褐色、内面は暗茶褐色を呈す。003～005は整理番号を付けた後に接合したものである。屈曲した口縁



第4図　縄文時代出土遺物実測図（010・011…1/2、012・013・014…1/3、他1/4）

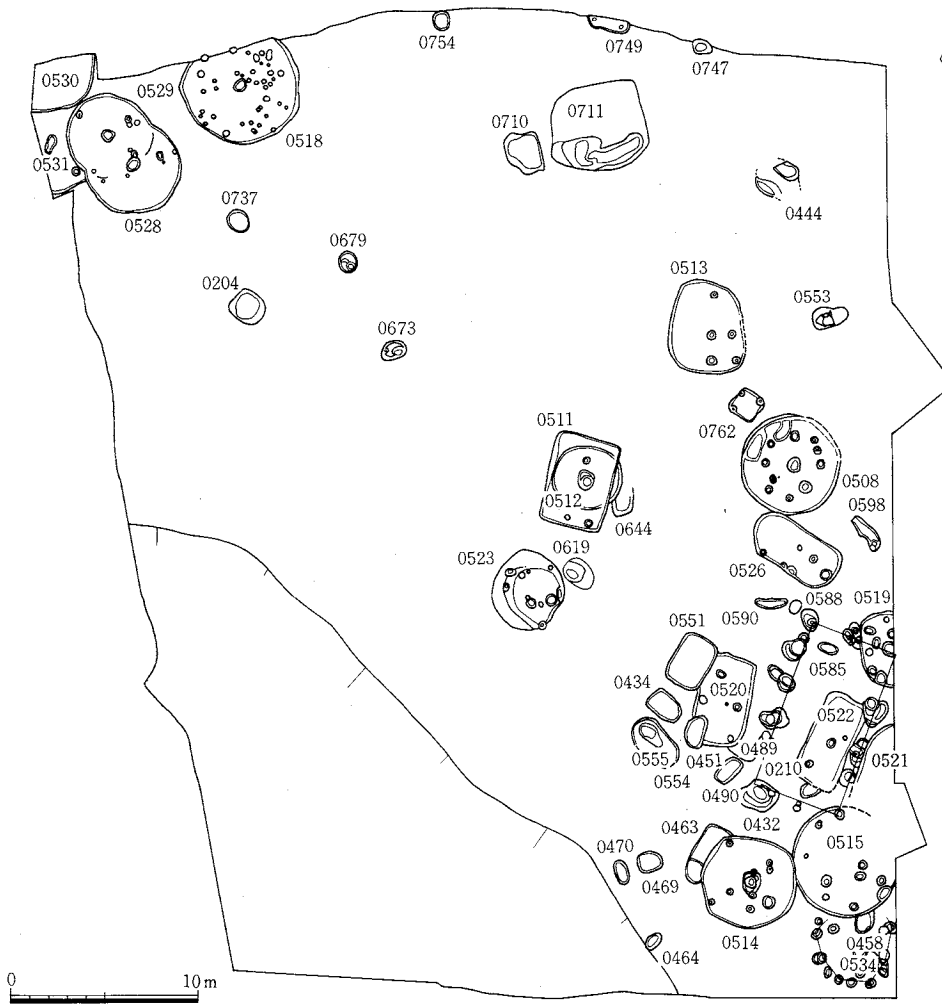
部は、やや外反して立つ。口唇部はナデ調整よりわずかにくぼむ。口縁部は波頂部を持つと思われる。文様は集約部には入組文とそれを囲む半同心円文を施す。入組部を成す沈線は連結せず、連続反転して半同心円文につながる。外面は研摩調整、内面はヘラナデまたは粗い研摩調整である。外面は暗灰色、内面は黄灰色を呈す。006は2本の横走沈線間に充填縄文を施し、半同心円文を描く。沈線は細身ではあるが鋭く細い。外面は研摩調整で灰褐色を呈し、内面は淡灰色を呈す。007は沈線に沿って破損し、それを含めて4本の沈線が見られる。充填縄文は部分的である。外面は研摩調整、内面は研摩、または篦ナデ調整を施す。外面は灰茶褐色、内面は暗灰色を呈す。008は鉢の底部で、内外面、底に二枚貝による条痕調整を施す。黄色を帯びた茶褐色を呈す。009は植物原体による粗い削り状の調整を施す。茶褐色を呈す。010、011は剥片鏃で、抉り部のみに微細剥離を施す。順に1.19g、0.88gを測る。012、013は玄武岩製扁平打製石斧で314g、248gを測る。014は安山岩の扁平の自然礫の長辺の片側に刃部を作る。287gを測る。

3　弥生時代の遺構と遺物

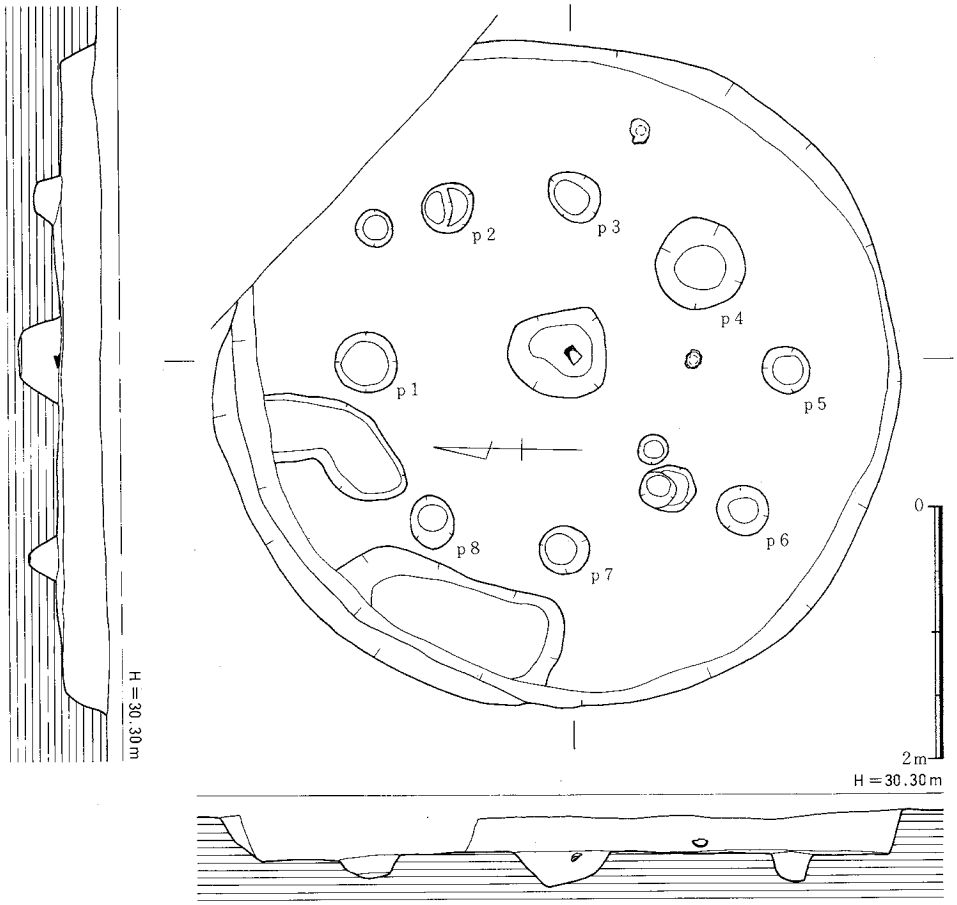
今回検出した弥生時代の遺構は竪穴住居18棟、掘立柱建物１棟、土坑33基、甕棺墓１基およびピットである。遺構は調査区の西北から東南方向に帯状に分布しており、住居を中心にしてみると西北と東南の２群に分かれる。また西南部は段落ちとなり遺構はみられない。出土遺物はほとんどが小破片であったが、可能な限り図示した。

１）竪穴住居

西北群５棟（SC0518･0528～0531、いずれも円形）、東南群13棟（SC0508･0512･0513･0514･0515・0519・0521・0523・0534が円形、0511・0520・0522・0526が長方形）に分かれる。ここでは平面円形、長方形の順に説明を加える。なおすべての住居に周壁下の周溝は認められなかった。



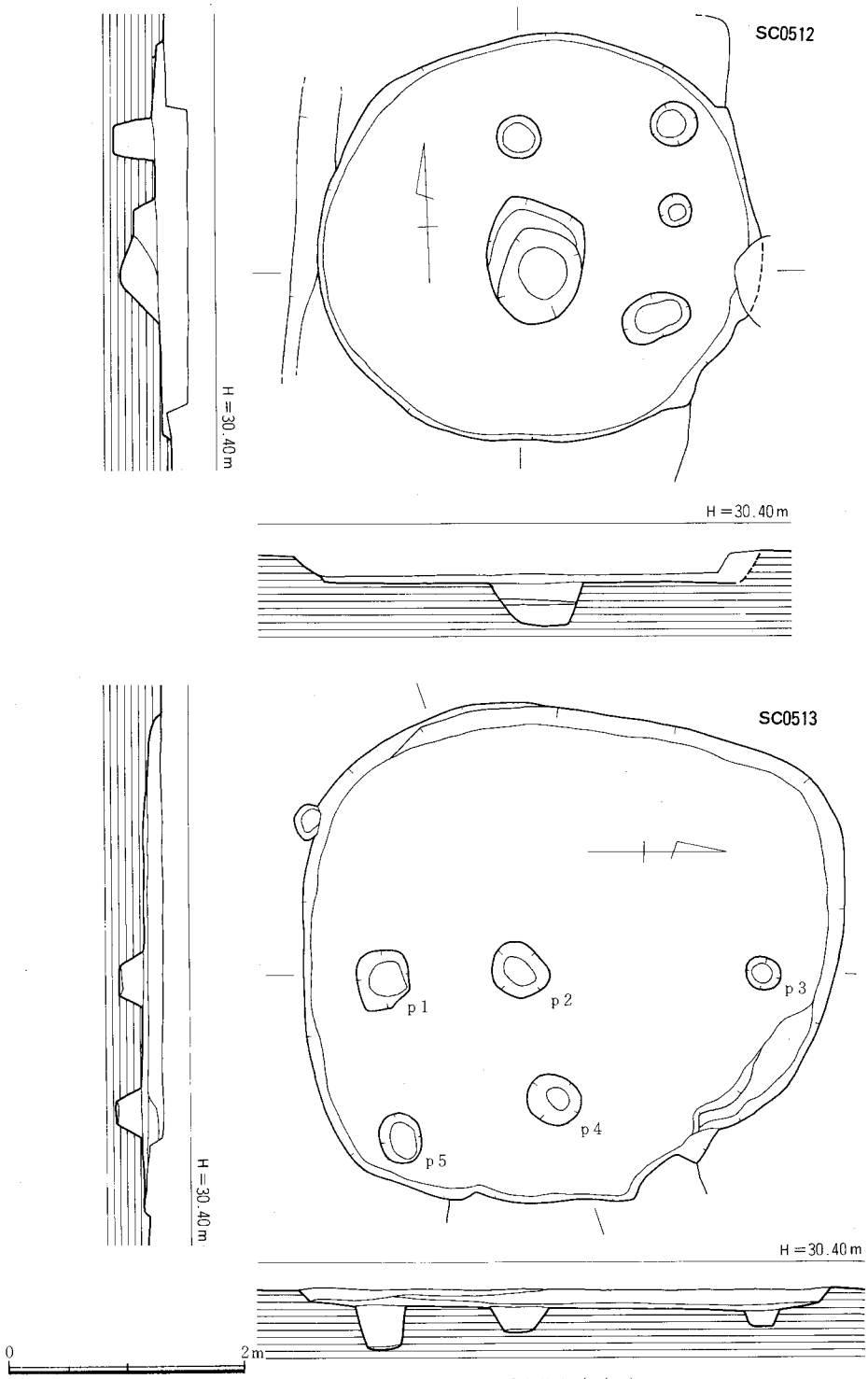
第５図　弥生時代遺構配置略図（1/400）



第6図　SC0508実測図（1/60）

SC0508（第6図、図版5）　東南群の北側に位置する径5.28m～5.43mの円形住居である。東北側をSC0507に切られ、南側でSC0526と接する。覆土は茶褐色土。周壁残高は32cm～34cmで、西北壁面には段が付く。床面中央には南北0.78m、東西0.68m、深さ26cmの楕円形土坑があり、その外側1m周辺をp1～p8の8主柱穴が取り囲む。主柱穴の径は0.37m（p5）～0.75m（p4）、深さは18cm（p1）～32cm（p8）。主柱穴間は1.00m～1.50mをはかる。主柱穴内側の床面は硬く踏み締まる。西北壁下には長さ1.85m、幅0.70m、深さ20cmの土坑があり、また北側には幅0.50m、深さ10cmの溝状遺構が主柱穴間付近まで鉤状に延びる。中央土坑から甕底部（022）が、また床面からは鉢（018）などが出土した。前期中頃、板付II式古段階の住居であろう。

出土遺物（第9図015～025）　015～017は如意形口縁の甕で、015・016は口唇下端部に細棒で刻目を入れる。017は刻目がなく、内外面ともヘラ磨きで仕上げる。022は甕の底部。外面は縦刷毛目、内面はヘラナデ調整を行う。023は外底に木葉痕のある甕。時期的には他の甕より古



第７図　SC0512・0513実測図（1/60）

い。いずれの甕も胎土に砂粒が多い。018（図版31）は鉢。口径13.8cm、器高10.0cm。口縁部の一部を欠く。内外面とも板状工具による横ナデ調整で、灰黒色から黒色を呈する。胎土には砂粒が多い。019は内外面とも丁寧なヘラ磨きで仕上げた壺口縁片である。微砂粒の入った精良な胎土で、黄褐色を呈する。021は壺底部。端部は垂直に立つ。胎土には砂粒が多く、淡赤褐色を呈する。020は高杯の脚部片である。調整は刷毛目で、外面は目が細かく、内面は粗い。混入か。

024・025は黒曜石製の石鏃。024は1.74g、025は1.42gをはかる。

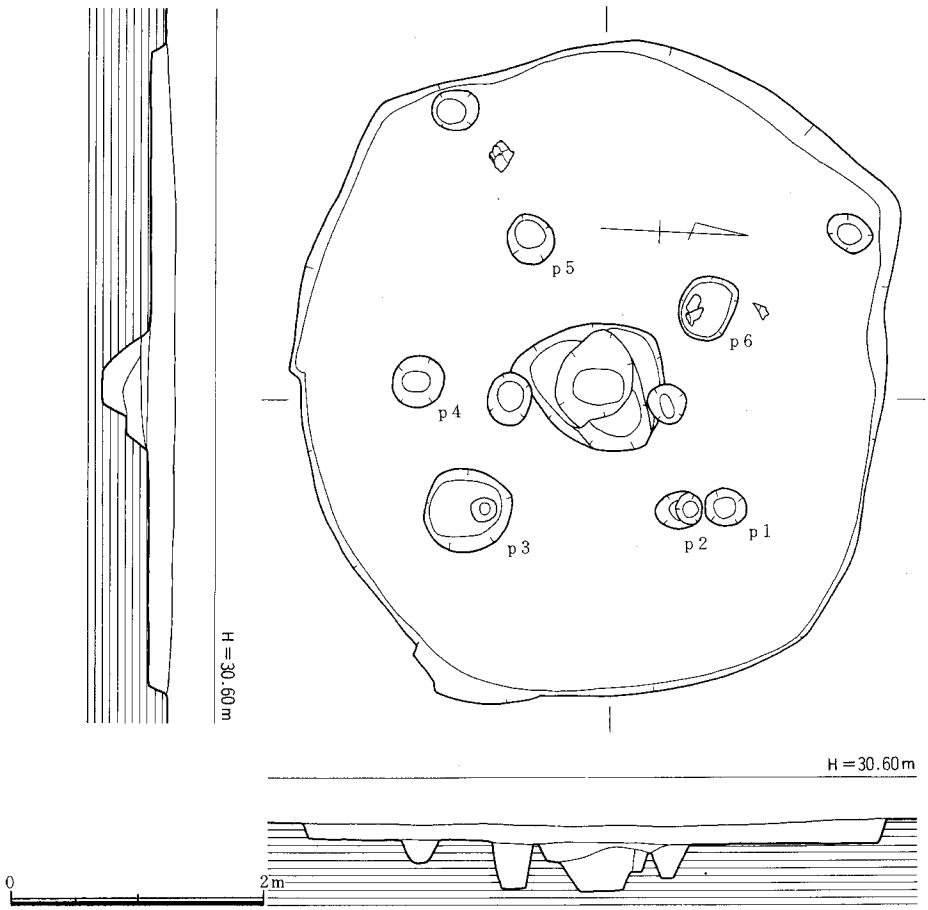
SC0512（第7図、図版5） 東南群の西北に位置する東西径3.80mの楕円形住居である。ほとんど全体をSC0511に切られ、また東側をSK0008に切られる。覆土は茶褐色土。周壁残高は東側で25cm、SC0511の床面からは5cm前後にしか過ぎない。床面中央には南北1.03m、東西0.82m、深さ32cmの楕円形土坑がある。覆土は暗褐色砂質土で、焼土などは認められない。床面では径0.30m～0.50m、深さ12cm～36cmの4ピットを確認したが、その配置から主柱穴とは考えにくい。床面の踏み締めは明確でなかった。出土遺物はないが、SC0511との関係から前期に属する住居である。

SC0513（第7図、図版6） 東南群の北端部に位置する南北径4.65m、東西径4.30m前後の楕円形状住居である。東北側をSK0205に切られ、残存する周壁がややいびつとなる。覆土は褐色砂質土。周壁残高は10cm前後。床面では径0.28m～0.50m、深さは14cm～37cmのピットを5個確認し、うち3個のピットは床面中央を南北に並ぶが、主柱穴とするには問題が残る。床面の締まりはない。出土遺物からすれば中期初頭の住居であろう。

出土遺物（第9図026～029） 026～028は甕。026は如意形口縁の口唇部に二枚貝の腹縁で刻目を施す。口縁の屈曲角度が強い。027・028は断面三角形の口縁部をもつ。029は壺の肩部片で、浅い沈線により段がつく。外面はヘラ磨きで仕上げ、黒褐色を呈する。胎土には砂粒が多い。

SC0514（第8図、図版6） 東南群の南側に位置する南北径1.80m、東西5.25mの楕円形住居である。東側でSC0514を切る。覆土は茶褐色土。周壁残高は17cm～20cm。床面中央には南北1.10m、東西1.00m、深さ37cmの楕円形土坑があり、その南北両側にそれぞれピットを掘り込む。北側のピットは径0.30m、深さ27cm、南側のピットは径0.40m、深さ36cmをはかる。中央土坑から0.5m～0.6m外側に主柱穴がめぐる。確認したのはp1～p6のピットで、北側周壁の形からすると主柱穴はp2～p6になると考えられる。主柱穴の径は0.37m（p2）～0.65m（p3）、床面からの深さは4cm（p6）～65cm（p3）。主柱穴間は1.15m～1.65mをはかる。床面は主柱穴内側を中心に硬く踏み締まる。西北壁下には径0.35m、深さ16cmのピット、また西南側には径0.37m、深さ24cmのピットがある。甕（033）が床面から出土しており、居住の時期は中期前半頃と推定される。

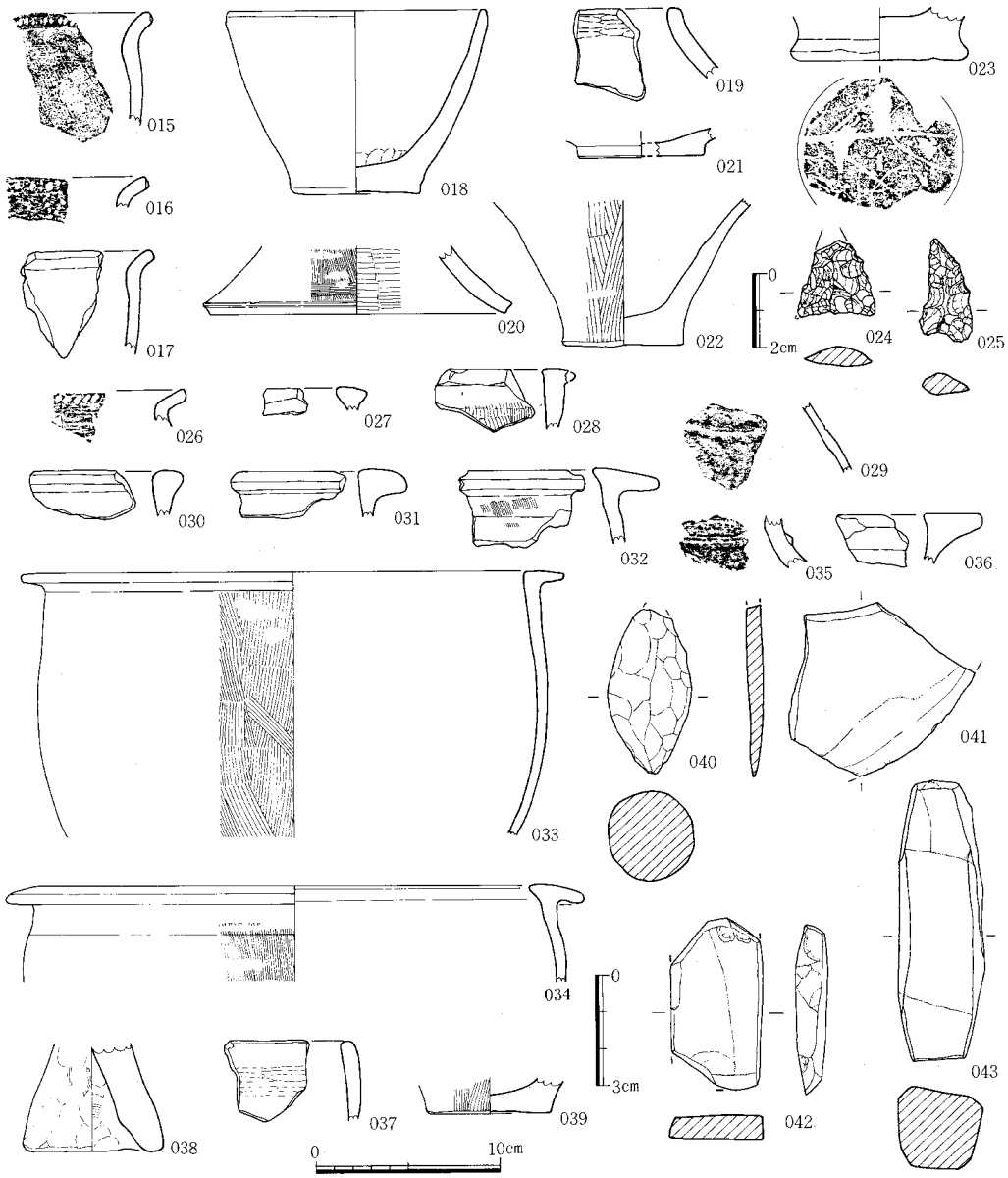
出土遺物（第9図030～043） 030～034は甕。030は小さな断面三角形の口縁部をもつ。032～034



第8図　SC0514実測図（1/60）

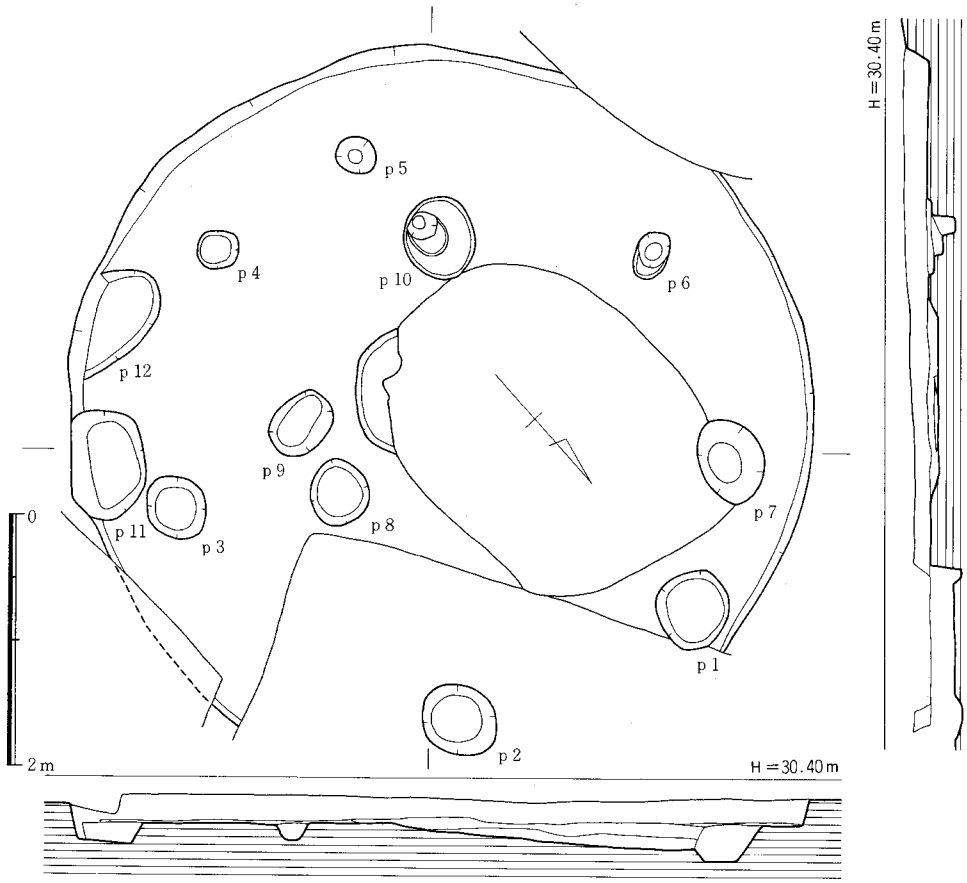
は逆L字状口縁で、外傾気味である。また033・034は薄手の作りである。調整は摩滅したものを除けば外面縦刷毛目、内面ナデである。033の復元口径26.3cm。039は甕の底部。外底中央がわずかに上げ底となる。035は壺肩部片。小さな三角凸帯がめぐる。外面はナデもしくはヘラ磨きで丁寧に仕上げ、赤みを帯びた暗褐色を呈する。胎土には砂粒が多い。036は高杯片であろう。丁寧な作りであるが、胎土は砂粒が多くしまりを欠く。037は鉢の口縁端部細片。外面はヘラ磨きで、丹塗り。胎土には砂粒が多い。038は肉厚の器台。内外面とも指で調整する。胎土は目が比較的細かく、細砂粒を混入する。

040は一端を欠いた土製投弾。最も厚いところで径2.4cm。041は石包丁片。厚さ0.4cmの両刃。安山岩ホルンフェルス製。042は頁岩製扁平片刃石斧。043は石錘であろうか。長方体に四面を砥ぎ、さらにその角を狭く砥ぎ出す。また両端部に向い砥ぎ減らし、全形が角張るものの紡錘状形となる。長さ7.6cm、幅2.3cm。



第9図　SC0508・0513・0514出土遺物実測図（024・025・040～043…1/2、他1/4）

SC0515（第10図、図版7）　東南群の南側に位置する径5.90mのほぼ正円形の住居である。東北側をSC0506に、また西側をSC0514に切られる。さらに南側でSC0534にも切られている。覆土は茶褐色土。周壁残高は20cm前後である。床面北側にはSK0002が切り込んでおり、全貌は判明しないが、床面中央やや南寄りに現存長1.00m、深さ25cmの楕円形土坑が認められる。床面では

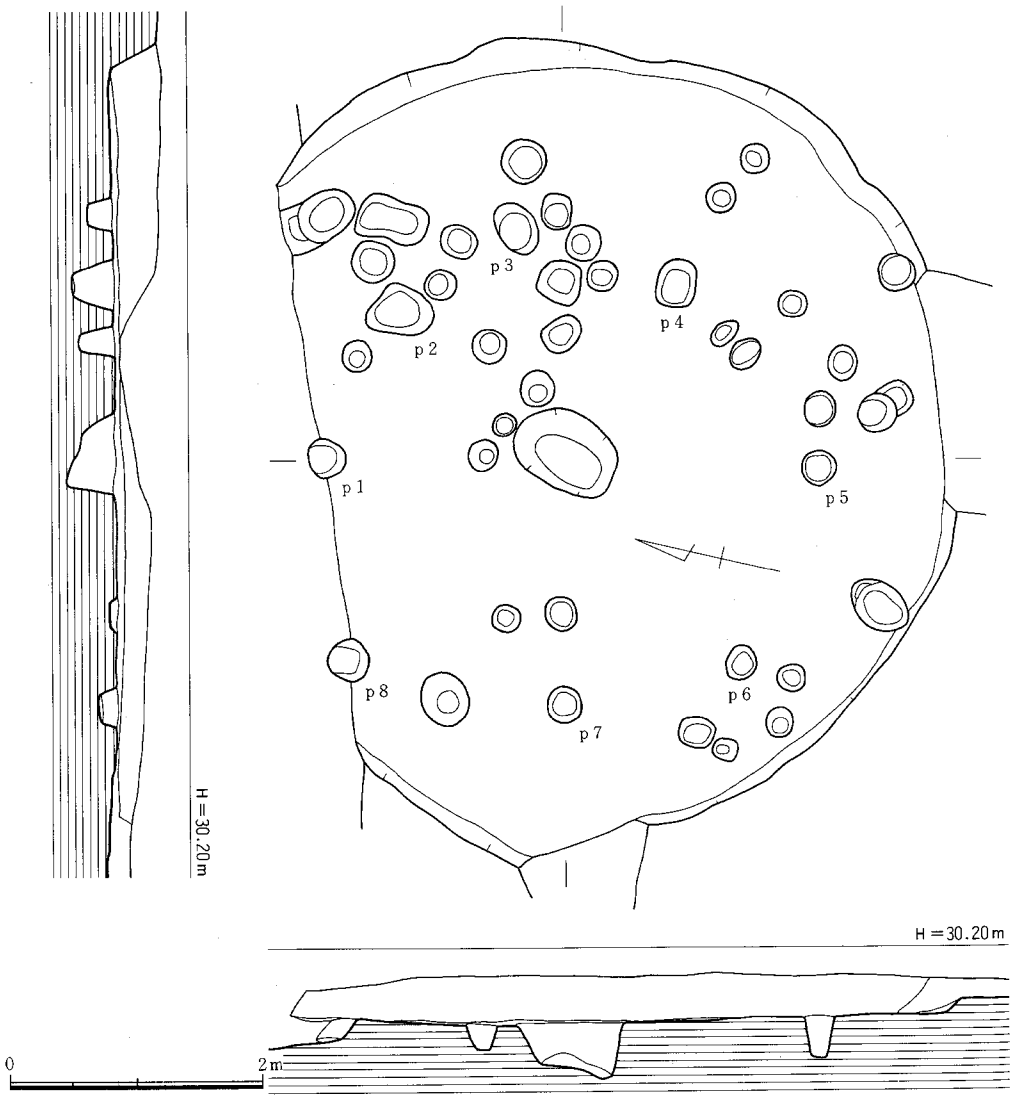


第10図　SC0515実測図（1/60）

p1～p10を、また東南壁下ではp11・p12のピットを検出した。うち周壁近くをまわるp1～p7が主柱穴と考えられる。主柱穴の径は0.35m（p5）～0.70m（p7）、深さは20cm（p3）～36cm（p1）。主柱穴間は1.20m～2.80mと開きが大きい。主柱穴内側の床面は硬く踏み締まる。p12の北側床面で柱状片刃石斧（050）を検出した。出土遺物からみて中期初頭の住居であろう。

出土遺物（第12図044～053）　044～047は甕。口縁部は断面三角形もしくは046・047のように未発達な逆L字状となる。外面は刷毛目、内面はナデ調整を行う。黄褐色、淡赤褐色を呈する。048は広口壺の口縁部細片。内外面とも丹塗磨研で、外面には縦方向の暗文が認められる。

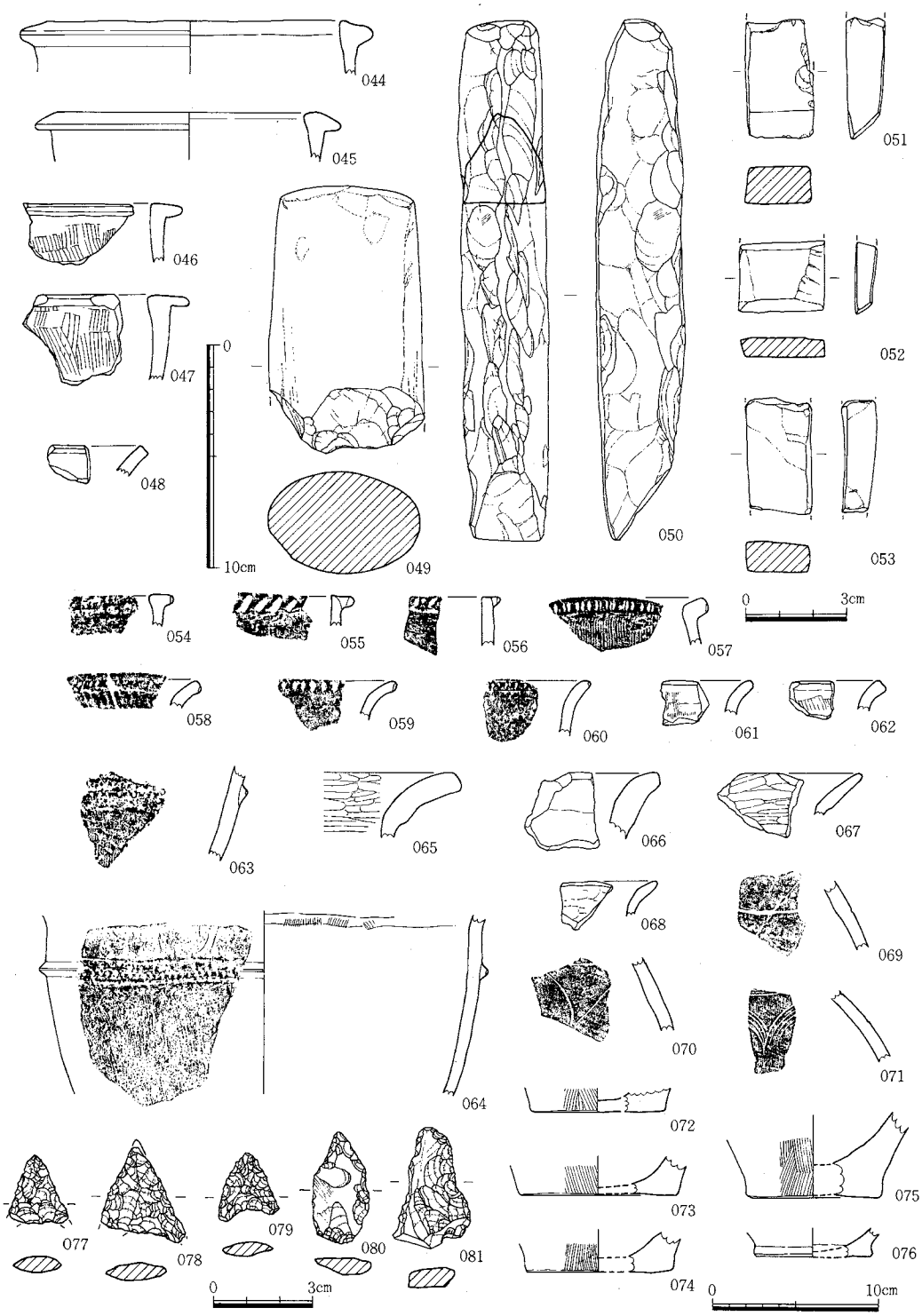
049は太形蛤刃石斧。折損した刃部付近を敲打して再利用する。玄武岩製。050は柱状片刃石斧の未製品。背をまだ形成しきっておらず、敲打痕がこの部分に集中して残る。このため断面はまだ三角形を呈する。底面および側面の一部は研ぎが加わり、また使用した痕跡もうかがわれる。全長23.2cm、刃幅3.0cm。051～053は扁平片刃石斧。053は刃部が欠損している。いずれ



第11図　SC0518実測図（1/60）

も頁岩製。

SC0518（第11図、図版７）　西北群の東側に位置する東西径6.30mの円形住居である。SK0203やSD0202などの中世遺構に切られ、また北側は水田のため掘り下げられており周壁の残存は悪い。覆土は茶褐色土。周壁高は東側で32cm～33cm、残りの悪い西北側では９cm程度である。床面中央には南北0.85m、東西0.60m、深さ43cmの楕円形土坑がある。床面上では42個のピットを確認したが、中央土坑の外側1.50mあたりを取り囲むｐ１～ｐ８が主柱穴と考えられる。主柱穴の径は0.28m（ｐ６）～0.50m（ｐ２）、深さは12cm（ｐ７）～38cm（ｐ４）。主柱穴間は1.20m～1.



第12図　SC0515・0518出土遺物実測図（051～053・077～081…1/2、049・050…1/3、他1/4）

80mをはかる。主柱穴内側の床面は硬く踏み締まる。出土遺物からみると、前期中頃、板付II式古段階の住居であろう。

出土遺物（第12図054～081） 054～064は甕。054～056は刻目凸帯口縁をもつ。055・056の刻目は二枚貝の腹縁による。057は口縁凸帯がやや発達し、その上面にも刷毛目調整を行っている。凸帯上の刻目は細く、間隔も狭い。058～062は如意形口縁をもつ。058～060は口唇下部に刻目をもち、061・062はない。063・064は胴部に断面三角の刻目凸帯を設ける。072～075は甕の底部。073・074は中央がわずかに上げ底となる。065～071は壺。065～067は口縁外部が肥厚し、頸部との境に段を作る。いずれも内外面ともヘラ磨きで、とくに小型の067は磨きも丁寧で、黒色の光沢を帯びる。068は口縁が外反し端部を丸く収める。小型で、灰黒色を呈する。069～071はいずれも胴肩部から胴部の細片で、069は横沈線、070は横沈線下に単弧文、071は重弧文をいずれもヘラで描く。076は小型壺の円盤貼付け底部である。壺の胎土は比較的密であるが、いずれにも砂粒が多い。

077～080は黒曜石製の石鏃。081は未製品であろうか。

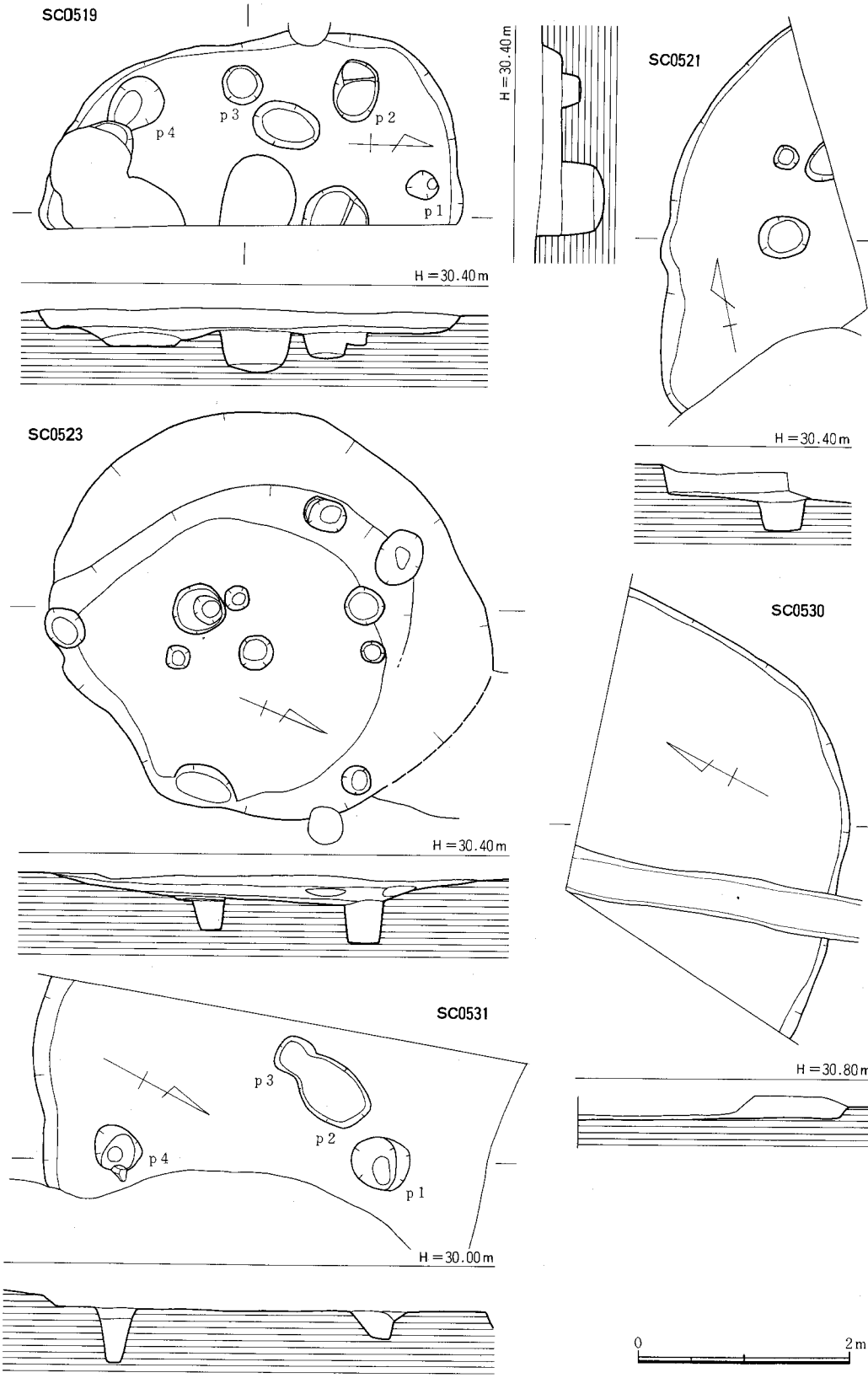
SC0519（第13図、図版８） 東南群の中央付近に位置する。東側が調査区外にかかり、現状で南北長4.00mをはかる円形状住居である。南側をSB0210の柱穴が切る。覆土は茶褐色土。周壁残高は16cm～19cmである。壁直下の周溝は認められない。床面では６個のピットを確認し、うち周壁に沿ってめぐるｐ１～ｐ４が主柱穴と考えられる。ｐ１～ｐ４の径は0.30m（ｐ１）～0.58m（ｐ２）、深さは14cm（ｐ４）～27cm（ｐ２）で、また柱穴間は1.05m～1.10mをはかる。床面の踏み締りはない。出土遺物からみて中期前半の住居であろう。

出土遺物（第14図082～089） 082～086は甕。082は刻目凸帯口縁をもつ。残存部の調整はナデ。083は断面三角形の口縁部をもつ。084～086は逆Ｌ字状口縁を呈するが、084が未発達であるのに比べ、085・086はしっかりとした作りとなる。外面縦刷毛目、内面ナデ調整を行う。

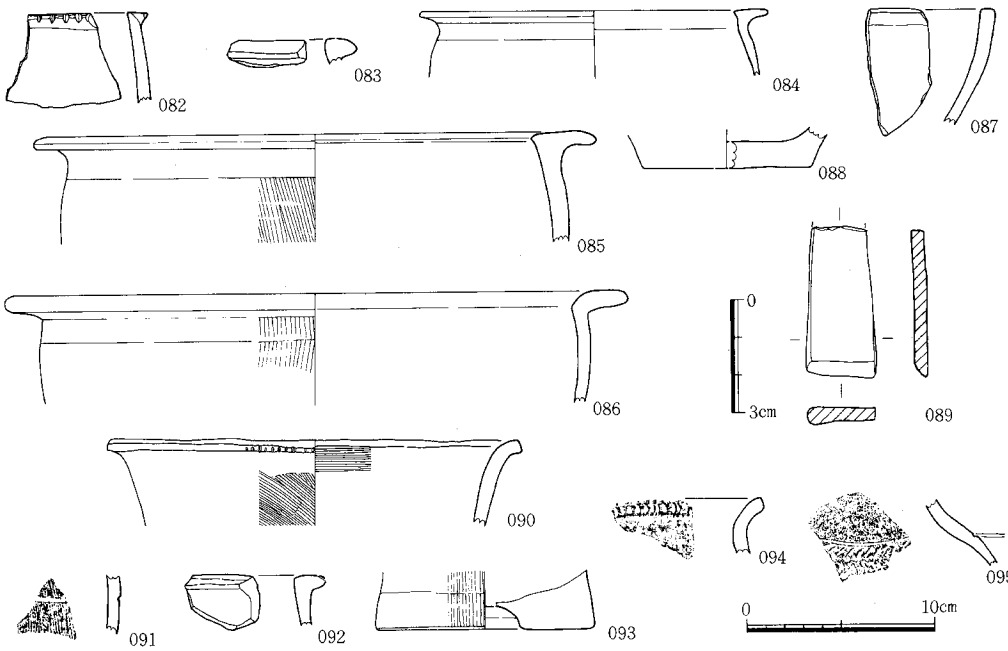
089は厚さ0.5cm、刃幅1.9cmのきわめて薄い偏平片刃石斧である。基部は欠損する。安山岩ホルンフェルス製。

SC0521（第13図、図版９） 東南群に位置する円形住居であるが、大半が調査区外にかかり、またSC0506、SK0001に切られほとんど形態をとどめない。残存する周壁から６m前後の規模と推定できる。周壁残高は21cm。床面では径0.20m～0.45m、深さ40cm前後のピット３個を確認した。中期の土器が若干出土しているが、細片で実測に耐えない。

SC0523（第13図、図版10） 東南群の西側に位置する径3.60m～3.90mの円形状の掘り込み遺構で、住居とするには躊躇するが、その規模、平面形態から未完成の竪穴住居と考えられなくもない。ここではとりあえず住居として扱っておく。周壁は西側で二段の緩やかな勾配となるが、東側では直立に近く、深さ18cm～19cmで径2.60m前後の円形状の底面を形成している。遺構地山面からは複数のピットを確認したが、この遺構に伴うものかどうかは不明である。底面の



第13図　SC0519・0521・0523・0530・0531実測図（1/60）



第14図　SC0519・0523・0530出土遺物実測図（089…1/2、他1/4）

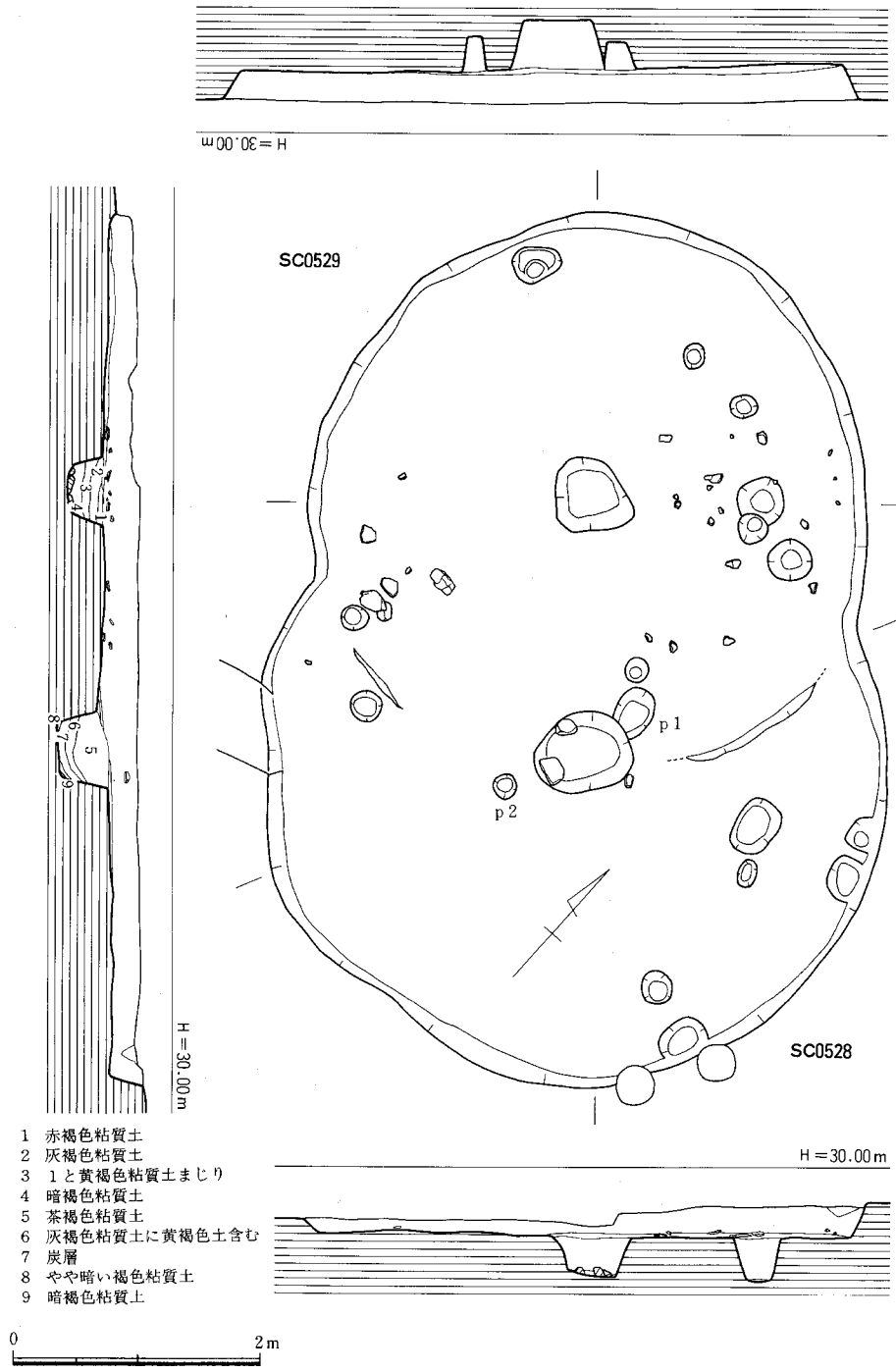
ピットは径28cm～48cm、深さは6cm～42cmとばらつきがある。覆土は暗黄褐色砂質土。北側をSK0004に切られる。出土遺物からみれば弥生中期初頭前後の時期の遺構である。

出土遺物（第14図090～093）　図示したのはいずれも甕である。090は如意形口縁をもち、口唇下部に小さな刻目を施す。091も横沈線からすると如意形口縁であることがうかがえる。092は小さな逆L字状口縁部である。093は厚みのある底部片で、中央部が深い上げ底となる。

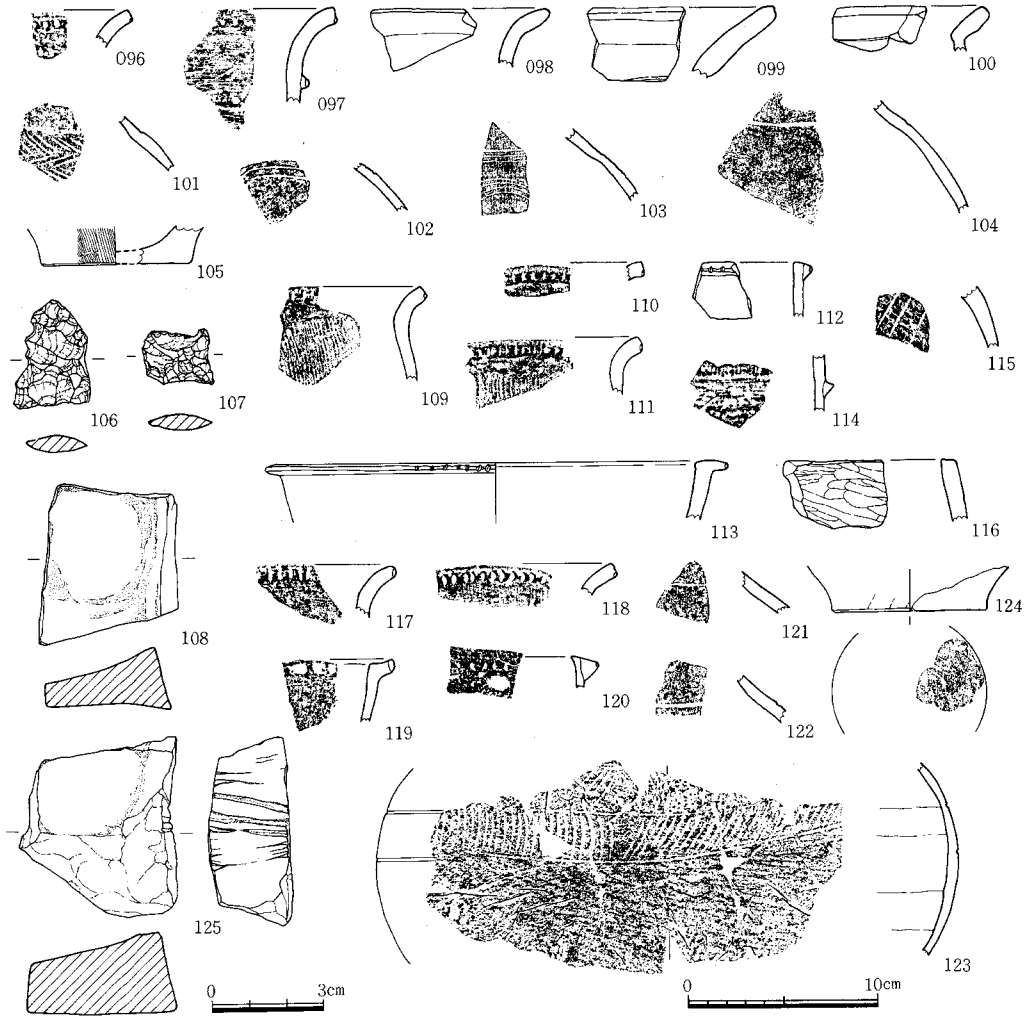
SC0528・0529（第15図、図版11）　西北群に位置する重複する2棟の円形住居である。ともに覆土は茶褐色粘質土で分別できず、また平面の観察も上面のみならず床面近くまで掘り下げても2基の先後関係を特定することができなかった。

SC0528は南側に重複する東西径5.01mの円形住居である。周壁残高は18cm～23cm。床面中央には東西0.78m、南北0.64m、深さ30cmの楕円形土坑があり、土坑底近くには灰の堆積が認められる。この土坑を挟んだ東西に2個のピット（p1、p2）があり、p1は土坑と接し径0.30m、深さ24cm、p2は土坑から0.2m離れ径0.20m、深さ30cmをはかる。床面では東側周壁近くに径0.20～0.45m、深さは15cm～30cmのピットを検出したが、主柱穴とは云い難い。中央土坑南側の床面には硬く踏み締まる部分が認められた。

SC0529は北側に重複する東西径4.53mの円形住居である。周壁残高は30cm前後で、床面はSC0528より7cmから8cm低くなる。床面中央には幅57cm～60cm、深さ30cmの不整形土坑があり、その周辺は硬く踏み締まっている。土坑内には炭、灰などの堆積は認められない。床面北



第15図　SC0528・0529実測図（1/60）



第16図　SC0528・0529出土遺物実測図（106～108・125…1/2、他1/4）

から東側にかけて径0.20m～0.40m、深さ21cm～35cmのピット6個を検出したが、主柱穴とは考えにくい。

この両住居は出土遺物からも先後関係は確認できず、前期中頃、板付II式古段階に時期を置かず建て替えられた住居と考えられる。

SC0528・0529上面出土遺物（第16図096～108）　096・097は如意形口縁をもつ甕である。口縁部刻目は口唇下部に棒状のもので小さく押捺する。097はさらに口縁下に一条の断面三角形の刻目凸帯がめぐる。ともに残存部はナデ調整。105は甕の底部。平底で、外面は細かい刷毛目調整を行う。098～104は壺。098は口縁が外反し、端部を丸く収める。099は口縁外面が肥厚し、頸

部との境に段がつく。100も099の類と考えられるが、内面にも浅い段を設ける。101～104は胴上半部に文様を施すもので、101は横沈線の下に羽状文、102は重弧文、103は3本の沈線の下に四重弧文、104は一条の沈線をいずれもヘラで描く。壺の外面調整は098と100が横ナデ、他はヘラ磨きである。

106・107は黒曜石製の石鏃で、107は未製品であろうか。106は2.66g、107は1.04gをはかる。108は砂岩製砥石。

SC0528出土遺物(第16図109～116)　109～114は甕。109～111は如意形口縁をもち、口唇下部にヘラによる刻目を施す。112は口縁に三角凸帯がめぐり、凸帯頂部に小さな刻目を入れる。113は逆L字状口縁だが、口縁端部は薄く十分に発達していない。114は胴部に三角凸帯をもつ甕片である。112が横ナデで仕上げるのを除けば、他は外面縦刷毛目、内面横ナデで調整する。115は壺胴部片。右上がりに3条の平行沈線がある。胎土は精良で、若干の砂粒が入る。116は鉢であろうか。外面はヘラ磨きで、淡褐色を呈する。112・113・116は中央土坑からの出土である。

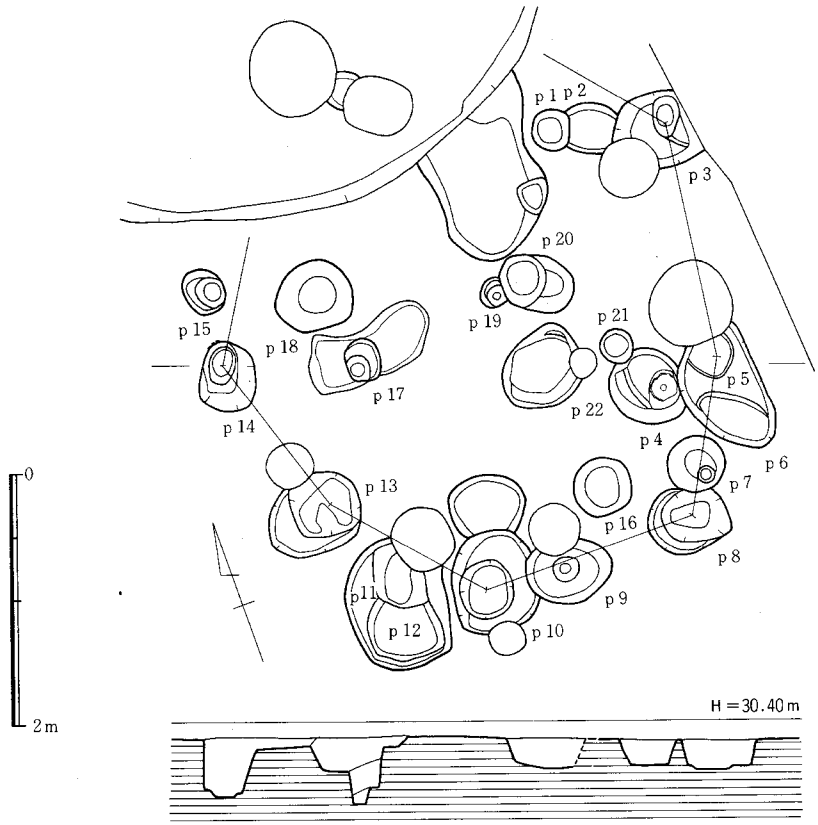
SC0529出土遺物(第16図117～125)　117～120は甕。117・118は口唇下部に刻目を施した如意形口縁をもつ。119は口縁部が上反りに外に張り出し、口唇には棒状工具で押圧した刻目を入れる。120は口縁に三角凸帯がめぐり、凸帯頂部にはヘラで小さな刻目を施す。124は甕底部。外底に籾圧痕が認められる。121～123は壺。121・122は肩部に1条の沈線がめぐる小型壺である。123は中型壺で、底部近くまでの破片があるが、接合できない。胴上半部の二条の横沈線の間に有軸羽状文をヘラで描く。外面はヘラ磨きであるが、胎土に大量の砂粒が入り、その多くが器表上に浮き出る。

125は砂岩製の砥石。残存部の3面に砥面があり、うち2面と他の1面には条痕が残る。

SC0530(第13図、図版11)　西北群に属する円形住居である。調査区西北端部にかかり、全体の4分の1ほどしか確認できず、また削平により残存状態も悪い。周壁から径5.6m前後の規模を推定できる。周壁高は残りの良い部分で20cmである。床面でのピットの確認はなかったが、部分的に硬く踏み締まった部分がみられた。出土遺物からみると前期中頃の住居と考えられる。

出土遺物(第14図094・095)　094は如意形口縁の甕。口唇下部に刻目を入れる。095は壺肩部片で、横沈線下に羽状文を描く。外面は黒塗研磨で光沢を帯びる。胎土には砂粒が多い。

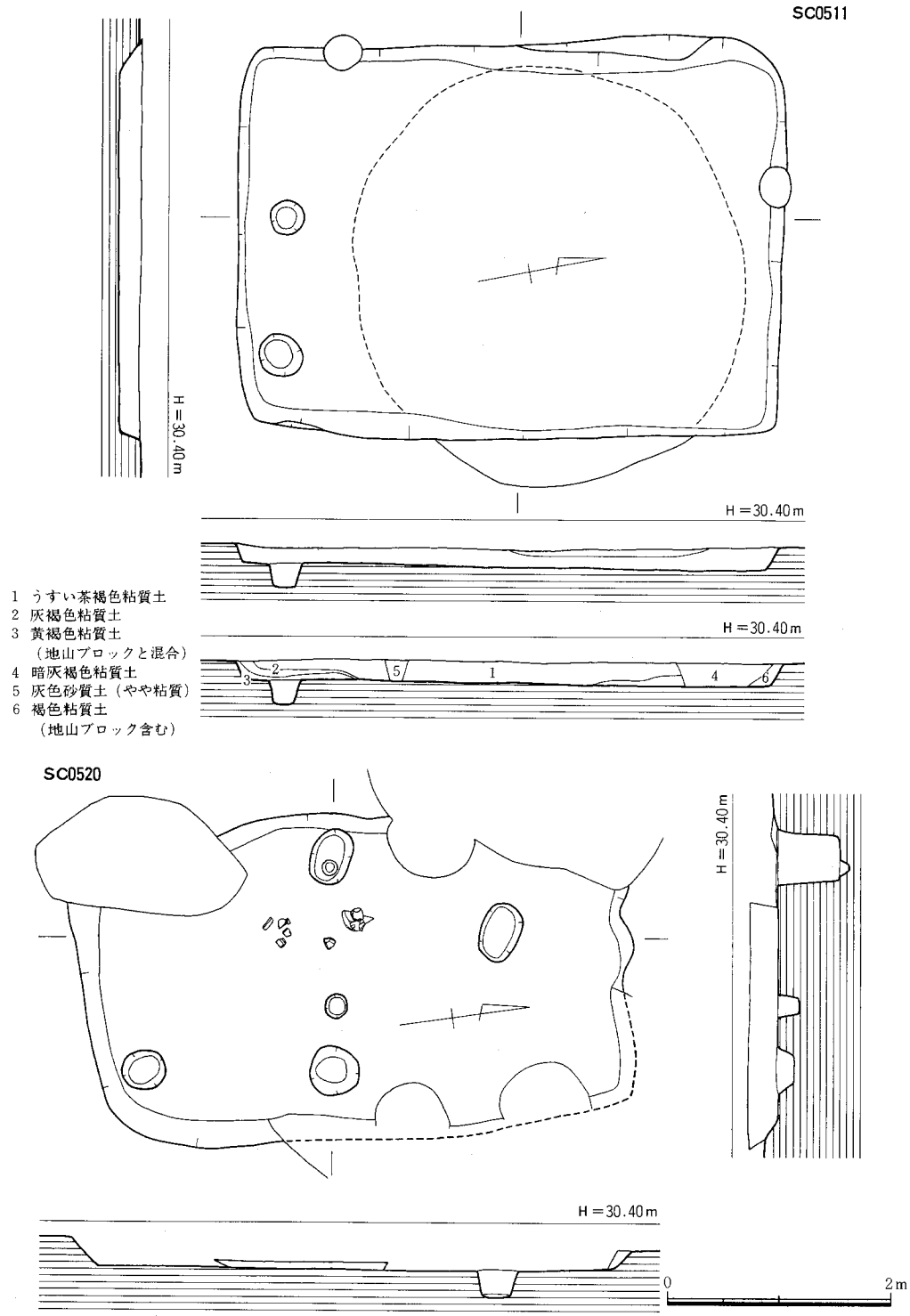
SC0531(第13図、図版11)　西北群に属する円形住居である。調査区西北端部にかかり、またSC0528・0529・0530に切られるため、南側周壁と床面の一部しか残存しない。周壁高は残りの良い所で20cm。床面ではp1からp4のピットを確認し、p2を挟んで深さ30cmのp1と深さ5cmのp3が対峙するようにも窺われる。p2の深さは5cm程度でこれを中央土坑としてとらえるなら、この住居は径5.5m程度の規模と推定される。床面は部分的に硬く踏み締まった部分がみられた。p4から前期壺の細片が出土しており、また切り合い状況からみても前期中ごろ以前の住居と考えられる。



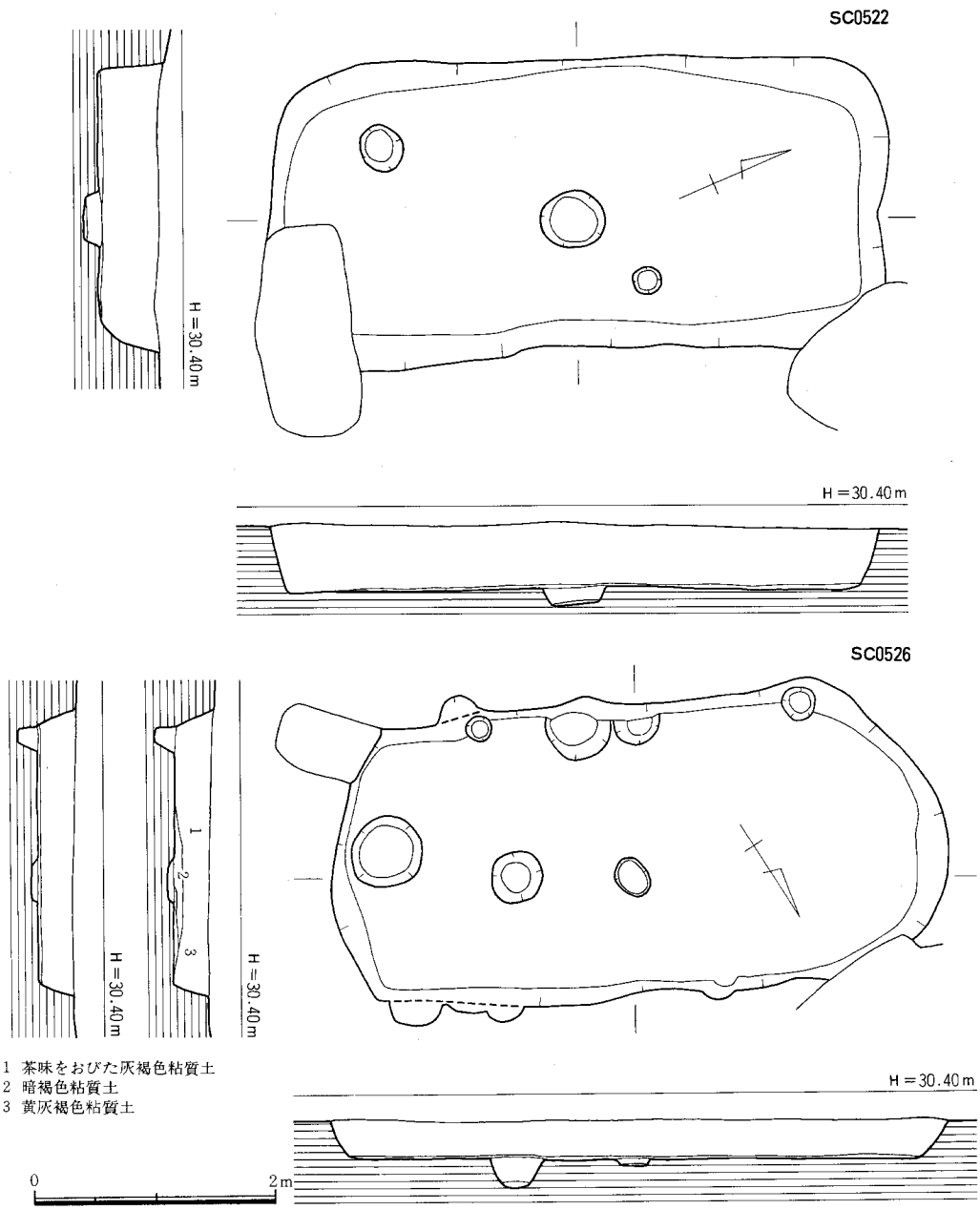
第17図　SC0534実測図（1/60）

SC0534（第17図、図版12）　東南群の南端に位置し、周壁と床面は残存しないが、主柱穴の並びから円形住居が想定できる。図示したのは遺物及び覆土から弥生時代に属するピットで、p1～p22のうちp3・p5～p15が主柱穴と考えられる。しかし、南側では柱穴間隔が狭く、また切り合いが見られるところから、柱の建て替えあるいは別遺構の重複があることは相違ない。ちなみにSC0508のように8主柱穴と想定し、切り合いを考慮してp3・p5・p8・p10・p13・p14を残存する主柱穴とすれば、その間隔は130cm～190cmとなる。p22が中央南側にあり、中央土坑の可能性がある。これらを考え合わせると、径4m前後の円形竪穴住居として復元できよう。またp4（0328）は柱を抜いた後土器を廃棄したピットで後述する（44頁）。図示できなかったが、出土遺物から中期前半の遺構と考えられる。

SC0511（第18図、図版5）　東南群の西北に位置する南北4.90m、東西3.55mの長方形住居である。中央でSC0512を切っている。覆土は茶褐色砂質土。周壁残高は15cm～17cm。床面では南側で径0.30m、深さ20cm前後のピットと、中央部分で径0.20mの黒褐色土部分を確認した。周壁



第18図　SC0511・0520実測図（1/60）



第19図　SC0522・0526実測図（1/60）

下部分を除き床面は比較的硬く踏み締まる。出土遺物からすると前期末の住居である。

出土遺物（第20図126～130）　126・127は如意形口縁の甕。126は口唇下部にヘラで刻目を施

す。残存部はナデ調整である。127は口唇下端に小さな刻目を入れ、外面は刷毛目調整を行う。128は断面三角形の口縁を作り、外面は刷毛目、口縁上面には細い刷毛目調整を施す。129は甕底部。指ナデで仕上げる。内面には炭化物が付着する。130は壺底部。外面はヘラ磨きで、光沢を帯びる部分がある。胎土には砂粒が多い。

131・132は石鏃。131の作りは雑である。132は欠損品を再加工したものか。133は二側面を加工してあり、石鏃の未製品と考えられる。いずれも黒曜石製。

SC0520(第18図、図版８)　東南群の中央に位置する南北4.94m、東西2.83m、残存するコーナーからすれば隅丸長方形住居である。SK0005、SK0451、SK0551などに切られ周壁の多くが失われている。覆土は茶褐色土。周壁残高は北側で15cm、南側で25cm。床面四方で径0.37m～0.50m、深さ16cm～27cmのピット４個を確認した。また床面に硬く踏み締まった部分が認められた。出土遺物からすると中期前半の住居である。

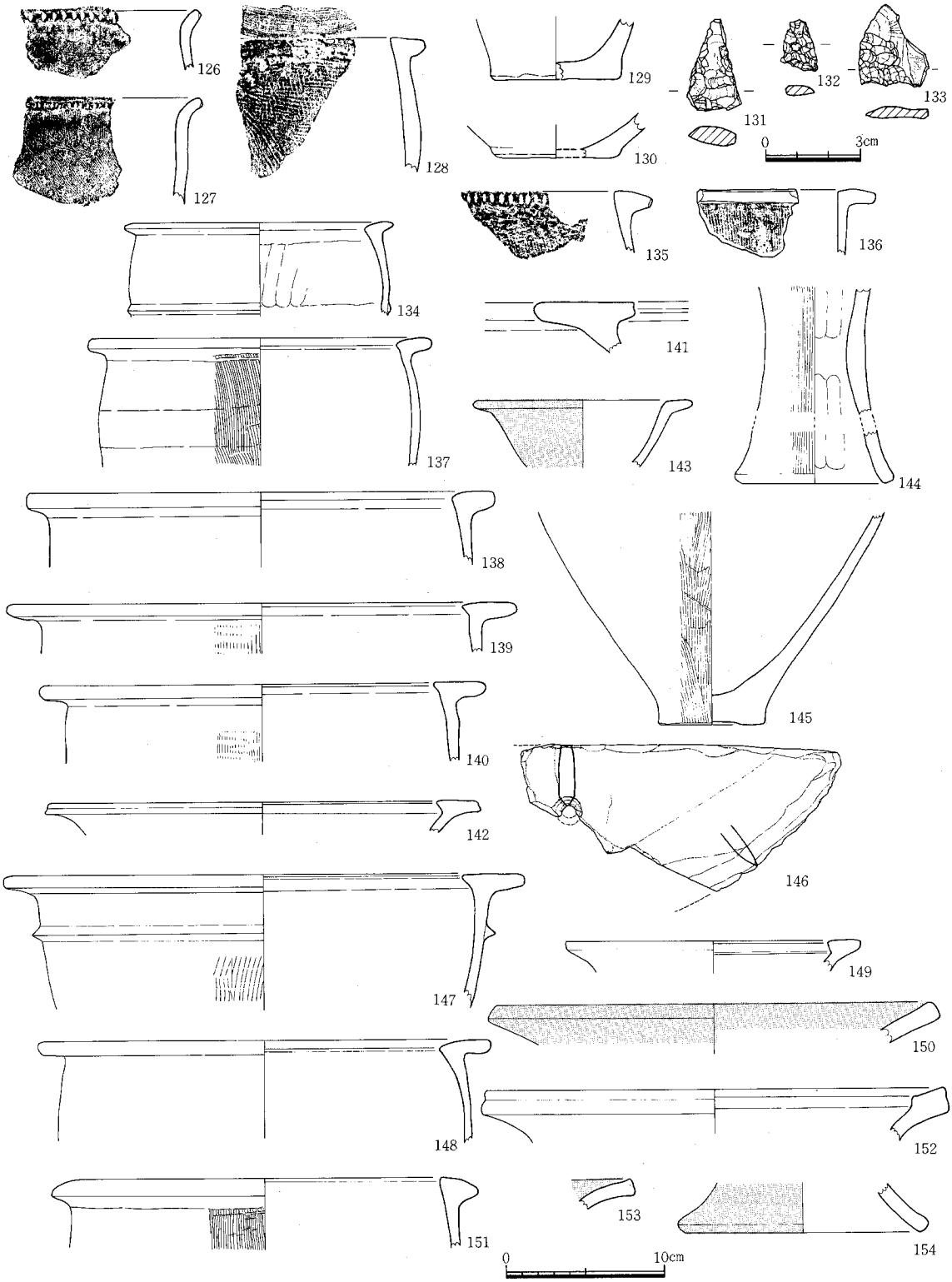
出土遺物（第20図134～146）　134～141・145は甕。口縁部は逆L字状に作るが、134は未発達で、胴部に１条の凸帯がめぐる。135は口縁が外傾し、口唇には刻目を入れる。141は大型甕の口縁部片で、内側への張りが大きい。145は外底中央がやや上げ底となる。なお137の口唇には粘圧痕が認められる。142は鋤先口縁を作る広口壺であろう。胎土は比較的精良で、外面は赤みを帯びた褐色を呈する。本来は丹塗りであったものか。143は高杯。口縁は外に反転し、丸くおさめる。精良な胎土を用い、摩滅しているが内外面とも丹塗りである。144は薄手の器台。同一個体であるが接合できない。以上の土器のうち、135・136・139・141・143は覆土上面からの出土である。

146は石包丁。厚さ0.5cm。安山岩ホルンフエルス製。

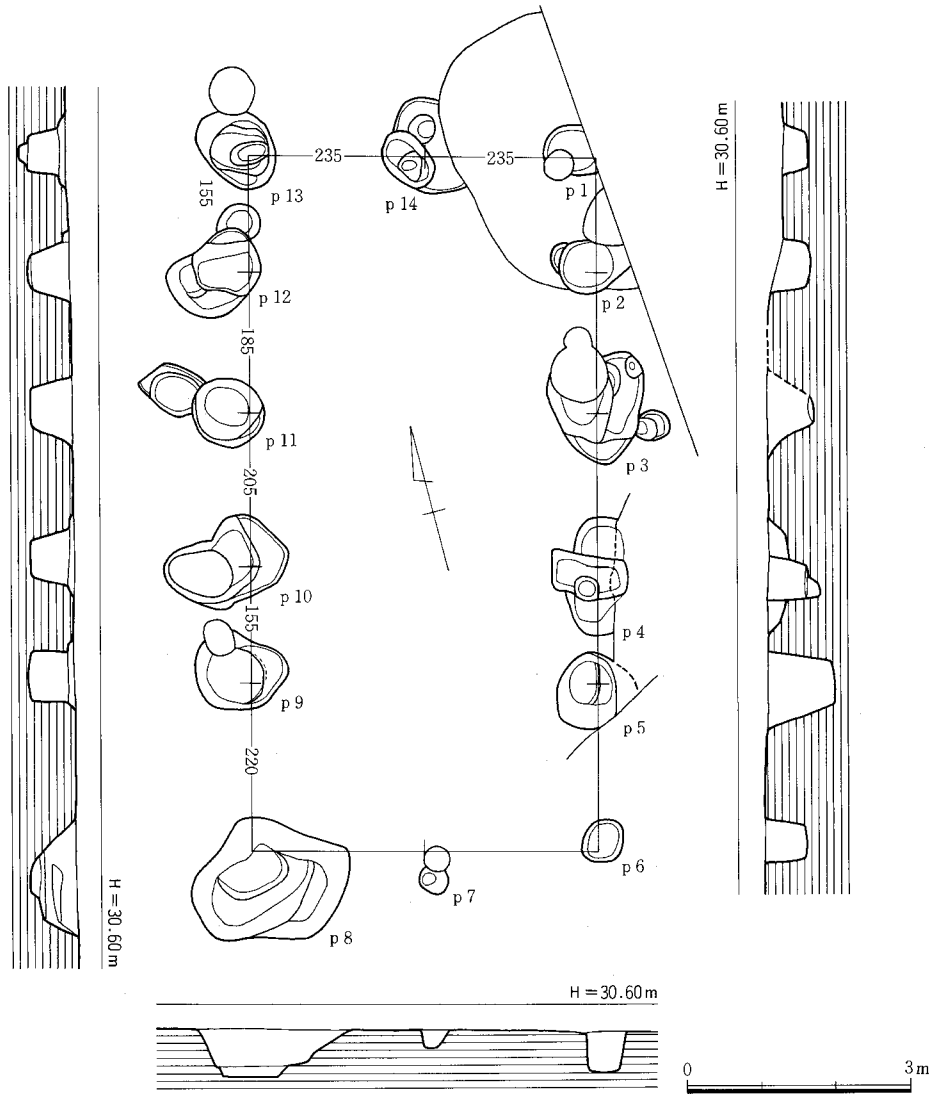
SC0522(第19図、図版９)　東南群のほぼ中央、SC0520の約３m東側にほぼ平行するように位置する南北5.05m、東西2.38mの隅丸長方形住居である。SB0210、SK0005、SK0427に切られる。覆土は茶褐色土。周壁残高は北側で45cm、南側で50cm。床面中央に南北0.53m、東西0.48m、深さ16cmの楕円形ピットがあり、その底面近くでは炭化物の堆積を検出した。他にこのピットのすぐ東北に径0.23m、深さ14cm、西南隅近くに径0.39m、深さ26cmの２個のピットを確認した。床面は比較的硬く踏み締まる。出土遺物からすると中期前半の住居である。

出土遺物（第20図147～150）　147・148は逆Ｌ字状口縁をもつ甕で、147の口縁はより発達して内側に張り出すとともに、口縁下には三角凸帯が１条めぐる。ともに外面は刷毛目の痕跡がうかがわれるが、最終的には内外面とも横ナデで仕上げる。149は口縁上面が肥厚する壺。外面は摩滅するが、口縁上面には丹塗磨研がみられる。150は広口壺の口縁部である。内外面とも丹塗磨研。胎土には砂粒が多い。他に薄手の器台などが出土している。

SC0526(第19図、図版10)　東南群の北側に位置する東西5.12m、南北2.50mの隅丸長方形住居である。他の長方形住居が南北に主軸をとるのに対し、この住居だけは東西にとる。周壁は



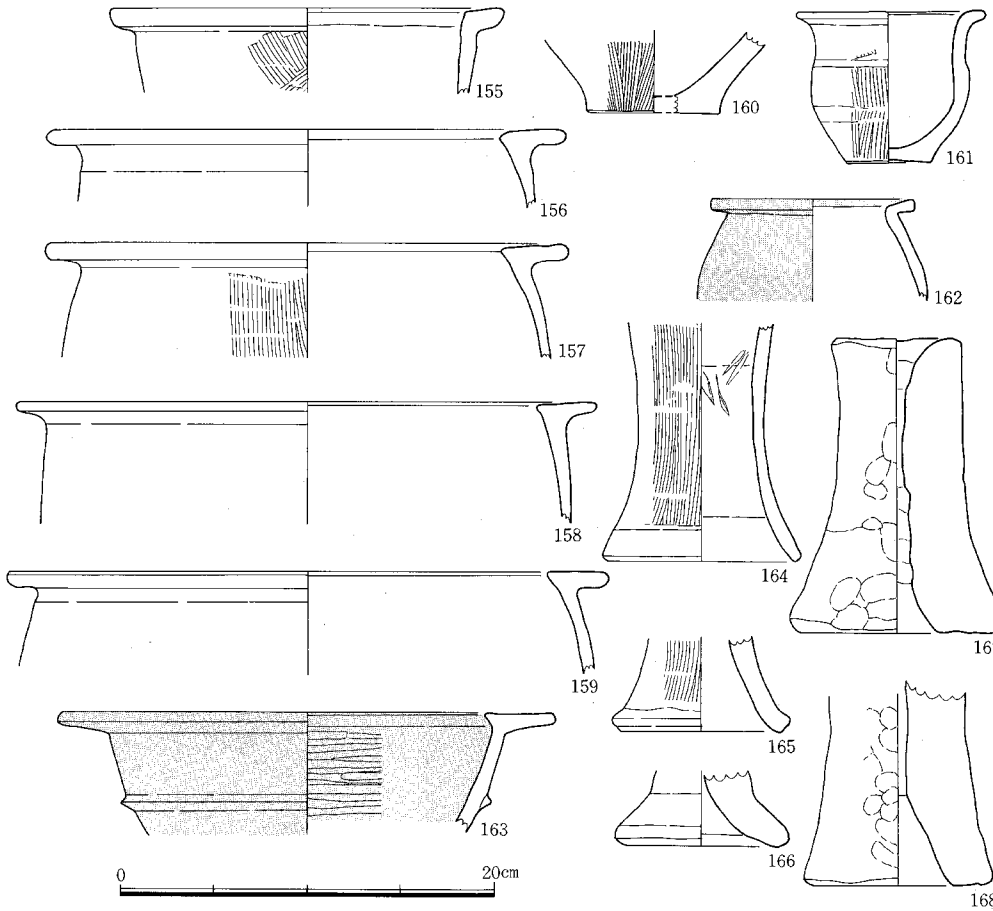
第20図　SC0511・0520・0526出土遺物実測図（131～133・146…1/2、他1/4）



第21図　SB0210実測図（1/100）

南北が直線的で、東西が丸みを帯びる。覆土は茶褐色砂質土。周壁残高は32cm～33cm。床面の南壁下に4個、また東壁下から中央にかけて3個の径0.30m～0.60m、深さ5cm～24cmピットを確認した。床面は比較的硬く踏み締まる。出土遺物からみれば中期前半の住居である。

出土遺物（第20図151～154）　151は断面三角形の口縁をもつ甕。152・153は壺。152の口縁上面は折り返したように肥厚する。胎土には砂粒が多く、ナデ調整で仕上げる。153は口縁端部がわずかに跳ねる薄手の広口壺で、内外面とも丹塗り。外面にはヘラによる暗文がうかがえる。154は高杯脚部片。摩滅が著しいが、外面丹塗りである。



第22図　SB0210出土遺物実測図（1/4）

2）掘立柱建物

SB0210（第21図）　掘立柱建物で確認したのはこの一棟だけであるが、周辺の状況からみるとまだその棟数は増加する可能性が高い。SB0210は調査区の東南部に位置する2間×5間の側柱からなる建物で、主軸をN－15°－Eにとる。これは長方形住居のSC0520、SC0522とほぼ同方向である。梁行実長4.7m、柱間は2.35mの等間、桁行実長9.20m、柱間は北側から1.55m、1.85m、2.05m、1.55m、2.20mとばらつきがある。柱穴は径0.7m～1.3m、深さ55～90cmの円形状を呈するものが多く、竪穴住居の柱穴に比べ規模が大きい。ただ南妻柱穴は若干南にずれ、その規模も他に比べ小さい。柱穴からの出土遺物からすると中期中頃の建物である。

出土遺物（第22図）　155～160は甕である。いずれも逆L字状口縁を作るが、155だけは発達の度合が小さく、口縁上面および内面の一部に刷毛目調整を行い、また胎土に砂粒が多く混じ

るなど156～159と異なる。160は底部。平底で、外面暗褐色を呈する。161は小壺。張りの小さな胴部から頸部が直立し、口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。胴部は縦刷毛目、他は横ナデで仕上げる。口径10.0cm、器高8.1cm。162は無頸壺。口縁部は急角度で折れ曲がり、端部は角張る。口縁から外面にかけては丹塗り磨研。163は高杯もしくは鉢であろうか。鋤先状口縁の下に三角凸帯をめぐらす。口縁上面から内面は丹塗り研磨、外面は横ナデで丹塗り。胎土は精良である。164～168は器台である。164・165は薄手の作りで、外面刷毛目、内面指ナデ調整を行う。166～168は厚手で、特に167・168は中央に棒で小穴を通しただけの肉厚なものである。167の器高15.7cm。この他凹基の黒曜石製鏃が1点出土している。

3） 土坑

今回の調査では34基の土坑を検出した。住居とは異なり東南群に集中する。

SK0204（第23図、図版12） 調査区西北に位置する径1.65m～1.75mの隅丸方形の土坑である。深さは58cm。覆土中には拳大の礫が多い。SD0202に切られる。前期中頃の貯蔵穴か。

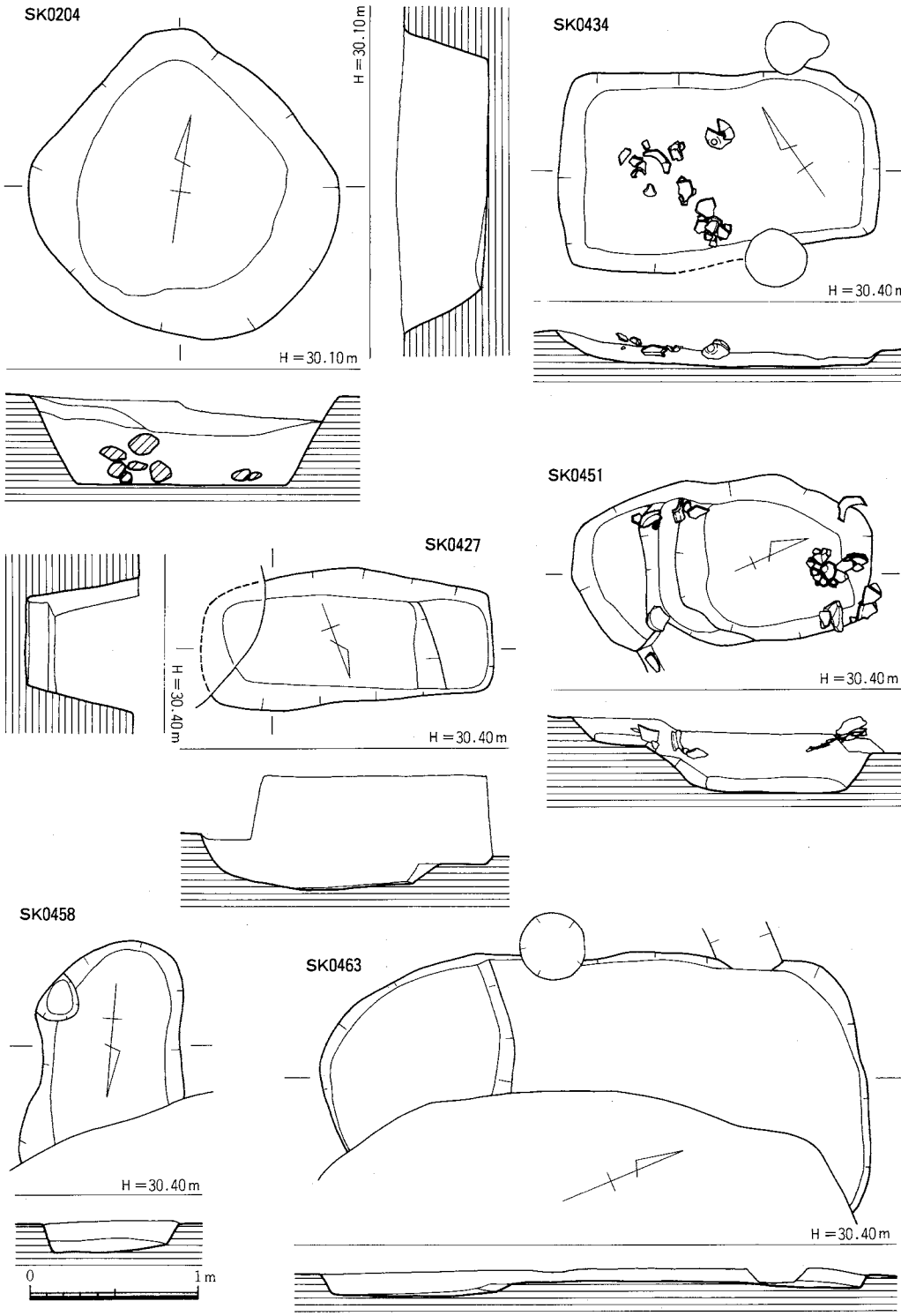
出土遺物（第24図169～172） 169～171は壺。169の口縁部は大きく外反し、端部を丸くおさめる。内外面とも雑なヘラ磨き調整である。170は肩部に段を作る。外面はヘラ磨き。171は円盤貼付底部。いずれの壺も胎土に砂粒が多い。172はわずかに上げ底となる甕の底部である。残存部はナデ調整を行う。

SK0427（第23図、図版13） 調査区東南に位置する長さ1.75m、幅0.80m、主軸をN－68°－Wにとる長方形土坑である。底面西側の深さ53cmの所で小さな平坦面を作り、東側がさらに15cm深くなる。底面には凹凸がある。覆土は茶褐色粘質土。SC0506に切られ、SC0522を切る。中期の壺、高杯などの小片が出土した。土壙墓の可能性もある。

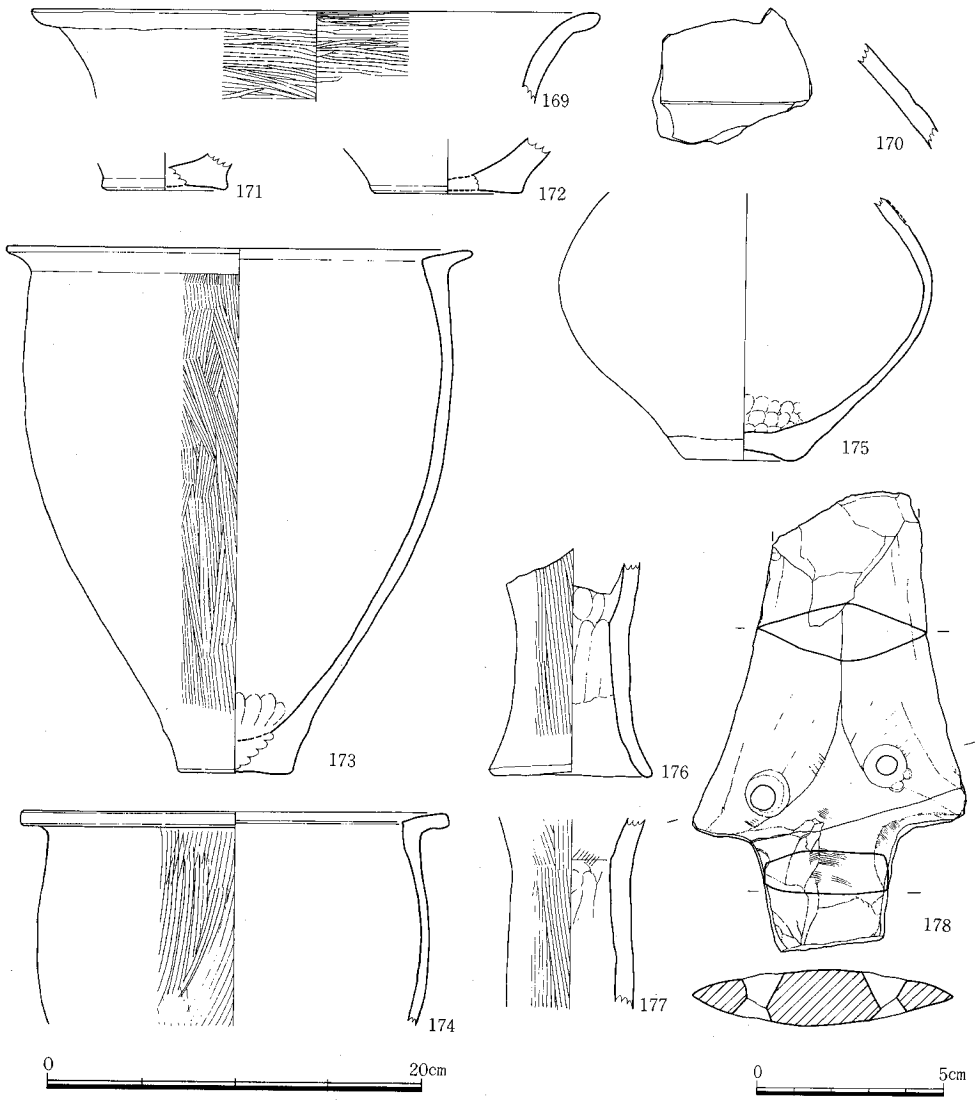
SK0434（第23図、図版13） 調査区東南、SC0520のすぐ西側に位置する長さ1.90m、幅1.21m、主軸をN－68°－Wにとる長方形土坑である。深さは残存状態の良い所で16cm。底面から5cmほど浮いた状態で土器片が出土した。中期前半の貯蔵穴か。

出土遺物（第24図173～177） 173・174は内傾する逆L字状口縁甕である。173の口縁は薄く先端は尖り気味で、また底部は締り厚い平底となる。復元口径24.6cm、器高28.0cm。174の口縁は厚みをもち、端部は丸くおさめている。ともに外面刷毛目、内面ナデ調整を施す。175は壺で、膨れた胴部と小さな上げ底をもつ。外面は摩滅で調整不明、内底には指頭痕が著しい。胎土には砂粒が多い。176・177は薄手の器台である。ともに外面刷毛目、内面指ナデで仕上げる。

SK0444 調査区東北端近く、SC0517とSC0524の間に位置する。この2基の古墳時代住居に切られ、全容はわからない。現状で東西幅2.20m、深さ31cmの竪穴となり、その底面北側にさらに幅0.90m、深さ8cmの長方形状の掘り込みがある。石戈はここから出土した。覆土は黒褐色粘質土である。



第23図　SK0204・0427・0434・0451・0458・0463実測図（1/40）

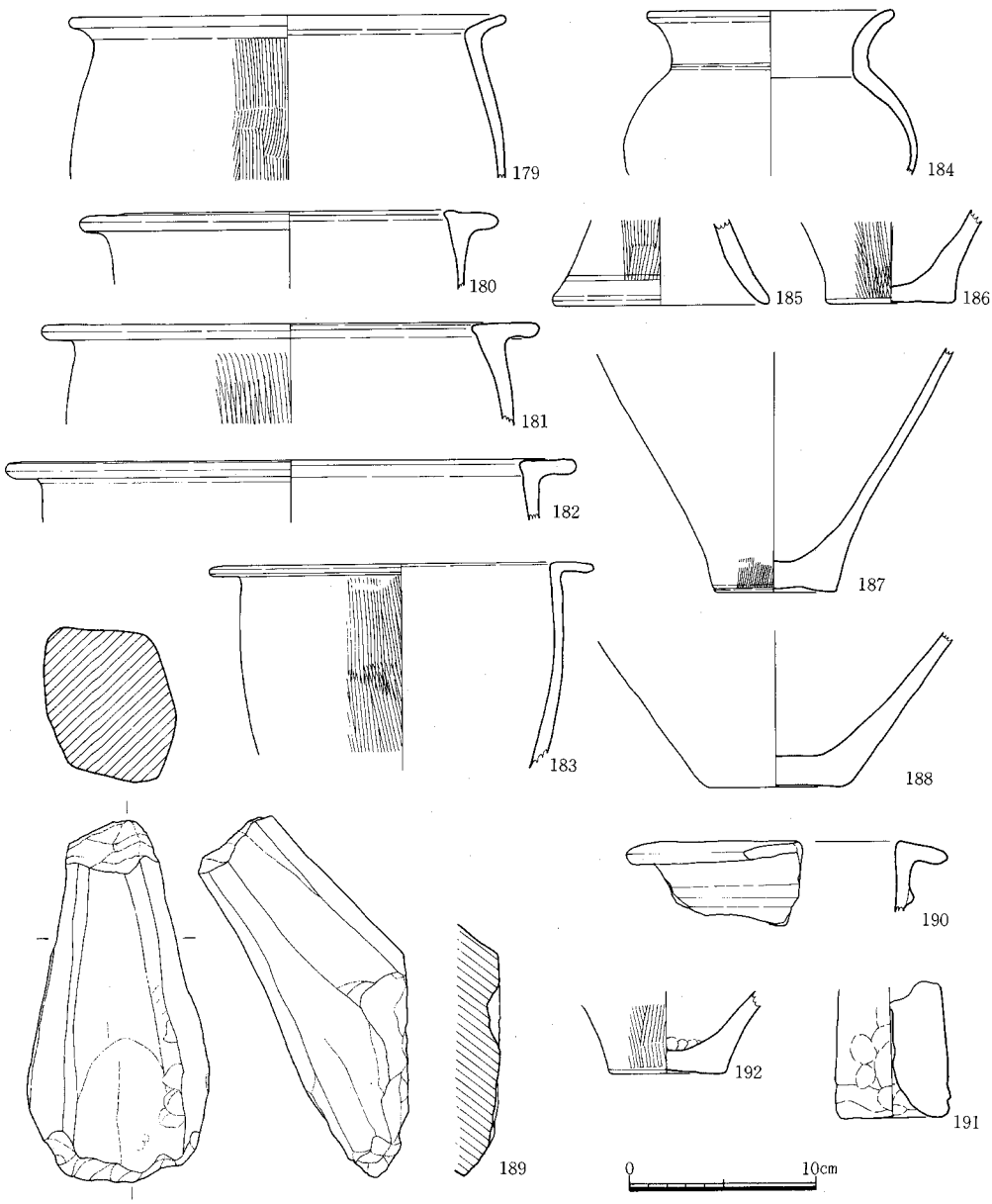


第24図　SK0204・0434・0444出土遺物実測図（178…1/2、他1/4）

出土遺物（第24図178）　切先を欠いた石戈である。関幅7.3cm、胡部厚1.1cm。砥ぎは身部が長軸方向、胡部が横方向に行う。残存部の鎬は鋭利さを欠く。穿孔は両面から行う。安山岩ホルンフェルス製。この他中期前半までの甕、壺などの細片が出土した。

SK0451（第23図、図版14）　調査区東南、SC520の西南隅を切る長さ1.81m、幅1.00mの楕円形土坑である。主軸はN－23.5°－Eにとる。坑内南側で2段の階段状の平坦面を作り、深さ44cmで長さ0.80m、幅0.78mの底面となる。遺物は遺構の上面近くで検出した。

出土遺物（第25図179～188）　179は内傾する逆L字状口縁をもつ甕で、187の上げ底の底部と



第25図　SK0451・0458・0464出土遺物実測図（1/4）

同一個体の可能性がある。内外面とも摩滅が著しい。復元口径23.6cm。180～183は逆Ｌ字状口縁甕で、183の口縁だけは外傾する。186は甕底部。184は口縁が外反する壺で、頸部と胴部の間には小さな段を作る。頸部から口縁部にかけては厚みがある。器面調整は摩滅が激しく不明。胎土には砂粒が多い。185は薄手の器台片で、胎土に砂粒が多く器表に浮き出る。188はわずか

に上げ底となる壺の底部。内外面ともヘラナデ調整である。

SK0458(第23図)　調査区東南端、SC0515の南周壁に切られた楕円形状土坑である。現状で東西幅0.85m、深さ28cmをはかる。中央から砥石が出土した。

出土遺物（第25図189）　一端が広がり厚みをもった砂岩製の砥石である。砥面は7面にわたり、底面には凹みがある。この他に前期の甕、壺の細片が出土した。

SK0463(第23図)　調査区東南、SC0514の西北周壁に切られた隅丸長方形状土坑である。南北長3.28m、東西幅は1.70～1.80mであろう。底面は北側で深さ8cm、南側は一段下がって深さ17cmとなる。中期甕などの細片が出土した。

SK0464(第26図)　調査区南、段落ち際に位置する楕円形状土坑である。南側を中世ピットに切られ、長さは1.50mを越えない。幅は0.67m、深さは8cmと浅い。

出土遺物（第25図190～192）　190は逆L字状口縁甕である。口縁は外傾し、下に三角凸帯がめぐる。192は甕底部で、わずかに上げ底となる。191は肉厚の器台である。中央孔さえもつぶれている。調整はナデ。

SK0469(第26図)　調査区南、SC0501の東北隅周壁に切られた不整方形土坑である。東西1.25m、南北は1.15m、深さ48cmをはかる。

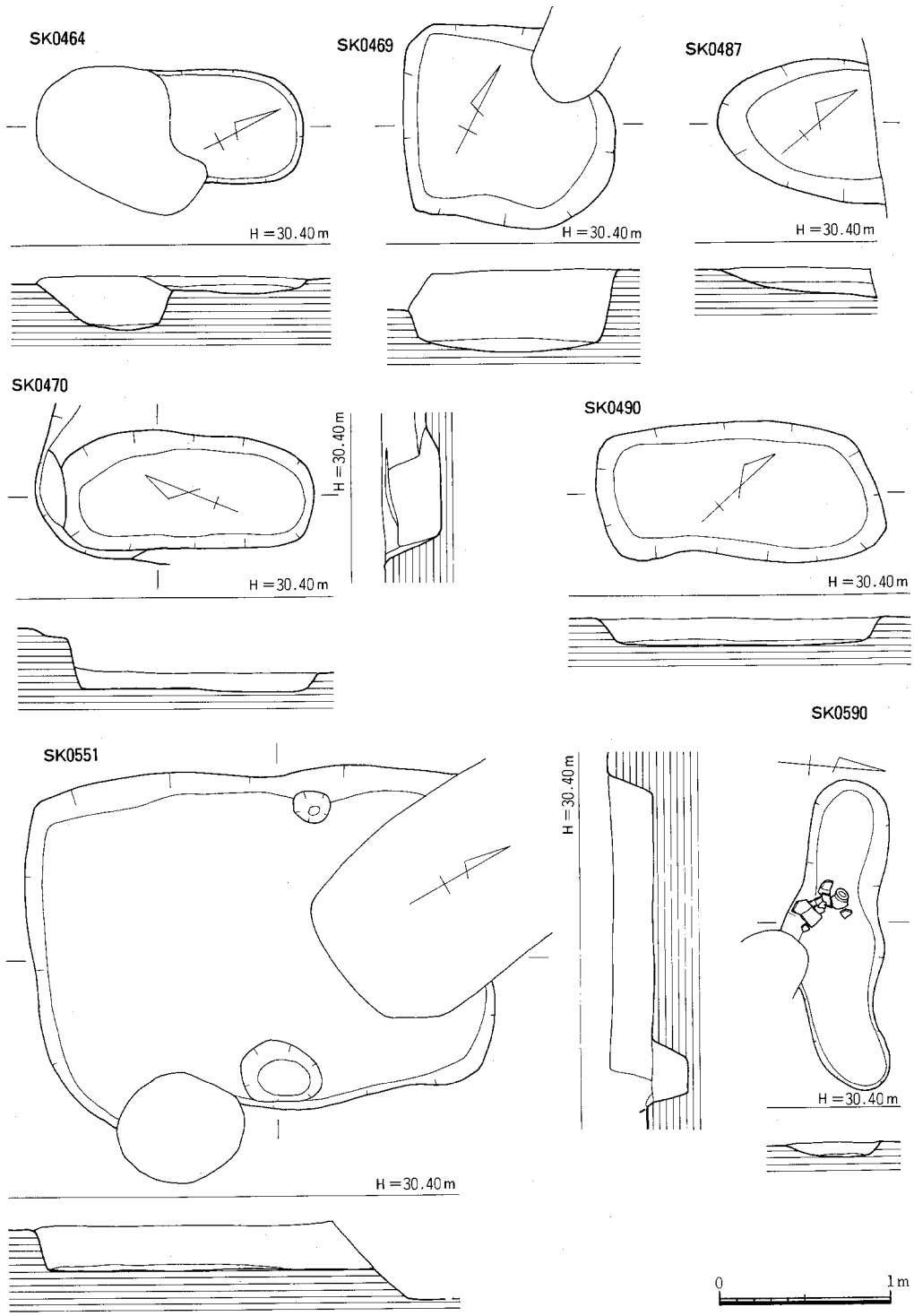
出土遺物（第27図）　193～196は逆L字状口縁甕である。195は口縁上面がややくぼみ、他は外傾気味の口縁となる。194を除き口縁下に三角凸帯があり、またナデ調整で仕上げる。197・198は甕底部で、ともに上げ底。外面は刷毛目調整を行う。199～201は壺の底部である。いずれもわずかに上げ底となる。調整はナデで、200の外面は丹塗りである。胎土には砂粒が多い。202は全長12.0cm、幅0.6cmの断面方形の鉄製品である。両端は扁平で尖り気味になり、その一端には巻物の痕跡が認められる。

SK0470(第26図)　調査区南、SC0501の北側周壁に切られた長さ1.65m、幅0.78m、深さ38cmの楕円形土坑である。主軸はN－21°－Wにとる。土壙墓の可能性がある。中期甕、広口壺などの小片が出土した。

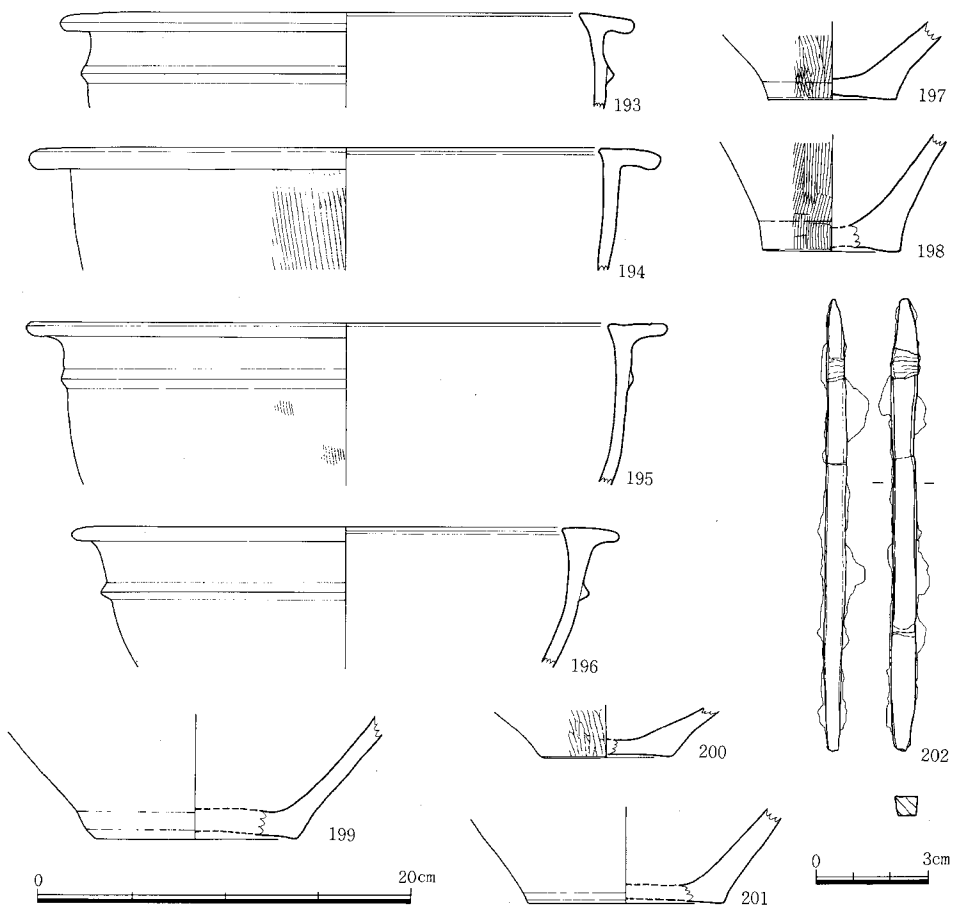
SK0487(第26図)　調査区東南、SC0522の北南側周壁およびSK0427に切られた長軸をほぼ東北－西南にとる楕円形土坑で、南側部分しか残存しない。幅0.85m、深さ17cmをはかる。弥生甕細片が出土したにとどまる。

SK0489　調査区東南、SC0520の東南隅周壁に切られた東西に長軸をとる楕円形土坑である。幅は0.50m、長さは1.70m前後であろう。深さ63cm。底面ではピットを確認した。覆土は暗褐色土。中期中頃の甕、器台などの小細片が出土した。

SK0490(第26図)　調査区東南、SK0489のすぐ南側に位置する長さ1.62m、幅0.84m、深さ15cmの隅丸長方形土坑である。長軸をN－40°－Eにとる。覆土は暗褐色土。中期の甕などの細片が出土した。



第26図　SK0464・0469・0470・0487・0490・0551・0590実測図（1/40）



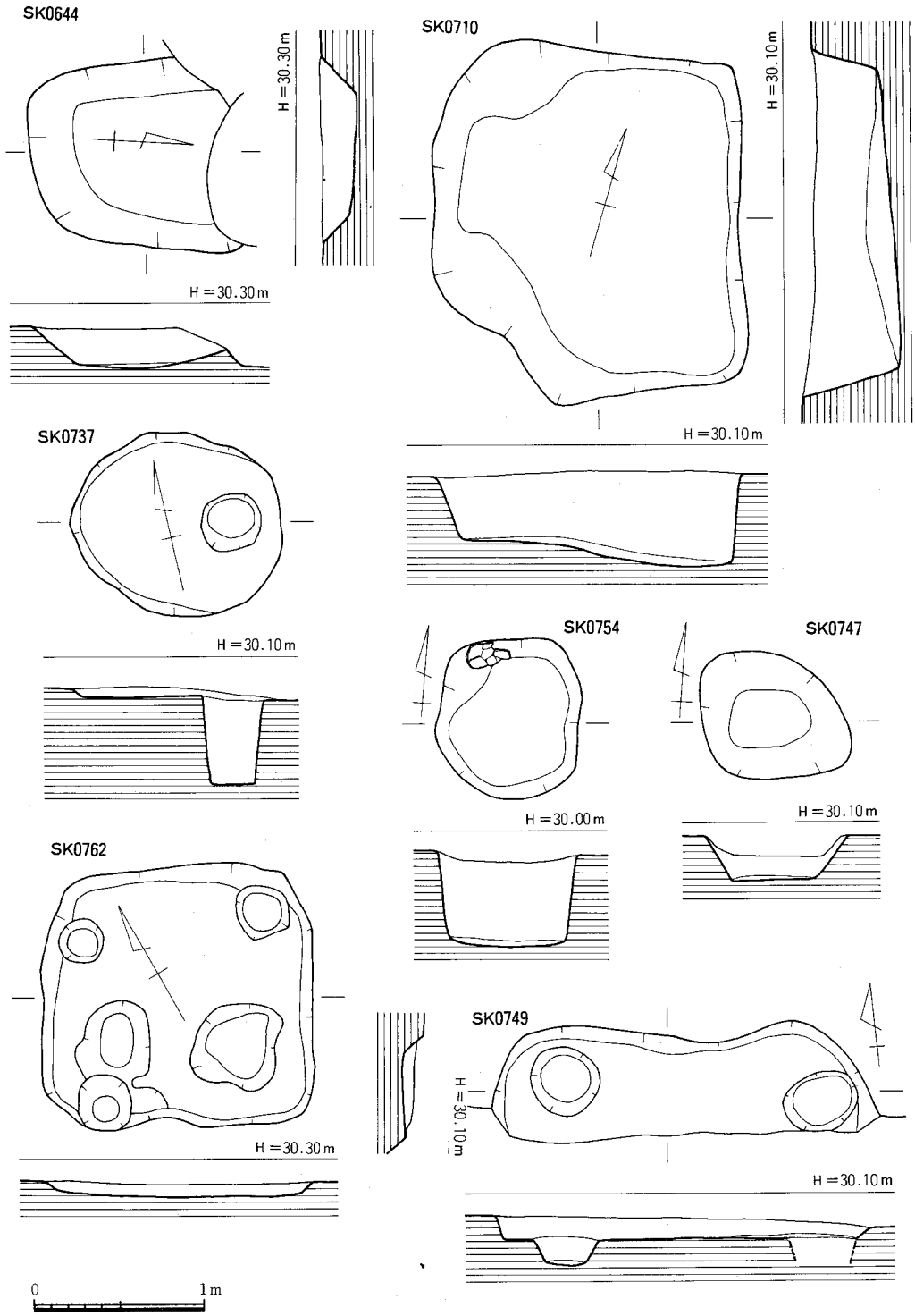
第27図　SK0469出土遺物実測図（202…1/2、他1/4）

SK0551（第26図）　調査区東南、SC0520の西北に位置する長さ2.80m、幅2.00m、深さ30cmの長方形土坑である。北側隅をSK0002に切られる。中期中頃。

出土遺物（第29図203～205）　203・204は逆L字状口縁甕で、203の口縁下には沈線が入る。204の口縁上面はくぼむ。205は鋤先口縁壺である。口縁上面以外はヘラ磨きで、頸部外面には縦方向の暗文を8ケ所に施す。丹塗りであろう。胎土には細かい砂粒が多い。

SK0554・0555　調査区の南、SC0502の西北隅周壁に切られる楕円形土坑である。ほぼ西北－東南に長軸をとり、長さ3.10m、幅1.60mをはかる。深さ10cmほどで平坦面を作り、その西北側に長さ1.65m、幅0.80mの長軸を同じくする深さ61cmの竪穴（SK0555）を掘り込む。別番号を付けたが同一遺構である。中期前半の甕などの細片が出土した。

SK0569　調査区東側、SC0502の西側に位置する径0.80m、深さ70cmの円形土坑である。坑内には礫が多い。柱穴の可能性もある。



第28図　SK0644・0710・0737・0747・0754・0759・0762実測図（1/40）

出土遺物（第29図207） 出土したのはこの薄手の器台片だけである。外面は刷毛目、内面は指ナデ調整を行っている。

SK0585 調査区東南、SC0519の西側に位置する楕円形土坑で、長軸をほぼ東西にとり、長さ1.02m、幅0.50m、深さ52cmをはかる。底面には凹凸がある。

出土遺物（第29図208） 図示したのは厚手の器台で、内外面とも指ナデで仕上げる。他に中期甕、壺の細片が出土している。

SK0590（第26図） 調査区東南、SC0526の南側に位置する長楕円形土坑である。長軸はほぼ東西で、長さ1.80m、幅0.58m、深さ10cmをはかる。中央部から土器がまとまって出土した。中期前半。

出土遺物（第29図209～211） 209は甕で、口縁部は逆L字状に近いが、外への突出は小さく、また内傾する。外面は縦方向の板ナデ、内面は指ナデ調整。210は甕底部。下半部が引き締まり、上げ底となる。211は壺胴部片で、外面はヘラ磨き、内面は指押えを行う。胎土には砂粒が多い。

SK0619 調査区中央、SC0523の東側に位置する楕円形土坑である。長軸をほぼ東西にとり、長さ1.02m、幅0.50m。底面には凹凸があり、最も深いところで48cmをはかる。覆土は暗褐色土。

出土遺物（第29図212・213） 212は壺胴部で、上下2本の横沈線間に羽状文を貝殻の腹縁で描く。外面はヘラ磨き。胎土には砂粒が多い。213は砂岩製の扁平な砥石で、表裏両面と一側面を砥面として利用する。他に甕細片などが出土している。

SK0644（第28図） 調査区中央、SC0512の東側周壁に切られた長軸を南北にとる楕円形土坑である。幅1.10m、長さは1.30m前後であろう。深さ25cmで、覆土は暗褐色土。

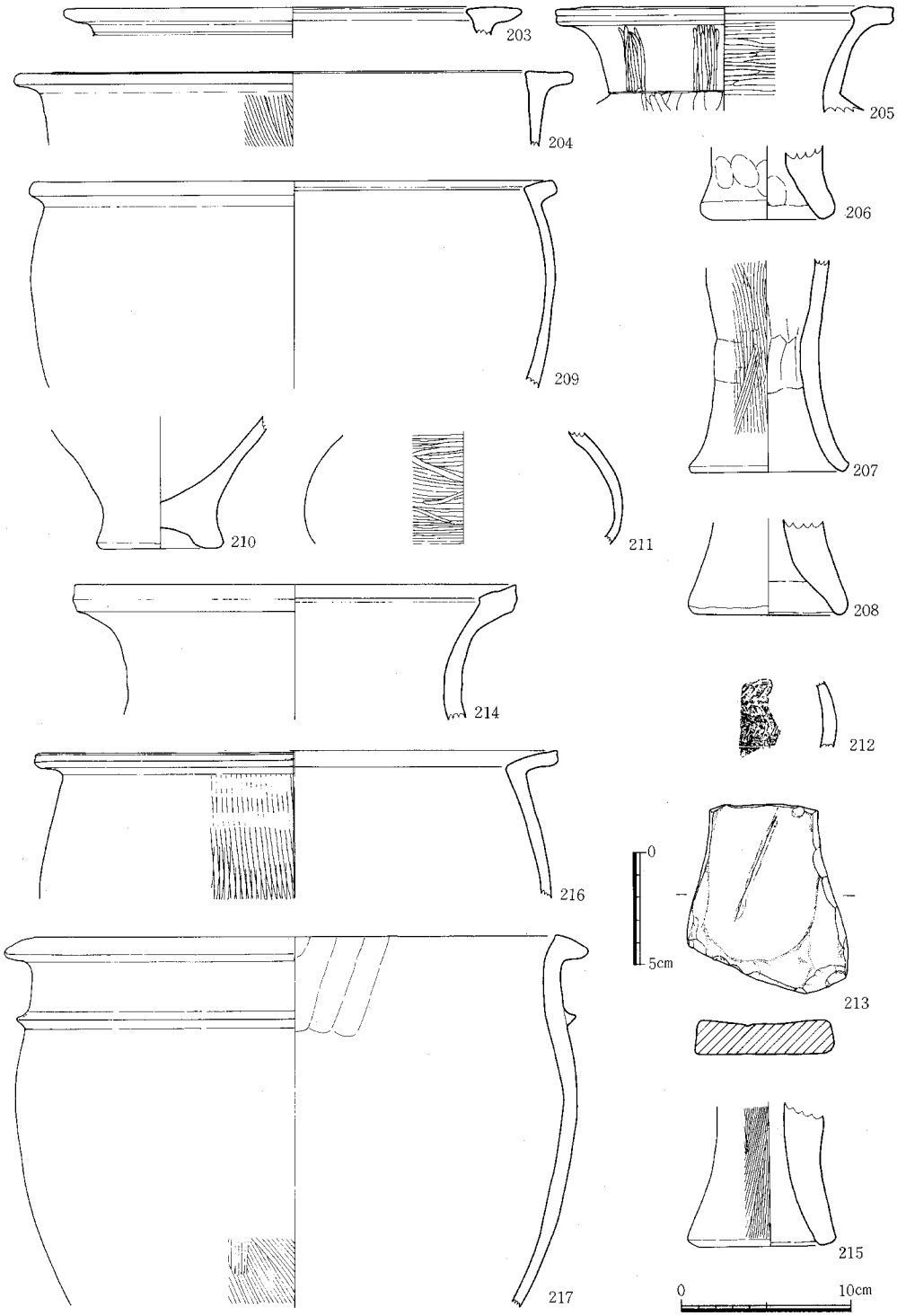
出土遺物（第29図214） 図示したのは大きく外反する口縁上面が肥厚した壺である。内外面ともナデ調整を行う。他に甕などの細片が出土している。

SK0710（第28図） 調査区北側、SC0516（古墳時代）の東側に位置する南北2.10m、東西1.81mの不整方形の土坑である。底面は東南方向に傾斜し、深いところで60cmをはかる。覆土はやや淡い褐色粘質土である。

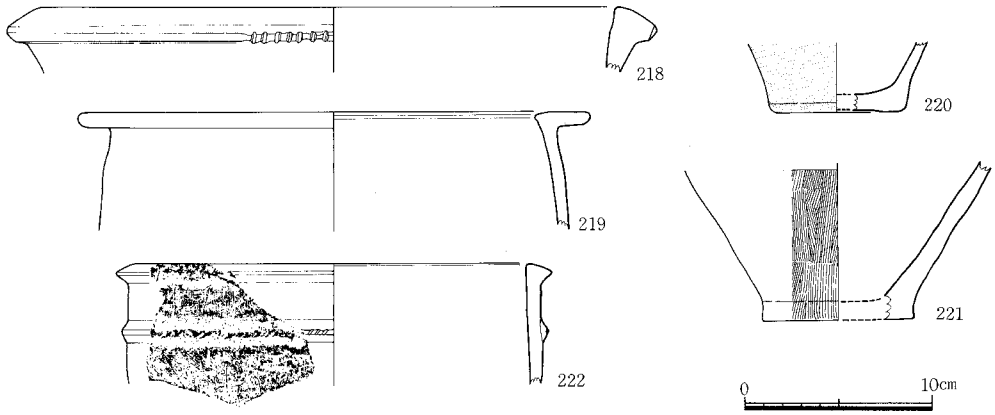
出土遺物（第29図215） 厚手の器台片である。外面の一部に細かい刷毛目がみられる以外は指ナデで調整している。他に甕細片などが出土した。

SK0711 調査区北側、SK0710のすぐ東側に位置する土坑である。東西5.00m、南北4.50m、深さ5～6cmの浅い方形状掘り込みがあり、その底面南側に長さ4.00m、幅1.40m、深さ40cmの長楕円形竪穴を作る。覆土は暗褐色土である。

出土遺物（第29図216・217） 216は内傾する逆L字状口縁甕である。外面は粗い刷毛目、内面は横ナデ調整を行う。作りは端正で、厚さも一定し、また焼成も良好である。217は断面三角



第29図　SK0551・0569・0585・0590・0619・0644・0710・0711出土遺物実測図（213…1/2、他1/4）



第30図　SK0749・0754出土遺物実測図（1/4）

形の口縁をもつ甕で、口縁下に１条の三角凸帯がめぐる。内外面ともナデ調整である。

SK0737（第28図）　調査区西北側に位置する西北－東南に長軸をとる楕円形土坑である。長さ1.25m、幅1.05m、深さ６cmをはかる。東側のピットは後世のものである。SD0202（中世）に切られる。弥生土器の細片が少量出土した。

SK0747（第28図）　調査区北側の段落ち部分に位置する不整方形土坑である。東西0.90m、南北0.77m、深さ27cmをはかる。東側上面には礫がみられる。前・中期の甕、壺の細片が少量出土した。

SK0749（第28図）　調査区北側の段落ちに削られ北側部分しか残存しない土坑である。東西2.20m、深さ14cmをはかる。底面東西両側にはピットがそれぞれある。

出土遺物（第30図218～221）　218は断面三角形の口縁をもつ厚手の甕の小片で、口唇にはヘラで刻目を施す。219は逆Ｌ字状口縁甕。全体に薄手の作りで、均整がとれている。ともにナデ調整である。220は丹塗りの甕で、若干上げ底となる。胎土は精良。221も甕の底部で、外面には細かい刷毛目調整を行う。他に壺などの細片がある。

SK0754（第28図）　調査区北側、段落ち部分に位置する南北長0.96m、東西幅0.83mの楕円形土坑である。深さ60cm。壁面には地山の礫が露出する。覆土は暗褐色土である。

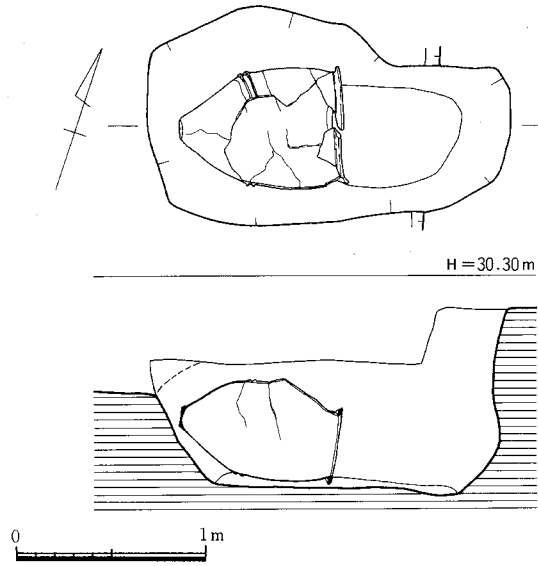
出土遺物（第30図222）　図示したのは口縁および口縁下に刻目三角凸帯がめぐる甕である。刻目は小さく浅い。外面は細かい刷毛目、内面はナデ調整を行う。他に前期壺、甕底部などが出土した。

SK0762（第28図）　調査区東側、SC0508とSC0513の間に位置する一辺1.55m前後の隅丸方形土坑である。深さ10cm程度。底面四隅に浅いピットがある。弥生土器の細片が少量出土したにとどまる。

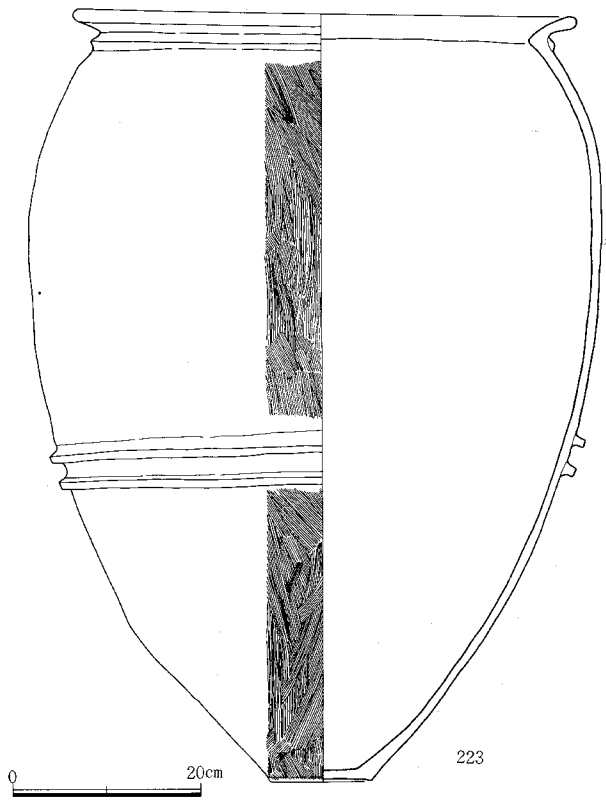
4）甕棺墓

SX0533（第31図、図版14）　調査区東、SC0509の床面下から検出した。竪坑をうがち、さらに横穴を掘り甕棺をおく。棺は主軸をN－71.5°－Eにとる単棺で、底部がやや高くなるようにして埋置している。蓋の痕跡は確認できなかった。埋土は明褐色土と黄色土ブロックが混じる。

甕棺（第32図）　口径53.0cm、高さ81.8cm。口縁はくの字状に外反し、口縁下に三角凸帯、胴部の最も膨らんだ辺りに台形状の凸帯２条がめぐる。底部はわずかにあげ底となる。調整は内面ナデ、外面刷毛目である。橋口甕棺編年のIIIC式に相当する。



第31図　SX0533実測図（1/40）



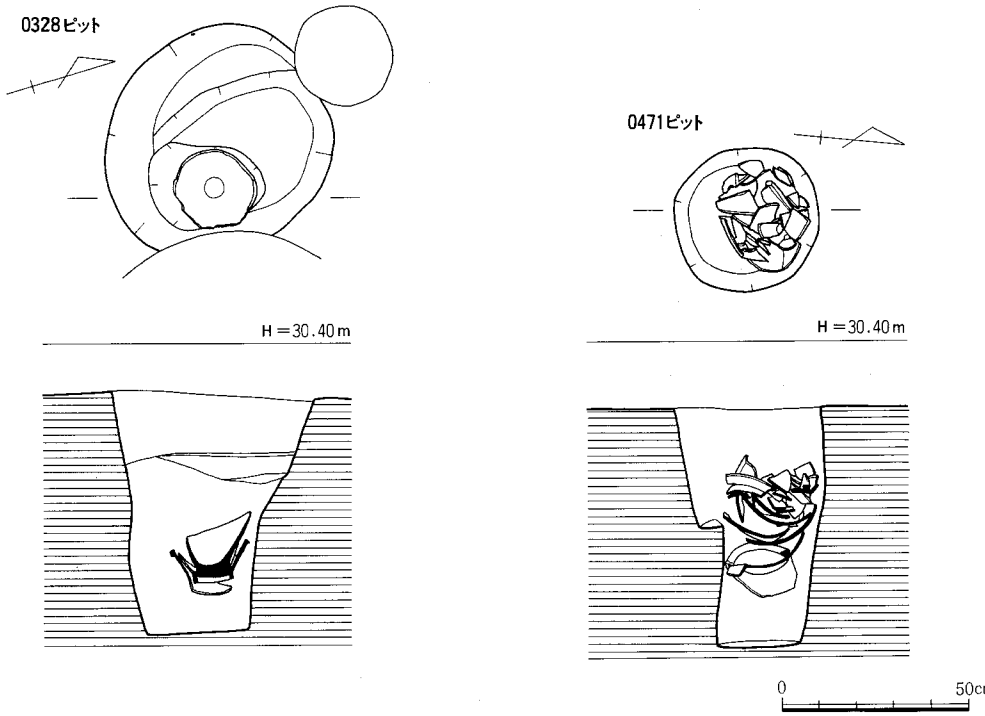
第32図　SX0533甕棺実測図（1/8）

5）その他の遺構と遺物

（1）ピットおよび出土遺物

調査区内では径50～60cmのピットを多数検出し、その中には覆土の特徴また出土遺物から明らかに弥生時代と認定できるものが相当数あった。それらのピットにはSC0534のように周壁が削平された竪穴住居の柱穴、あるいはSB0210のように掘立柱建物をなすもののまとめきれなかった柱穴も含まれるものと考えられる。

第33図に示した0328・0471の両ピットは、おそらくこの種の柱穴で、建物の廃棄あるいは建て替えの際柱を抜き取り、その穴に破損した土器類を投棄したものと考えられる。



第33図　0328・0471ピット遺物出土状況実測図（1/20）

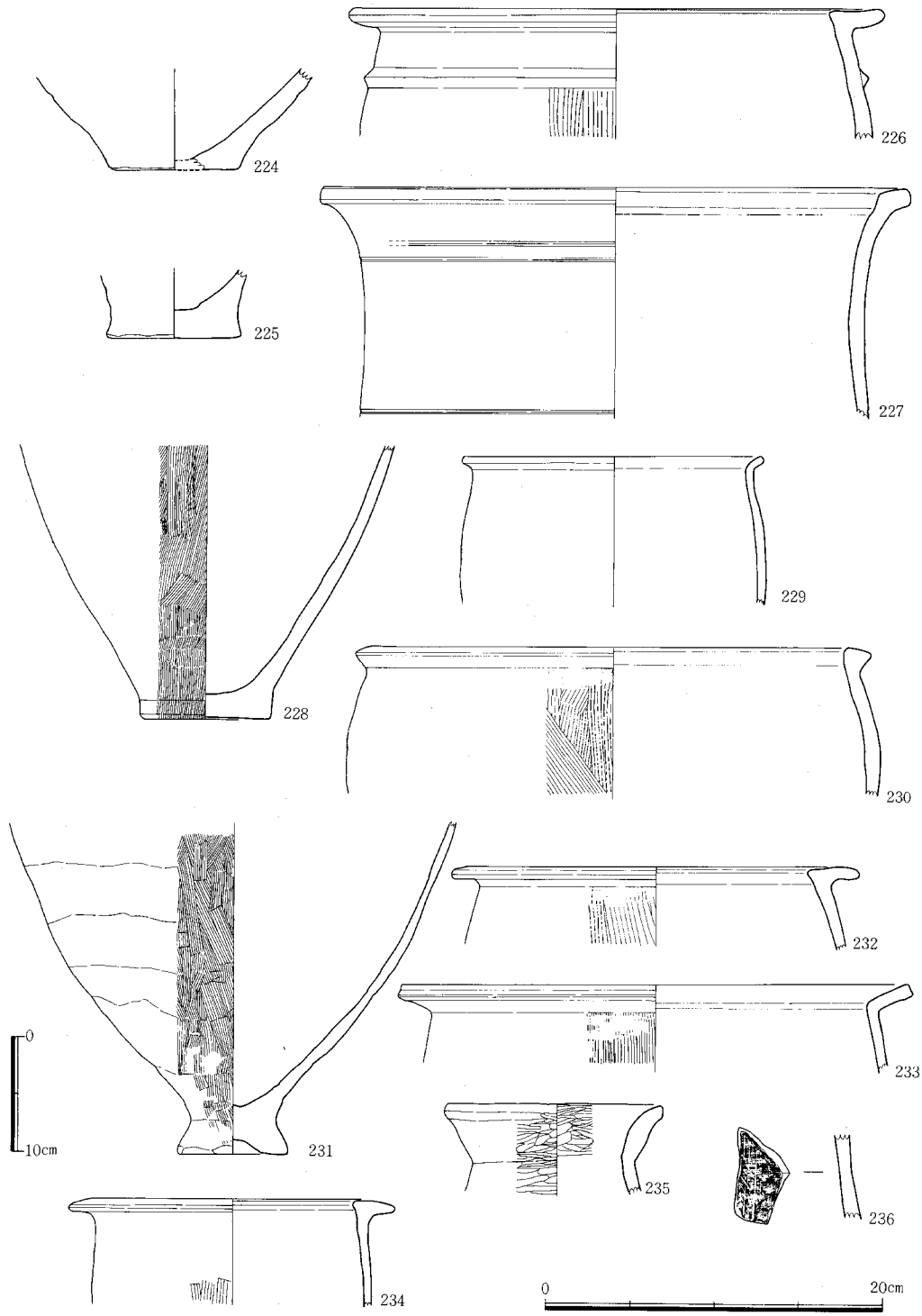
以下この項ではピットから出土した弥生土器をみていく。

0275ピット出土遺物（第34図224・225）　224は壺、225は甕の底部である。225は外に張り出し、底面も厚い。ともに胎土には砂粒を多く含む。調整はナデ。

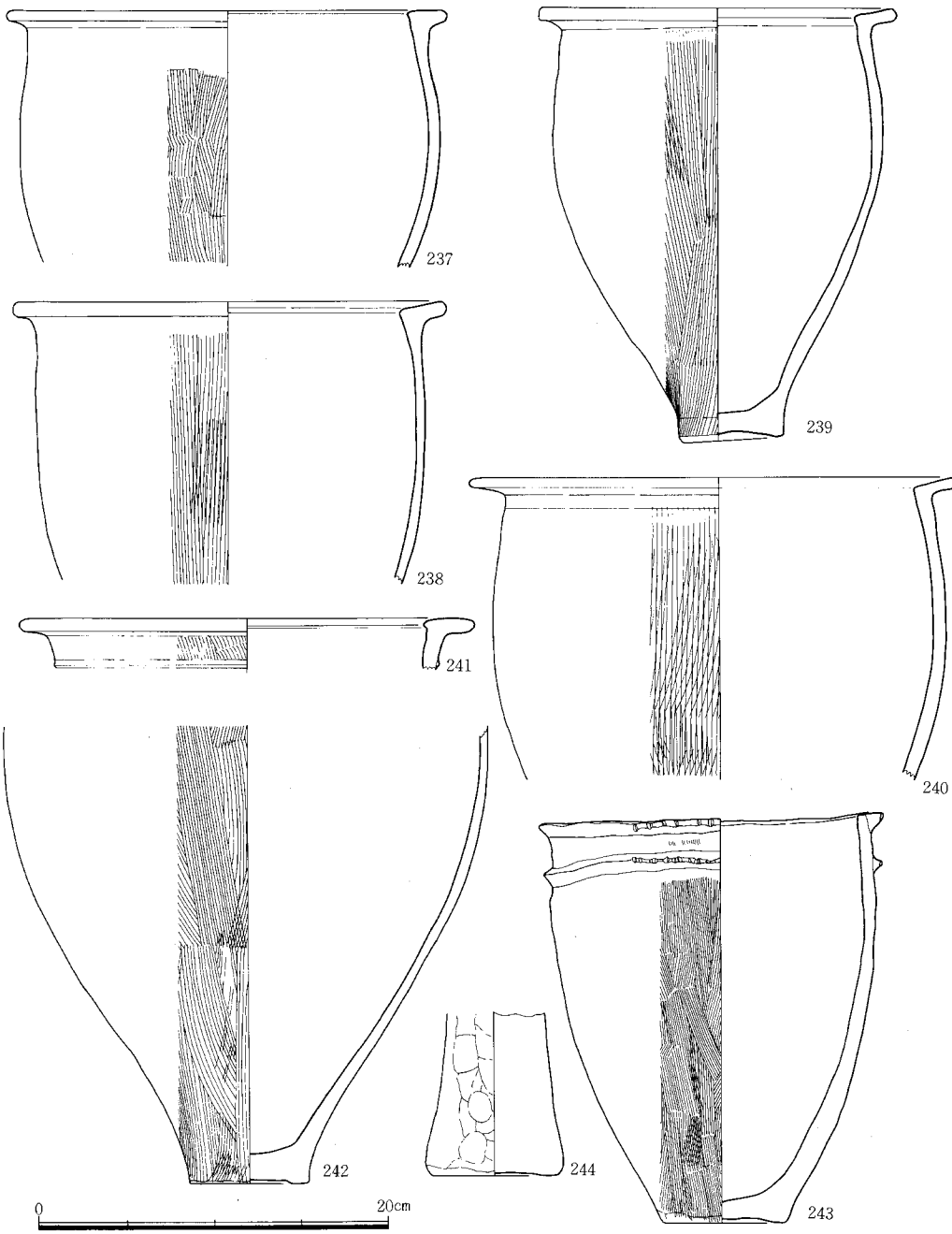
0328ピット出土遺物（第34図226～228）　226は逆Ｌ字状口縁甕。口縁上面はくぼみ、口縁下には三角凸帯がめぐる。凸帯下は縦刷毛目、他は横ナデ調整を行う。227は壺とすべきか。頸部が外湾気味に立ち上がり、上部で口縁が小さく外反し、その上面を肥厚させ平坦面を作る。口縁下に２条、頸部下に１条の浅い横沈線がめぐる。調整はナデ。胎土中には径８㎜大までの砂粒が多い。

0347ピット出土遺物（第34図229・230）　229は如意形口縁甕。口唇には刻目を施す。器表は摩滅し本体も脆い。230は断面三角形口縁の甕。外面は刷毛目、内面は指ナデで仕上げる。胎土には砂粒が多い。

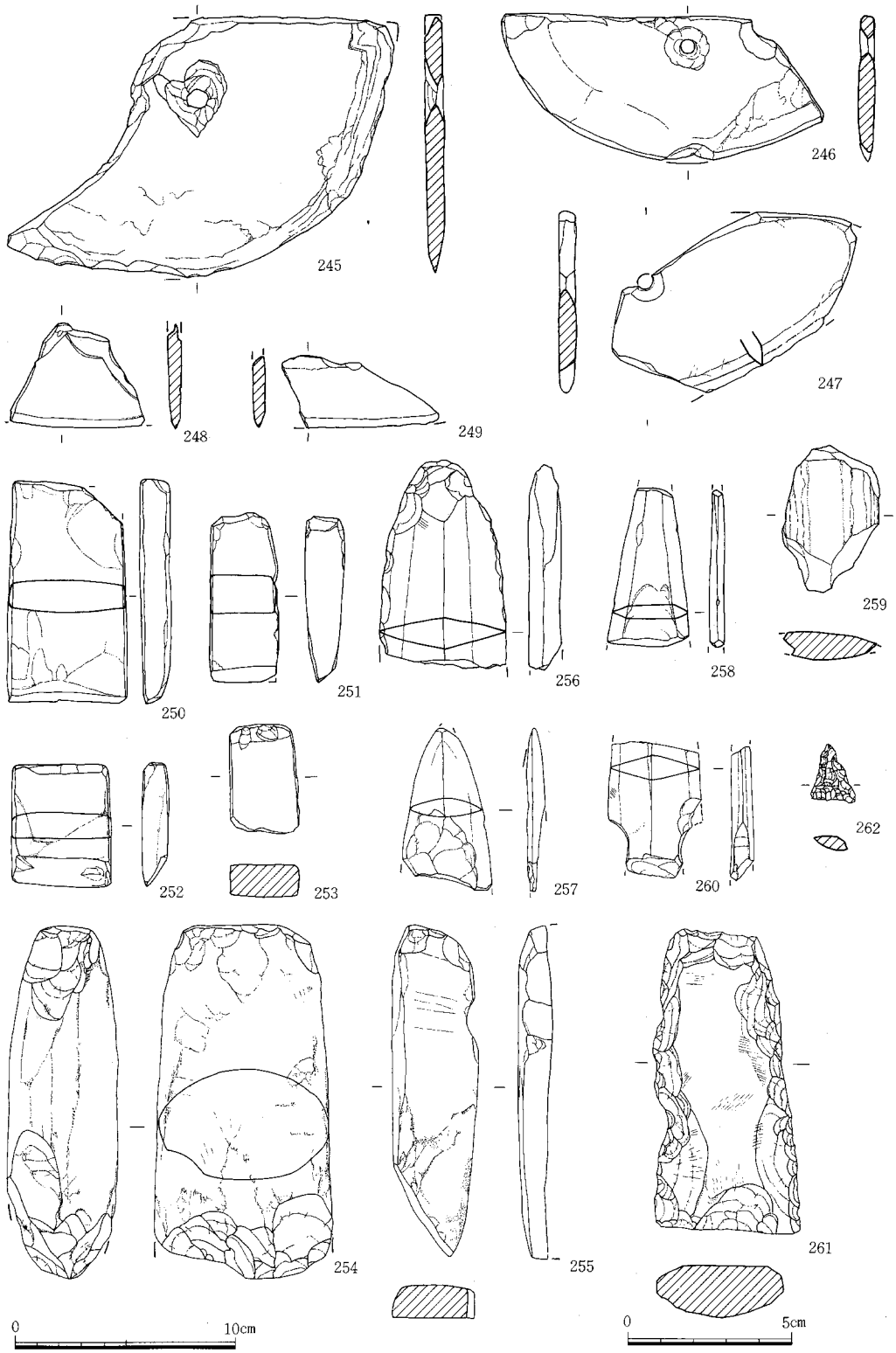
0471ピット出土遺物（第34図237～242、図版31）　237～241は逆Ｌ字状口縁甕。237の口縁は外側への張り出しが小さく、他の３個体の口縁は内傾する。241の口縁下には小さな三角凸帯がめぐる。いずれも外面を縦刷毛目、内面をナデで仕上げる。239は口径20.4cm、器高24.6cm。底部は締まり、厚い上げ底となる。242も同様の甕の下半部である。底部はわずかに上げ底となる。



第34図　ピット出土遺物実測図Ⅰ（231…1/6、他1/4）



第35図　ピット出土遺物実測図II（1/4）



第36図　出土弥生時代石器実測図（254･255…1/3、他1/2）

0473ピット出土遺物（第34図231） 胴下半部が締まり、底部が台形状に張る甕である。底部は厚く、上げ底。外面は刷毛目、内面ナデ調整を行う。

0589ピット出土遺物（第34図232・233） 232は逆Ｌ字状口縁甕。233も甕で、口縁はくの字状に近いが、端部は明瞭な稜線を作る。ともに外面刷毛目、内面ナデ調整。

0592ピット出土遺物（第34図234） 逆Ｌ字状口縁をもつ薄手の甕である。口縁は外傾する。外面は刷毛目を横ナデで消す。他はナデ調整。煤が付着する。

0594ピット出土遺物（第34図235） 外反する口縁外面が肥厚する壺である。残存部は内外面ともヘラ磨き。胎土には砂粒が多い。

0599ピット出土遺物（第34図236） 小型壺の頸部片であろうか。外面には縦方向の数本の沈線と、それを斜めに横切る短い沈線がみられる。胎土は比較的密で、砂粒が入る。

0630ピット出土遺物（第35図243・244） 243（図版31）は口縁及び口縁下に２条の三角凸帯がめぐる甕。凸帯にはヘラで刻目を入れる。底部は上げ底となる。外面は刷毛目調整で、煤が付着する。内面はナデ調整。口径19.7cm、器高23.4cm。244は器台であろうか。中実で、底面は平坦である。調整はナデ。

（２）包含層およびその他の遺構出土石器（第36図）

ここでは調査区北側の包含層および古墳時代以降の遺構などから出土した主な弥生時代の石器について簡単な報告を行う。なお弥生土器の出土も相当数に及んだが、時間的制約から報告に至らなかった。

245～249は安山岩ホルンフェルス製石包丁である。245は大型で、半円形を呈する。246・247は半月形。いずれも弧に両刃を作る、また穿孔は両面から行う。248・249は刃部片である。

250～253は頁岩製の偏平片刃石斧。法量に相違があるが、いずれも丁寧に研ぎあげている。253の刃部は欠損する。254は玄武岩製の太形蛤刃石斧。折損した刃部を敲打して再利用する。255は安山岩ホルンフェルス製の抉入片刃石斧で、縦方向に本体が割れている。

256～261は石剣。256～258は切先付近の破片で、うち258は鎬を作らず断面は六角形状となる。259は身の一部、260は関部分の破片である。261は基部近くの破片で、一側縁に抉りがある。一部に研ぎを行っただけの未製品である。

262は黒曜石製の石鏃。凹基で、重量0.68g。石鏃は他にも出土している。

なお245・253・259は北側包含層、246・258・260・261はSC0507、247はSC0501、248はSC0509、249はSC0504、250はSK0005、251はSC0525、252・255・256・262はSC0510、257はSC0505から出土した。

6）小結

今回検出した弥生時代の遺構は、竪穴住居を主体とする集落跡であった。竪穴住居は約20～30m隔て、西北群と東南群に分れる。西北群では5棟の円形住居を確認した。この辺りは低丘陵の先端にあたり、住居数は調査区を拡げてもさほど増えないものと考えられる。住居はいずれも前期中頃までの時期で、西北端部では4基が切り合っている。

東南群は9棟の円形住居、4棟の長方形住居、1棟の掘立柱建物と貯蔵穴を含む土坑群からなる。時期別に見ると前期中頃に円形住居2棟（SC0508・0512）、前期末中期初頭に長方形住居（SC0511・0513）が出現し、また円形住居1棟（SC0515）のあわせて3棟、中期前半は、円形住居4棟（SC0514・0519・0521・0534）、長方形住居2棟（SC0520・0522）のあわせて6棟となる。土坑も中期前半の時期が多い。中期中頃には掘立柱建物（SB0210）が出現し、竪穴住居は見られない。すなわち東南群では円形住居の出現、長方形住居の出現、竪穴住居の消滅と掘立柱建物の出現と住居の消長がたどれるとともに、前期以降若干ではあるが住居数が増加し、その立地も丘陵先端部からより遠去っている状況が窺われる。

第1次調査でこの東南群の東約15mを調査しているが、弥生時代の住居の広がりは認められない。ただ約50m離れた第1次調査第13地点で、中央土坑と4本柱をもつ円形住居2棟と1間×2間（4.5×5.9mほど）の掘立柱建物1棟が検出されている。報文では建物は中期とある。岩本遺跡群内では他に弥生時代の住居は確認されていない。

これまでの入部地区圃場整備に伴う調査では次の10地点で弥生時代の住居跡が確認されている。北から①重留遺跡2次第16地点（前期4棟）、②同第8－III地点（前期9棟）、③同第9－III地点（前期7棟）、④四箇船石遺跡1次第12－VI地点（前期4棟）、⑤重留遺跡3次第10地点（前期1棟）、⑥本報告の岩本遺跡2次（前～中期18棟）、⑦同1次第13地点（2棟）、⑧東入部2次8区（前～中期20棟以上）、⑨同13区（前～中期10棟）、⑩同15区（中期8棟）である。これらの住居は、現在油山の裾部を走る国道263号線（早良街道）より300～400m平野中央部に近く、150～250mの距離をとって約1.2kmにわたって続く。⑧⑨⑩は同一集落として把えることができ、この南側平野部には弥生時代の遺構、遺物はほとんど認められない。いずれの地点も住居跡の切り合いが認められ、一時期の住居数は多くて5～6棟と考えられる。また一部を除き墓地が近接して造営されているのも特徴的である。早良平野南部、油山西南麓の弥生時代集落については今回がはじめての報告で、先に概述した他集落の詳細な報告を俟つ必要がある。

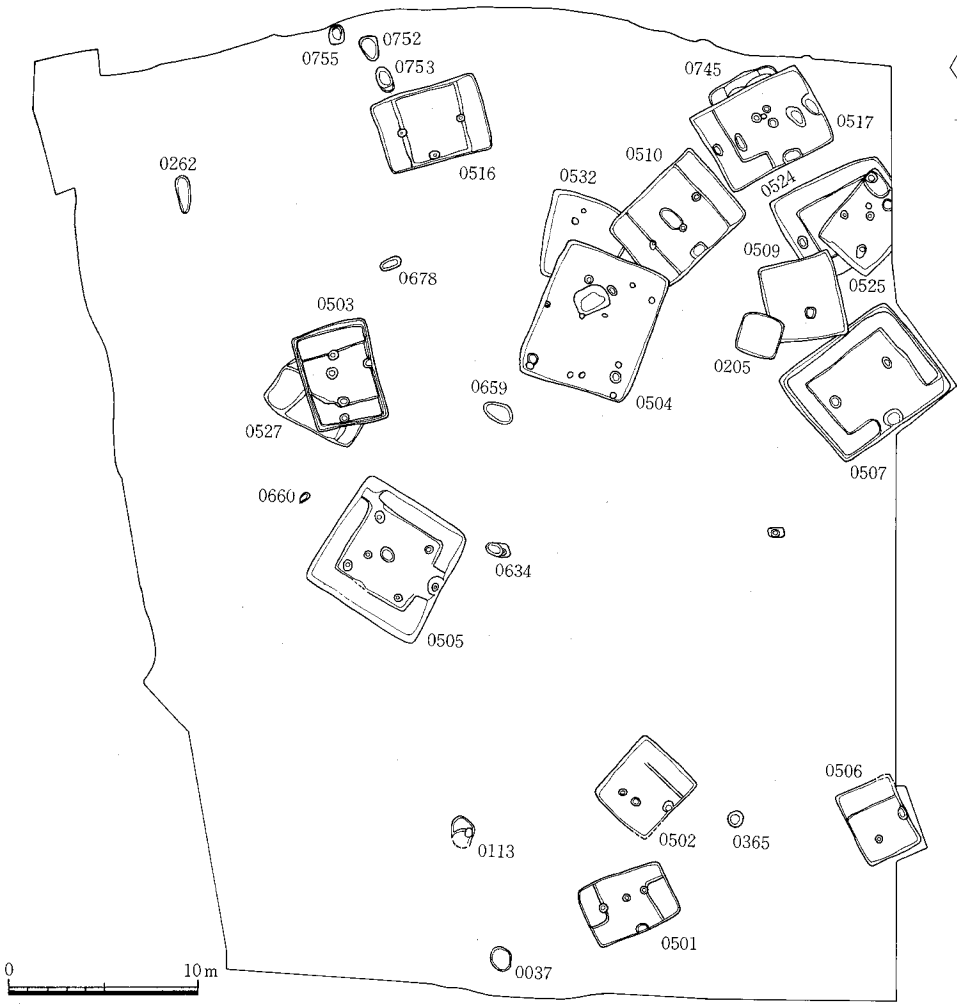
参考文献　『入部Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集　1990
『入部II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集　1991

4　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に属する遺構としては竪穴住居跡15棟、土坑15基、ピット、その他が検出された。主体はベット状遺構を持つ竪穴住居跡で、調査区北東部を中心にほぼ全面で検出した。

1）竪穴住居

SC0501（第38図）　調査区中央南側で検出。東西長4.9m、南北長3.4m、残存壁高20cm～25cmを測る。東西両短辺に２m×１m、高さ５cm程のベッド遺構を削り出し付設する。炉は住居中央部に掘り込まれる。p１・p２の２本柱を主柱穴とする。南側長辺の中央壁添いに、床面より深さ10cm程の小穴が掘り込まれている。性格については不明であり、入口・貯蔵穴等の機能も考えられている。ここではこの種のピットを“壁際ピット”と呼称することとする。出土遺物には甕・壺・椀等がある。甕については内面刷毛目を施すもののみが出土しており、体内面に削り



第37図　古墳時代遺構配置略図（1/400）

を施す外来系のものはみられない。

出土遺物（第38図） 263は甕の体部下半破片である。残存器高22.4cmを測る。長胴の体部に、底部は丸底化しておらず凸レンズ状を呈す。外面上半は右上がりの斜位のタタキ、下半は縦方向の刷毛目によって最終調整を施す。内面は全体に縦刷毛を施し底部付近は螺旋状に横方向の刷毛目を施す。外面上半2/3程度に煤が付着する。

264は埦である。口径11cm、器高3.3cmを測る。焼成が軟質で器面の剝落が著しい。

265・266は小型の直口壺である。口径はそれぞれ11.6cm・9.4cmを測る。265は体外面に細かい縦刷毛、内面にやや粗い横刷毛を施す。266は口縁外面に波状のミガキ、体部上半に斜方向のミガキを行い、下半は縦刷毛による調整を施す。内面に板状工具によるナデ調整に伴う小口痕が残る。

SC0502（第39図） SC0501の北側で検出、南側コーナーを現代の攪乱及び中世溝によって削平される。東西長4m、南北長4.4m、残存壁高20cmを測る略正方形の竪穴住居跡である。住居内南東側に、壁添いに3m×1mの範囲を深さ3cmほどの浅い溝で区画している。所謂間仕切りの溝であり、居住空間を分別する機能を有すると思われる。炉は中央に掘り込まれ、径50cm、深さ10cmの断面皿状を呈している。炉上面に鼓形器台が検出され人頭大の自然礫により破砕されていた。住居の廃棄に伴うものであろうか。床面よりピット3個を検出したが主柱穴は認定し難い。北東壁中央部に径50cm、深さ25cmの壁際ピットを検出した。出土遺物には土師器甕・壺・器台・高坏・土製品・鉄器がある。

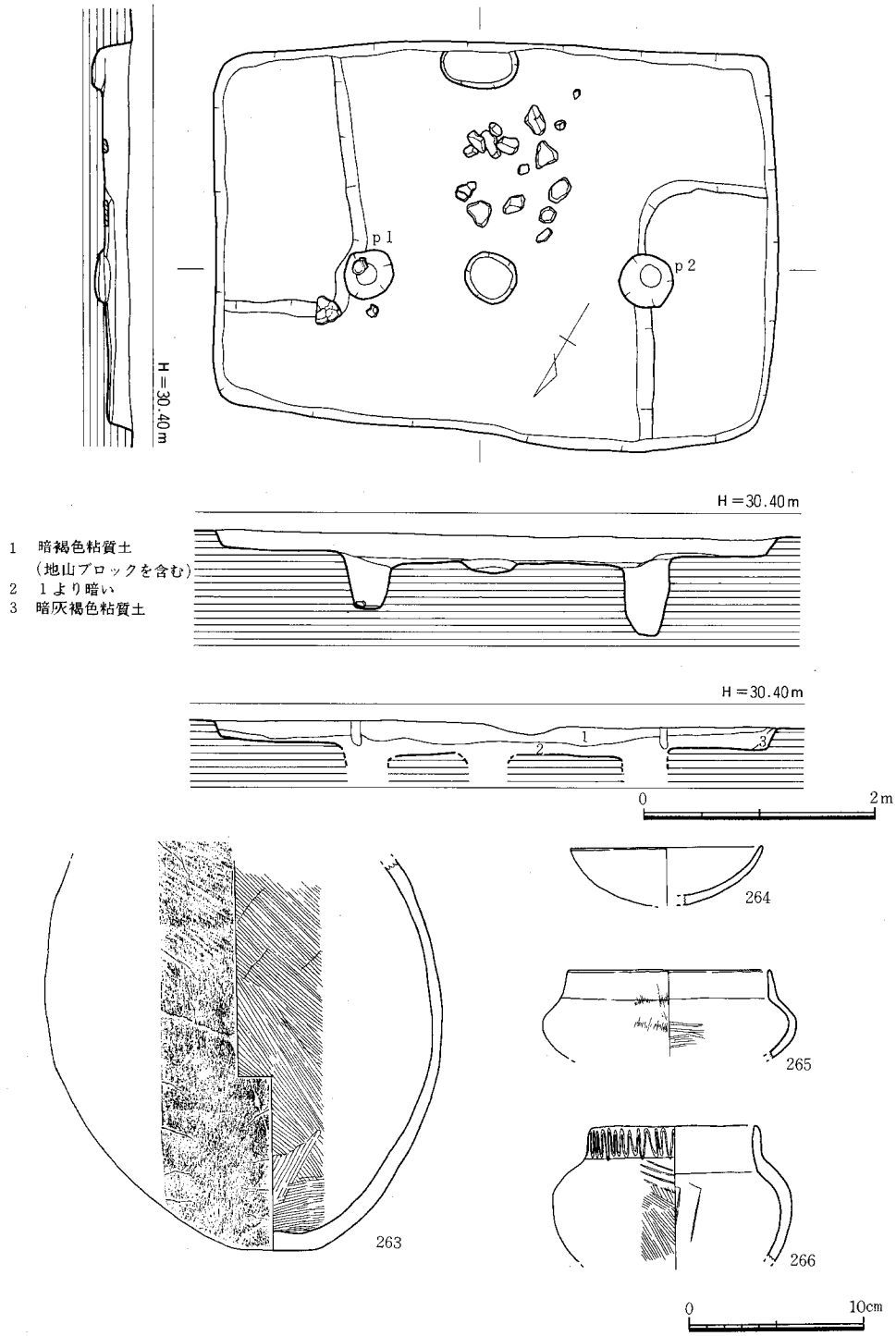
出土遺物（第39図） 267は甕である。住居中央北側の床面上に横転した状態で出土した。若干内湾しながら外方に伸びる口縁部の端部を鈍くつまみあげる。体部は球形で器壁も3mm程度の薄手のつくりである。調整は外面上半を横刷毛、下半には縦刷毛を段階を分けて施す。内面は上半1/4程が右斜上方への削り上げ、下半が上方への削り上げによる。口径17.4cm、残存器高23cmを測る。

268・269は壺である。268は口径9cmを測る。外面下半1/3は横位のヘラ削り、内面は口縁部に粗いハケ、体部はナデにより最終調整を行う。器壁が厚手で粗雑な感じを与える。269は外面上半が縦刷毛、下半が手持ちのヘラ削りにより、内面は上半横刷毛、下半板ナデを施す。

270は鼓形器台である。受け部径22cm、裾部径17cm、器高10.7cmを測る。外面上部に手持ちのヘラミガキ、下部にも縦方向のヘラミガキを施す。内面は上部がヘラミガキと板ナデ、下部がヘラ削りによる。脚部に2孔1対の焼成前穿孔が2対穿たれている。

271は脚付土器の脚部である。裾部径11.4cmを測る。外面は縦ミガキ、内面には横刷毛及び横ナデを行う。

272は高坏脚部である。裾径12cm、残存器高4.6cmを測る。外面刷毛、内面上半が横位のヘラ削り、下半が継続的な横刷毛による。脚中央付近に焼成前の穿孔が3ケ所に施される。



第38図　SC0501および出土遺物実測図（1/60、1/4）

273・274は埦である。口径13cm・15cmを測る。いずれも外面は刷毛目をナデ消しており、底部にヘラ削りを施す。内面は右下がりの斜方向の刷毛目調整。

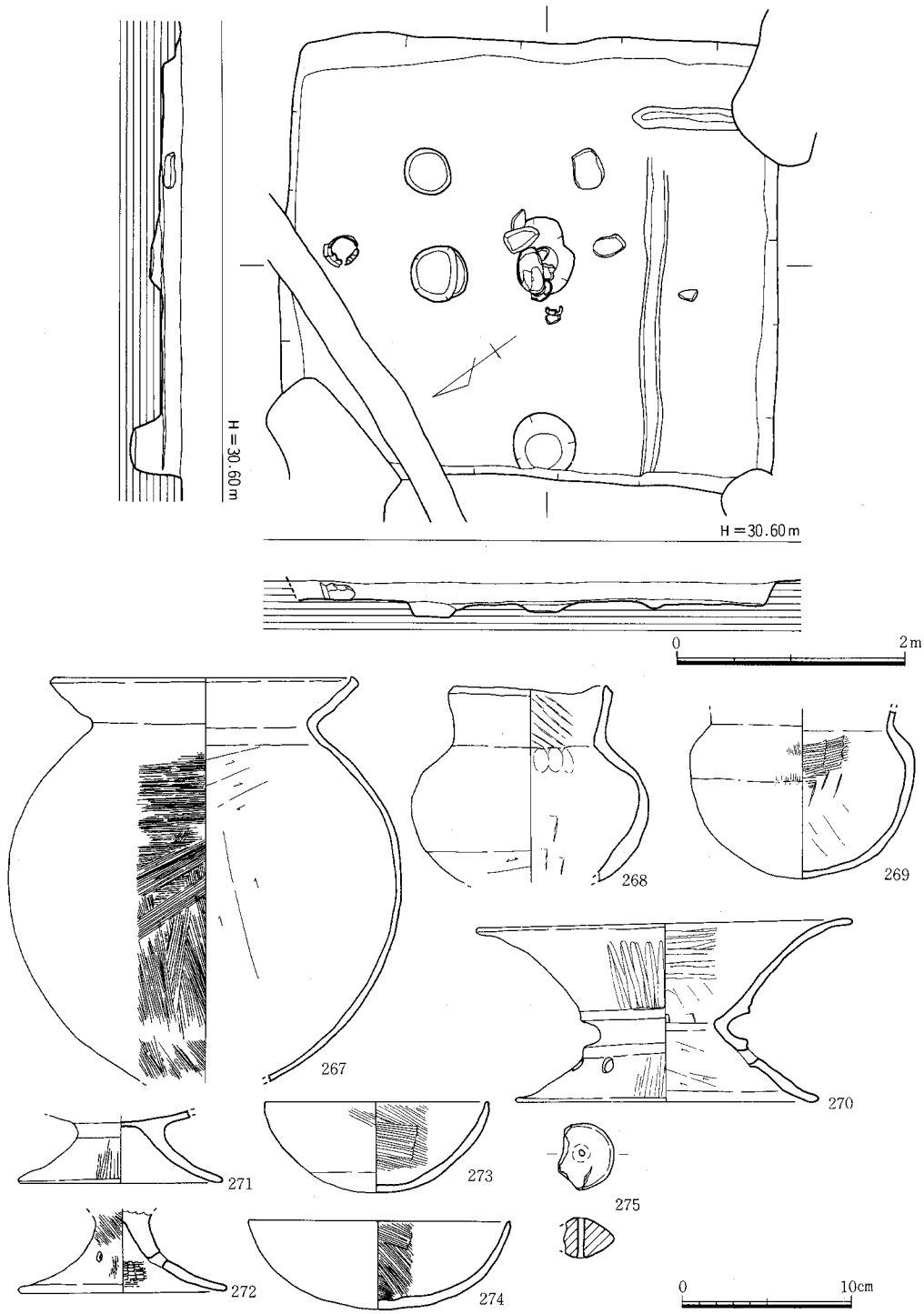
275は有孔土製品。平面円形、断面ラグビーボール形を呈す。径４cm、最大厚2.4cmを測る。中央に径４mmの小孔が穿たれる。

SC0503（第40図）　調査区中央西側で検出。東西長3.9m、南北長5.4mを測り、平面長方形を呈する。南・北両短辺に幅50cmの長方形のベッド状遺構が盛上によって作られる。床面も掘方より15cm程貼った上に形成される。炉跡は中央で検出した。中央部に東西1.5m、南北１mの範囲で炭化物・焼土が散布しておりこれを除去した所で径60cm程の炉跡を確認した。炉は深さ15cm程で炭化物を含む混合土の上に高坏の坏部（第41図282・283）を２個体正置しており、炉床として用いていたと思われる。またｐ１・ｐ２が主柱穴と考えられる。ｐ２からは直口壺（第41図281）が柱痕跡上に横倒しに据えられており、廃棄に伴うものと考えられる。覆土はレンズ状の自然堆積をみせるが、最初の埋土である④層と同時に拳大～人頭大の自然礫が多量に入り込んでいる。土層観察から礫は主に北壁部より流入したことが看取される。本調査区内のどの遺構にも、同様に礫が流入して埋没した状況は認められず、自然のものとは認め難く、恐らくｐ２の出土壺と同様に住居廃棄行為の一つと考えられる。出土遺物には土師器甕・壺・高坏・埦・器台・土製品・砥石・鉄斧等がある。

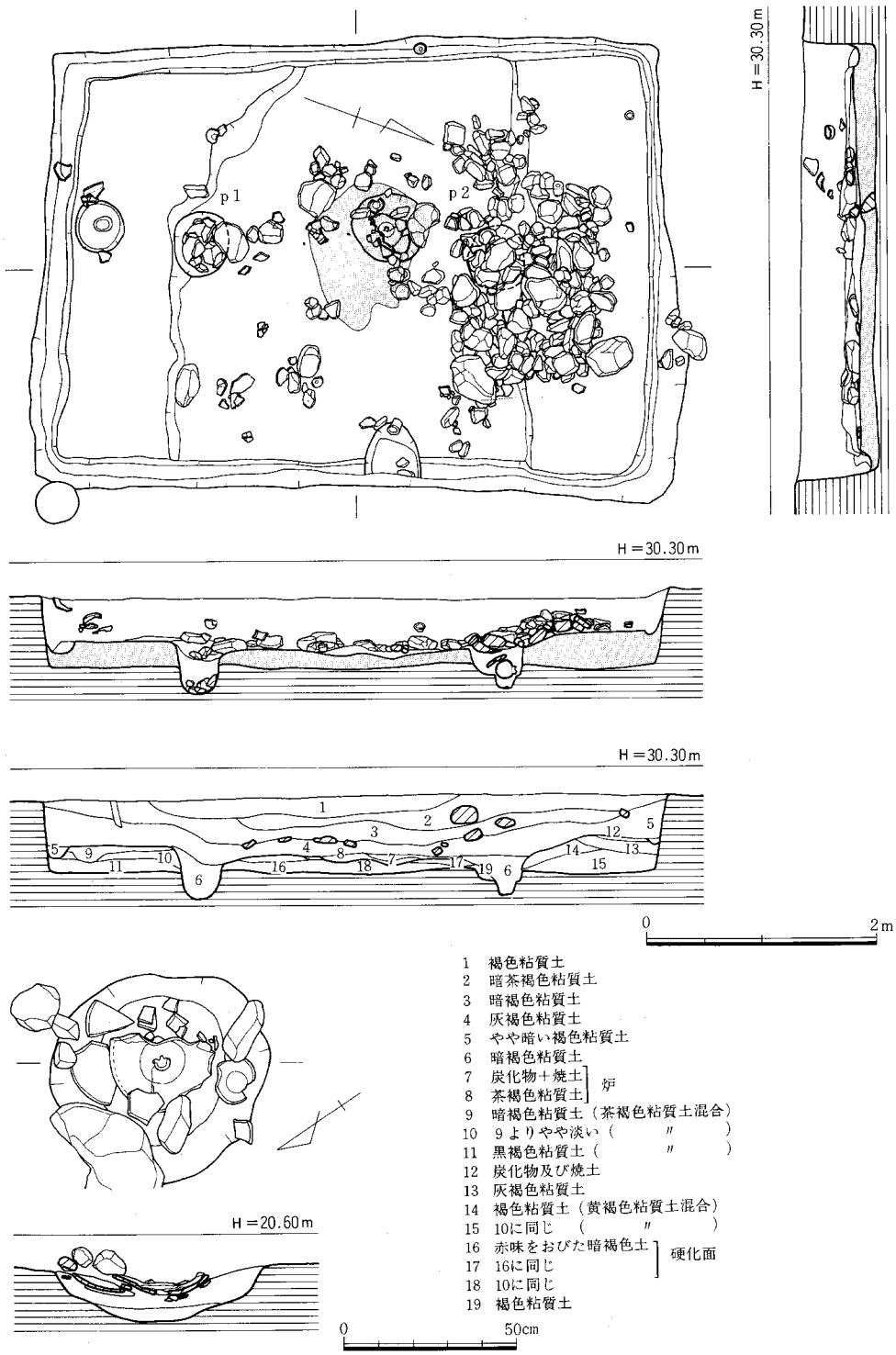
出土遺物（第42図）　277～280は甕上半部である。いずれも長胴の体部に「く」字状の口縁部を持つ。口縁端部は平坦にしており、面取りを行っている。277・278・280は外面タタキの後に縦刷毛、内面縦刷毛調整による。口径はそれぞれ13.4cm・13.4cm・13.2cmを測る。279は外面上半は縦刷毛、下半は縦方向の板ナデによる調整を行う。体部に径６mmの焼成後穿孔有。甕はいずれも器壁がやや厚手で胎土に砂粒・雲母を含み、淡褐色を呈す。280には体外面全体に煤の付着が認められる。

281・287は壺である。281は主柱穴ｐ２の中位に横位に埋置されていた直口壺である。口縁端部を全周欠いており、埋置時の行為に関係あるものとも思われる。外面は口縁部～体部上半は刷毛の後横位のヘラミガキを施すが肩部の刷毛目は装飾状に残している。下半は粗い刷毛目。内面は口縁部を横ミガキ、体部は下半１／３に螺旋状の刷毛目、それ以外は指ナデ調整による。体部と口縁部の境には指頭痕が残る。色調は上半明赤褐色、下半淡黄褐色を呈す。体部中位に黒斑有。287は小壺である。口径7.4cm、器高6.4cmを測る。外面は縦刷毛の後ナデ調整、内面は口縁部横ナデ。体部は螺旋状に刷毛目を施す。胎土には石英砂粒が多く混じる。淡黄白色を呈し、焼成はやや軟質。体外部下半に黒斑有。

282～284は高坏であり、すべて坏部のみの出土である。282・283は炉跡に据えられたものである。282が中央に据えられ、283は１／５破片がその外側に配されていた（第40図）。282は口径26.6cm、残存器高6.3cmを測る。下半１／３程で反転し外湾しながら外方へ伸びる。外面は反転



第39図　SC0502および出土遺物実測図（1/60、1/4）



第40図　SC0503および炉跡実測図（1/60、1/20）

部以上は横刷毛から暗文状の縦ミガキ、以下は縦刷毛から一部ミガキを施す。内面は縦刷毛を施した後横ミガキ、もしくはナデによる。暗赤褐色を呈し、焼成は堅緻。内面は2次焼成をうけている為か器表面が剝落している。283は口径22.6cmを測る。坏部下半1/3で反転屈曲するが、反転は緩やかで外湾せずほぼ真直に外方にのびる。外面は荒れており横刷毛のみが認められる。内面は横刷毛の後暗文状の縦ミガキを施す。284は埦形の坏部。口径18cmを測る。内・外面共に暗文状に2度に分けた縦ミガキを行う。両面に横刷毛が一部残る。胎土は精良で、焼成は良好。色調は褐色を呈し、口縁端部内面に煤が付着する。

285・286は埦である。285は口径13cmを測る。外面下半は横位のヘラ削り、その他はナデによる。胎土は良好で明赤褐色を呈する。286は口径10.4m、器高6.4mを測る。外面は上半が縦刷毛、下半は横方向のヘラ削り。内面は横刷毛による。

288・289は脚付土器の脚部である。上部には壺等の大型の器種が乗るものであろう。288は裾径11cmを測る。内外面横刷毛による。289は裾部径11cmを測る。外面横・縦両方向の刷毛、内面横刷毛による。いずれも胎土に砂粒・雲母を多く混え、調整も粗雑である。色調暗茶褐色を呈し、SC0503出土の他の土器とは異なった印象を与える。

290・291は支脚である。290は裾広がりの円筒形を呈す。上面径8cm、底部径10.5cm、器高10.4cmを測る。内外面に縦方向の指ナデが残る。上面（受け面）は平坦で中央に孔を有する。一方に5mm程の突起を有し、同じ面に把手状の隆起部を持つ。291は同形の脚部である。底部径13.8cmを測る。

292・293は手づくねの埦である。292は口径6.2cm、器高2.3cmを測る。293は口径8.2cm、器高3.1cmを測る。293は口縁部をつまみ出して埦状に仕上げる。いずれも完形品で指頭痕が全面に残る。胎土は精良で暗赤褐色を呈する。

294は有孔土製品。径2.6cm、厚さ3.8cmを測る。断面菱形を呈し、中央部にやや歪んだ孔を有する。淡赤褐色を呈す。

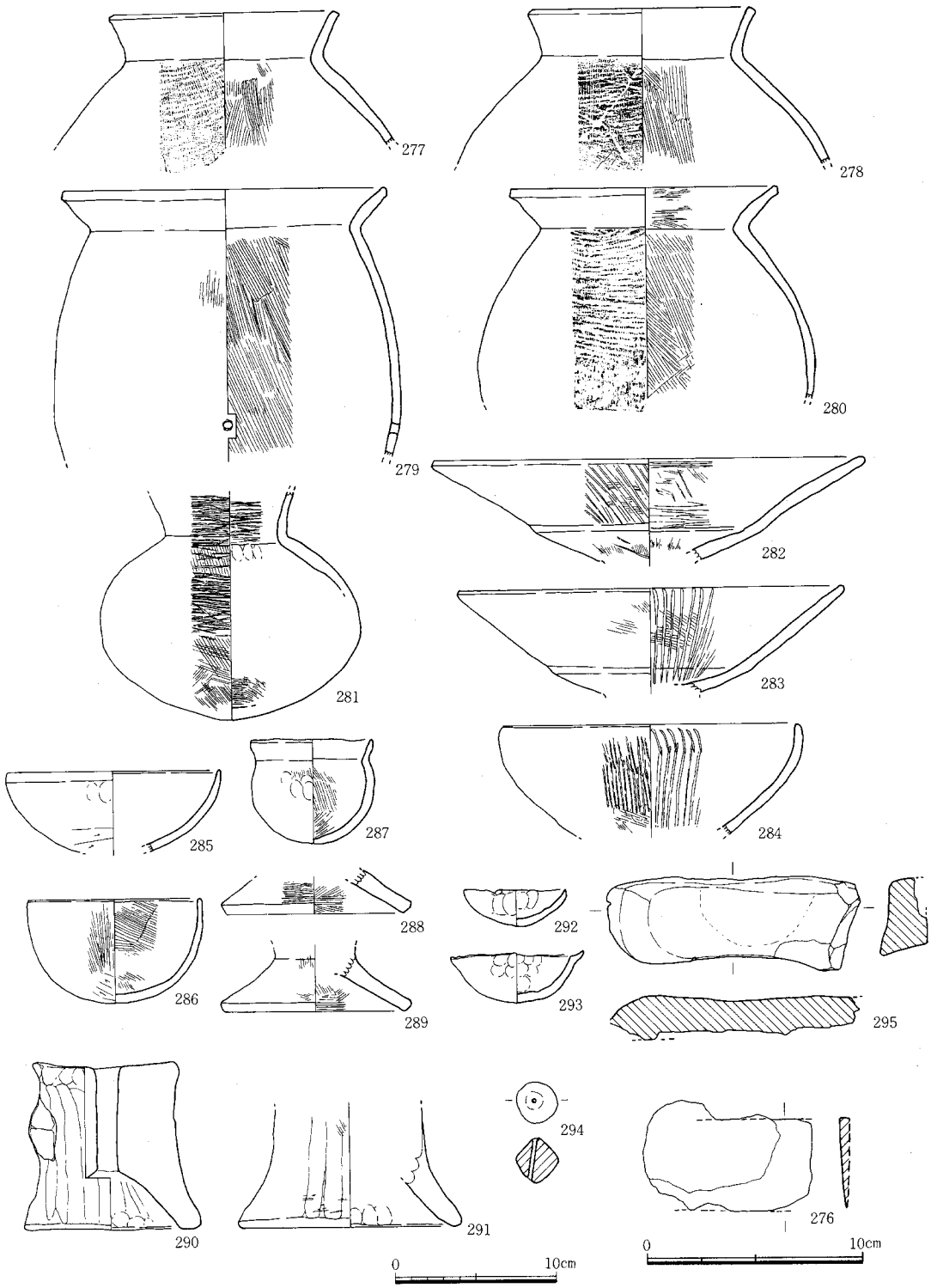
295は頁岩製砥石である。残長14.8cmを測る。欠損部が多いが4面を砥面とする。

276は鉄刀破片である。錆ぶくれが著しく、刃部の片面が剝落している。背部厚5mm、幅4.2cmを測る。

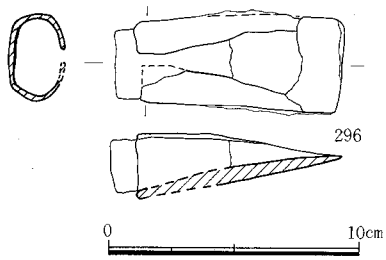
296は袋状鉄斧である。長8.2cm、幅3.7cmを測る。無肩で平面長方形を呈し、袋部は厚さ5.2cmの長楕円形である。袋部の合わせ目は閉じないもので5mm程の間隙があく。袋部から刃先へは真っ直ぐ伸びている。

SC0503出土遺物は甕、高坏にみられる様に在地系のものが主体を占め、破片資料を見ても外来系の土器片が非常に少ない特徴を持つ。

SC0504（第43図）　調査区中央北側で検出。SC0510・SC0532を切る。東西長6.0m、南北長7.2m、残存壁高25cmを測る。四周に幅20cm、深さ3～5cmの壁溝が巡る。床面よりピットを検出



第41図　SC0503出土遺物実測図Ⅰ（276…1/3、他1/4）



第42図　SC0503出土遺物実測図II（1/3）

したが、主柱穴は確定し得なかった。中央部やや北側寄りに1.3m×1.7mの長方形土坑を検出。覆土に炭化物・焼土は含まれていないが炉跡と思われる。床面は全体に縮まりがなく、貼床部・硬化面等は認められない。覆土は黄褐色土ブロックを混えた暗褐色土である。遺物は少なく、土師器甕・鉢・椀・砥石等が出土した。

出土遺物（第44図）　297～300は甕口縁部である。297～299は口縁部は内湾し外方に伸び、端部は肥厚させず鈍く納める。体外面は横刷毛により内面は斜め～横方向のヘラ削りを施す。297は薄く仕上げるが、298･299はやや厚手である。300は口径17cmを測る。口縁部は「く」字状に屈曲し、端部は断面三角形に仕上げる。内外面刷毛目を施す。器壁８㎜を測る。

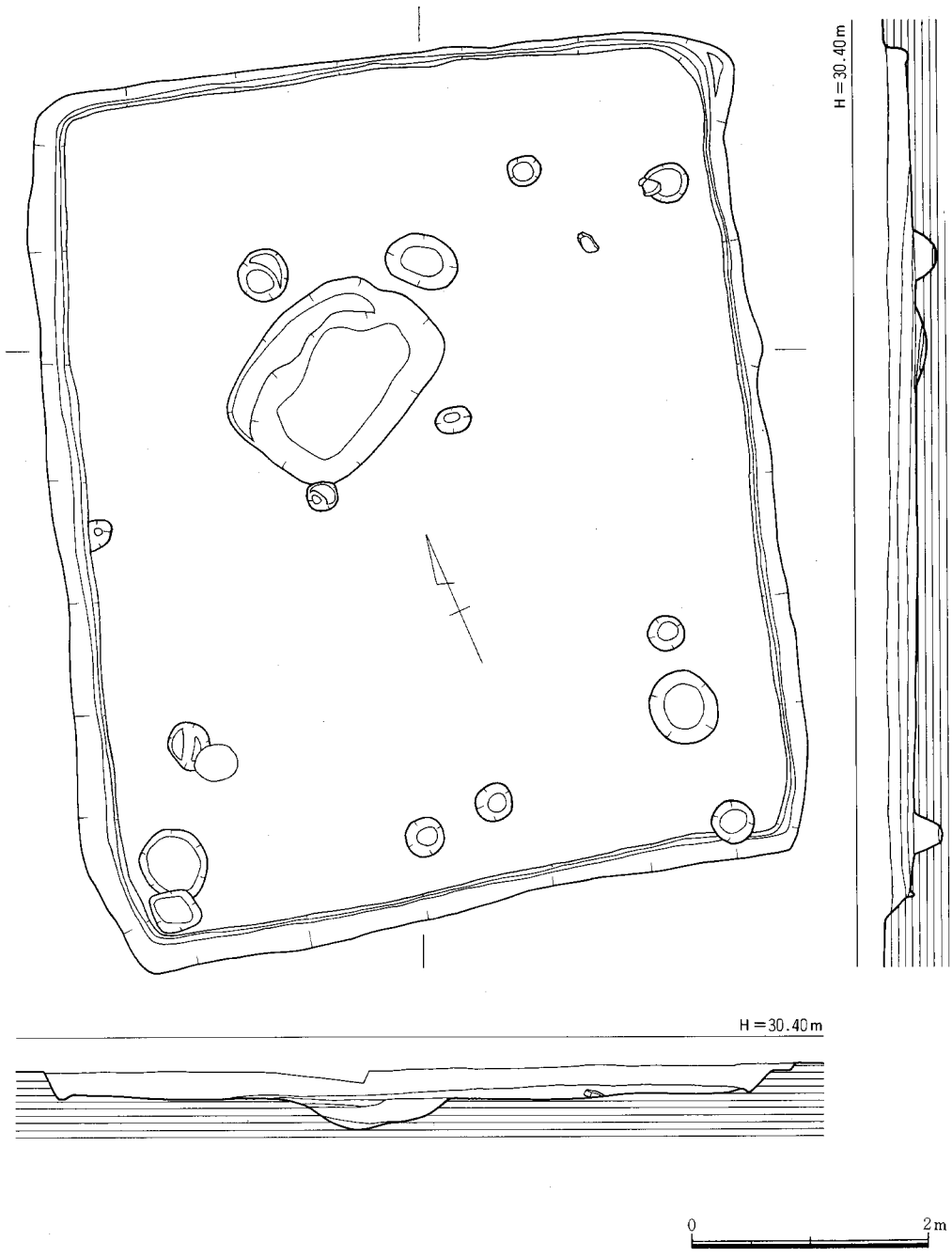
301は鉢である。口径17cm、器高6.8cmを測り体部に径６㎜ほどの焼成後穿孔を有す。体外面は横方向のヘラ削り、内面は斜方向の刷毛目の後横ナデを施す。胎土に石英・長石粒を含み、赤褐色を施す。

302は口径22.6cm、残存器高11.5cmを測る大型の椀である。口縁部は内傾し端部を肥厚させる。端面はナデにより浅く窪む。外面は横方向のヘラ削りの後粗いナデを施し、下位には指頭痕を残す。内面は縦刷毛により口縁部を横ナデ。

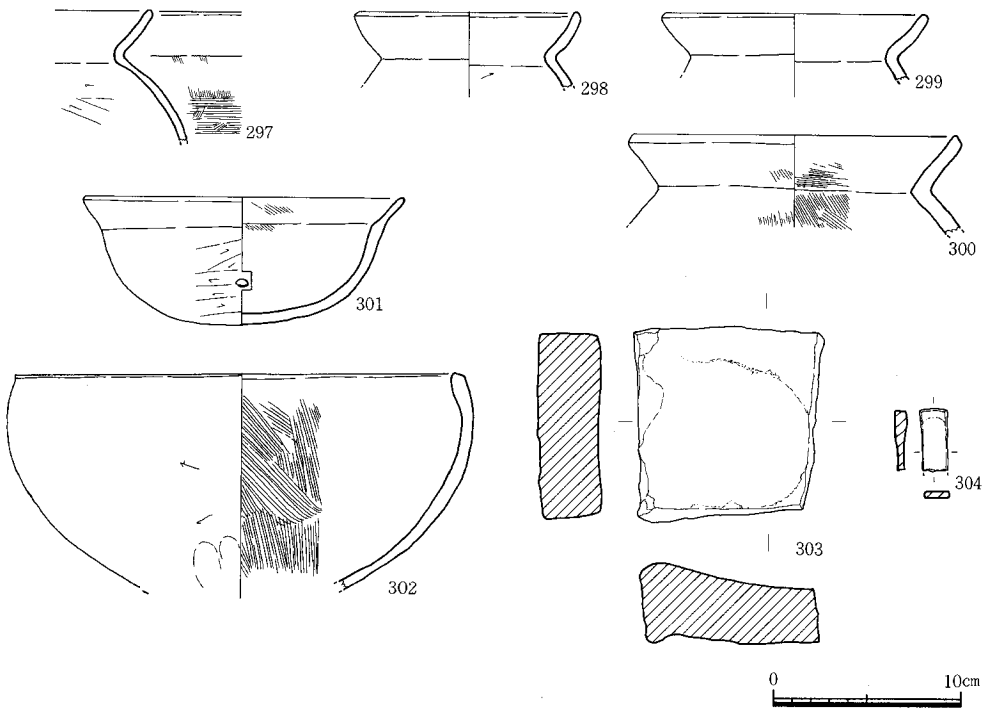
303・304は砥石である。303は砂岩製で２面を砥面とする。304は小型の手持ちの砥石で頁岩製。幅1.5cm、残存長3.4cm、最大厚６㎜を測る。

SC0505（第45図）　調査区中央西側で検出、南西辺6.6m、北西辺6.6mの平面正方形を呈する。床面迄の残存高は30cmを測る。四周に幅80cm、高さ10cmの地山削り出しのベッド状遺構を有する。ベッド状遺構は東南壁中央部は北側コーナー部で一部途切れている。東南壁中央部には１m×1.7mの壁際ピットを有する。平面半楕円形を呈し、中央にピット状の中落ちを有する。深さ35cmを測る。北側コーナー部では、床面より10cm程浮いて甕が壁際に正立した状態でほぼ完形で出土した。その他ベッド直上より、破壊状態もしくは完形の土器が出土しており、住居廃棄の時期を示しているものと思われる。床面からは４本の主柱穴が検出された。南西柱間3.2m、北西柱間3.0mを測る。また、床面中央より80cm×60cmの楕円形を呈する炉跡を検出。壁際及びベッド状遺構内側にはそれぞれ幅30cm・深さ10cm、幅15cm・深さ５～８cmの壁溝が巡る。出土遺物には土師器甕・椀・脚付土器・鉄器がある。

出土遺物（第46図）　305～309は土師器甕である。305・306・308は卵形の体部に口縁部は内湾し端部を肥厚させるものである。305・307は肩部全周に横方向のタタキ痕が残り、以下は横刷毛、体部下半は縦刷毛を施す。内面は上半横方向、下半縦方向のヘラ削りを施す。308は肩部



第43図　SC0504実測図（1/60）



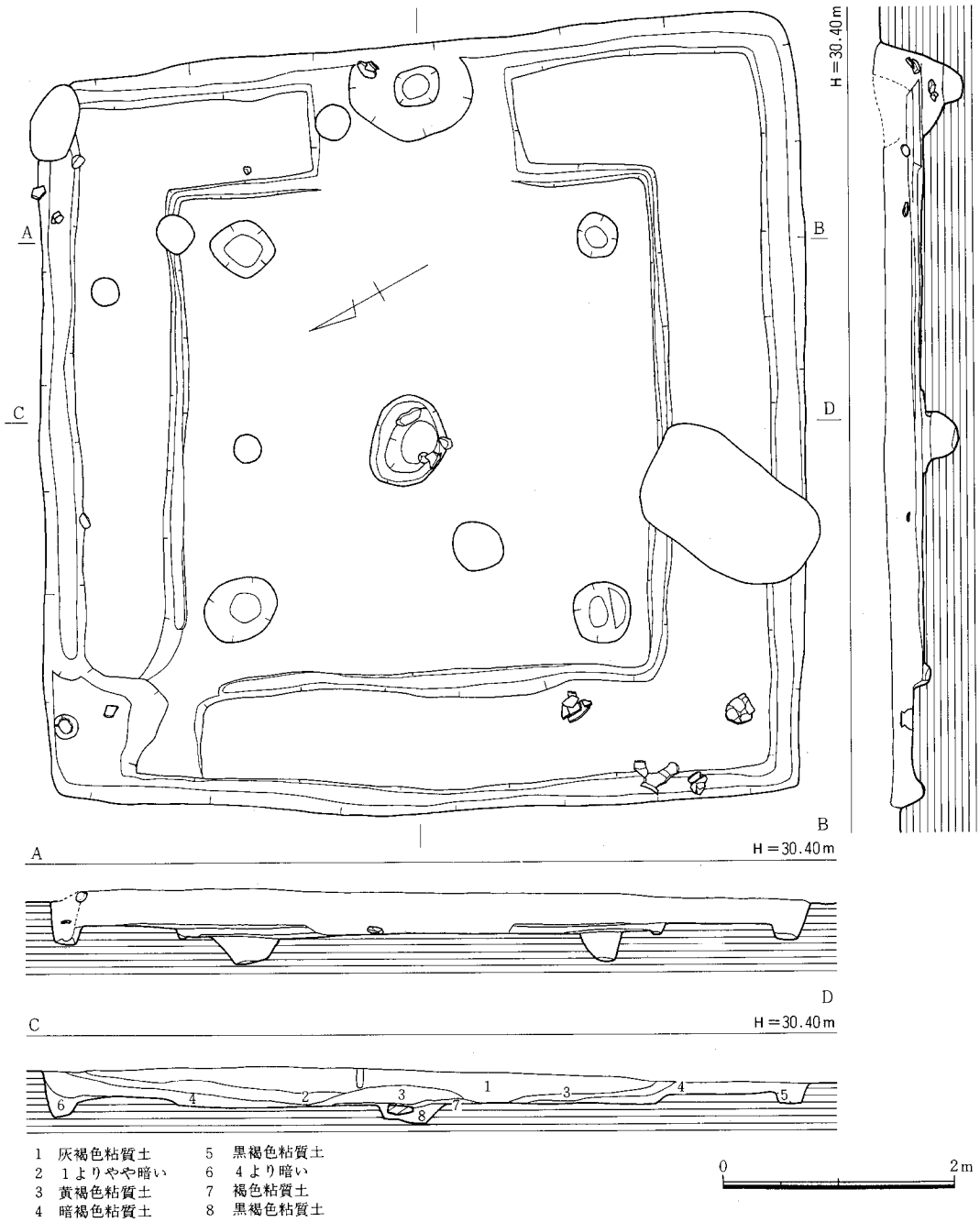
第44図　SC0504出土遺物実測図（1/4）

に波状文を施す。体部は横刷毛及び縦刷毛による。内面はヘラ削りで底部に指頭痕を残す。307は北側コーナー出土の甕である。体部は球形で口縁部は肥厚させない。外面は上半横刷毛、下半を縦刷毛による。体部中央部及び口縁部外面の全周に煤が付着する。305・306は307・308に比べ器壁が厚く、つくりが鈍い印象を与える。309は二重口縁の破片である。

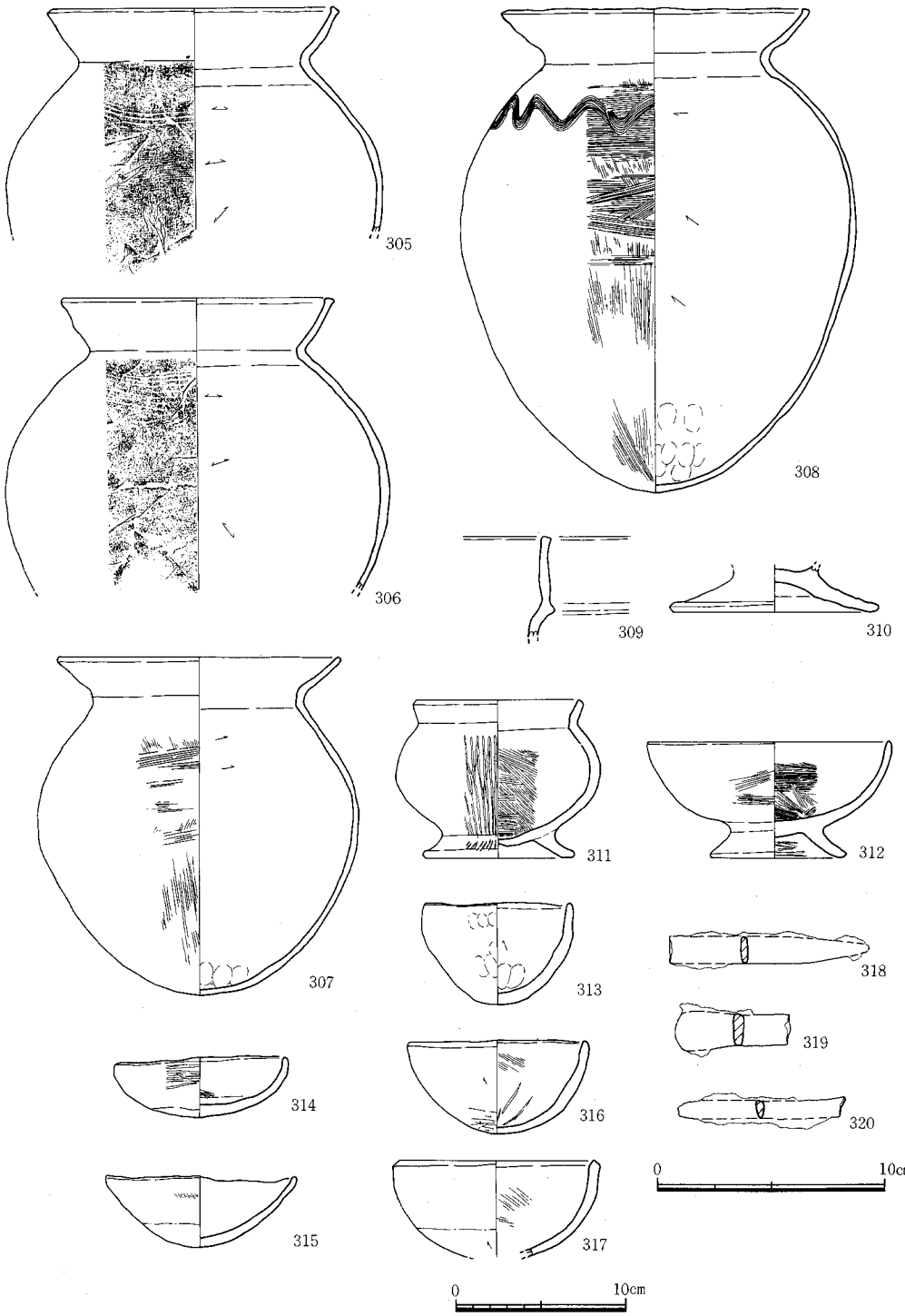
310～312は脚付土器である。310は脚部破片で底部径12.4cmを測る。外底面に横方向のヘラ削りを施す。311は脚付壺である。口径9.6cm、器高9.2cmを測る。外面は暗文状の縦ミガキ、内面は刷毛目による。胎土は精良で明赤褐色を呈す。312は脚付埦で口径14.6cm、器高6.8cm。埦部は内外面刷毛による。脚部内面は横位のミガキを施し、いぶし焼き状に黒褐色を呈す

313～317は埦である。313は口径8.4cmを測る。内外面に指頭痕が残り、内面上半に縦方向の削りを施す。314は口径9.8cm。外面上半は横位のミガキ、下半は粗いナデ。内面は刷毛及びナデによる。315は外面上半に刷毛目が残る。外面下半１/３程は調整痕が観察できず、器面も粗いままである。何かに押し当て成形したものであろうか。316・317は外面下半ヘラ削り、内面刷毛目による。

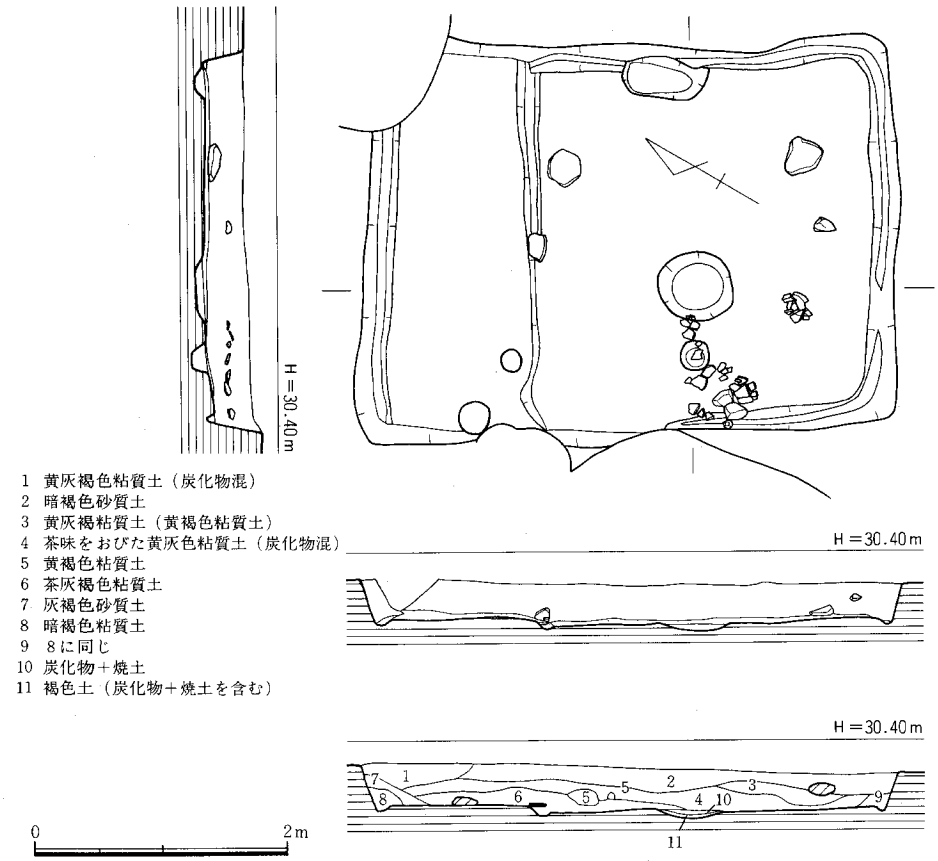
318～320は不明鉄製品である。いずれも厚さ２㎜～３㎜で断面長方形を呈し刃部は見られない。茎部の破片であろうか。



第45図　SC0505実測図（1/60）



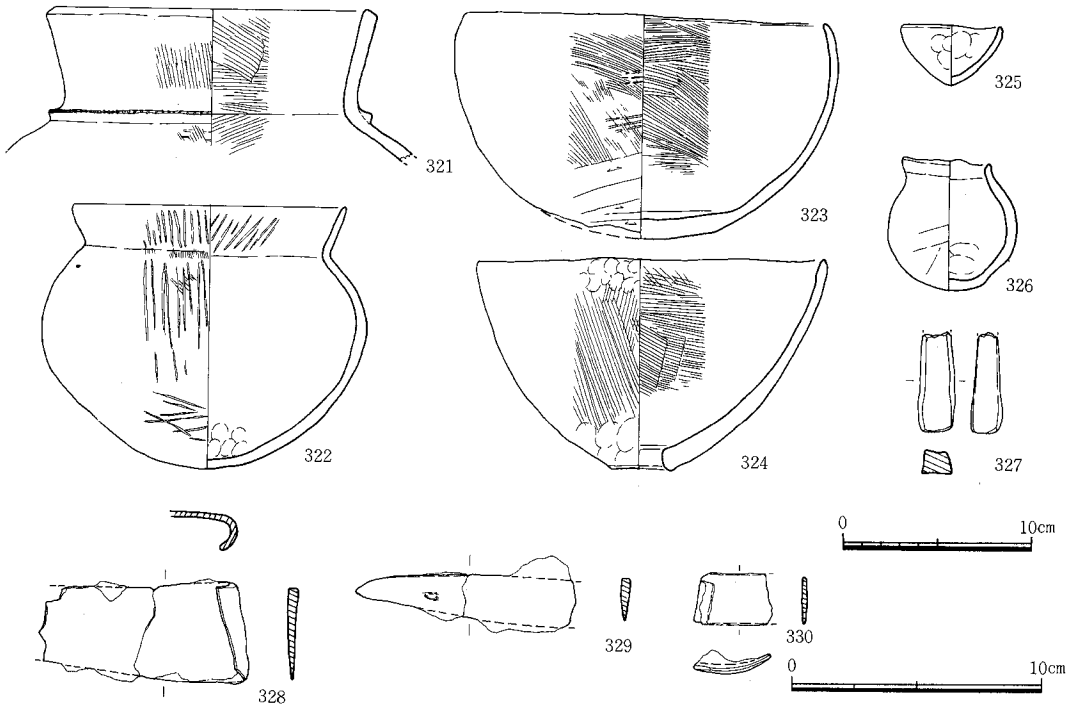
第46図　SC0505出土遺物実測図（318・319・320…1/3、他1/4）



第47図　SC0506実測図（1/60）

SC0506（第47図）　調査区東南部で検出。西南壁4.2m、西北壁3.1m、残存器高30cmを測る。西北壁添いに幅1.1m、高さ４cm程の地山削り出しのベッド状遺構を有する。また床面中央西寄りに炉跡を検出した。径45cm、深さ６cmを測り断面浅皿状を呈す。覆土には焼土ブロック及び炭化物が多く混入していた。東北壁添いには壁際ピットが認められる。長さ70cm、深さ15cmを測る。床面からは他のピットは１個しか検出されず、主柱穴は確認できなかった。遺物は床面より浮いて出土した。土師器甕・壺・埦・甑・手づくね土器・石器・鉄器がある。

出土遺物（第48図）　321・322は壺である。321は口径16.2cmを測る。器面は磨耗しているが内外面刷毛目による。外面体部には刷毛目調整前のタタキ痕が残る。頸部に断面三角形の突帯を貼り付け、細かい刻みを入れる。322は口径14.2cm、器高14cmを測る。体部は球形を呈し中位に最大径をもつ。外面は刷毛の後ミガキを施すが、下半は粗い。内面は口縁部にミガキ、体部はナデにより、底部に指頭痕を残す。



第48図　SC0506出土遺物実測図（328～330…1/3、他1/4）

323は埦である。口径19cm、器高11.9cmを測る。口縁部にタタキ痕の後縦刷毛、下半は横方向のヘラ削り、内面は横刷毛による。

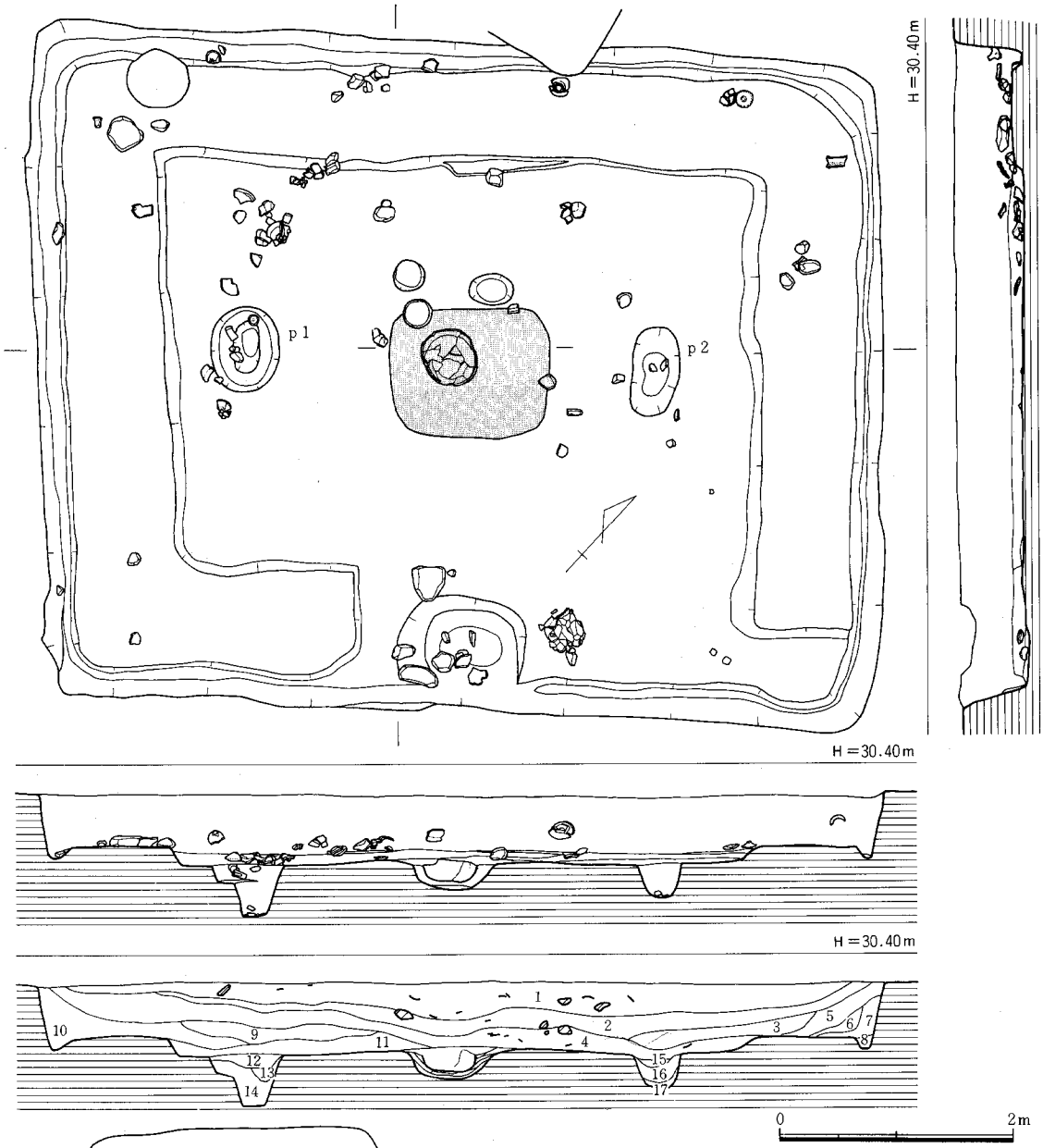
324は甑である。炉跡の西側で破砕状態で出土したほぼ完形品である。口径18.3cm、器高11.3cmの埦底部に径３cmの孔を有する。体部は内湾気味に外方に伸び、口縁部内面を肥厚させる。口縁部・底部外面を指おさえ、他を刷毛目による。内面の刷毛目は螺旋状になる。

325・326は手づくね土器である。325は口径５cm、器高3.2cmの埦である。焼成はあまく淡桃色を呈す。326は甕である。口径4.4cm、器高7.2cmを測る。外面には粗い削りを施す。

327は砂岩製砥石である。残存長5.2cmの方柱状を呈し４面を砥面とする。

328～330は鉄器である。328は鎌の基部である。着装部をJ字形に折り返している。背部厚３mmである。錆化の為木質痕は残っていない。329は刀子である。刃部のみの出土で残存長8.5cmである。錆化が進み不明瞭である。330は不明鉄器である。残存長3.1cm。幅２cm、厚さ２mmを測る。刃部をもたず、端部は鋭く納めている。刀子の茎部であろうか。

SC0507（第49図）　調査区北東部で検出。SC0509に一部切られる。調査区内で最も遺存状態の良好な住居跡である。北西壁7.2m、北東壁5.7m。床面迄の残存高55cmを測る。南東壁の北側２/３を除いて四方に幅80cm、壁高10～15cmを測る地山削り出しのベッド状遺構を有する。壁溝は



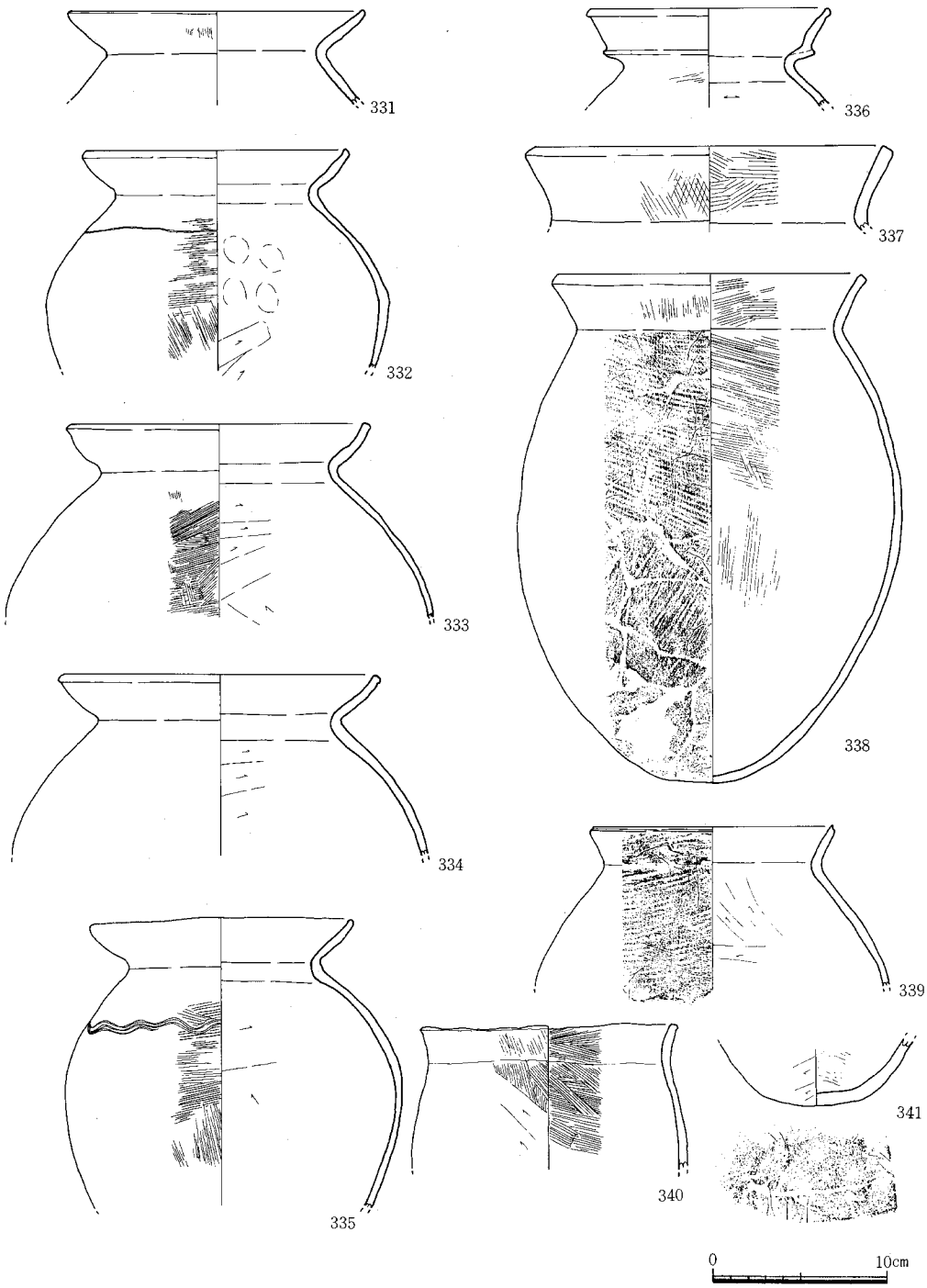
1 灰褐色粘質土（土器多）
2 黄褐色粘質土
3 褐色粘質土＋黄褐色粘質土
4 暗褐色粘質土
5 褐色粘質土
6 茶褐色砂質土
7 黒褐色粘質土
8 褐色粘質土
9 灰黄褐色粘質土
10 褐色粘質土
11 暗灰褐色粘質土
12 黒褐色粘質土
13 灰褐色粘質土
14 茶褐色粘質土
15 黒褐色粘質土
16 茶褐色粘質土（黄褐色土混）
17 茶褐色粘質土（やや砂性）
18 黒褐色粘質土（炭化物混）
19 18に同じ
20 炭化物
21 白色粘土
22 黒褐色粘質土（炭化物混）
23 22に同じ
24 灰褐色砂質土
25 茶褐色粘質土

第49図　SC0507および炉跡実測図（1/30、1/60）

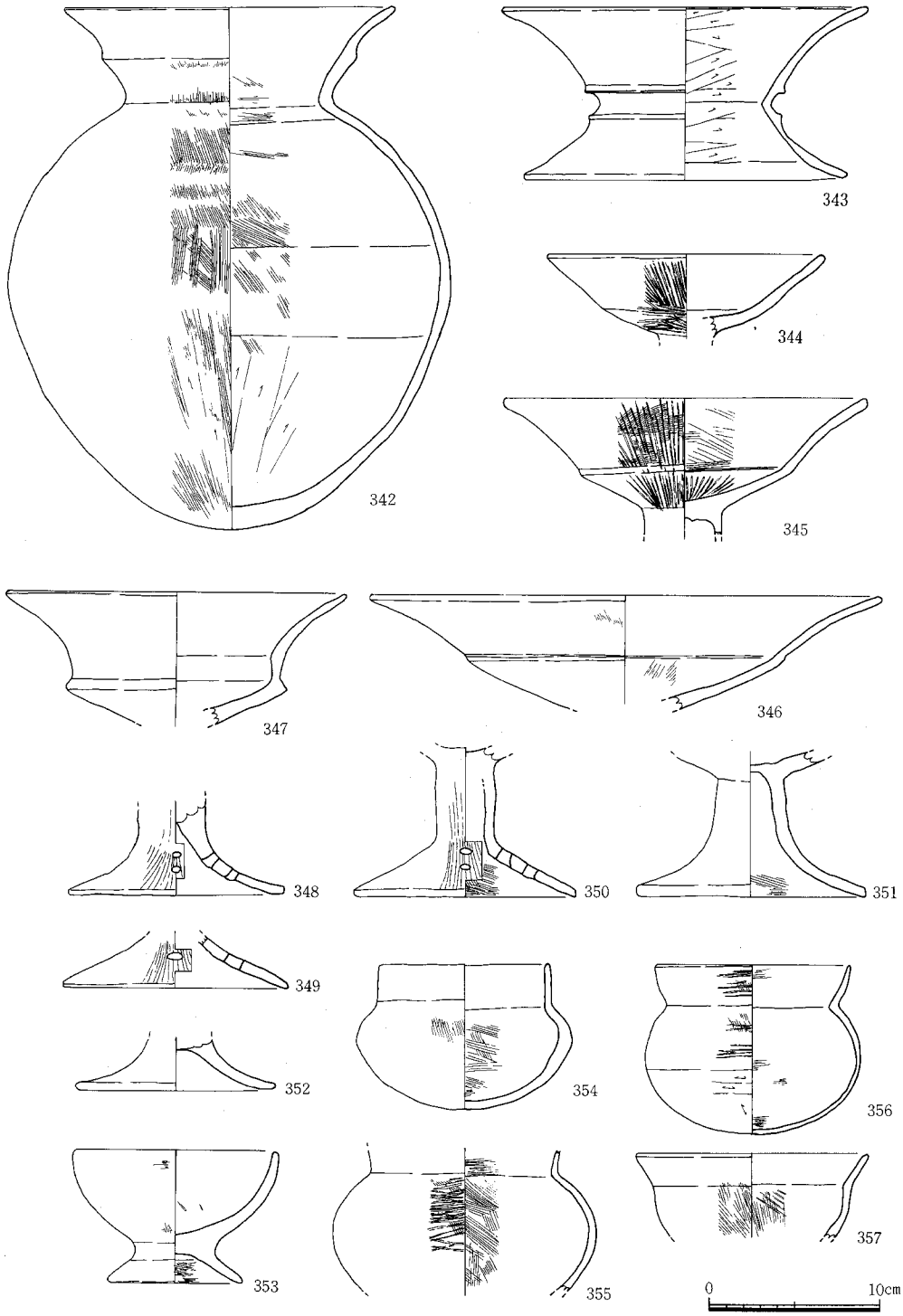
ベッド状遺構内側からは検出されず、住居壁際全周で幅20～30cm、深さ10cmのものが検出された。南東壁中央部からは1.1m×0.8mの長円形を呈する壁際ピットが検出された。深さは30cmを測り、上層では拳大の自然礫数個を含む。また、床面よりピットを数個検出した。p1・p2が主柱穴と考えられる。また炉跡周辺検出のピットでは炭化物・焼土ブロックが多量に混入していた。

住居中央部より炉跡を検出した。住居と同一の主軸を取る1.4×1.1mを測る浅い掘り込みの中央やや西よりに一辺90cm、深さ25cmの不整方形の2段目を掘り込み大型の鉢を据えて炉床としている。鉢は一旦掘り込まれた上に5～8cm程盛上をして据えられており、さらに盛土との隙間に粘土を充塡して安定させている。周囲には掻き出しと思われる炭化物（⑳層）が広がっている。遺物量は非常に多くパンケース30箱程度出土した。上層からは、②層の上面でまとまって遺物が出土しており、埋没途中での窪みに土器が廃棄されたものと思われる。床面からは西側よりまとまって出土している。また壁際ピット北側からも破砕状態のほぼ完形の甕が床面より若干浮いて出土した。出土遺物には土師器甕・壺・高坏・鉢・椀・脚付土器・手づくね土器・土製品・石器・鉄器があり、他に弥生時代に属する石剣破片が出土している。

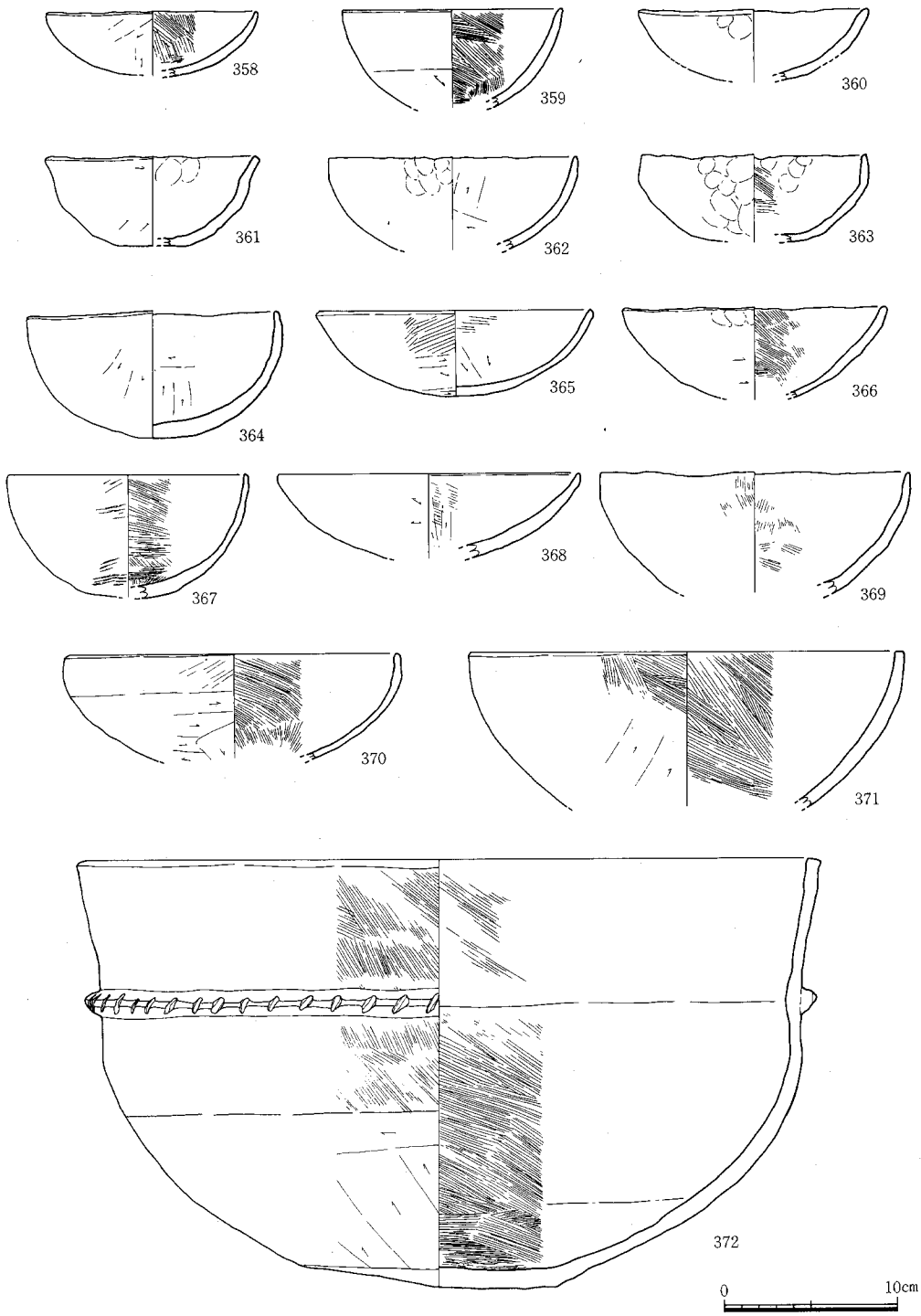
出土遺物（第50～第53図）　331～341は甕である。331～335は口縁を内湾させ端部を内側に肥厚させ外面を上半横刷毛、下半縦刷毛、内面はヘラ削りで仕上げる布留系の甕である。331は口径16.8cmを測る。口縁外面に縦刷毛を残す。端部は痕跡的に肥厚させている。焼成不良で磨耗が著しい。332は口径14.8cmを測る。端部を鈍くつまみ上げる。肩部には浅い沈線が2条断続的に巡る。内面は上半がナデ調整により指頭痕が残る。333は口径16.8cmを測る。端部は外面により肥厚させている。外面全体に煤が付着する。334は口径17.8cmを測る。端部外側を肥厚させ断面鈍い三角形を呈する。体部に一部煤が付着する。335は口径15cmを測る。肩部に振幅の小さな波状文が巡る。口縁端部は丸く内側に肥厚させている。336は二重口縁を有する甕口縁部。1/8破片からの復元口径13.6cmを測る。体外面には横刷毛が認められる。外面全体に煤付着。337～339は口縁部は「く」字状に屈曲し長胴の体部をもつものである。337は口径20cmを測る口縁部破片である。内外面刷毛による。338は壁際ピット横で破砕されていた甕である。口径17.5cm、器高29.4cmを測る。外面の体部上半はタタキの後粗い縦刷毛、下半は縦刷毛を施す。内面は刷毛調整により、下半はナデを行う。外面上半は煤の付着がみられ、下半は器壁が2次調整によりピンクに発色し器面の剝落が進んでいる。ほぼ完形である。339は口径13.8cmを測る。口縁端部は上端が潰れ、端面に沈線状の窪みを形成する。外面はタタキの後粗い刷毛を行う。煤が全体に付着。内面は板ナデを行い、圧痕が明瞭に残る。340は口縁部が緩く外反して伸びるものである。口径14.2cmを測る。外面体部に板ナデ状の削りを施しその他は刷毛目調整による。341は底部破片である。外面は板ナデ、内面は横刷毛による。底部は凸レンズ状を呈し、外底面に木葉痕を残す。



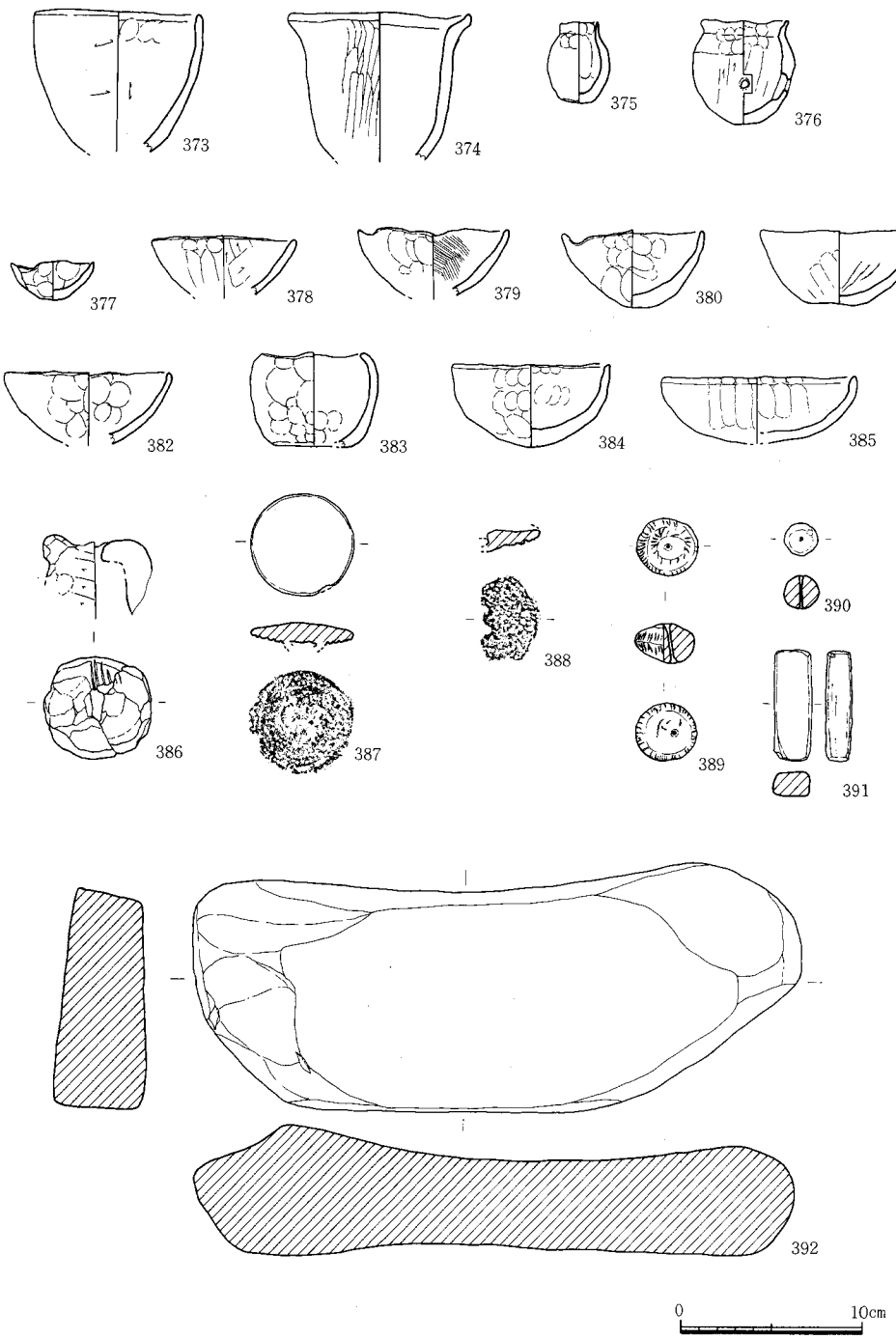
第50図　SC0507出土遺物実測図Ⅰ（1/4）



第51図　SC0507出土遺物実測図II（1/4）



第52図　SC0507出土遺物実測図III（1/4）



第53図　SC0507出土遺物実測図IV（1/4）

342・354～356は壺である。342は上層出土で、ほぼ完形である。口径19.2cm、器高35.7cmを測る。口縁部は二重口縁につくり端部を丸く納める。体部は長円形を呈し中位に最大径をもつ。外面上半は数段に分け縦刷毛を行い、下半は板ナデを施す。内面上半は横刷毛～斜刷毛の後に粗いナデを行う。下半は縦方向のヘラ削り。外面下半に煤が付着する。胎土には石英・長石砂粒を混え、淡桃色を呈す。354～356は小型壺である。354は口径9.8cm、器高8.5cmを測る。外面上半刷毛目、下半ヘラ削り。内面は横刷毛による。外面下位に黒斑が認められる。355は口径11cmを測る。外面上半は刷毛目の後横位のヘラミガキ、下半に横位のヘラ削りを施す。内面は刷毛目による。356は口径11.2cm、器高9.9cmを測る。外面上半は縦刷毛の後横ミガキ、下半はヘラ削り、内面は刷毛目の後にナデを行う。口縁部は内湾させる。器壁は薄く仕上げ、胎土も精良で精製されている。焼成良好で明橙色を呈す。

343は鼓形器台である。受け部径21.2cm、底径18.7cm、器高10.2cmを測る。外面横ナデ、内面横位のヘラ削りを施す。

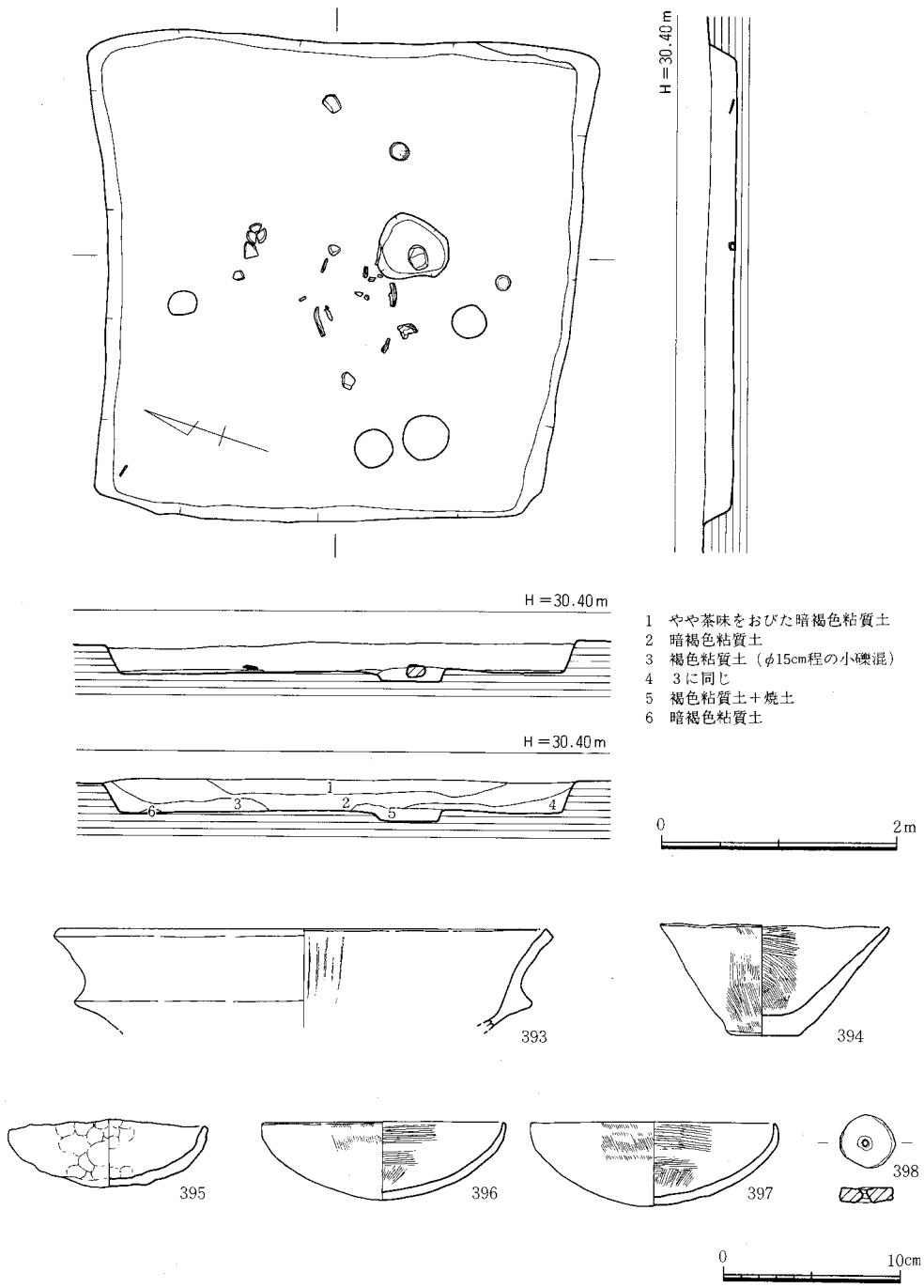
344～351は高坏である。344は口径16.1cmを測る。下半1/3程で鈍く屈曲し真っ直ぐに伸びる。外面は縦ミガキを施し、屈曲部以外は横ミガキを行う。内面は縦方向のナデ。焼成良好で明橙色を呈す。345は口径21cmを測る。坏部は中程で屈曲し外反して伸びる。外面は横刷毛の後暗文状の縦ミガキを施す。内面は上半に粗い横刷毛、下半に縦方向のヘラミガキを行う。346は口径30cmを測る。345同様坏部は中程で屈曲外反する。内外面には縦刷毛が残る。347は屈曲部より一担上方に伸びた後に外反する。348～351は脚部である。中ふくらみの筒部をもち孔を有するものと有さないものがある。348・350は2方向、349は4方向に穿孔される。調整は外面縦ミガキ、内面横刷毛。

352・353は脚付土器。353は脚付埦で、埦部外面刷毛目、内面ナデ。内面に指頭痕・小口痕を残す。脚部は内面に横刷毛。

357・372は鉢である。357は内外面に刷毛目を有す。内面は一部にタタキ痕が残る。372は炉床として用いられていた大型鉢である。口縁部の3/4を欠き、口径41.7cm、器高24.9cmを測る。口縁部は緩く屈曲し、真っ直ぐやや外方に伸びる。底部はヘラ削りによって径15cm程の凸レンズ状の底をもつ。調整は体外面下半をヘラ削りによる他はすべて刷毛目を施す。突帯は断面三角形を呈し、屈曲部に刷毛目調整を行った後に貼付ける。突帯には約2cm間隔で斜方向の刻みが施される。内面には上半2/3に2次焼成を受けた痕跡を残しており、下半1/3程にはその痕跡が残らない。

358～371・373・374は埦である。外面下半をヘラ削りし、内面を刷毛目、若しくは板ナデによって調整する。373・374は長胴のものである。374は口縁部を屈曲させる。共に外面をミガキ状の板ナデ、内面を指ナデによる。

375～385は手づくね土器である。375・376は甕である。376には焼成後の穿孔が施される。377～385



第54図　SC0509および出土遺物実測図（1/60、1/4）

は埦である。363はｐ１より出土した。完形品である。外面には指頭痕が残り、内面には螺旋状に小口痕が残る。胎土は精良で雲母を含む。

386～390は土製品である。386は口径５cmの円筒形を呈す。上面に突起状の膨らみがある。中央で２次焼成を受けており一見羽口状を呈している。387・388は模造鏡であろうか、円形で断面凸レンズ状である。一方は無文で反対の面には鈕状の突起がついており、同心円状の列点が全体に施される。389は偏平な有孔土製品である。全体に瓜形の文様が巡る。390は球形で径１mmの孔を有する。

391・392は砥石である。391は砂岩製で長方体を呈する。392は頁岩製の砥石で４面を砥面にする。

SC0509（第54図）　調査区北東部で検出。SC0507・SC0527を切る。東西長4.0m、南北長4.0mを測り、正方形を呈する。床面からはピットが一個検出され、覆土に炭化物・焼土を含んでおり、炉跡と思われる。炉跡の北西側床面より炭化物を検出している。遺物は少量であるが、完形に近い埦が３個体床面上より出土している。

出土遺物（第54図）　393は高坏口縁部である。口径27.4cmを測る。屈曲部は突帯状をなし、短く外方へ立ち上がる。内外面に一部縦方向のミガキが残る。

394～397は埦である。394は床面に横向きに据えた状態で出土した。内外面粗い刷毛目を施す。底部は平底を呈し、未調整である。395～397は口縁部の内湾する浅い埦である。すべてほぼ完形。395は全面指ナデによる。396・397は内面刷毛目、外面刷毛目の後ミガキを施す。外面には口縁部の屈曲部に文様状に刷毛目を残す。

398は土製紡錘車である。土器片の周りを打ち欠いて略円形にし、両側より穿孔している。図面の上側に一度穿孔しかけてやり直した跡が残る。

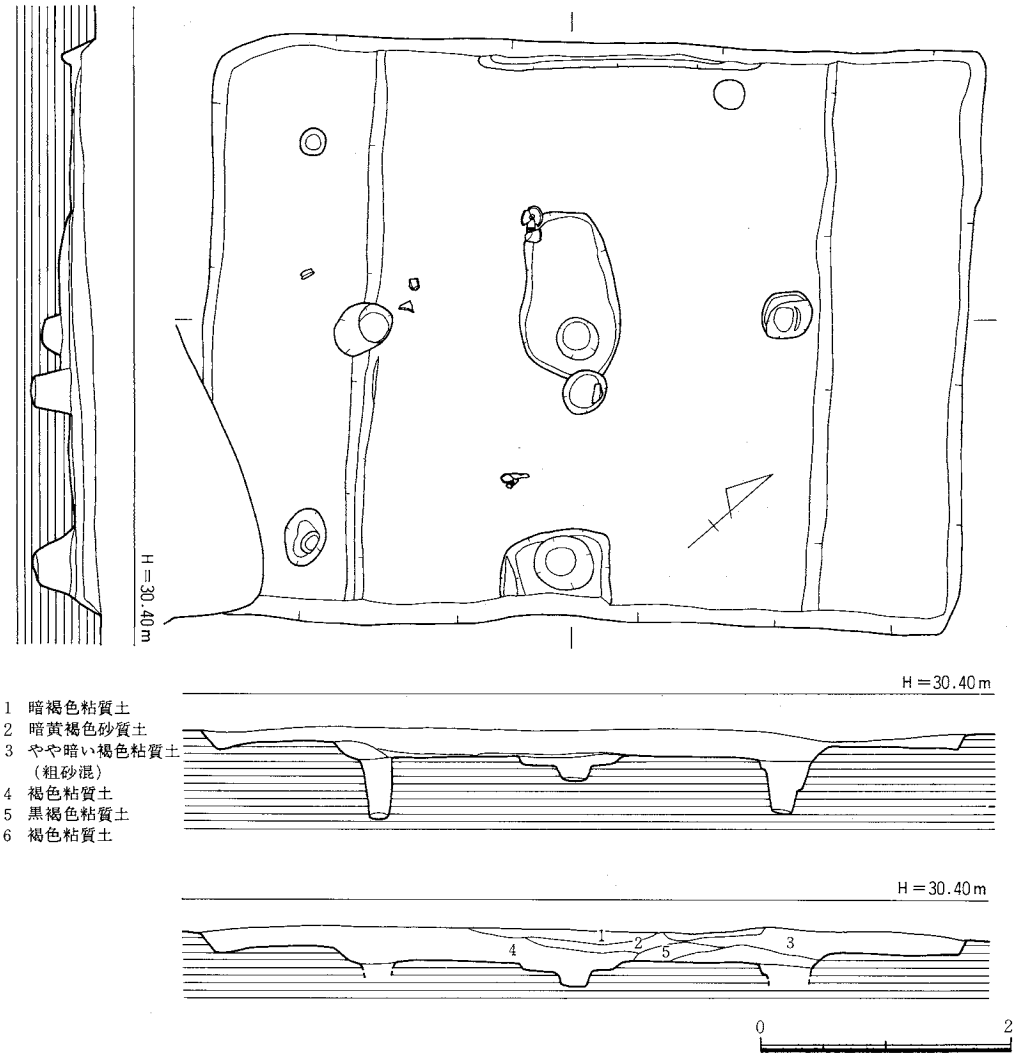
SC0510（第55図）　調査区北東側で検出。SC0504に切られる。北西長6.1m、北東壁長4.6m、床面迄の高さ25cmを測り長方形を呈す。両短辺に幅1.0～1.2m、壁高10cm程の地山削り出しのベッド状遺構を有する。床面中央に1.3m×0.8mを測る浅皿状の炉跡を検出した。また炉跡を挟んで柱間3.3mの２本主柱が掘り込まれる。南東壁中央に90cm×50cmの長方形を呈する壁際ピットを有する。出土遺物には土師器甕・鉢・埦・高坏などがある。

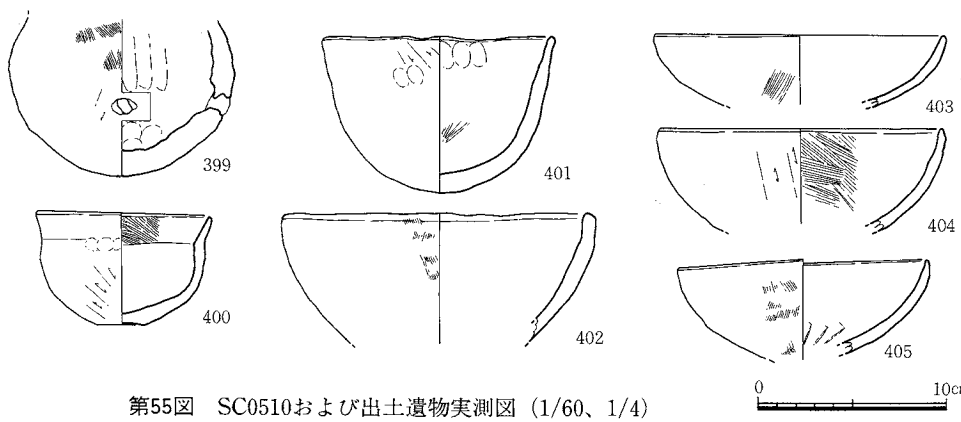
出土遺物（第55図）　399は小型の甕の底部である。外面上半に刷毛目が残り、下半は粗い板ナデを施す。内面は粗い指ナデ。

400は鉢である。口径9.2cm、器高6.1cmを測る。外面は板ナデを施す。内面は口縁部を斜刷毛を施し、体部には板ナデによる螺旋状の圧痕が残る。底部は径２cmの上げ底を呈す。

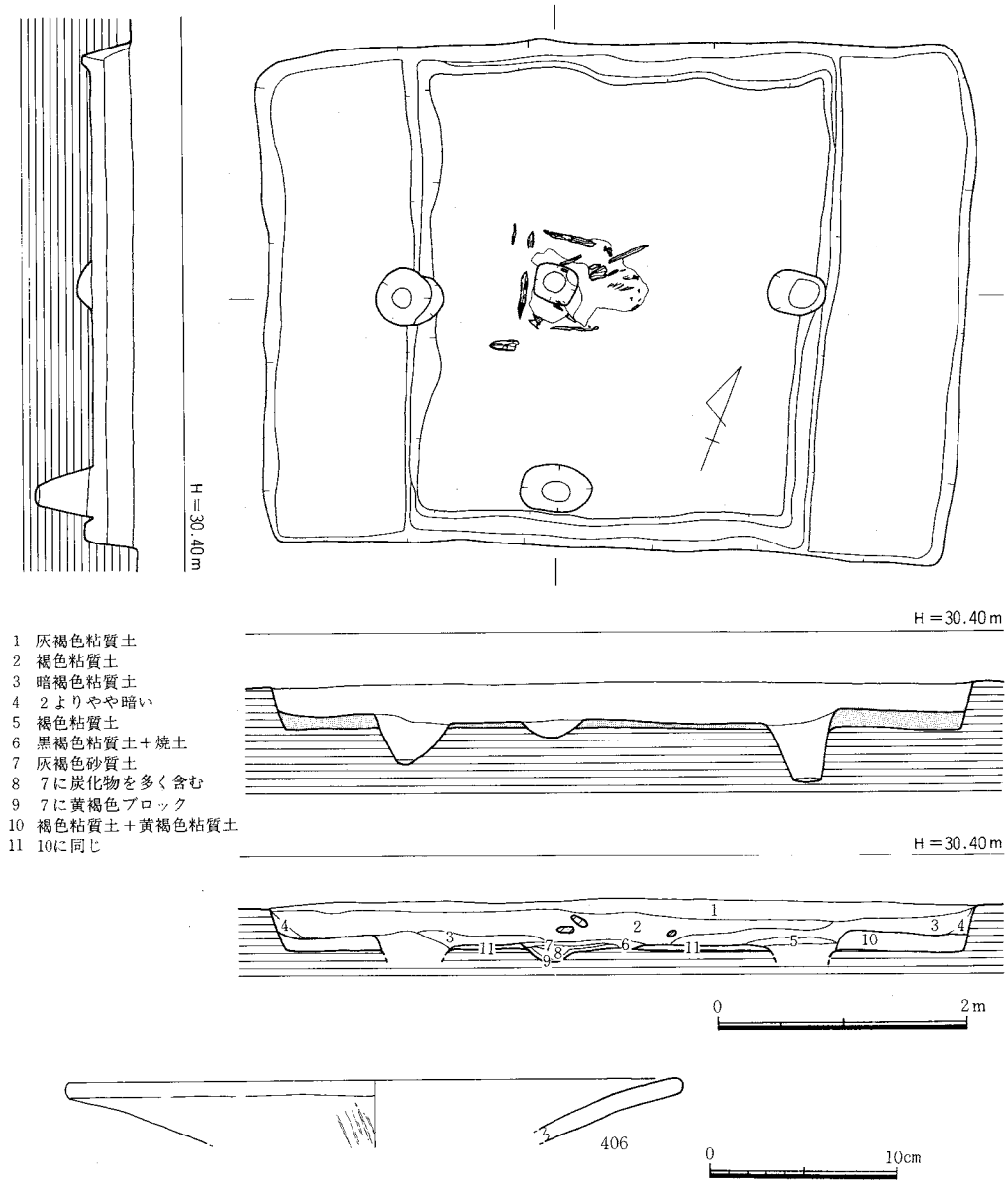
401～404は埦である。401は外面指おさえ、内面ナデ状にかき上げ調整する。402・403には外面縦刷毛を残す。404は外面板ナデ。

405は高坏坏部である。口径15.2cmを測る。器面はあれているが、外面には縦刷毛が残る。内





第55図　SC0510および出土遺物実測図（1/60、1/4）



第56図　SC0516および出土遺物実測図（1/60、1/4）

面には横方向の板ナデによる同心円状の小口痕が残る。

SC0516（第56図）　調査区中央北端で検出。東西長5.5m、南北長4.0mを測る。両短辺に幅1.0m、壁高10cmの盛土によるベッド状遺構を検出。床面は5cm程の貼床を施し中央に炉を置く。炉跡では床面より炭化物・灰・焼土が検出された。炭化材より復元すると炉跡は径35cm、深さ15

cm程のピットを掘り込みそれを中心として東西60cm、南北80cmの長方形に木材を組んで炉としていた様である。東側が乱れており、掻き出し口として利用したのであろうか。SC0503・SC0507でみられた土器を転用した炉とまた異なる形態で、遺存状態もよく特筆される。主柱は心々で3.2mを測る2本主柱である。壁際ピットを南壁中央に有し、60cm×40cmの長円形を呈する。出土遺物は少量で甕・高坏破片が出土する。甕の破片は外面にタタキ痕、内面に刷毛目を有する。

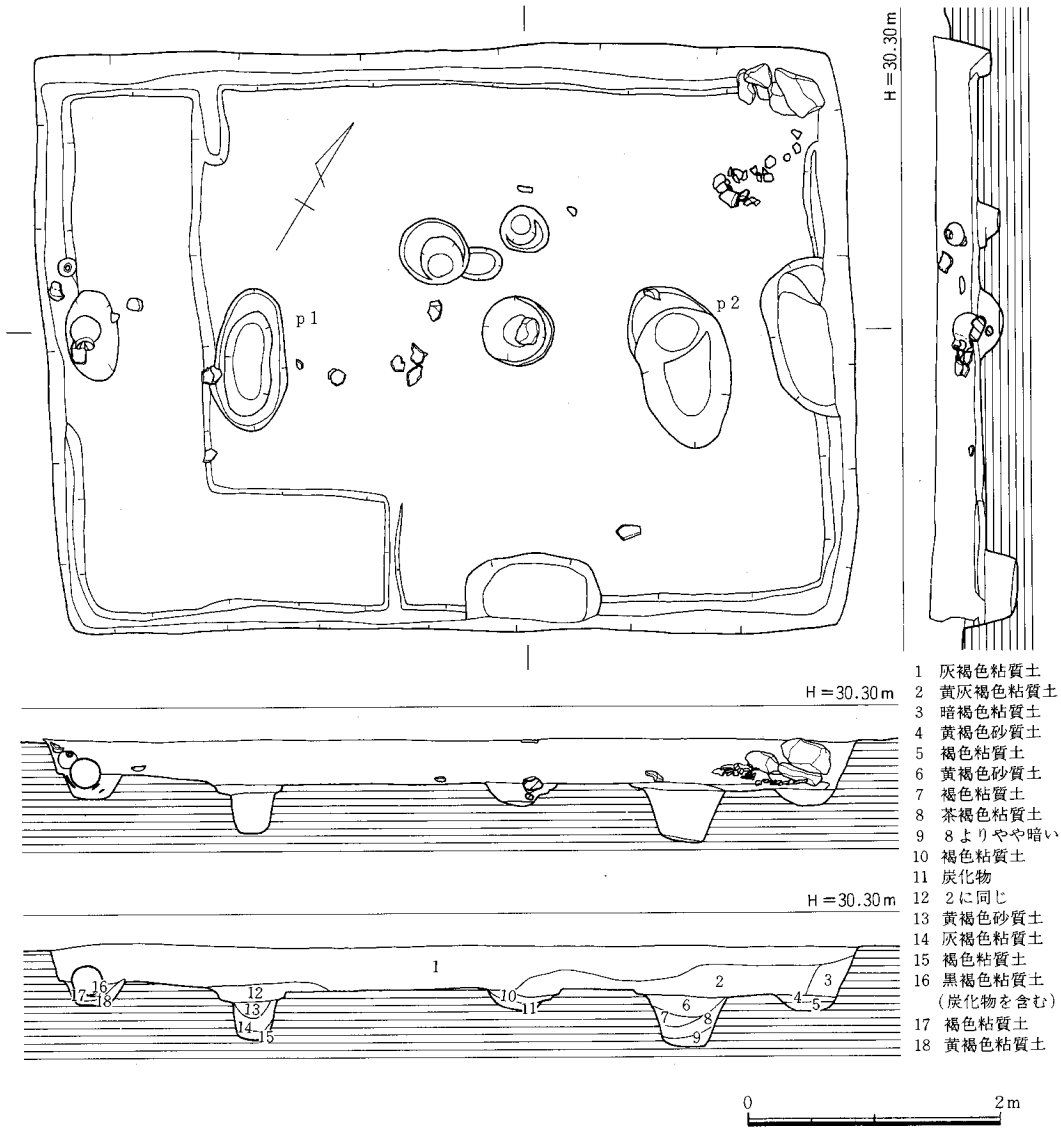
出土遺物（第56図） 図示し得たのは1点のみである。406は高坏破片である。口径30.6cmを測る。内面横ナデ、外面には刷毛を粗く施す。胎土に微砂粒を含み、淡橙色を呈す。

SC0517（第56図） 調査区北東隅で検出。東西長6.4m、南北長4.6m、床面迄の壁高40cmを測り、長方形を呈す。西壁添いにL字形に地山削り出しのベッド状遺構を有する。幅1.0m、壁高5cmを測る。床面は中央に硬化部分がみられるがベッド状遺構上にはみられない。炉跡はベッド状遺構を除いた床面の中央部分で検出した。径60cm、深さ20cmの円形を呈し、覆土に炭化物・灰を含む。主柱穴はp1・p2の2本であり、心々で3.4mを測る。掘り方から1.1～1.3mの所に掘削されているため、p2は炉跡に60cmの近い位置にある。壁際ピットは南壁添いで検出した。1.1m×0.5mの長方形を呈する。壁溝は一部で途切れながら四周している。遺物は床面より若干浮いて出土。ベッド状遺構上のピットより壺が横位に据えられて検出された。出土遺物は土師器甕・壺・高坏・鉢・椀などである。

出土遺物（第58図） 407～411は甕である。407～410は外来系統の甕である。口縁部は内湾し端部を肥厚させる。体内面にはヘラ削りを施す。407は口径13.6cmを測る。端部を上方につまみ上げる。外面に横刷毛が残る。408は口径14.6cmで端部を鈍くつまみ上げる。409は口径18cmを測る。端部は外側に肥厚させ、平坦に仕上げる。肩部に一条の浅い沈線を施す。体外面は横刷毛による。全体に煤が付着する。410は口径17.2cmを測る。端面は断面三角形を呈す。肩部四方に竹管文が陰刻される。外面上半は縦刷毛の後横刷毛。下半は縦刷毛による。体部に煤が付着。411は在地系の甕で口縁部は「く」字形を呈す。口径17.6cmを測る。体外面はタタキ痕の上から粗い縦刷毛、内面は斜～縦方向の刷毛目による。

412・413は壺である。412は口縁端部を欠く。ベッド状遺構上で出土。体外面上半は縦刷毛、下半はヘラ削り、内面は上半ヘラ削り、下半に縦刷毛を施す。焼成はあまく淡橙色を呈す。413はベッド状遺構上のピットから横位置の状態で出土。完形で口径11.2cm、器高25cmを測る。体外面上半はタタキ痕の後縦刷毛、下半は縦刷毛による。内面は斜～横刷毛による。色調淡褐色を呈し、器壁は厚手である。

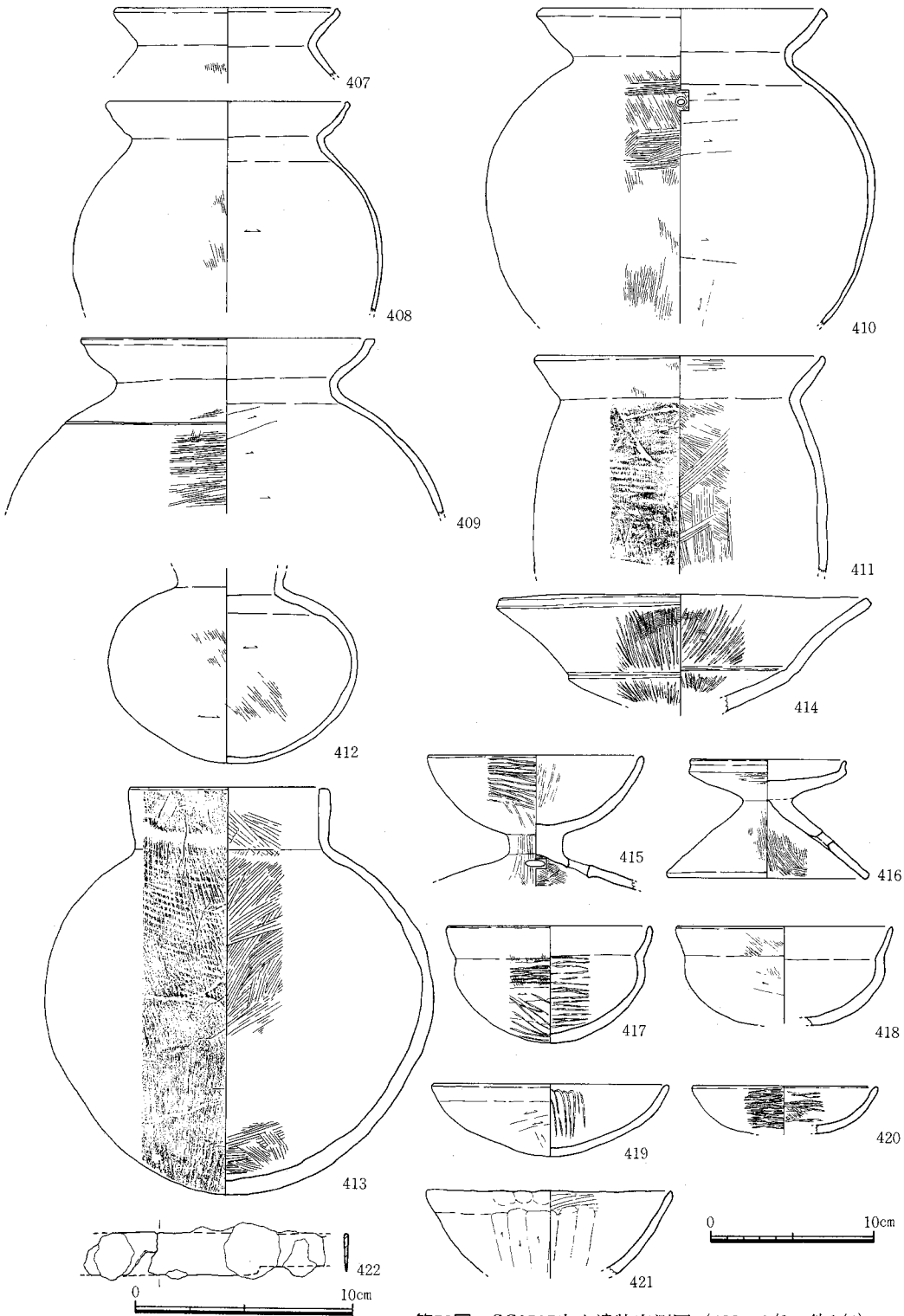
414・415は高坏である。414は口径22.5cmを測る。屈曲部よりやや外反して外方に伸びる。調整は内外面共に刷毛目の後暗文状の縦ミガキを施す。内面から外面上端迄に黒色処理を施す。415は短脚の高坏である。口径13cmを測る。坏部は外面横ミガキ、内面縦ミガキ。脚部は外面刷毛の後縦ミガキ、内面螺旋状に横刷毛を施す。脚部四方に穿孔を有す。



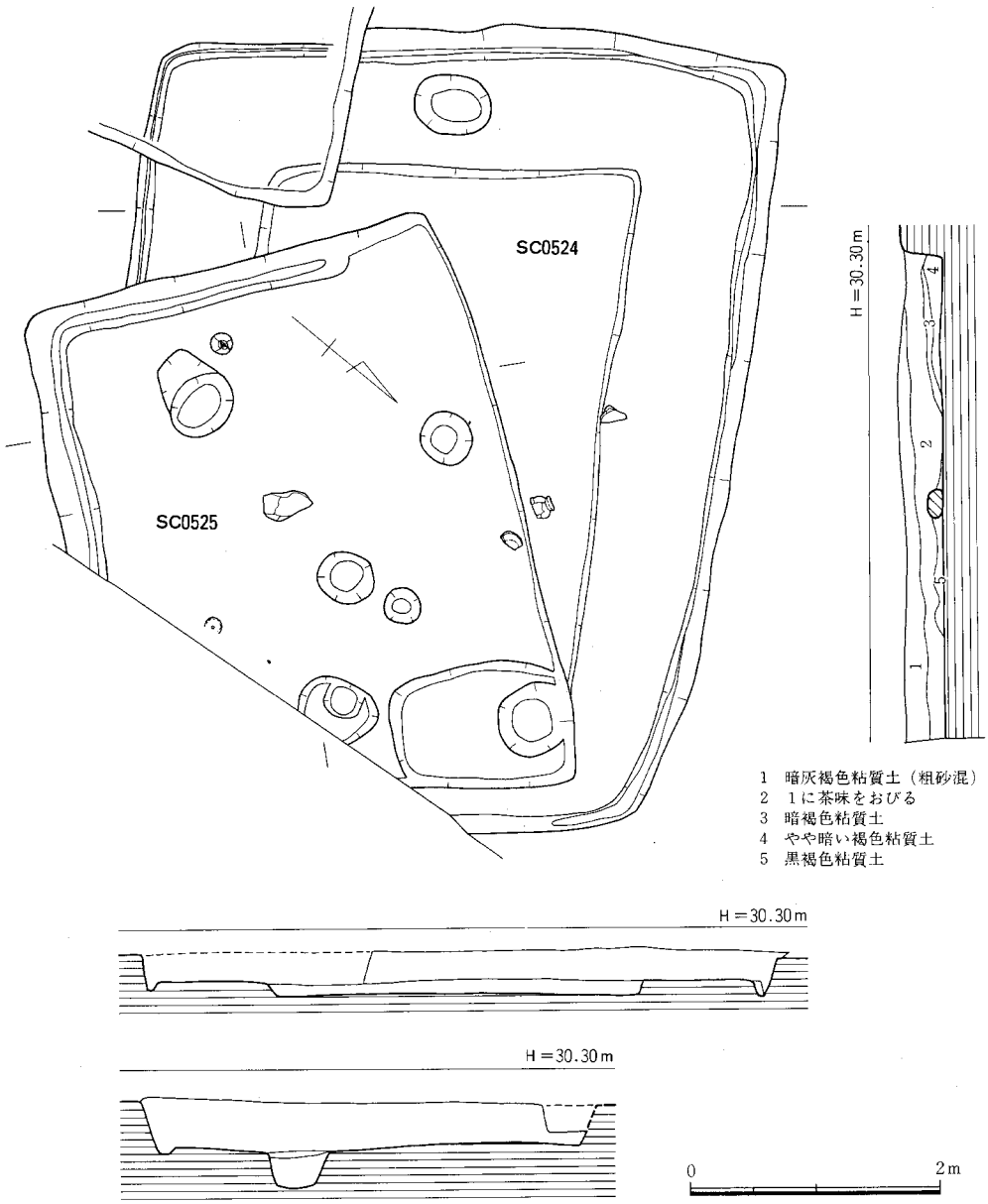
第57図　SC0517実測図（1/60）

416は器台である。口径9.6cm、底径12cm、器高7.3cmを測る。受け部は口縁部を短く立ち上げ、横ナデによって外面を窪ませている。

417・418は鉢である。417は体外面横ミガキを施す。胎土も緻密で明橙色を呈する。418は外面は上半刷毛、下半は横方向のヘラ削りを施す。淡褐色を呈す。417に比べ調整粗く器壁も厚手である。

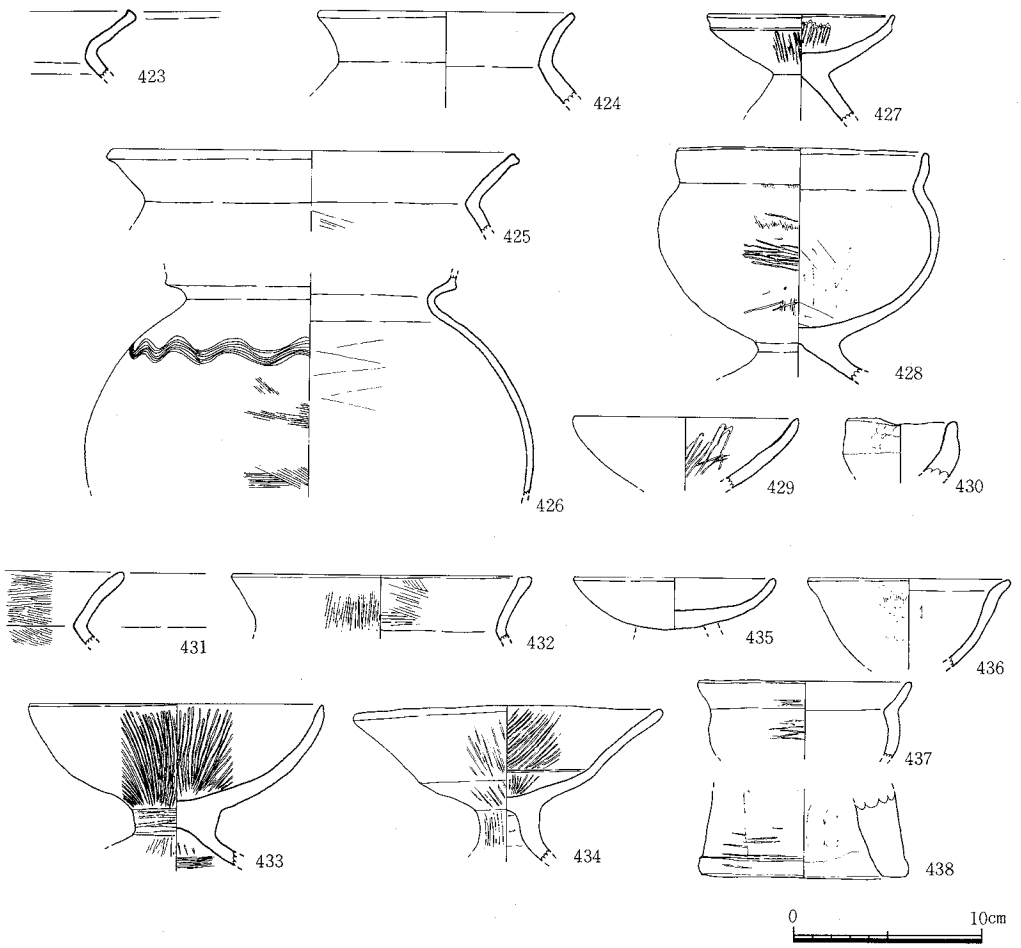


第58図　SC0517出土遺物実測図（422…1/3、他1/4）



第59図　SC0524・0525実測図（1/60）

419～421は埦である。419は外面下半は横位のヘラ削り、内面は縦ミガキによる。420は内外面に横方向のヘラミガキ。421は外面縦方向のヘラ削り、内面は上半が横刷毛、下半が縦方向の指ナデを施す。



第60図　SC0524・0525出土遺物実測図（1/4）

422は鉄製刀子である。関部は錆化して不明瞭である。茎部幅1.5cmを測る。

SC0524（第59図）　調査区北東隅で検出。SC0509・SC0525に切られる。北西壁長6.2m、南西壁長5.0m、床面迄の深さ35cmの平面長方形を呈する。少なくとも三方に幅40cm～50cm、壁高10cmの地山削り出しのベッド状遺構を有する。幅15cm、深さ5cmの壁溝が途切れながら壁添いに巡るが、本来は全周するものであろう。主柱穴は確認できなかった。出土遺物には甕・器台・脚付壺・椀・手づくね土器がある。

出土遺物（第60図423～430）　423～426は甕である。423・426は外来系の甕である。423は口縁部のみであり、内湾して外方に伸び、端部はつまみ上げ断面三角形を呈する。外面に煤が付着。426は二重口縁をもつものであるが口縁端部を欠失。外面は波状文を施し、以下は刷毛目調整、内面は横方向のヘラ削りによる。色調は淡黄褐色。424・425は在地系の甕である。425は口

縁端部を外側に肥厚させる。頸部以下には一部刷毛目が残る。

427は器台である。口径9.8cmを測る。口縁部は短く立ち上がる。外面はナデにより浅く窪む。受け部内外面に縦方向のミガキが施される。

428は脚付壺である。口径12.9cmを測る。外面は縦刷毛・板ナデの後に粗い横ミガキを施す。内面は上半横ナデ、下半縦方向のヘラ削りによる。脚部内面は螺旋状の横ナデ、焼成はややあまく、淡赤褐色を呈す。

429は埦である。口径12cmを測る。外面ナデ、内面粗いミガキを施す。

430は手づくねの埦である。口径5.6cmを測る。胎土は良好で赤褐色を呈す。

SC0525(第59図)　SC0524を切って東側で検出。北西壁長4.7m、南西壁長3.4m、残存壁高40cmの平面長方形を呈す。南東壁～南西壁添いに幅30cm、深さ5cm程の壁溝が検出された。床面よりピットを検出したが主柱穴は認定し得なかった。出土遺物には甕・高坏・器台・鉢・支脚等がある。床面南西側で高坏(第60図　434)が倒立状態で出土している。

出土遺物(第60図431～438)　431・432は甕である。いずれも内面は刷毛目調整による。431は端部を丸く納める。外面はナデにより、煤が付着する。432は口径15.8cmを測る。端部は平坦につくる。外面縦刷毛による。

433・434は高坏である。いずれも短脚で脚裾を欠失する。433は口径15.4cmを図る。坏部は埦状で内外面に密に縦ミガキを施す。筒部には横ミガキ、下には縦ミガキ。胎土は精良で明橙色を呈する。434は倒置状態で出土。口径16.2cmを測る。坏部は中程で屈曲し、やや外反気味に外方へ伸びる。坏部内外面・脚外面に密に縦ミガキを施す。

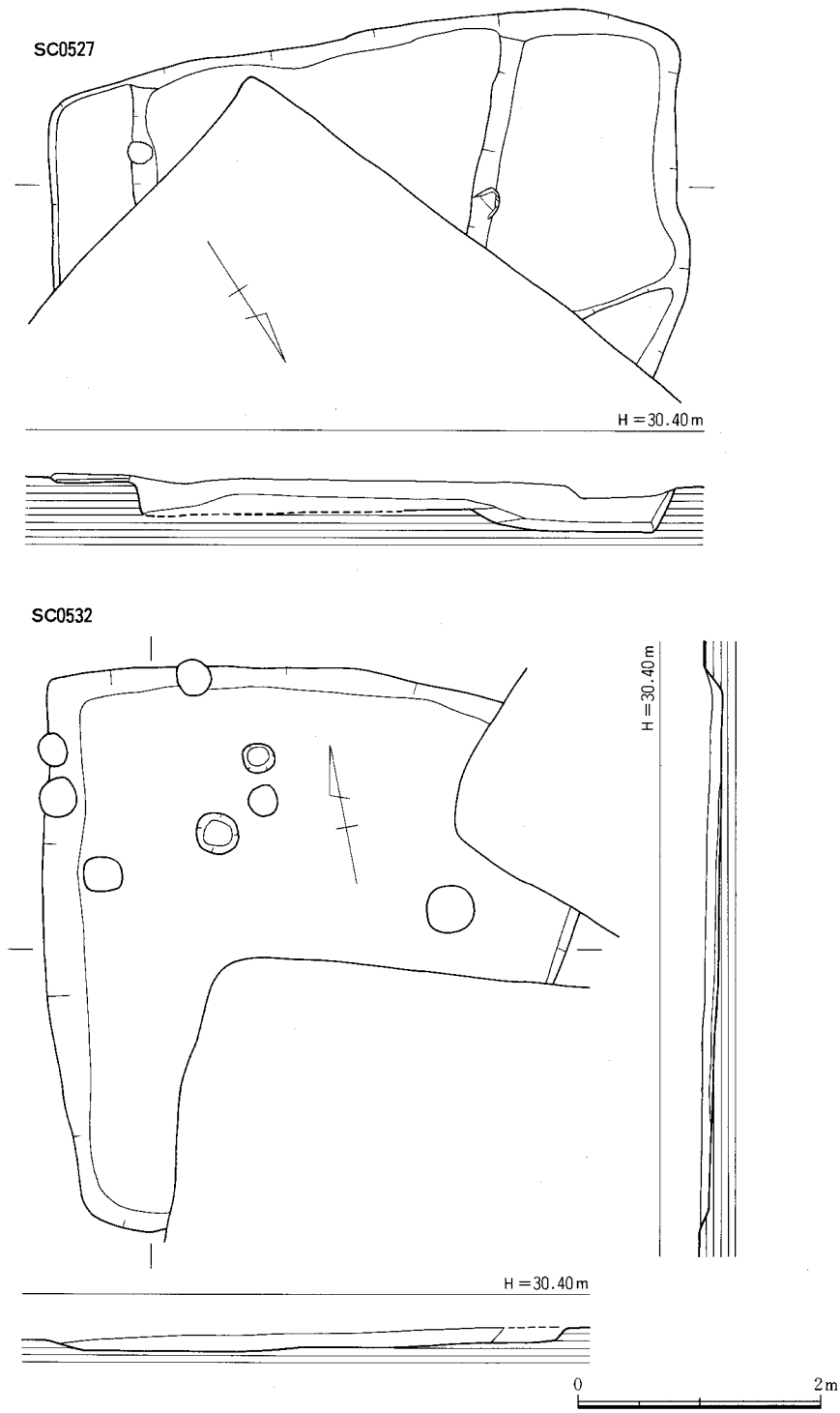
435は器台の受け部である。口径10.6cmを測る。淡黄褐色を呈す。

436・437は鉢である。436は口径10.6cmを測る。外面指おさえによる。一部縦刷毛残る。内面は縦方向の板ナデ状の削り。437は口径11.2cmを測る。剝落が進むが外面は横方向のミガキと思われる。明赤褐色を呈し焼成は良好。

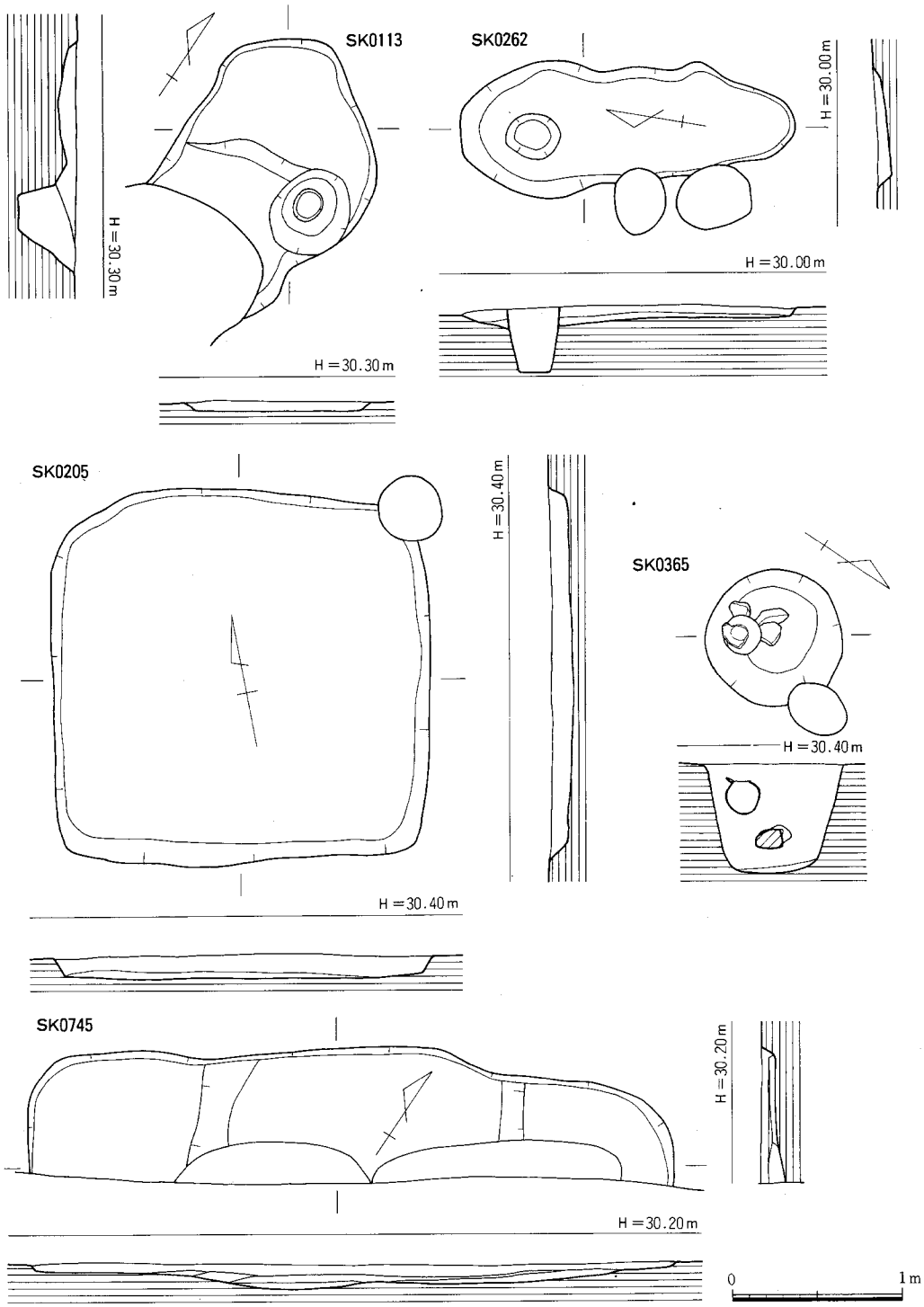
438は支脚の裾部。底径11cmを測る。外面にタタキ痕が残り、内面は指おさえによる。

SC0527(第61図)　調査区中央西側で検出。SC0503に切られる。東西長5.1m、南北長3m以上を測る。東壁添いにベッド状遺構が認められる。また西壁添いは2.5m×1.5mの略長方形に掘り窪められている。主柱穴は検出し得なかった。遺物は細片がわずかに出土するのみである。

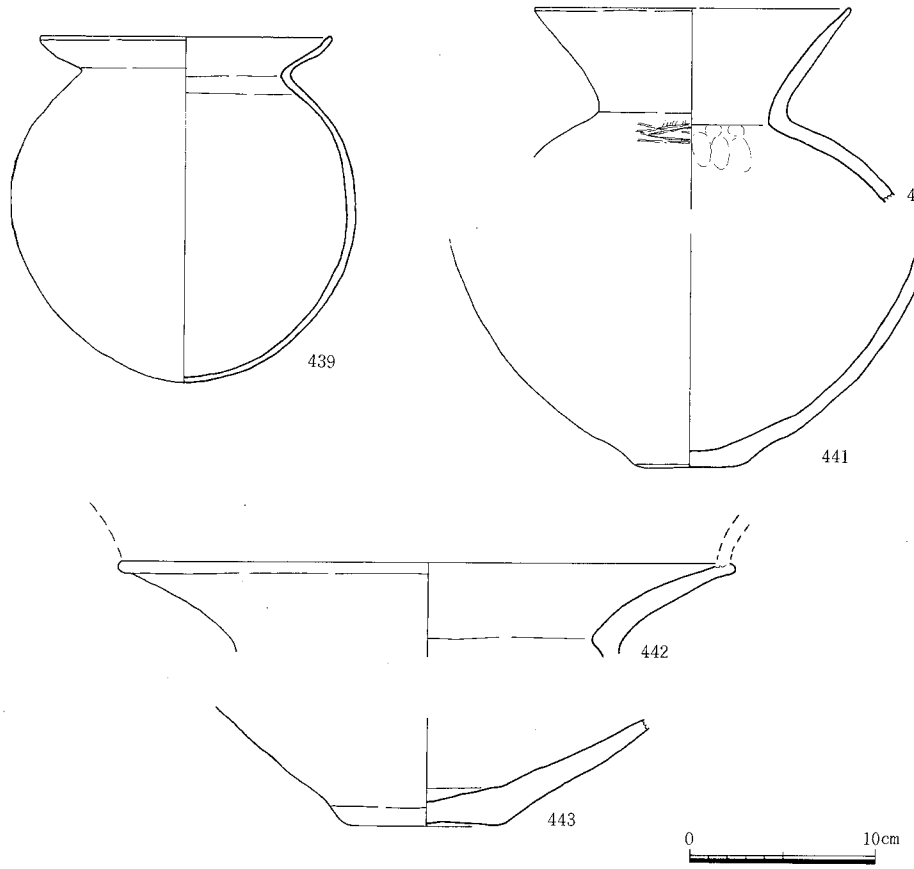
SC0532(第61図)　調査区中央北側で検出。SC0504、SC0510に切られる。東西長4.3m、南北長4.6m、床面迄の深さ10cmを測り、略正方形を呈す。床面はあまりしまりがなく、炉跡・主柱穴等は検出されなかった。他の住居跡と比べ立ち上がりも鈍く、別の性格の遺構とも考えられるが、ここでは調査時の所見のまま住居跡として扱う。遺物は僅少で破片のみの出土である。



第61図　SC0527・0532実測図（1/60）



第62図　SK0113・0205・0262・0365・0745実測図（1/40）



第63図　SK0365, SX0635出土遺物実測図（1/4）

2）土坑

古墳時代に属する土坑は15基程確認した。遺物はほとんど含まれておらず、破片資料のみで、時期の不明確なものがほとんどである。

SK0113（第62図）　調査区南西部で検出した。この部分は弥生時代には谷が入り込んでいるが、古墳時代迄には谷は埋没しており、遺構面は黒色の粘質土を呈している。SK0113は、中世の土坑SK0024に南側を切られる。残存長は、長軸1.2m以上・短軸1.2mを測る。二段に掘り込み、一段目は検出面より５cm程掘り込む。二段目は更に５cm掘り込んでいる。床面は共に平坦である。遺物は破片のみで図示し得ない。

SK0205（第62図）　調査区北東部で検出。SC0509、SC0513を切る。一辺2.2mの正方形を呈する。壁高10cmを測り、底面は平坦である。覆土は暗褐色を呈しSC0509に似ている。出土遺物はほとんどない。

SK0262（第62図）　調査区北西部で検出。SC0528の一部を切り、覆土中に中世のピットが切り

込む。長軸２m、短軸0.5mを測る長円形を呈する。壁高５cmを測り、床面は中央に向かって緩く傾斜する。遺物は破片のみ。

SK0365(第62図)　調査区東南部で検出。直径80cmを測る円形土坑の上層に、ほぼ完形の土師器甕が正置してあった。土坑は深さ60cmを測るが、中位以下は黄褐色シルトの下の砂礫混層迄掘り込んでおり、掘りすぎの可能性が強い。甕は本来基底面近くに正置されていたものであろう。

出土遺物（第63図439～441）　439は布留式甕である。口径15.6cm、器高18.5cmを測る。球形の体部内面はヘラ削りを施す。外面は摩耗しているが刷毛目によるものであろう。焼成は甘く、淡灰褐色を呈す。

440･441は壺である。同一固体と思われる。440は口径18.8cmを測る。外面横ナデの後に粗いミガキを施す。441は底部で、径５cmの平底を有す。外面は粗くナデつける。共に暗赤褐色を呈し、焼成良好。

SK0745(第62図)　調査区北東部で検出。SC0517に切られているが、住居と同じ軸を持ち、住居に向かって傾斜しているなどの検出状況から、なんらかの関連も考えられる。遺物はほとんど出土していない。

３）その他の遺構と遺物

SX0635　　SC0505の東コーナーの脇で検出。掘方はなく検出面より土器が出土するものである。この他にも本調査区より弥生時代～古墳時代の遺物が検出面より出土する。

出土遺物（第63図442・443）　422・443は壺である。同一個体であろう。442は口縁部の１／８程の破片で、屈曲部より上部を欠失しているが、二重口縁を呈するものであろう。443は底部で平底を有す。共に器面の荒れが著しい。

４）小結

ここで述べてきた竪穴住居跡は弥生時代終末～古墳時代前期前半に位置づけられるものである。本調査区では集落の西端部の検出にとどまっており主体となる北東部は未調査である。

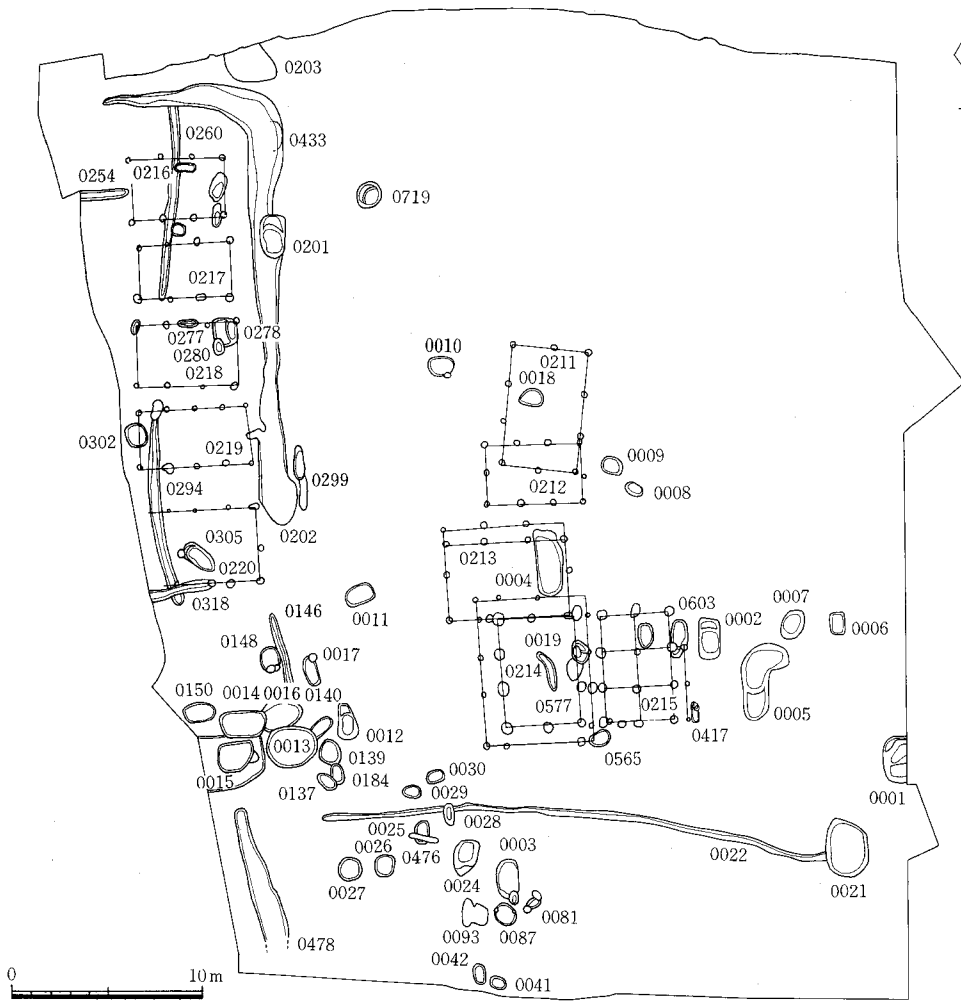
住居の形態としては、長方形プランの２本主柱（0501・0503・0507・0510・0516）が主体を占める。時期的には0501が弥生時代終末に位置づけられる他は古墳時代前期初頭～前半に属するものと考えられる。また形態的に新しい傾向を持つ、正方形プラン４本主柱（0505）は古墳時代前期初頭～前期前半に位置づけられる。平面分布としては、北と南の２群に分かれ、南群（0501・0502・0506）は規模が小さく、出土土器は相対的に古い様相を呈している。またほかにも、住居に付帯する施設として、ベッド状遺構・炉跡・壁際ピット等を検出した。ここでは考察し得ないが、集落だけでなく住居個別の構造を考える上でも貴重な資料である。

5　平安～鎌倉時代の遺構と遺物

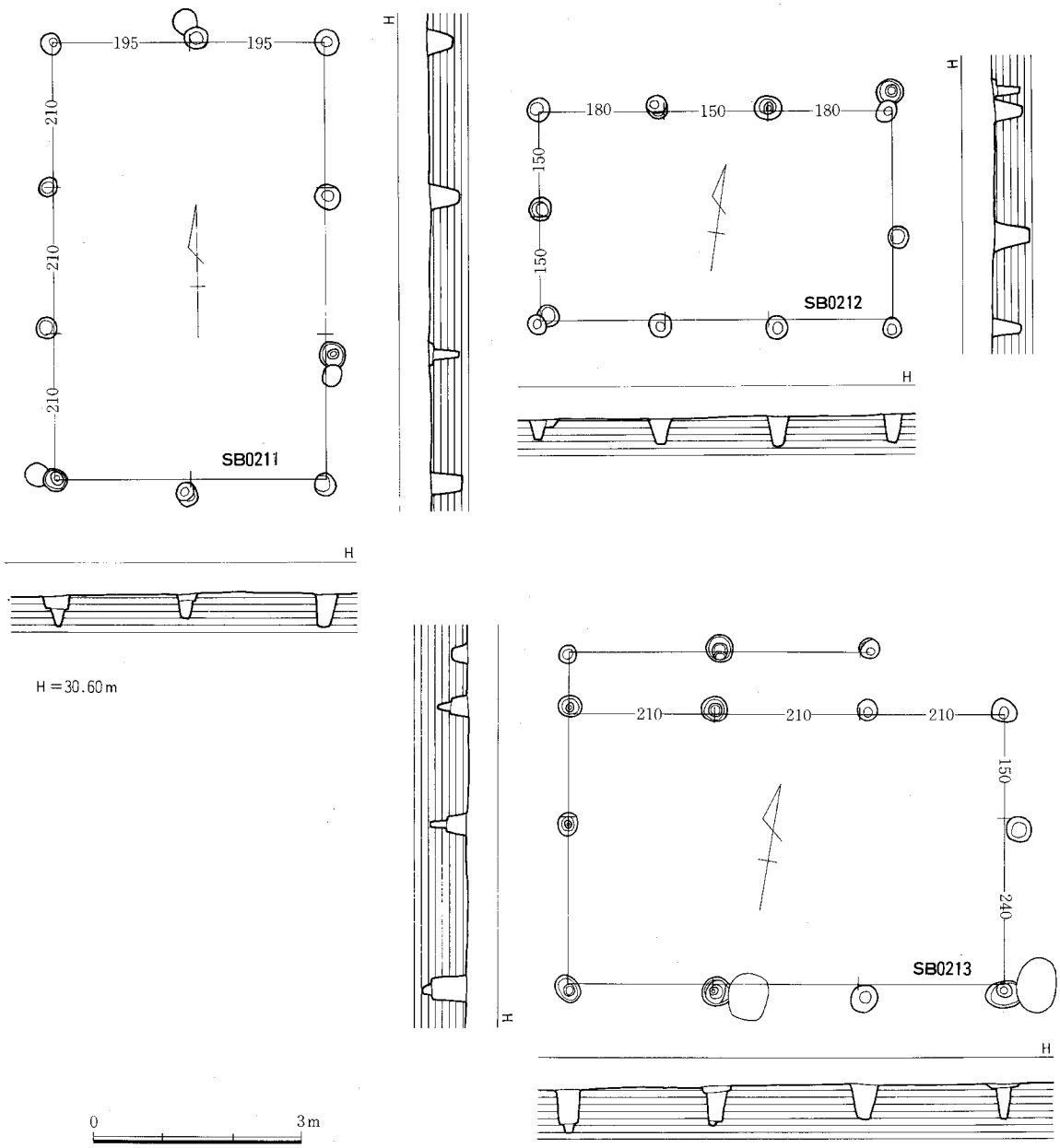
平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構は、調査区の西北側を除いた地区に分布していた。この時期には西南側の段落ちは完全に埋まり、遺構が築かれている。検出したのは掘立柱建物10棟、土坑57基、溝10条などである。遺構の覆土は灰色の砂質土が主で、締りがなく、他の時代の遺構との識別は容易であった。なお遺物のうち磁器は大宰府分類に従った。

1）掘立柱建物（第65～67図、図版25～28）

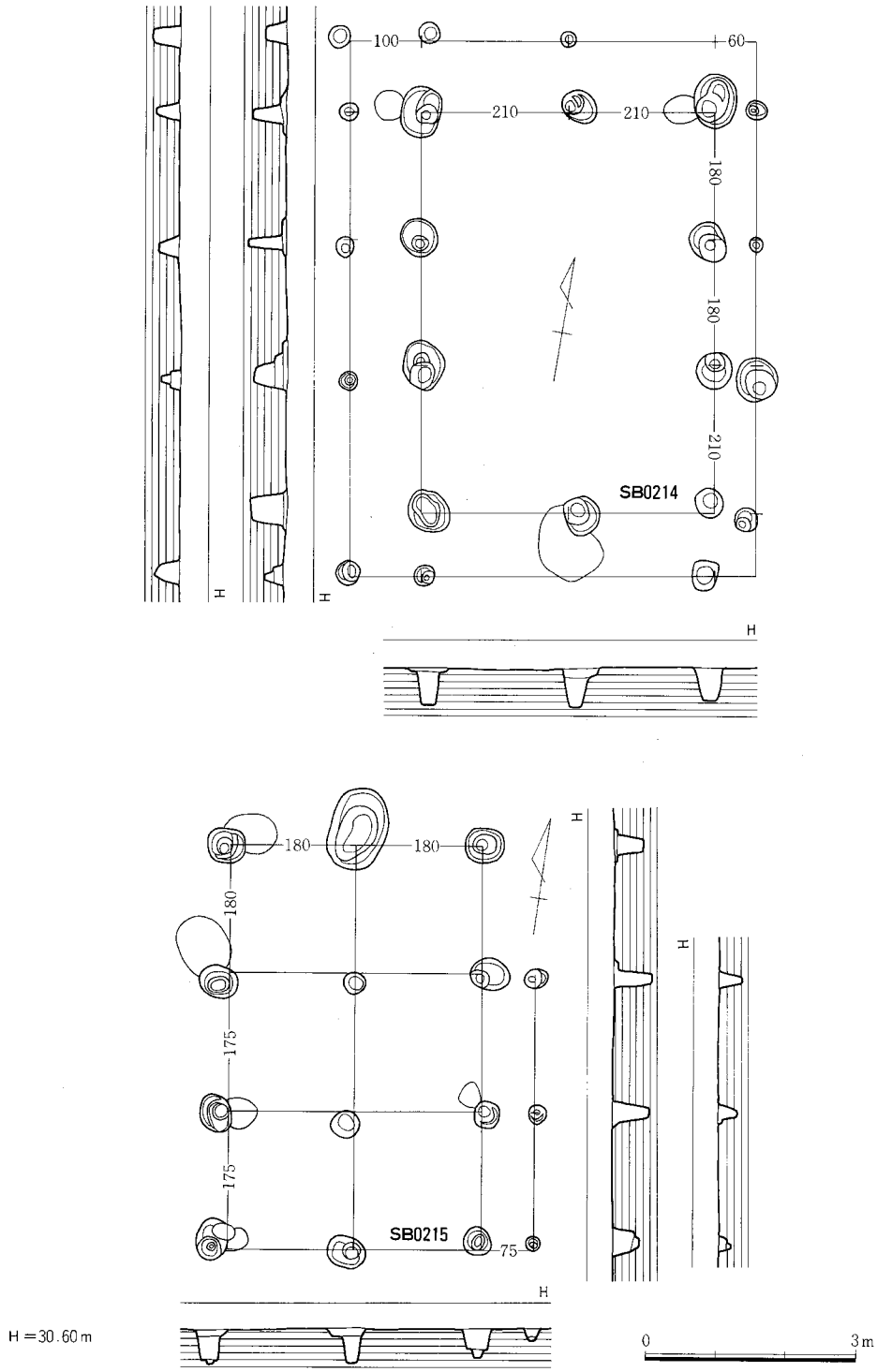
確認した掘立柱建物は第３表に示した10棟である。この掘立柱建物は調査区中央（Ⅰ群）と西北側（Ⅱ群）に分かれる。Ⅰ群は２間×３間の身舎をもつ５棟からなり、うち３棟が南北棟、残りが東西棟となる。南北棟のSB0211とSB0214が東西棟のSB0212とSB0213をそれぞれ切っており、総柱建物であるSB0215も、その柱の配列位置からSB0214に付属した建物と考えられると



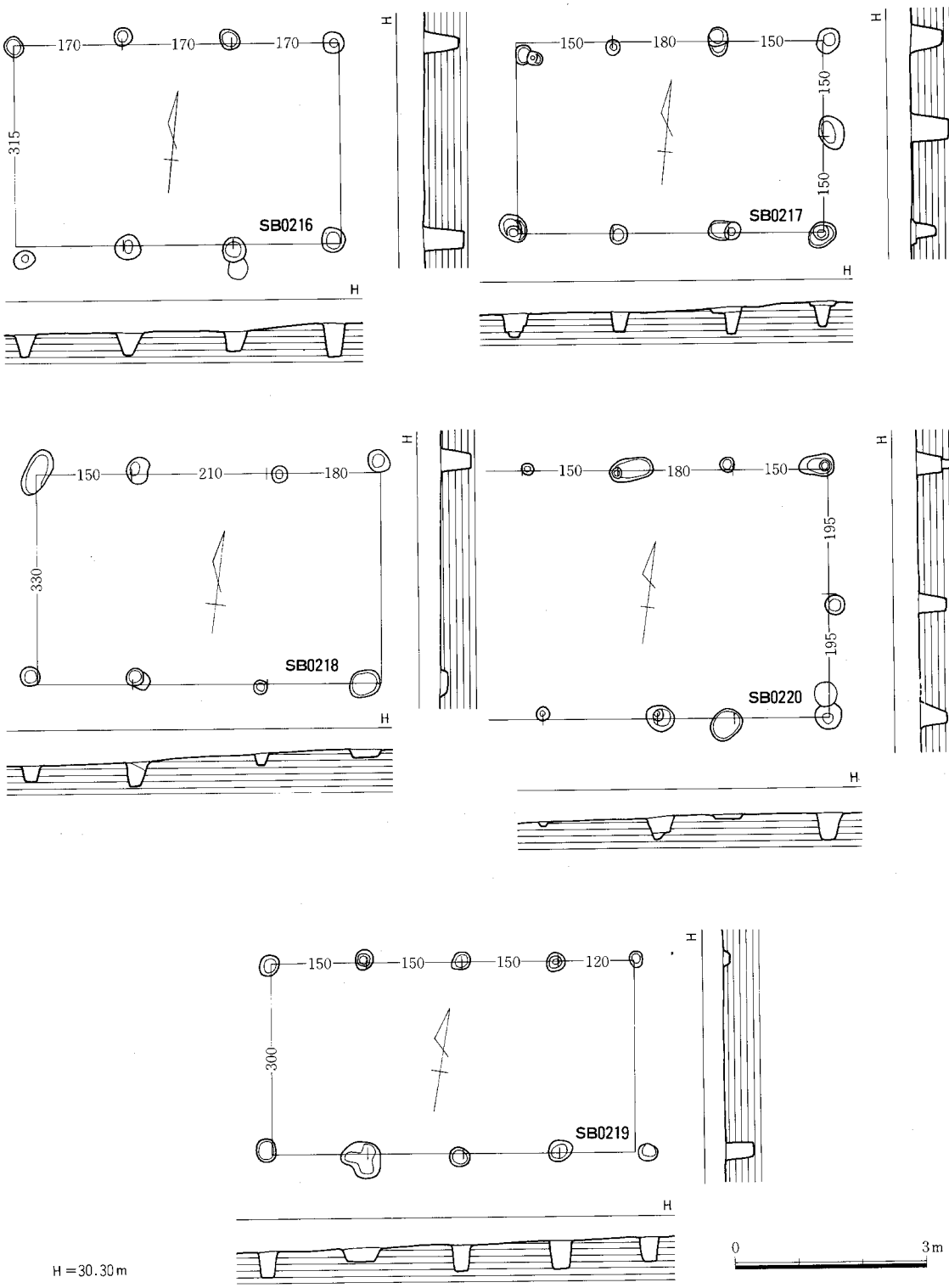
第64図　平安～鎌倉時代遺構配置略図（1/400）



第65図　SB0211・0212・0213実測図（1/100）

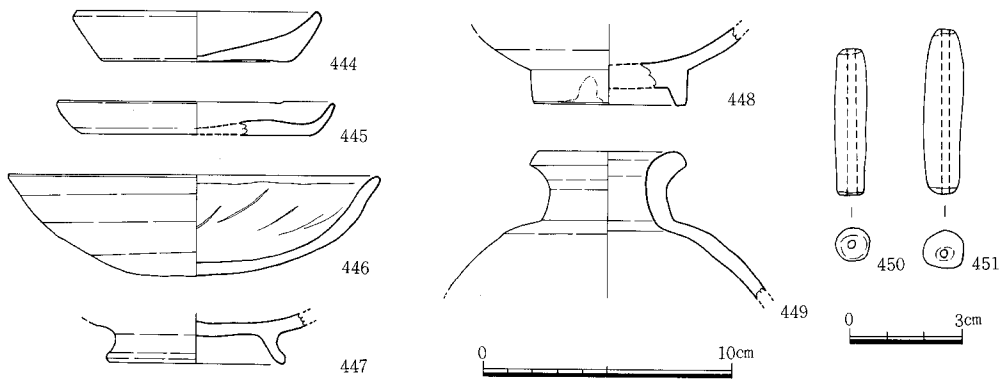


第66図　SB0214・0215実測図（1/100）



H＝30.30m

第67図　SB0216・0217・0218・0219・0220実測図（1/100）



第68図　掘立柱建物およびピット出土遺物実測図（450・451…1/2、他1/3）

ころからⅠ群の中にも東西棟群から南北棟群への変遷をたどることができる。それぞれの時期の主屋と考えられるSB0213は北側に庇をもち、またSB0214は四面に庇をもつ。身舎の面積はともに24㎡前後である。出土遺物からみるとこの切り合い関係に大きな時期の隔たりは認められず、およそ12世紀中頃から後半に相当する。

Ⅱ群はSD0202に囲まれており、建物としてはやや問題の残るSB0220を除いた４棟はいずれも１間×３間の東西棟で、約１m幅の間隔をとって北から南に整然と配置されている。身舎の面積も14～18㎡程度である。この掘立柱建物群も出土遺物や他遺構との切り合い関係からみて、Ⅰ群と時期を隔てずに構築されたものと考えられる。

掘立柱建物およびピット出土遺物（第68図）　444・445は糸切り底の土師器小皿。444は口径9.9cm、器高1.0cm。446は土師器丸底杯。底部はヘラ切り、内面にはコテ当て痕が残る。口径14.9cm、器高4.0cm。447は黒色土器B類。高台は大きく張る。内底はヘラ磨きで光沢を帯びる。448は白磁椀Ⅴ類。高台は直で高く、釉がこの部分にまでかかる。449は施釉壺。釉は黒褐色に発色し、内外面ともかかる。一部釉のかからない部分は褐色となる。胎は茶を帯びた灰色。450・451は管状土錘。450が長さ3.9cm、径0.9cm、451が長さ4.4cm、径1.0cmをはかる。ともに胎土は精

番　号	挿図	図版	群	規　模	棟向	梁		桁		建物方位	身舎床面積(m²)	その他の施設
						実長(cm)	柱間寸法	実長(cm)	柱間寸法			
SB0211	第65図	25-1	Ⅰ	2間×3間	南北	390(13)	6.5	630(21)	7	N	24.57	
SB0212	〃	26-1	Ⅰ	2間×3間	東西	300(10)	5	510(17)	6・5・6	N-10°-E	15.30	
SB0213	〃	26-2	Ⅰ	2間×3間	東西	390(13)	8.5	630(21)	7	N-9°-W	24.57	北側3尺に庇
SB0214	第66図	27-1	Ⅰ	2間×3間	南北	420(14)	7	570(19)	7・6・6	N-9°-W	23.94	四面庇（2～3.5尺外側）
SB0215	〃	27-2	Ⅰ	2間×3間	南北	360(12)	6	570(19)	85・85・8	N-7°-W	20.52	東側2.5尺に庇？
SB0216	第67図		Ⅱ	1間×3間	東西	315(10.5)	—	510(17)	5 2/3	N-6°-W	16.07	
SB0217	〃		Ⅱ	1間×3間	東西	300(10)	—	480(16)	5・6・5	N-5°-W	14.40	
SB0218	〃		Ⅱ	1間×3間	東西	330(11)	—	540(14)	5・7・6	N-8°-W	17.82	
SB0219	〃		Ⅱ	1間×4間	東西	300(10)	—	570(19)	5・5・5・4	N-10°-W	17.10	
SB0220	〃		Ⅱ	2間×？間	東西	390(13)	6.5	？	5・6・5…	N-8°-W	？	

第３表　掘立柱建物一覧

良だが、焼きはあまい。

444は0621ピット、445は0154ピット、446・447はSB0214の柱穴、448は0168ピット、449はSB0213の柱穴、450・451は0101ピットから出土した。

2）土坑（第69～74図、図版28～30）

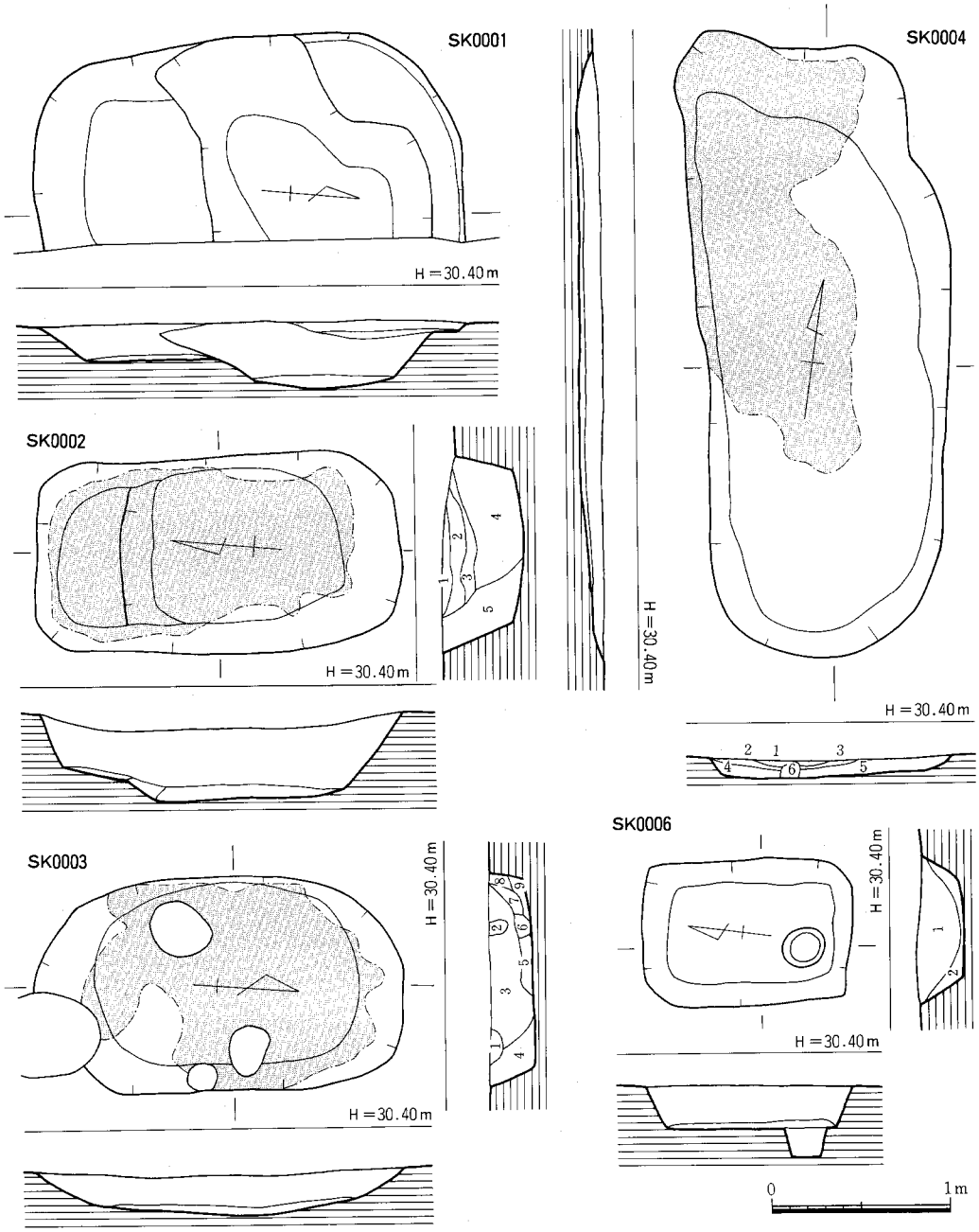
検出した土坑は第4表に示した57基である。この中にはSK0003、0004、0011、0433のように、坑内に焼土や炭化物が多く、また壁面が焼け締まっているものがみられる。他の土坑はおおむね灰褐色砂質土を覆土とし、平面は円もしくは楕円形が多い。土坑の時期は12世紀前半から13世紀前半にわたる。紙面の都合上個々の土坑については第4表と実測図に譲り、ここでは実測した遺物の観察を100頁以下で行う。

土坑番号	挿図	図版	平面形態	規模(cm) 長さ×幅	深さ(cm)	出土遺物	備考
SK0001	第69図	28-2	楕円形	南北長240	37	第75図(452,453)。他に土師器糸切皿、白磁椀IV、龍泉椀I-V-bなど。	SC0506・0521を切る。
0002	〃	28-3	隅丸長方形	200×110	45	第75図(454-456)。他に白磁、椀皿、龍泉椀など。	SK0551を切る。焼土あり。
0003	〃	29-1	楕円形	210×120	22	第75図(458)。他に白磁、龍泉青磁など。	焼土多い。
0004	〃	29-2	長楕円形	340×135	10	第75図(459)。他に白磁など。	焼土・炭化物多い。 SB0213と重複。
0005	〃	29-3	不整形	380×140	25	第75図(460)。他に土師器杯・皿(糸切り)、白磁椀II・IV：Vなど。	SC0520を切る。
0006	〃	29-4	隅丸長方形	115×80	25	土師器(ヘラ切り？)・瓦器細片。	SK0587を切る。
0007	第70図	29-5	楕円形	164×120	44	土師器杯・皿(ヘラ・糸切りまじる)、瓦器、白磁など。	SK0588を切る。
0008	〃	29-6	楕円形	104×70	28	土師器杯・皿(糸切り)、瓦器、白磁小椀など。	SC0512、SK0644を切る。
0009	〃	30-1	楕円形	115×88	16	土師器杯・皿、白磁など。	SC0512、0511を切る。
0010	〃		楕円形	137×104	13	土師器杯・皿(ヘラ切り)、白磁椀II、高麗青磁など。	
0011	第71図	30-2	楕円形	160×98	20	第75図(461～463)。他に瓦器、白磁椀IVなど。	炭を含む。SC0505を切る。
0012	〃		楕円形	190×100	37	第75図(464)。他に土師器杯(糸切り)、白磁など。	
0013	〃		楕円形	280×220	20	土師器、白磁細片。	SK0016、0140を切る。
0014	〃		楕円形	244×146	12	土師器杯・皿(糸切り)、瓦器、白磁など。	SK0015・0016を切る。
0015			不整形	南北幅300	38	第75図(465～467)。他に瓦器、龍泉青磁など。	SK0014に切られる。
0016	第72図		楕円形	215×150	30	土師器杯・皿(糸切り)。	SK0013・0014に切られる。
0017	第71図		楕円形	156×73	20	土師器杯・皿(ヘラ切り？)。	SK0142・0143に切られる。
0018	〃		楕円形	120×100	20	土師器杯(糸切り)。	SB0211と重複。
0019			溝状	210×52	35	土師器杯・皿(糸切り)、白磁・青磁細片など。	SB0214と重複。
0021	第72図	30-3	楕円形	300×225	32	第76図(468～491)。他にコネ鉢、朝鮮系陶器片。	SC0506・0515を切る。
0024			楕円形	163×132	40	土師器皿(糸切り)、白磁細片など。	SK0113を切る。
0025	第72図		楕円形	130×85	13	土師器杯・皿(ヘラ・糸切りまじる？)、白磁細片。	SK0476に切られる
0026	〃		楕円形	120×100	33	土師器杯・皿(糸切り)、瓦器など。	
0027	〃		円形	126×123	28	土師器杯・皿(糸切り)、白磁椀II・Vなど。	

第4表　土坑一覧I

土坑番号	挿図	図版	平面形態	規模(cm) 長さ×幅	深さ(cm)	出土遺物	備考
SK0028			楕円形	117×50	40	土師器杯・皿(糸切り)、瓦器など。	SD0022を切る
0029	第72図		楕円形	96×67	22	土師器皿(ヘラ切り)、瓦器、スリ鉢など。	
0030	〃		楕円形	98×64	15	土師器、瓦器細片、鉄釘。	
0041			楕円形	87×67	60	土師器皿(糸切り)、白磁など。	
0042	第72図		楕円形	110×62	16	土師器椀、白磁皿IV。	
0081			楕円形	80×50	36	土師器、白磁細片。	
0087	第73図		楕円形	130×110	5	土師器皿(ヘラ切り)、白磁細片。	
0093			不整形	152×138	6	土師器皿(糸切り)、青磁細片	
0137	第73図		楕円形	108×70	20	第77図(492・493)。他に土師器皿(糸切り)、白磁細片など。	SK0184を切る
0139			楕円形	132×117	28	第77図(494・495)。ほかに瓦器など。	SK0184に切られる
0140	第73図		長楕円形	東西幅66	12	土師器皿(糸切り)など。	SK0013に切られる
0148	〃		楕円形	140×106	22	土師器、白磁細片。	
0150	〃		楕円形	165×106	8	土師器皿(糸切り)、白磁椀IV	
0184	〃		楕円形	106×68	16	土師器細片。	SK0137に切られ、SK0139を切る
0201	〃	30-4	楕円形	220×137	44	土師器杯・皿(糸切り)、白磁椀II・IV、鉄鏃?など。	SD0202を切る
0203	第74図	30-5	不整形	東西幅225	23	土師器皿(糸切り)、瓦器細片。	SC0518を切る
0206			楕円形	130×72	30	土師器・瓦器細片。	SB0215と重複
0259			楕円形	110×48	7	土師器皿(糸切り)細片	SC0528・SD0260を切る
0267	第74図		楕円形	150×72	30	土師器細(糸切り)細片。	SB0216と重複
0268			楕円形	128×40	37	土師器、白磁細片。	SB0216に切られる
0269			楕円形	78×57	11	土師器皿(糸切り)、白磁椀V	SD0260を切る
0277			楕円形	114×43	26	土師器細片。	
0278	第74図		隅丸方形	145×130	24	第77図(496・497)。他に白磁椀II、龍泉青磁、鉄滓など。	
0299	〃		長楕円形	170×53	30	第77図(498)。他に土師器、瓦器細片	SK0660を切る
0302	〃		楕円形	122×110	20	土師器細片	SB0219と重複
0305	〃		楕円形	194×92	53	土師器皿(糸切り)、瓦器、コネ鉢、白磁椀II・IV、陶器など。	SB0220と重複
0417			隅丸長方形	108×46	25	土師器、瓦器細片	SK0434を切る
0433	第74図	30-6	楕円形	南北長330	55	第77図(499-510)。他に鉄刀子。	炭、土壙墓?SD202、SD0518を切る
0476			溝状	152×26	3	土師器細片。	SK0025を切る
0565			楕円形	115×90	4	土師器細片。	
0577			楕円形	120×87	50	土師器細片。	SB0214に切られる
0603			楕円形	192×83	55	第77図(511)。他に龍泉椀Ⅰ－5。	土壙墓?SB0215に切られる
0719			楕円形	135×132	77	土師器細片。	

第5表　土坑一覧II



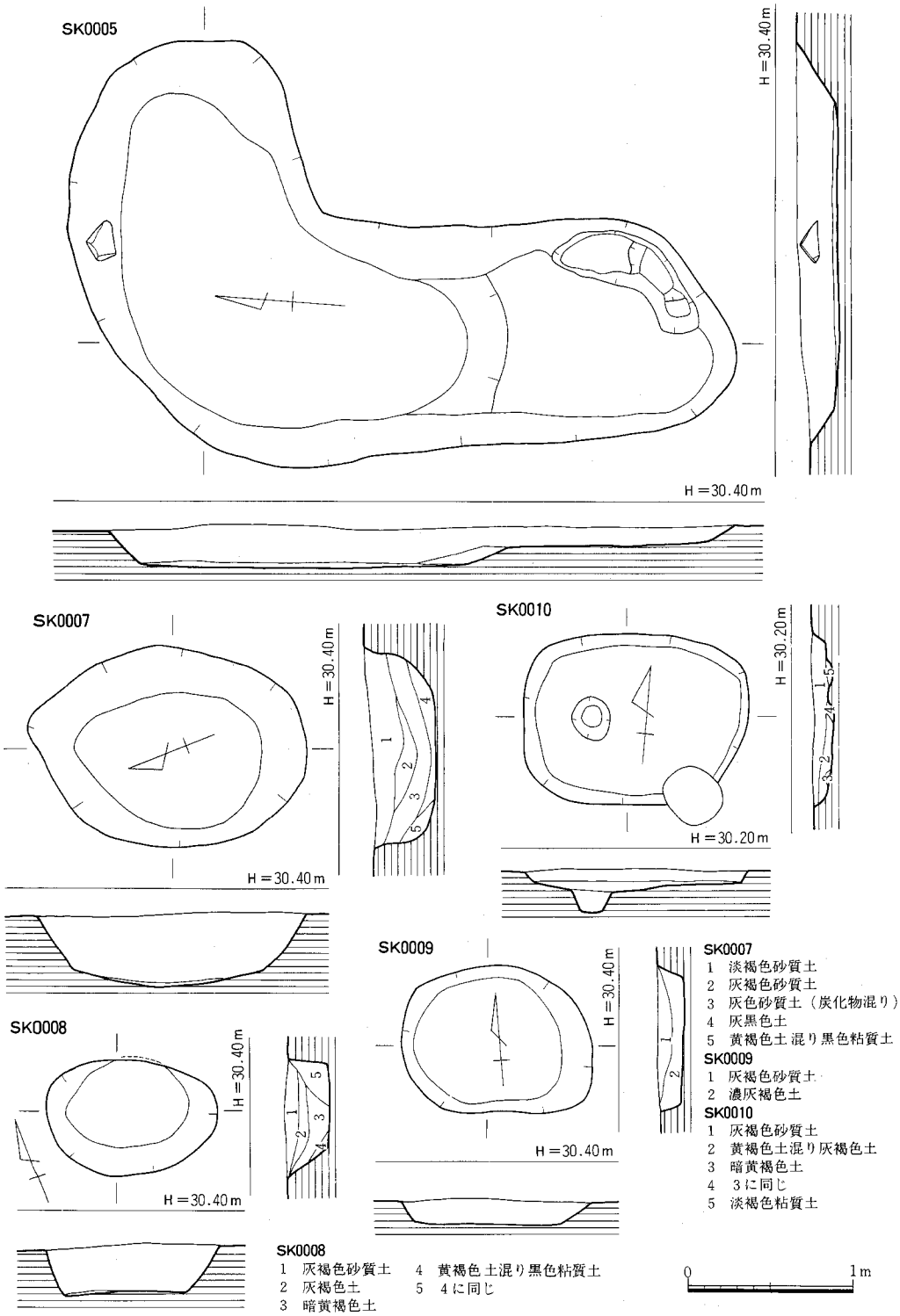
SK0002
1　灰味暗褐色粘質土
2　暗灰色粘質土（焼土塊含む）
3　暗黄褐色粘質土（焼土塊含む）
4　2より暗い暗灰色土（土器含む）
5　4よりやや明るい暗灰色土
（粗砂混、炭・焼土・土器若干混じる）

SK0003
1　褐色土（焼土混る）
2　黒褐色土
3　暗褐色土に焼土多く混る
4　3と同じ、焼土の割合少ない
5　炭化物
6　暗褐色土
7　5と同じ
8　黒褐色砂質土
9　暗灰褐色土

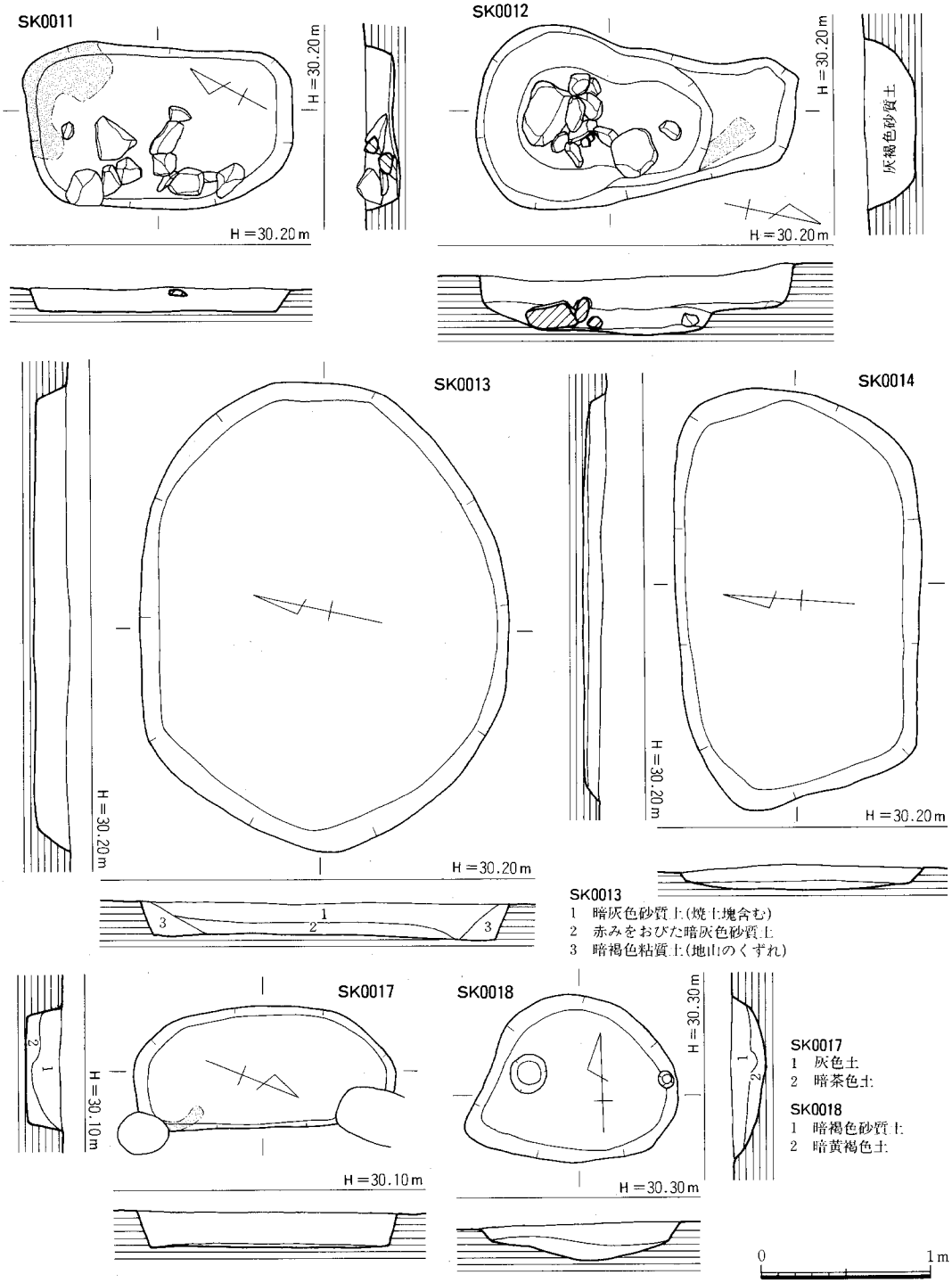
SK0004
1　茶褐色粘質土（炭混る）
2　焼土
3　2に同じ
4　灰褐色粘質土
5　4に同じ
6　黄色粘土

SK0006
1　黄褐色土混り灰褐色土
2　黄褐色土混り黒色粘質土

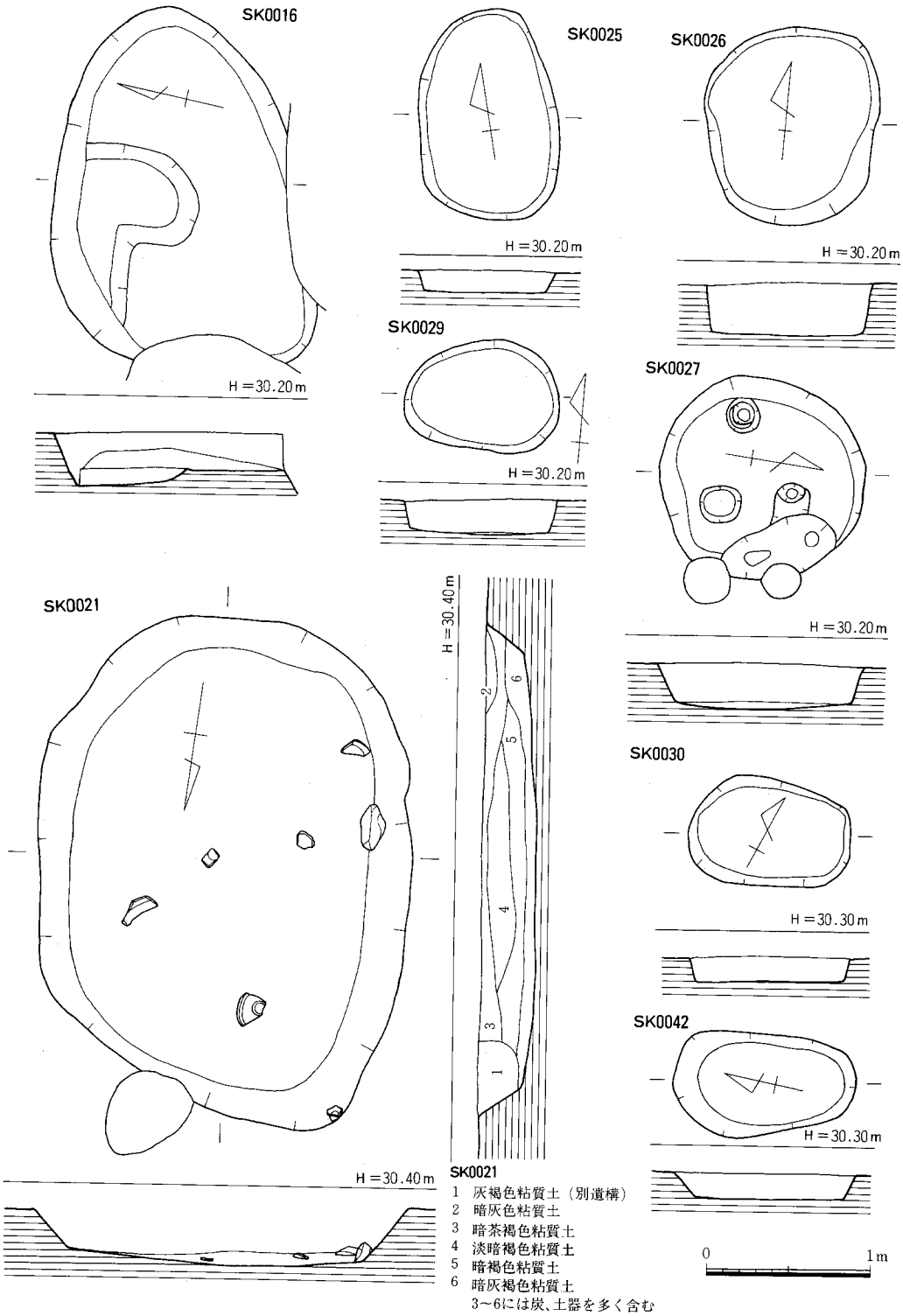
第69図　SK0001・0002・0003・0004・0006実測図（1/40）



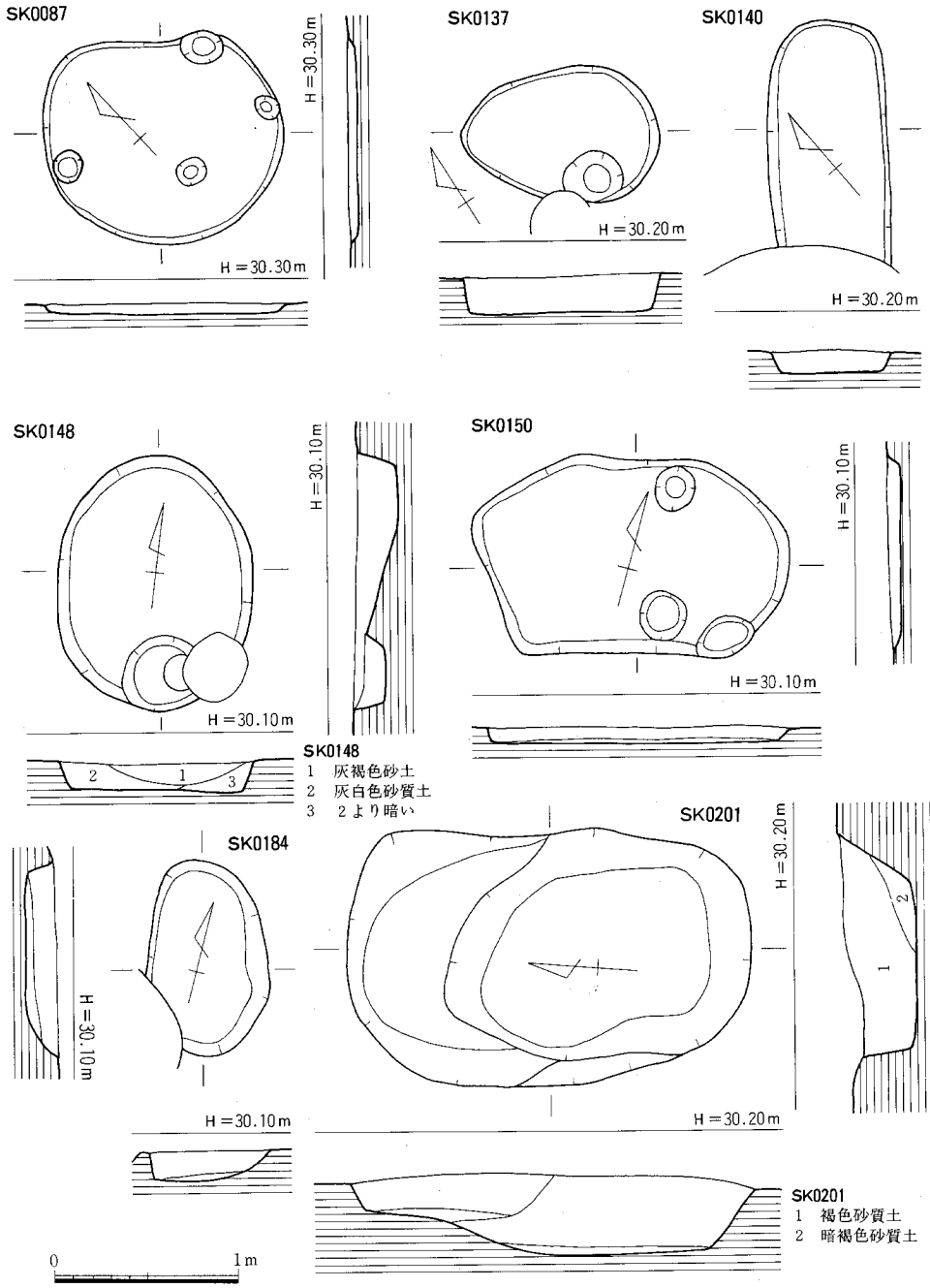
第70図　SK0005・0007・0008・0009・0010実測図（1/40）



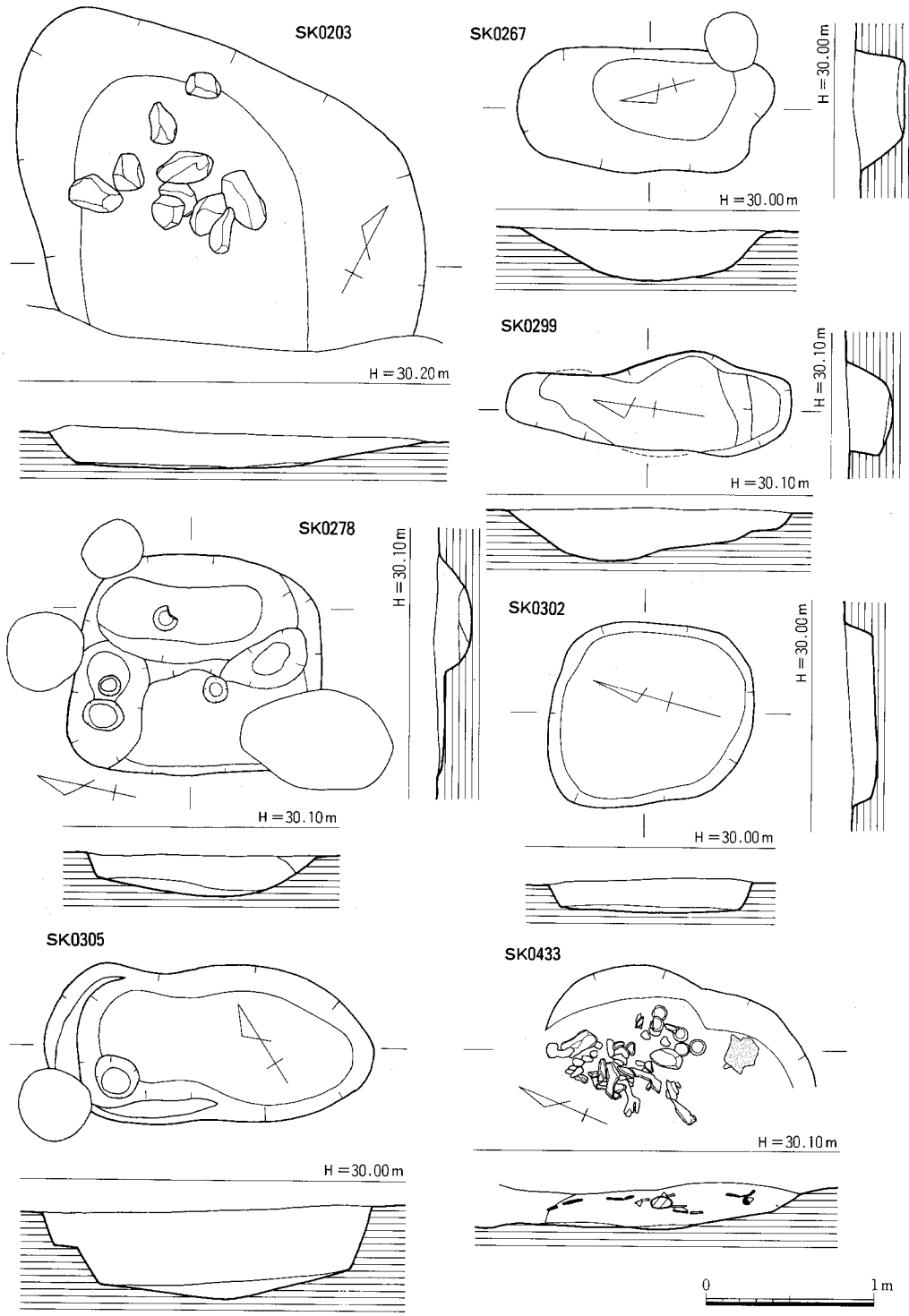
第71図　SK0011・0012・0013・0014・0017・0018実測図（1/40）



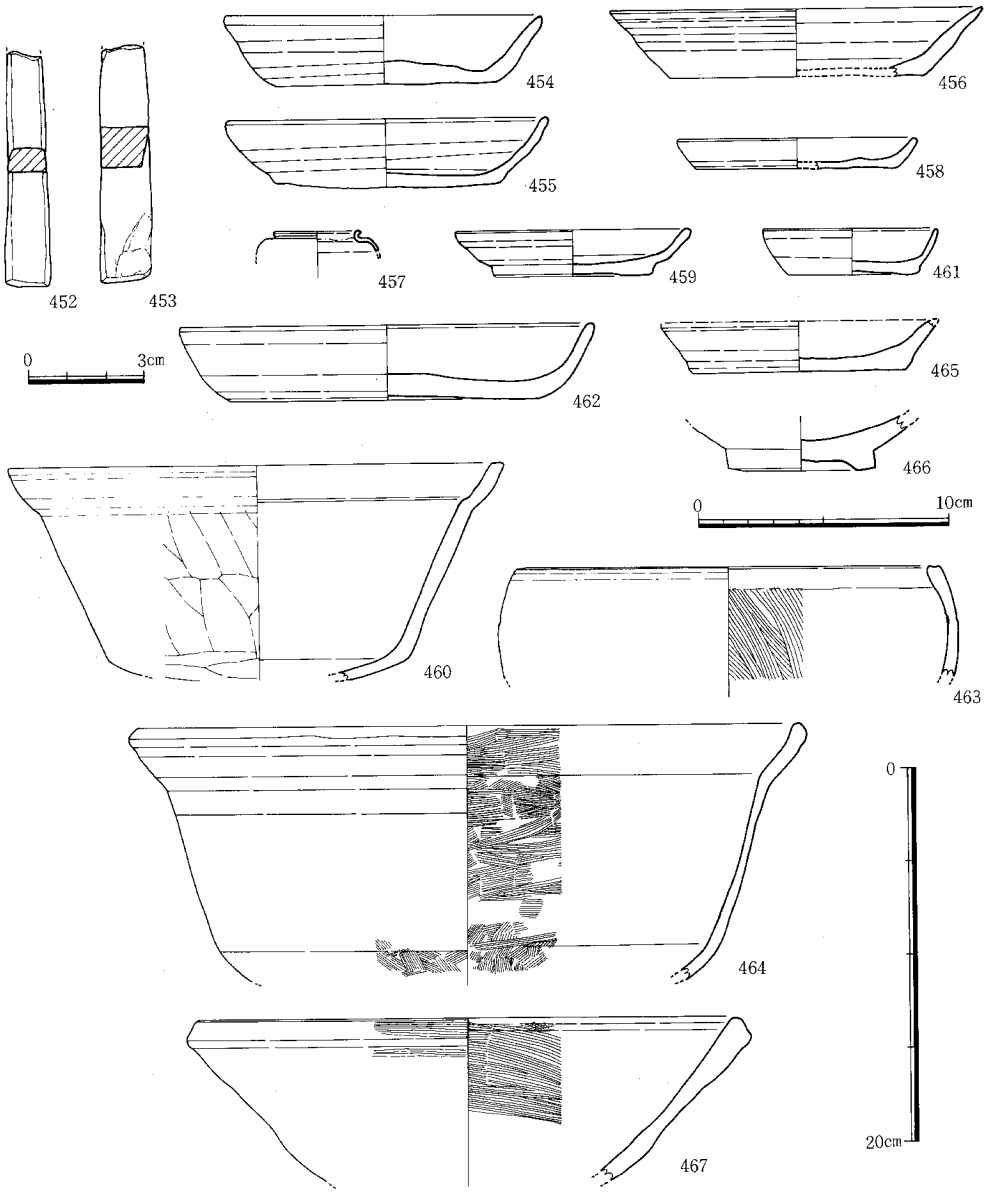
第72図　SK0016・0021・0025・0026・0027・0029・0030・0042実測図（1/40）



第73図　SK0087・0137・0140・0148・0150・0184・0201実測図（1/40）



第74図　SK0203・0267・0278・0299・0302・0305・0433実測図（1/40）



第75図　SK0001・0002・0003・0004・0005・0011・0012・0015出土遺物実測図（452・453…1/2、460・463・464・467…1/4、他1/3）

SK0001出土遺物（第75図452・453）　手持ちの砥石である。長さ6.3cmで、断面方形（452は半折）を呈する。砥面として用いているのはともに一面だけである。

SK0002出土遺物（第75図454～457、第6表）　454～456は糸切り底の土師器杯。454・455の口径12.6～12.8cm、456はひとまわり大きく14.8cm。器高はいずれも2.8cm前後。456の底部には雑

な板状圧痕がある。また454の内底には煤が付着する。457は小型で薄手の施釉壺。釉は黒褐色。胎は茶色を呈し、密である。

SK0003出土遺物（第75図458） 底部糸切りの土師器小皿である。口径9.6cm、器高1.2cm。

SK0004出土遺物（第75図459） 底部糸切りの土師器小皿である。口径9.3cm、器高1.8cm。調整が雑で底部が厚い。

SK0005出土遺物（第75図460） 土鍋である。復元口径26.3cm、器高11.5cm前後。底部は平底に近い。口縁は内側に蓋受けの段を作る。口縁から内面にかけては回転ナデを施すが、外面は削りのままで煤が付着する。

SK0011出土遺物（第75図461～463） 461は土師器小皿。底部は糸切りで、口径6.9cm、器高1.8cmをはかる。口縁部には煤が付着する。462は土師器杯。底部は糸切りで、口径16.5cm、器高2.9cmをはかる。463は土師質の鉢。内面には刷毛目を深く施す。赤褐色で焼成は良好。

SK0012出土遺物（第75図464） 土鍋片である。460と同様の器形を呈するが、ひとまわり大きく、また底部も丸みを帯びる。内面および外底は細かい刷毛目、他は横ナデ調整を行う。煤の付着が著しい。

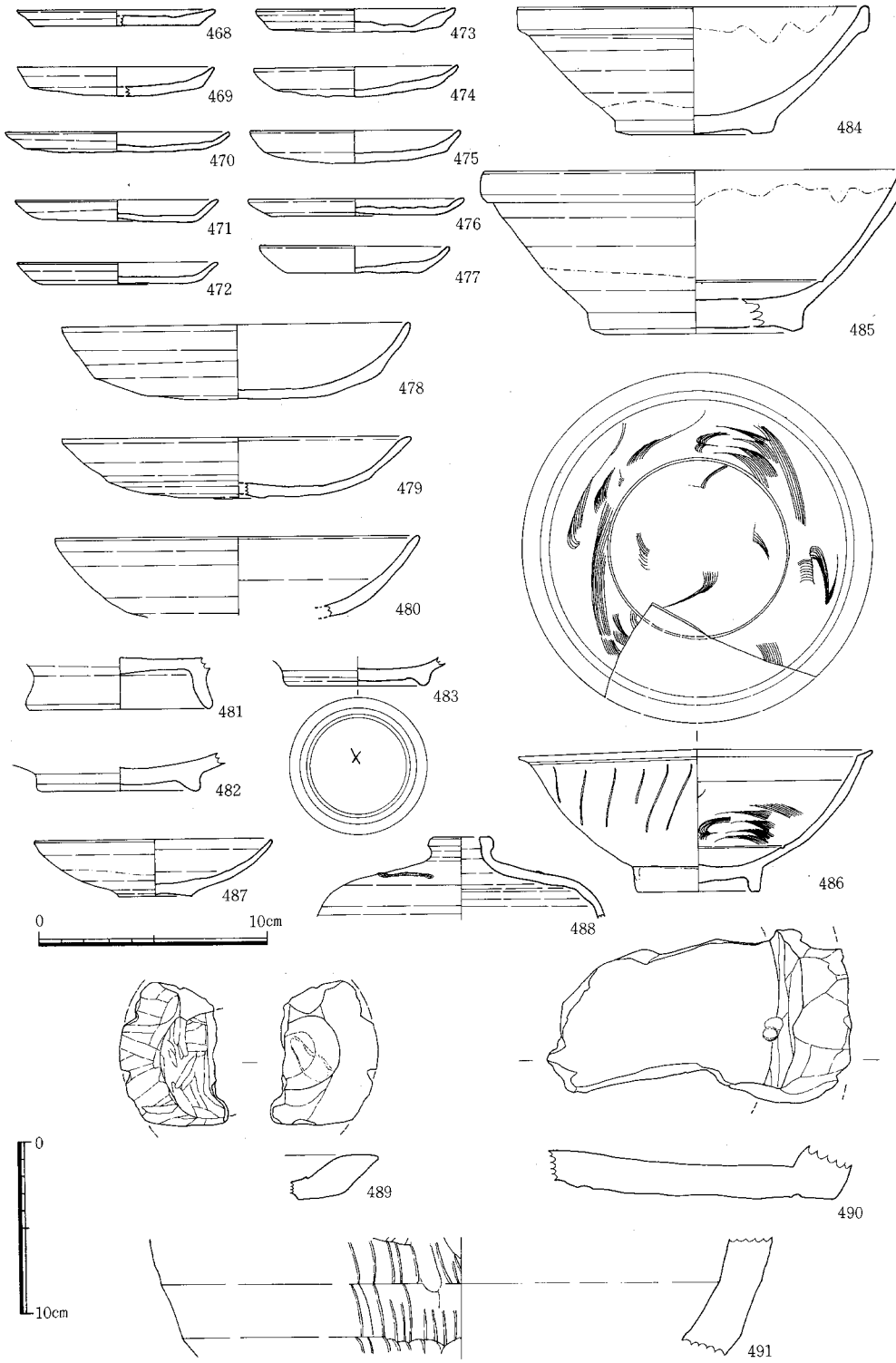
SK0015出土遺物（第75図465～467） 465は糸切り底の土師器皿。口縁端部を欠くが、11cm前後の口径であろう。466は白磁椀IV類底部片。467は土師質のコネ鉢。内面は横刷毛目を重複させて施す。淡灰黄色。

SK0021出土遺物（第76図、第6表） 468～476は底部ヘラ切りの土師器小皿。口径8.5～9.7cm、器高0.7～1.4cm、平均口径8.96cm、平均器高1.06cmをはかる。474・476の底部には板状圧痕が認められる。また473の口縁には煤が付着する。477は糸切り底の土師器小皿。口径8.4cm、器高1.2cm。底部には板状圧痕がある。478～480は土師器丸底杯。底部はいずれもヘラ切りで、479には板状圧痕がある。残りの良い478・479は口径15.2～15.3cm、器高2.7～3.3cm。481は高台の付く土師器椀の底部である。482・483は瓦器椀の底部である。高台は断面三角形状で、483の外底には×字状のヘラ記号がある。

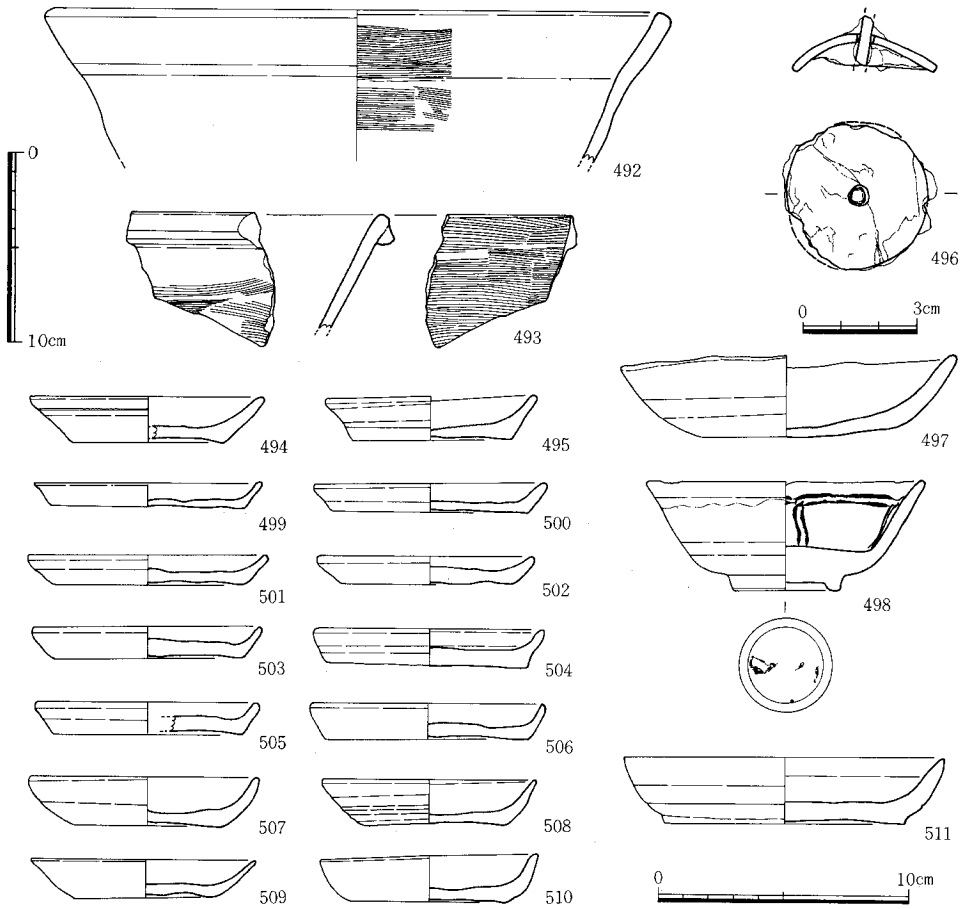
484～487は白磁である。484・485は椀IV類。485は見込みに沈線をもち、484はもたない。486は椀V類。外面に片切彫文、内面上位と見込みに沈線、また見込みと体部に櫛描の花文を施す。口径15.6cm、器高6.2cm。487は皿VI類。内面見込み近くに段を作り、また底部はわずかに上げ底となる。488は青磁壺。口縁は小さく直立し、また肩部は張り、胴部にかけて浅い数本の沈線がめぐる。釉色は濃い灰緑で、内面には施さない。胎は灰色で、黒色粒を多く含む。

489～491は石鍋片である。489だけは破損した底部を再加工している。いずれも器表に荒い削りが認められ、また489・491の外面には煤が付着する。

SK0137出土遺物（第77図492・493） 土鍋である。492の口縁が体部から内湾気味に外傾するのに対し、493は直線的に外に延び端部外側に三角凸帯がめぐる。492の外面以外は細かい刷毛



第76図　SK0021出土遺物実測図（489～491…1/4、他1/3）



第77図　SK0137・0139・0278・0299・0433・0603出土遺物実測図（496…1/2、492・493…1/4、他1/3）

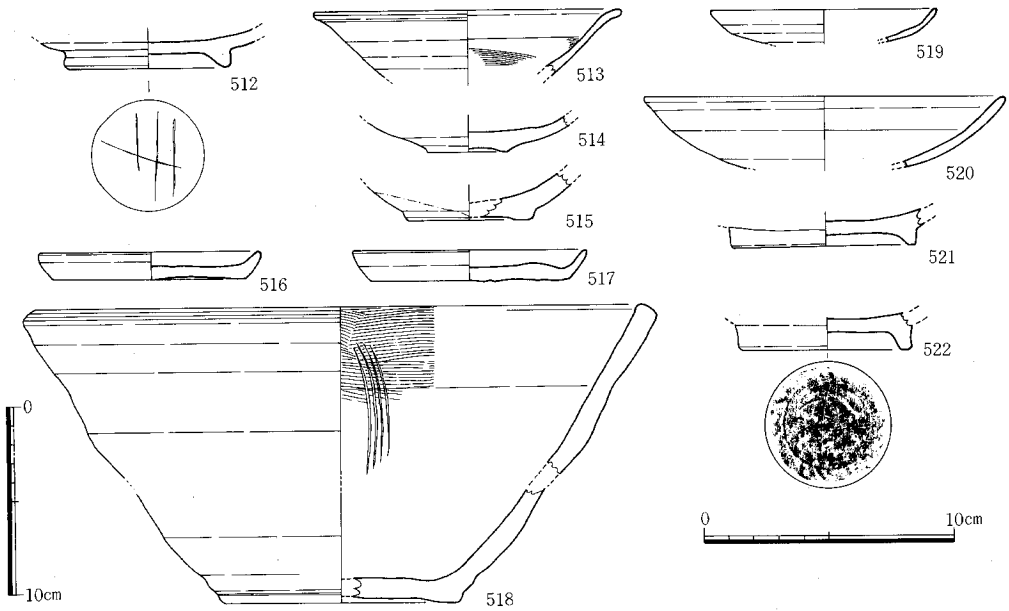
目調整を行う。ともに外面には煤が付着する。

SK0139出土遺物（第77図494・495、第６表）　ともに底部糸切りの土師器小皿である。口径8.4～9.3cm、器高1.8cmをはかる。

SK0278出土遺物（第77図・497）　497は土師器杯。底部は糸切りで板状圧痕がある。口径13.4cm、器高3.3cm。496は鉄製紡錘車。紡輪は径3.8cmの傘形を呈し、中央の孔には径0.5cmの断面円形の鉄製紡茎が残存する。

SK0299出土遺物（第77図498）　龍泉窯系青磁小椀Ⅰ－２類である。口縁部に輪花をもち、内面にはヘラで片彫りした文様が入る。釉は青みを帯びた緑色で、外底以外に施す。

SK0433出土遺物（第77図499～510、第６表）　すべて糸切り底の土師器小皿である。口径8.5～9.5cm、器高1.0～1.9cmで、その平均は口径8.98cm、器高1.40cmとなる。身の浅い499～506の平均をとれば口径9.08cm、器高1.25cm、身の深い507～510の平均は口径8.76cm、器高1.83cmとなる。



第78図　SD0022・0202・0478出土遺物実測図（518…1/4、他1/3）

499・500・503・510は炭化物が内底もしくは口縁に付着する。なお底部には板状圧痕が認められなかった。

SK0603出土遺物（第77図511）　底部糸切りの土師器杯である。口径12.7cm、器高2.7cmをはかる。

3）溝

SD0022　調査区南側を東西に走る溝である。東側でSK0021と接続し、西へ27m直線的に延びる。溝幅は最大で0.40mほど、深さは10～20cmである。

出土遺物（第78図512～515）　512は土師器椀。高台は低く、外底にはヘラ記号を施す。底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。513は白磁椀VI類。内面上位に1条の沈線を入れ、その下に櫛目による文様を施す。514は白磁皿VI類で、見込みには沈線を入れる。515は白磁椀IV類であろうか。低平な高台で、釉は青みを帯びた灰色となる。

SD0146　調査区西南を北北西に走る長さ4.4mの溝である。幅0.24～0.40m、深さ28cm。断面はV字状に近い。覆土は灰褐色粘質土。土師器などの細片が少量出土したにとどまる。

SD0202　調査区西北側に位置する東西8m、南北22mの鉤状に走る溝である。北側は幅2mほどになるが、溝底は凹凸が激しく、深さは5～10cm程度。北側の深さは20cm程度である。西端は不明瞭となる。覆土は灰褐色土。

出土遺物（第78図516～518） 516・517は土師器小皿。底部は糸切りで、口径8.8～9.3cm、器高1.1～1.3cmをはかる。518は土師質のコネ鉢。内面上位には横刷毛目の上に4本1単位の筋目が入る。底部には板状圧痕がみられる。

SD0252 調査区西北、SC0518の東南に位置する長さ1.6m、幅0.3m、深さ20cmの溝状遺構である。土師器細片などが少量出土した。

SD0254 調査区西北で検出した幅0.52m、深さ18cmの東西溝である。SC0528を切り、約2.5mで調査区外へ抜ける。土師器皿（糸切り）などの細片が出土した。

SD0260 調査区西南側で検出した幅0.46～0.60m、深さ5～7cmの南北溝である。SB0216、SD0202に切られる。SD0294と関連する溝か。ヘラ切り皿など土師器細片が出土した。

SD0294 調査区西側をほぼ南北に走る溝で、SD0260の南端延長上約5.5mから南に11m延びる。幅0.4m、深さは4cmと浅い。SD0318に切られる。土師器の細片が少量出土した。

SD0313 調査区西側、SD0146の北側に位置する長さ1.32m、幅0.4m、深さ20cmの溝状遺構である。覆土は灰白色砂。土師器細片が少量出土した。

SD0318 調査区西側を東西に走る溝。幅0.54m、深さ20cm。覆土は灰褐色砂。調査区内で確認したのは長さ3.4mだけである。溝幅は異なるが、SD0202とともに掘立柱建物群を囲む位置にあたる。土師器皿、龍泉窯系青磁の細片が出土した。

SD0478 調査区西南角を北北西に走る幅1.4m、深さ5cmの浅い溝である。確認したのは長さ8mであるが、さらに南に延びるものであろう。

出土遺物（第78図519～522） 519は土師器小皿。底部はヘラ切りで、復元口径9.0cm。520は土師器の丸底杯。復元口径14.4cm。底部はヘラ切りか。521・522は瓦器椀である。高台は低く、内底にはヘラ磨きが認められる。また522の外底には×字状のヘラ記号がある。

4）小結

今回検出した平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構は、出土遺物および切り合い関係から次の3時期に分けることができる。

1期（12世紀前半） 掘立柱建物2棟（SB0212・0213）とその西側と南側を区画する途切れた溝（西側は北からSD0260・0294・0146・0478、南側はSD0022）および溝に接続する土坑（SK0021）などからなる。建物の北から東には遺構がない。これは浅い溝をめぐらせた敷地内に主屋と納屋を建て、周囲に畑を作る独立した農家の景観を彷彿とさせる。

2期（12世紀中頃～後半） 1期の建物は南北棟となり1棟増える（SB0211・0214・0215）。これとは別に、西北部に溝（SD0202・0318）に囲まれた4棟の掘立柱建物（SB0216・0217・0218・0219）が整然と並ぶ。少ない出土遺物から推定すれば、西北部建物群が後出するようである。

3期(12世紀末～13世紀)　調査区内に明確な建物はない。主な遺構は土坑で、覆土に焼土・炭化物を含むSK0002・0003・0004・0433などもこの時期である。14世紀以降の遺構はない。

古墳時代前期以降調査地には遺構・遺物がなく、1期に建物が現われ2期に続く。2～3棟を単位とした独立した建物群である。この時期の大規模な集落は南側200m付近に検出されている(1次調査第4地点)。2期中途で西北側の建物群が出現するが、その並びなどからみて通有の農家の建物とは考えにくい。この時期清末遺跡では大型建物が出現しており、これとの関連も頭の隅に入れておきたい。12世紀末にはこれらの建物群はすべて廃絶している。調査区の西側には条里地割に沿った溝が検出されている(1次調査第12地点)。これが清末遺跡の同様の溝(SD0060)と同じ12世紀末に開さくされたとすれば、それに伴い調査区一帯が水田化された可能性もある。

遺構	番号	挿図	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底部切り離し		板状圧痕の有無
							ヘラ切り	糸切り	
SK0002	454	第75図	杯	12.6	8.8	2.9		○	×
	455	〃	〃	12.8	9.0	2.8		○	○
	456	〃	〃	14.8	10.2	2.7		○	○
SK0011	461	第75図	小皿	6.9	5.2	1.8		○	×
	462	〃	杯	16.5	12.2	2.9		○	×
SK0021	468	第76図	小皿	8.6	7.2	0.7	○		○
	469	〃	〃	8.5	7.6	1.3	○		○
	470	〃	〃	9.7	7.9	0.9	○		○
	471	〃	〃	8.8	6.8	1.0	○		×
	472	〃	〃	8.7	6.3	1.0	○		×
	473	〃	〃	8.7	7.3	1.0	○		×
	474	〃	〃	9.0	7	1.4	○		○
	475	〃	〃	9.2	8	1.4	○		×
	476	〃	〃	9.4	7.3	0.8	○		○
	477	〃	〃	8.4	6	1.2		○	○
	478	〃	丸底杯	15.2	—	3.3	○		○
	479	〃	〃	15.3	—	2.7	○		○
	480	〃	〃	15.9	—	3.8	○		○
SK0139	494	第77図	小皿	9.3	6	1.8		○	×
	495	〃	〃	8.4	6.3	1.8		○	×
SK0433	499	第77図	小皿	9.0	7.6	1.0		○	×
	500	〃	〃	9.2	7.7	1.2		○	×
	501	〃	〃	(9.5)	7.5	1.2		○	×
	502	〃	〃	8.6	6.8	1.1		○	×
	503	〃	〃	9.1	7.4	1.3		○	×
	504	〃	〃	(9.1)	8	1.5		○	×
	505	〃	〃	(8.8)	7.6	1.3		○	×
	506	〃	〃	(9.3)	8	1.4		○	×
	507	〃	〃	9.1	5.8	1.9		○	×
	508	〃	〃	8.5	5.6	1.8		○	×
	509	〃	〃	8.9	5.5	1.7		○	×
	510	〃	〃	8.6	6	1.9		○	×

第6表　土坑出土土師器小皿・杯法量一覧

IV　安通遺跡群調査報告

1　遺跡の概要

安通遺跡群は早良平野南部の沖積地上に位置し、扇の形状を呈する早良平野の要部を南東に臨む。南北約320m、東西340mの広がりをもつ。当遺跡群の北側には清末遺跡群が展開するが、両遺跡間を明確に区分するような河川や谷部は存在しない。また、東側及び南東側には荒平山の西麓から北西に舌状に延びる低丘陵上に位置する東入部遺跡群が展開している。西側には水源を脊振山系に発する室見川が北流する。当遺跡の標高は南側で31.9m、北側で29.8mを測り、北西に緩く傾斜する。

今回報告するのは本遺跡群の第1次調査にあたる。調査は構造物及び切土の田面を対象にし、調査面積は10573㎡である。調査の便宜上1～5区の調査区番号を付した。遺構番号に関しては調査時において1区は0001から、2区は0381から、3区は0391から、4区は0410から、5区は0601から番号を付しており、各区に遺構番号の重複はない(ただし欠番あり)。報告にあたっても原則的にその番号を用いている。また、遺構の内容を吟味した上で番号の頭に遺構略号を付した。以下1区から順に検出遺構・出土遺物の報告を行なう。

2　1区の調査

1）概要

1区は排水路建設及び田面の削りに伴い751.27㎡を調査した。調査区の標高は北側で31.5m、南側で31.5mを測る。

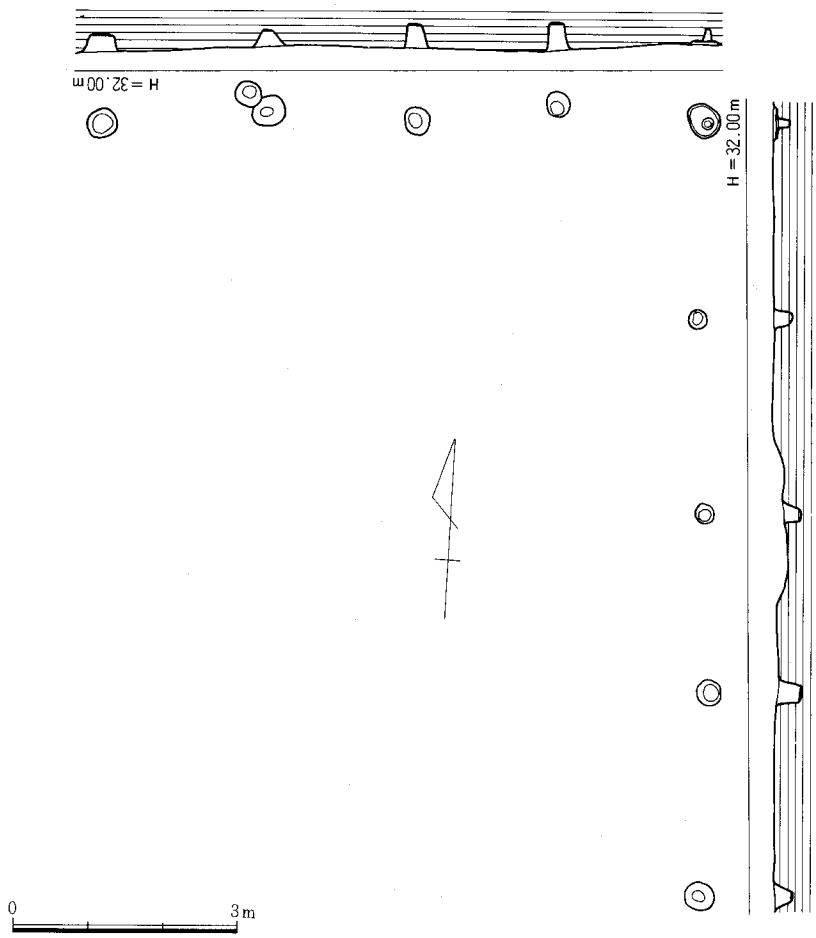
本調査の結果中世の柵1条・掘立柱建物6棟・井戸1基・土坑8基・溝2条・ピット・その他を検出した。遺構は調査区の南側と中央部に集中している。北側は溝を境に極端に薄くなることから、溝によって区画される集落であると思われる。遺構の多くは遺物が出土しておらず時代を確定できないが、遺物が出土しているものはすべて中世である。

2）遺構と遺物

(1)　柵

SA0371（第80図）　調査区南側西寄りに位置し、逆Lの字形に曲がる4間×4間の柵である。柱間隔は心々で東西2.0m、南北2.5mで実長は東西が8m、南北が10.5mになる。柱穴は径25～40cmとばらつきが大きい。深さは最大で40cmを測る。柱穴からは土師器甕や土師器小皿・白磁碗などの遺物が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはなかった。柵の西端・南端とも調査区の端にある為、調査区外に延びる可能性がある。柵の内側と思われる部分にも柱穴を多く検出しており、柵と同時期に建てられ、方位を同じくする建物が存在する可能性が高いと思われるが、実際に建物を確認することはできなかった。

第79図　安通遺跡群１区遺構配置図（1/200）



第80図　SA0371実測図（1/100）

（2）　掘立柱建物

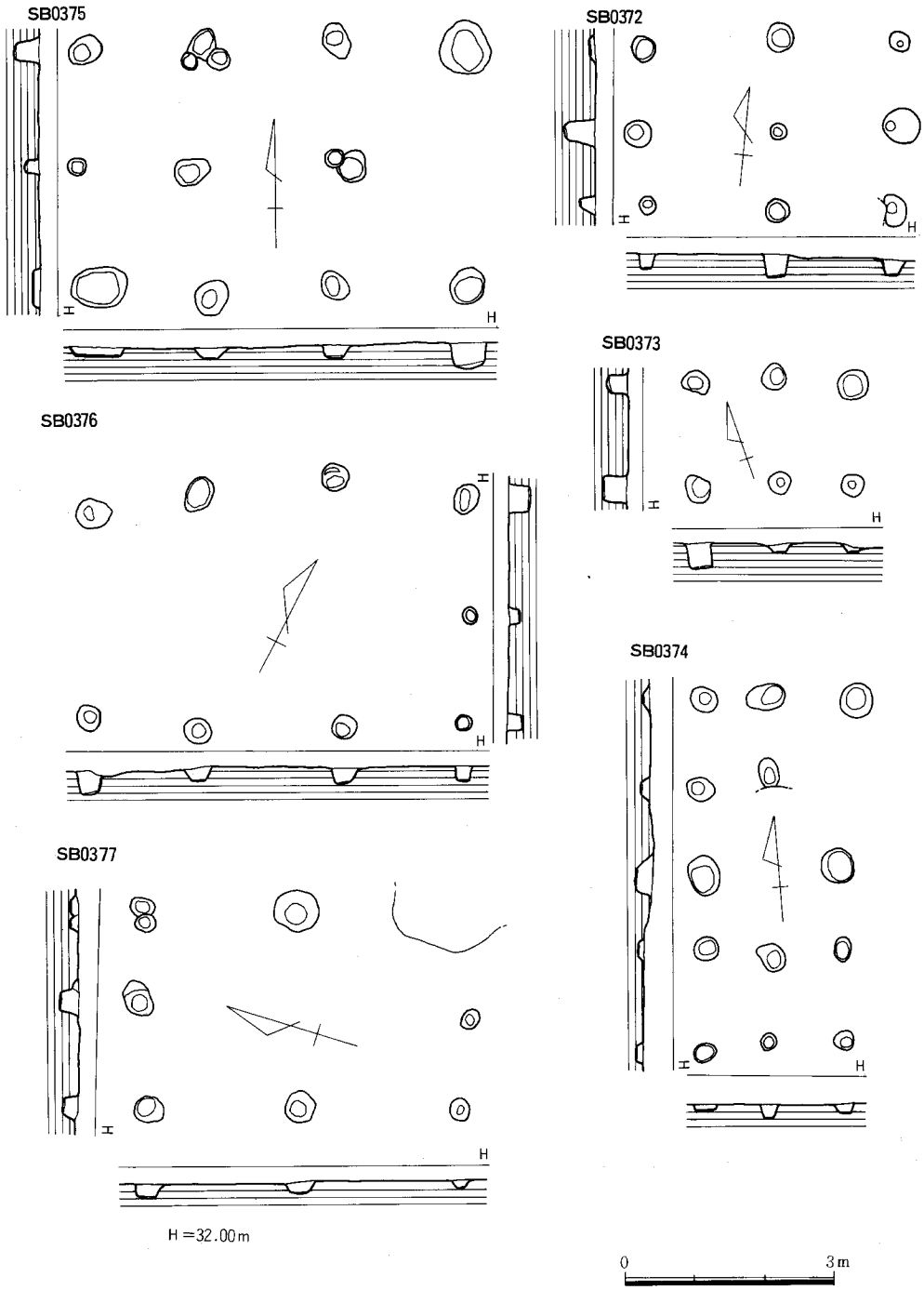
SB0372（第81図）　調査区の中央東寄りに位置する2間×3間の東西棟である。実長は梁行240cm、桁行350cm。柱穴は径20～55cm、深さ50cmを測る。

出土遺物（第82図001）　糸切りの土師器坏で口径12.3cm、底径9.8cm、器高3.1cmを測る。その他に青磁片が出土しているが細片のみで図示できなかった。

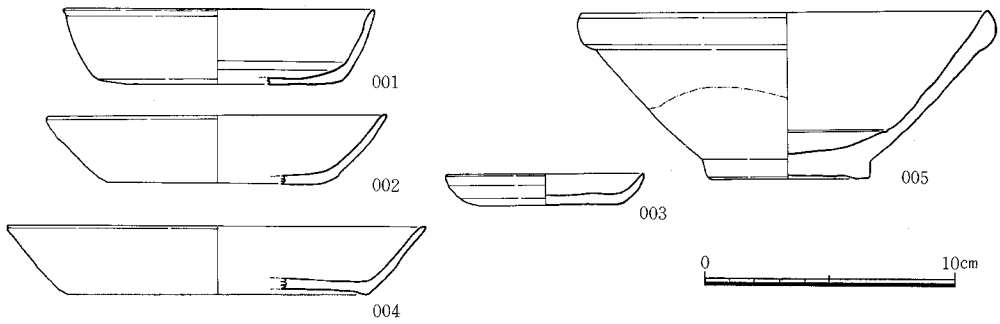
SB0373（第81図）　調査区の中央部東寄りに位置する1間×2間の東西棟である。実長は梁行150cm、桁行230cm。柱穴は径25～45cm、深さ35cmを測る。

出土遺物（第82図002）　糸切りの土師器坏で口径13.4cm、底径8.6cm、器高2.7cmを測る。

SB0374（第81図）　調査区の南側東寄りに位置する2間×4間の南北棟である。実長は梁行210



第81図　SB0372・0373・0374・0375・0376・0377実測図（1/100）



第82図　SB0372・0373・0375出土遺物実測図（1/3）

cm、桁行510cm。柱穴は径20～50cmで深さ30cmを測る。出土遺物は糸切りで板状圧痕を有す土師器皿や土師器甕・青磁などがあるが、いずれも細片で図示できなかった。

SB0375（第81図）　調査区の中央西寄りに位置する２間×３間の総柱建物で東西棟である。実長は梁行350cm、桁行570cm。柱穴は径25～65cmで深さは35cmを測る。

出土遺物（第82図003～005）　003は糸切りの土師器坏で口径7.8cm、底径5.7cm、器高1.2cm。004は板状圧痕を有す土師器坏で口径16.4cm、底径12.1cm、器高2.7cmを測る。005は玉縁の白磁碗で内面全面、外面体部上面に薄い不透明の釉を施す。釉は少し緑かかっていて、ムラがある。特に外面は口縁の下に流れた痕を呈す。胎土は灰色で粗い。

SB0376（第81図）　調査区の中央西寄りに位置する２間×３間の東西棟である。実長は梁行150cm、桁行270cm。柱穴は径20～45cm、深さ35cmを測る。出土遺物には糸切りの土師器皿があるが、いずれも細片で図示できるものはなかった。

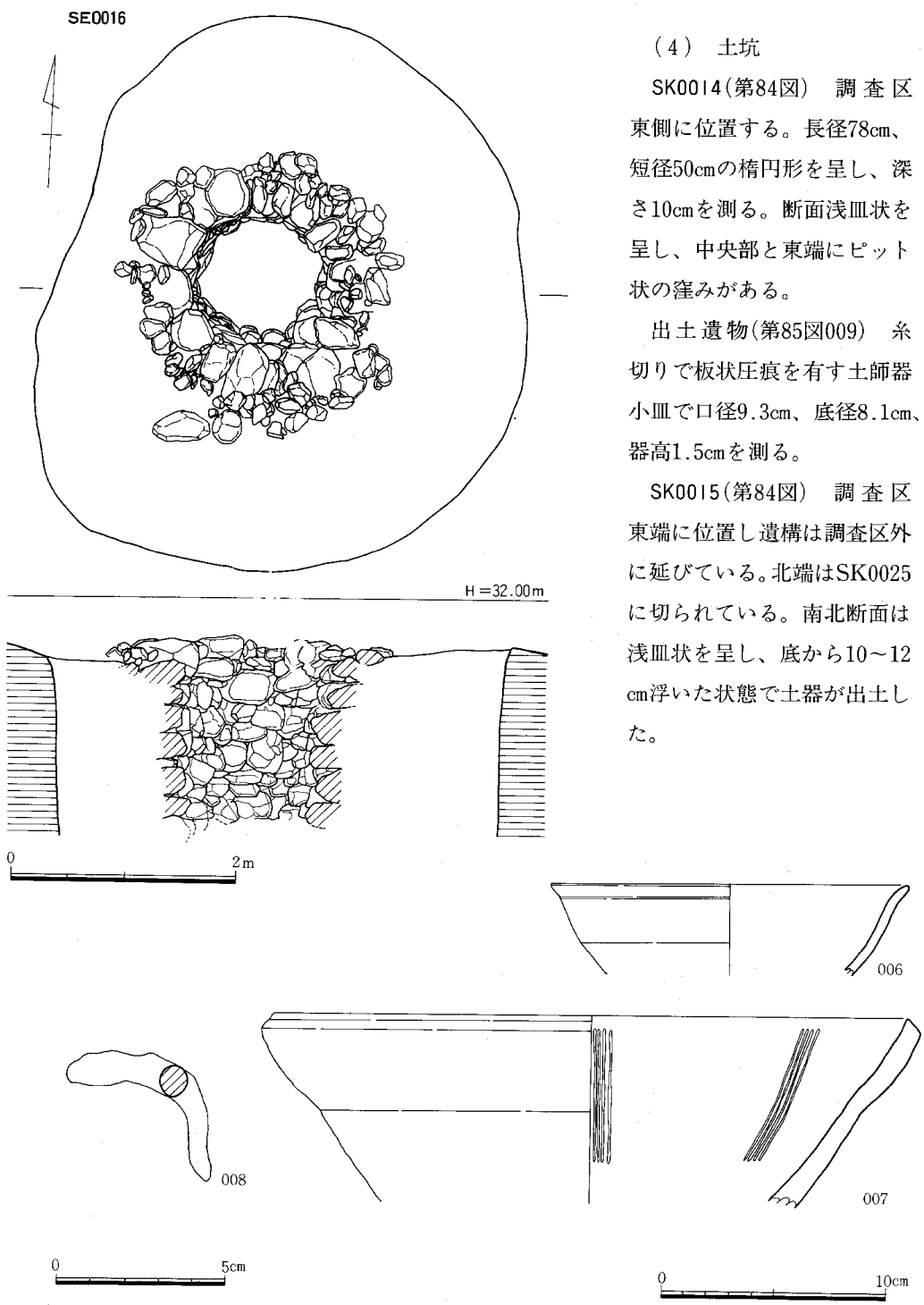
SB0377（第81図）　調査区の南西端に位置する２間×２間の南北棟である。実長は梁行300cm、桁行460cm。柱穴は径20～60cm。深さ25cmを測る。

出土遺物は鉄滓の他に糸切りの土師器皿や瓦器埦があるが細片で図示できなかった。この建物の南東角の柱穴を切る土坑から土師器皿と白磁片が出土したが、細片のため図示できない。

（３）　井戸

SE0016（第83図）　調査区中央東寄りに位置する。糸切りの土師器皿と青磁碗の細片が出土している土坑を切っている。井戸の石組みに対し掘方は非常に大きく、掘方上面径330cmの略円形を呈し、石組部は内径約90cm、深さ110cmを測る。石材は人頭大の自然礫をブロック状に積み上げており、上部及び中部が大ぶりで下部が相対的に小ぶりのものを使用している。断面は円筒状を呈する。最下部は砂礫層に僅かに切り込んでいる。

出土遺物（第83図006～008）　006は白磁碗である。007は瓦質のすり鉢で約１㎜の砂を多く含んでいる。008は鉄釘で長さ5.6cm、その他に糸切りの土師器埦が数点出土したがいずれも細片で図示できるものはなかった。



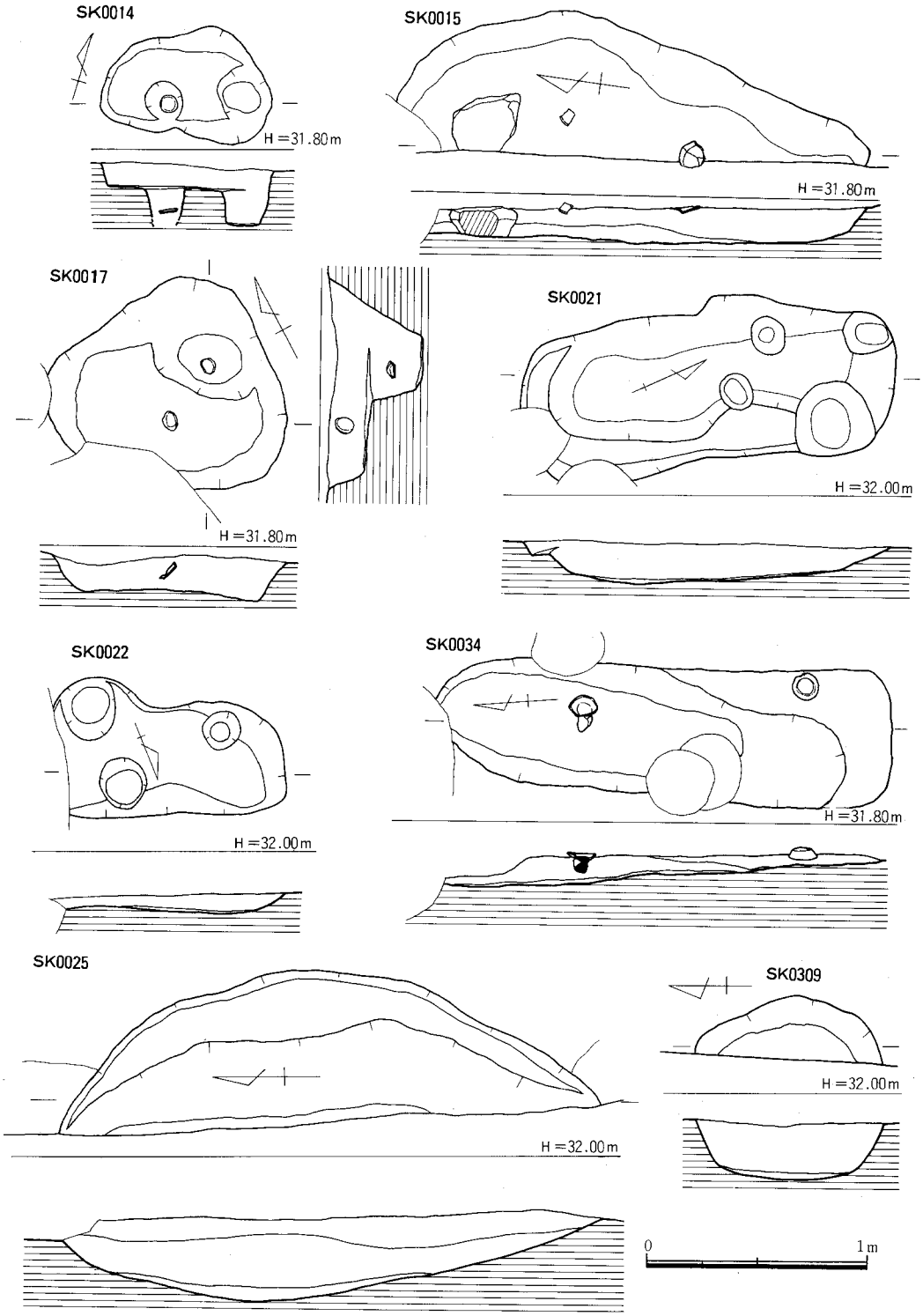
第83図　SE0016遺構、出土遺物実測図（1/60、1/3、1/2）

（4）　土坑

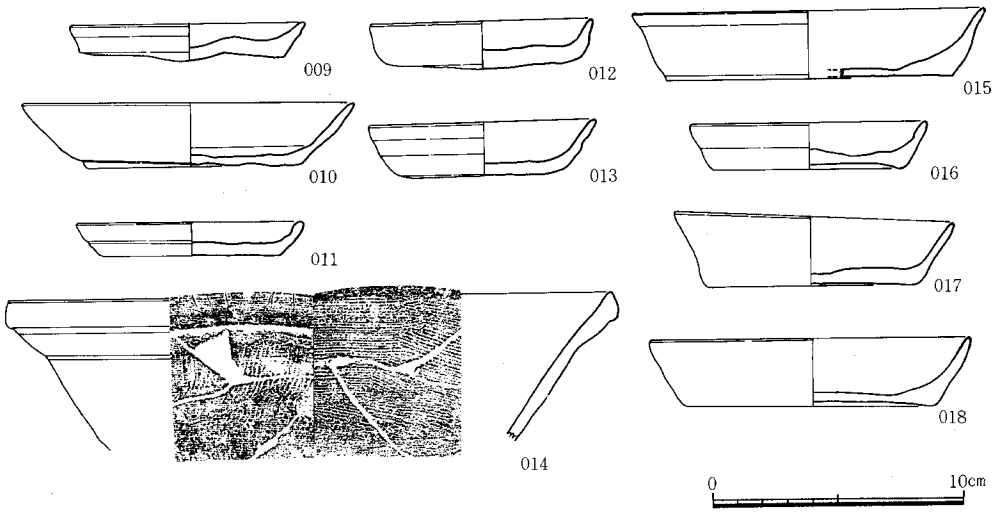
SK0014（第84図）　調査区東側に位置する。長径78cm、短径50cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。断面浅皿状を呈し、中央部と東端にピット状の窪みがある。

出土遺物（第85図009）　糸切りで板状圧痕を有す土師器小皿で口径9.3cm、底径8.1cm、器高1.5cmを測る。

SK0015（第84図）　調査区東端に位置し遺構は調査区外に延びている。北端はSK0025に切られている。南北断面は浅皿状を呈し、底から10～12cm浮いた状態で土器が出土した。



第84図　SK0014・0015・0017・0021・0022・0025・0034・0309実測図（1/30）



第85図　SK0014・0015・0017・0021・0022・0034出土遺物実測図（1/3）

出土遺物(第85図010・011)　010は糸切りの土師器坏で口径13.1cm、底径8.5cm、器高2.4cm。011は板状圧痕を有す土師器小皿で口径8.9cm、底径8.1cm、器高1.3cmを測る。その他に銅銭の破片が出土しているが、破片が小く磨耗が著しいため貨幣の種類は不明である。

SK0017(第84図)　調査区の南西端に位置する。長径110cm、短径95cmでほぼ円形を呈し、深さ46cmを測る。東西断面は浅皿状を呈す。また南側に一段平坦面をもち、北側は20cm程の二段の堀り込みを有する。

出土遺物(第85図012・013)　糸切りの土師器皿である。012は板状圧痕を有し、口径8.8cm、底径6.9cm、器高1.9cm。013は口径9.0cm、底径5.5cm、器高2.1cmを測る。

SK0021(第84図)　調査区の南側東寄りに位置する。長径172cm、短径61cmで長方形を呈し、深さ19cmを測る。南北断面は浅皿状を呈す。また南側に一段平坦面を持つ。出土遺物のうち糸切りの土師器皿・口禿げの白磁皿・連弁の青磁碗・滑石製石鍋は細片で図示できなかった。

出土遺物(第85図014)　瓦質のコネ鉢である。色調は白色で焼成はあまい。

SK0022（第84図）　SK0021に切られている。残存している部分で長径98cm、短径54cm、深さ10cmを測る。東西断面は西側が僅かに深い浅皿状を呈する。

出土遺物（第85図015・016）　015は板状圧痕を有す糸切りの土師器坏で口径14.0cm、底径11.5cm、器高2.7cm。016は土師器小皿で口径9.4cm、底径7.7cm、器高1.8cmを測る。この他に滑石製石鍋、龍泉窯系の青磁碗が出土している。

SK0025(第84図)　調査区の中央部西端に位置する。長径258cm、深さ36cmを測る。南北断面は浅皿状を呈す。出土遺物には白磁碗があるが、細片で図示できなかった。

SK0034(第84図)　SK0021に切られている。残存している部分で長径204cm、短径58cmで長方形を呈し深さ14cmを測る。南北断面は南側に段があり、北側に緩く下がる。

出土遺物(第85図017・018)　糸切りの土師器坏で、017は板状圧痕を有し口径11.1cm、底径8.0cm、器高3.1cm。018は口径12.8cm、底径9.9cm、器高2.6cmを測る。

SK0309(第84図)　調査区の南端に位置する。径68cm、深さ48cmを測る。東西断面は坏状を呈す。出土遺物は糸切りで板状圧痕を有す土師器坏・須恵質の鉢・白磁碗・青磁・鉄滓があるが、いずれも細片で図示できるものはなかった。

(5)　溝

SD0028(第79図)　調査区の北側西寄りに位置し、ほぼ南北に走る。幅60cm前後、深さ17cm程度。北側で段落ちにつながる。出土遺物に玉縁の白磁碗がある。

SD0031(第79図)　調査区の北側東寄りに位置し、ほぼ東西に走る。幅60cm程度、深さ25cm程度。この溝を境として、南側に遺構が集中し北側は遺構の密度が薄いことからこの溝が集落を区画するものと思われる。出土遺物には土師器坏や連弁の青磁碗があるが、いずれも細片で図示することができなかった。

SD0291(第79図)　調査区の南側中央に位置し、ほぼ南北に走る。幅50cm前後、深さ15cmを測る。出土遺物は糸切りの土師器皿の細片が多く出土した他、青磁・鉄滓・鉄釘などもあったがいずれも細片で図示することはできなかった。

SD0316(第79図)　調査区の南側東端に位置し、ほぼ南北に走る。幅は最大で95cm、深さ10cmを測る。出土遺物には糸切りで板状圧痕を有す土師器坏・土師器皿・瓦器椀・白磁小皿・鉄釘が出土したがいずれも細片で図示することはできなかった。

(6)　その他の遺構と遺物

SX0001(第86図)　調査区の中央西寄りに位置する。長さ56cm、幅47cmのほぼ円形を呈する。西側に段がある。出土遺物は糸切りの土師器皿の破片が多数出土した。

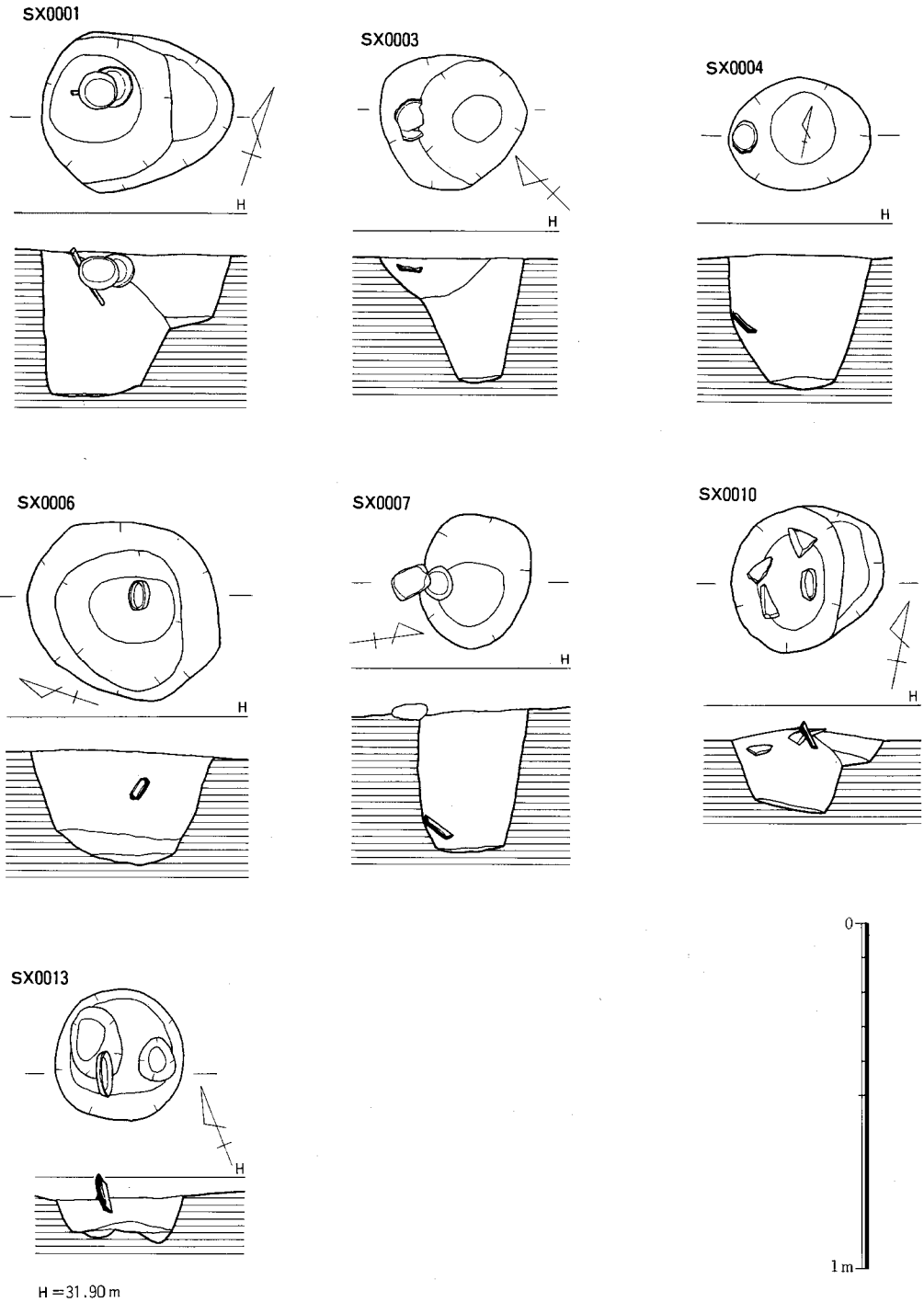
出土遺物(第87図019～021・028)　019～021は土師器坏である。019は口径11.3cm、底径7.7cm、器高3.1cm。020と021は板状圧痕を有し、020は口径12.0cm、底径8.4cm、器高2.75cm。021は口径12.2cm、底径8.6cm、器高2.5cmを測る。028は鉄製の刀子で全長25.9cm、刃は17.2cmを測る。

SX0003(第86図)　調査区の中央西寄りに位置する。長径42cm、短径39cmのほぼ円形を呈し、深さ36cmを測る。断面は逆台形で北西側が緩く広がる。

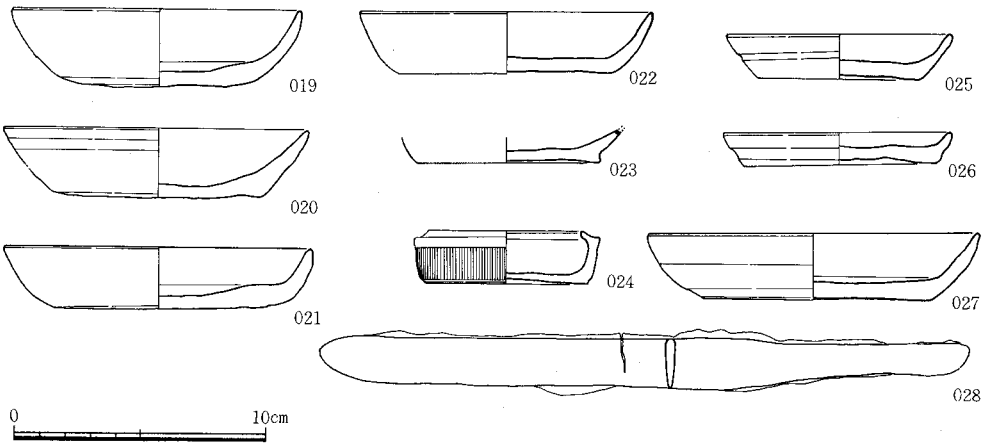
出土遺物(第87図022)　糸切りの土師器坏で口径11.6cm、底径8.6cm、器高2.4cmを測る。

SX0004(第86図)　調査区の中央西側に位置する。長径41cm、短径32cmの略円形で深さ38cmを測る。東西断面は逆台形を呈し、底から16cm浮いた状態で土師器坏が出土した。

出土遺物(第87図023)　糸切りの土師器坏で底径7.3cmを測る。



第86図　SX0001・0003・0004・0006・0007・0010・0013実測図（1/20）



第87図　SX0001・0003・0004・0006・0007・0010・0013出土遺物実測図（1/3）

SX0006（第86図）　調査区の西南部に位置する。長径58cm、短径53cmのほぼ円形を呈し、深さ33cmを測る。南北断面は逆台形を呈する。

出土遺物（第87図024）　合子は底から18cmほど浮いて出土した。口径5.8cm、底径6.1cm、深さ2.2cmを測る。釉は深緑で外面は側面の底から２㎜ほどを除いて薄く施釉してあるのみで口縁・底部には施されていない。内面は全体に施釉してあるが側面が厚く施釉してあるのに対し、底部は素地が見えるぐらい薄くなっている。素地は土師質で底部は糸切り後丁寧にナデを施している。

SX0007（第86図）　調査区の西南部に位置する。長径39cm、短径32cmのほぼ円形を呈し、深さ40cmを測る。底から３cm程浮いて完形の土師皿が出土した。遺物は盗難にあい、記載した025は別個体である。

出土土器（第87図025）　糸切りの土師器皿で口径9.1cm、底径6.5cm、器高1.8cmを測る。

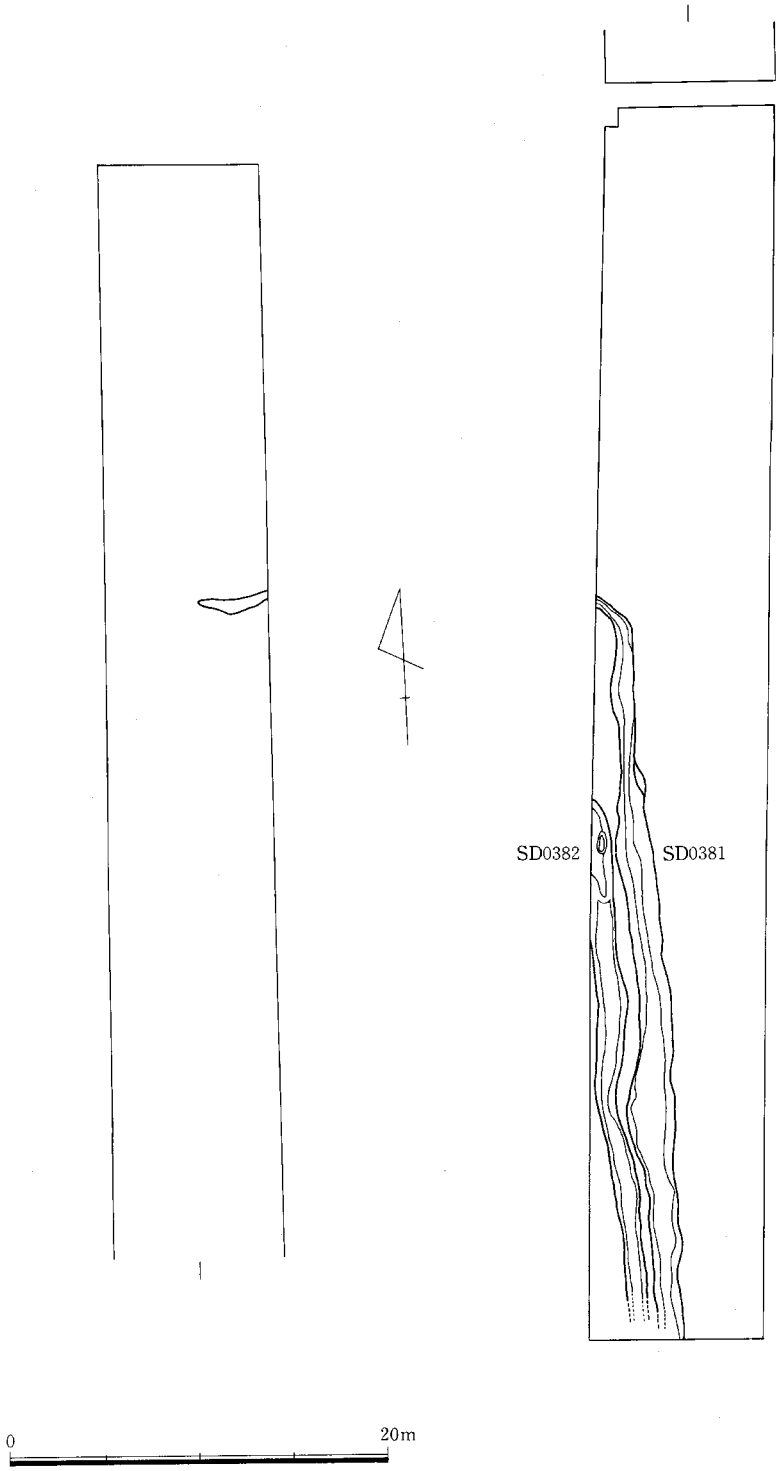
SX0010（第86図）　調査区の中央部に位置する。長さ45cm、幅42cmの円形を呈し、深さ23cmを測る。断面は逆台形で東側に段をもつ。底から18cmほど浮いて土師器小皿が出土した。

出土遺物（第87図026）　糸切りで板状圧痕を有する土師器坏で口径8.2cm、底径7.9cm、器高1.3cmを測る。

SX0013（第86図）　調査区の中央部に位置する。長径37.5cm、短径38cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。東西両方に落ち込みを持つ。底から５cmほど浮いて土師器坏が出土した。

出土遺物（第87図027）　糸切りの土師器坏で口径13.3cm、底径9.1cm、器高2.6cmを測る。

SX0009（第79図）　調査区の中央部西寄りに位置する。径35cmの円形を呈し、深さは20cmを呈す。銅銭を１枚出土したが半分欠けており、また磨耗が著しく貨幣の種類は不明。



第88図　安通遺跡群２区遺構配置図（1/400）

3　2区の調査

1）概要

2区は道路・用水路の建設に伴い1378.68㎡を調査した。本調査の結果、南北方向の溝を2条検出した。2条の溝は南から北へ平走しており西に向きを変えて調査区外へと伸びる。

2）遺構と遺物

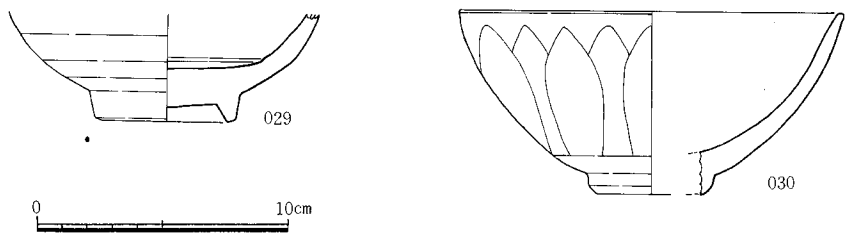
（1）　溝

SD0381（第88図）　調査区の南側を南北に走る溝である。幅は最大で250cm程度、深さは35cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で上から暗灰色粘質土が切り込んでいて、2層に分かれる。

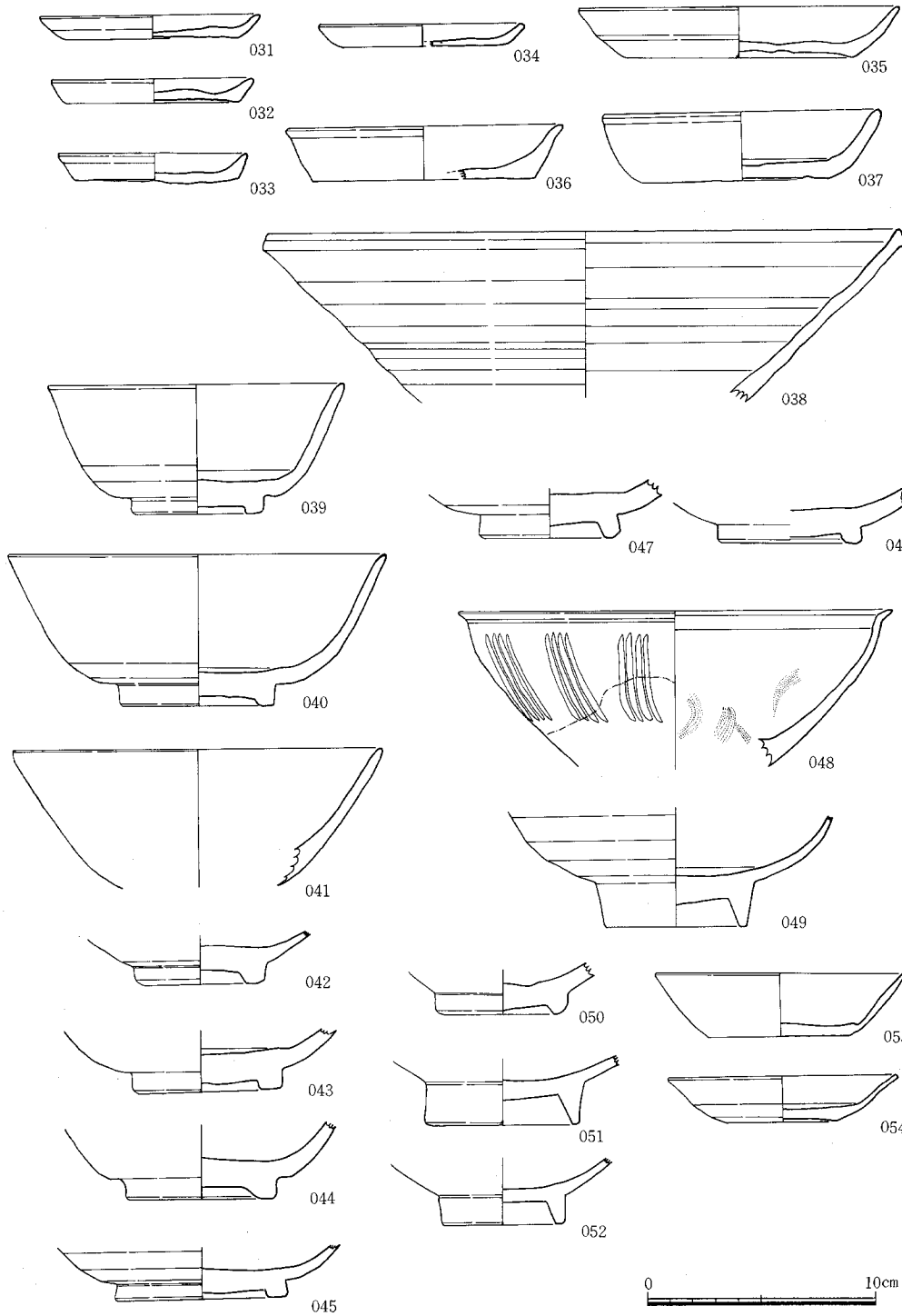
出土遺物（第89図）　029・030は青磁碗である。

SD0382（第88図）　SD0381の西側を並行して流れる溝で、幅は最大で135cm程度、深さは20cmを測る。覆土は暗灰色粘質土で3層に分けられる。

出土遺物（第90図）　031～034は糸切りの土師器小皿で031・032は板状圧痕を有す。031は口径9.6cm、底径7.5cm、器高1.1cm。032は口径8.8cm。底径7.5cm、器高1.0cm。033は口径8.1cm、底径7.0cm、器高1.2cm。034は口径8.9cm、底径7.1cm、器高1.0cm。035～037は土師器坏で035・037は板状圧痕を有す。034は口径8.9cm、底径7.1cm、器高1.0cm。035は口径14cm、底径9.9cm、器高2.2cm。036は口径11.9cm、底径9.7cm、器高2.3cm。037は口径12cm、底径8.1cm、器高3.1cmを測る。038は須恵質の鉢で口径は27.6cmを測り、調整は内外面とも指ナデである。039～047は青磁碗である。039は龍泉窯系青磁碗で、深緑色で不透明な厚い釉が施されている。040は薄い緑色で不透明な薄い釉を施している。041は龍泉窯系の青磁碗で体外面に蓮弁を削りだす。048は磁器である。釉は薄く不透明な釉を内面は全体に、外面は口縁から4～5cm下まで施している。胎土は灰色を呈す。049～052は白磁の碗である。049は体外面はヘラ削りの後、薄く透明な釉を高台の半分まで施している。胎土は白色を呈す。053・054は白磁の皿である。053は口禿で釉は薄く少し青みがかかる。胎土は白色で緻密である。054は小皿で薄い釉を内面は全体に、外面は口縁部に施している。小さめの底部より体部は丸みをもち、口縁部を外反させる。胎土は灰色を呈し1㎜程の白色砂を多く含む。



第89図　SD0381出土遺物実測図（1/3）



第90図　SD0382出土遺物実測図（1/3）

4　3区の調査

1）概要

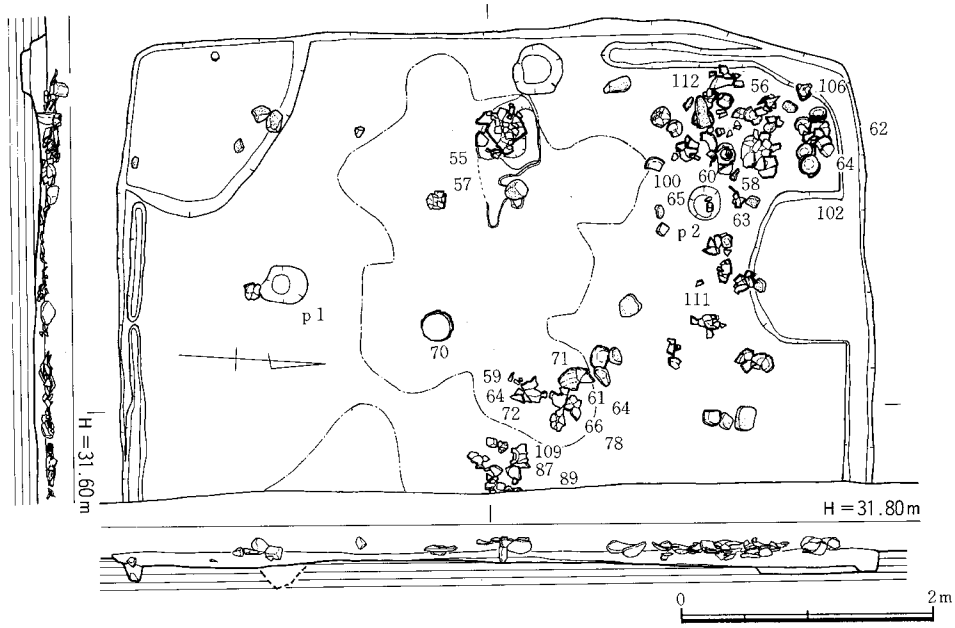
3区は2区の南にあたり、遺跡群の南東隅付近にある。道路、用水路建設に伴い894.75㎡を調査した。調査地点は耕作土、床土の下40cmで黄色土と砂礫が広がる。調査区の北隅、南半の多くで砂礫が露出しており、不安定である。遺構はこの面で認められる。標高は31.4m～31.9mを測る。検出遺構は、住居跡1軒、土坑、溝、ピットである。SC0400からは5世紀の土器を中心とした遺物が多く出土している。同時期の遺構は他にない。集落は広がらず、単発的なものと思われる。南半中央の溝状遺構は耕作土床土を埋土としており、水田にともなうものと思われる。ピットは灰褐色土を埋土とする。中世の遺物を少量含むが、まとまりはない。

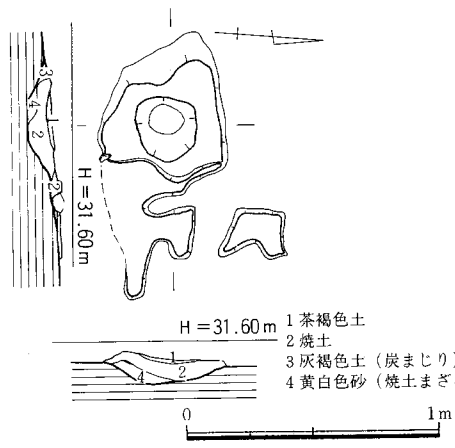
2）遺構と遺物

（1）竪穴住居

SC0400（第91図）　本調査区の中央に位置する。東側が調査区の外になる。竪穴式住居跡で、黄色のシルト質の土に掘り込み、淡茶色シルト質土を埋土とする。床は中央の一点波線部のみ鉄分の沈着によりやや固くなるが、他は黄白色の砂質土である。東西長360cm＋α、南北長600cmを測り、長方形プランをとるものと思われる。壁の遺存高は約15cmである。壁に沿って幅10～15cm、深さ10～15cmの壁溝が部分的に立ち上がりながら南壁、北壁から西壁の北半にかけて巡る。中央の西壁近くには、やや砂質の焼土が鉄分の沈着面に乗った状態で90×50cmの範囲に広がる。この焼土の広がりは東側に薄く、西側は50×50cmの浅い不整円形のくぼみにたまる。炉跡と思われる。その床面には黄白色の砂質土が薄く堆積するが粘土を貼った状態ではない。また壁は焼けていなかった。このくぼみの上には55、57が焼土に乗って正立もしくは横倒しの状態で出土した。柱穴と考えられる堀込みとしてｐ1とｐ2があげられる。深さはそれぞれ25cmと17cmで、その間隔は440cmを測る。間隔が空いており疑問も残るが、これらが主柱穴であるとすれば4本柱になるものと思われる。このほか、南西隅、北壁沿いに土坑状の堀込みがみられる。遺物は北半、特に北西隅から多く出土している。いずれも床面より0～10cmで出土しており一括性が高いものと思われる。

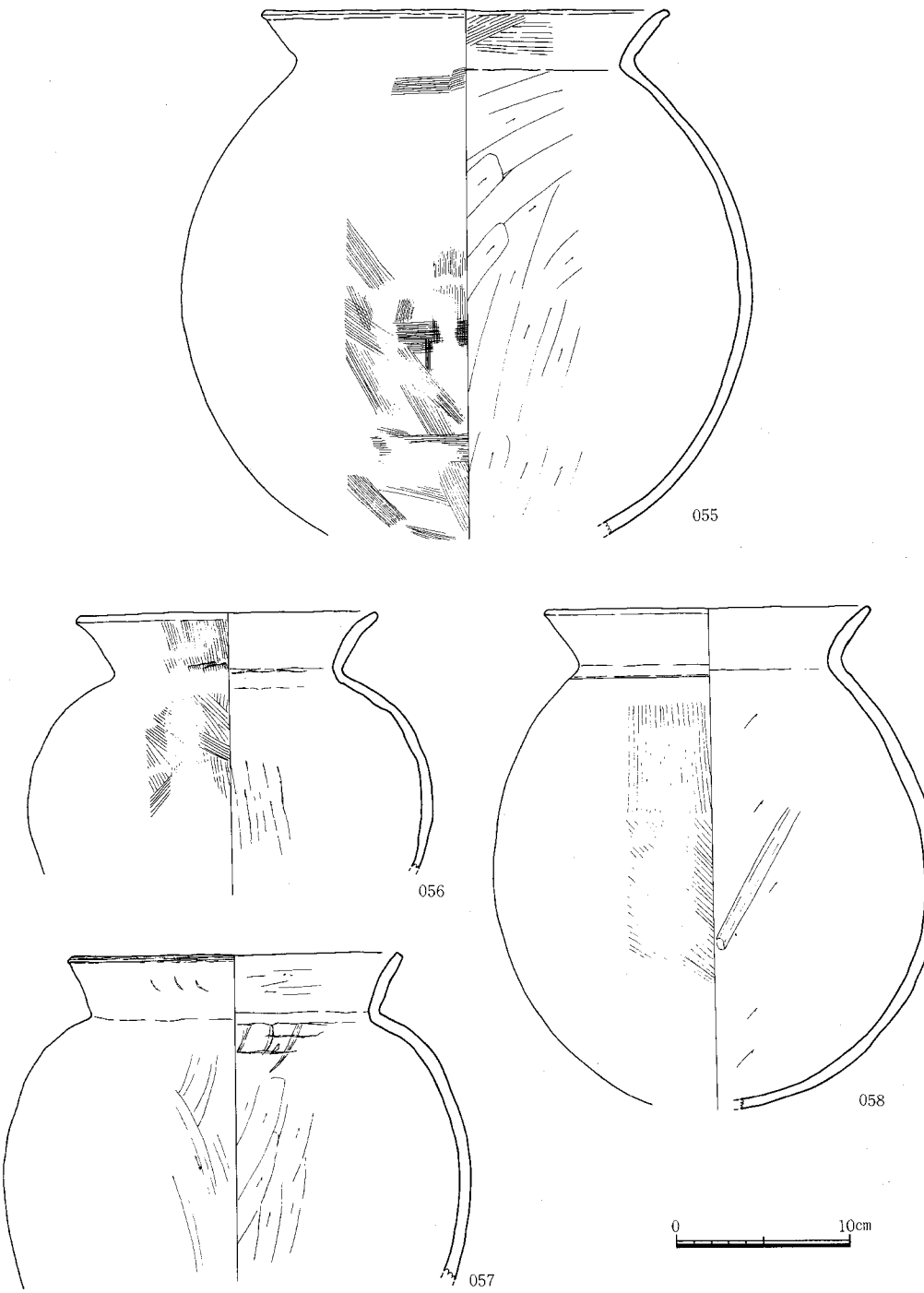
出土遺物（第92図～96図）　土師器がほとんどで、須恵器、鉄器、石製品が一点ずつ出土している。055～68は土師器の甕である。055は胴部外面は上半は擦過痕が残り、下半は刷毛目調整を施す。胴部内面は上半を斜方向、下半は縦方向の削り調整である。口縁部は横ナデを施す。内面で胴部と緩い稜をなす。約1/3が残存する。外面は灰色がかった橙色を呈し、下半にはわずかに煤が付着する。内面は淡灰色を呈す。056は胴部外面上位に斜方向の粗い刷毛目調整を施す。内面は縦方向の粗い削り調整である。口縁部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は緩く屈曲する。口縁部の一部を欠いて上半部が現存する。砂粒を多く含む。淡黄橙色を呈す。外面には肩部に黒斑がみられ、煤がわずかに付着し下部は橙色がかり2次焼成を受けたものと考えられ



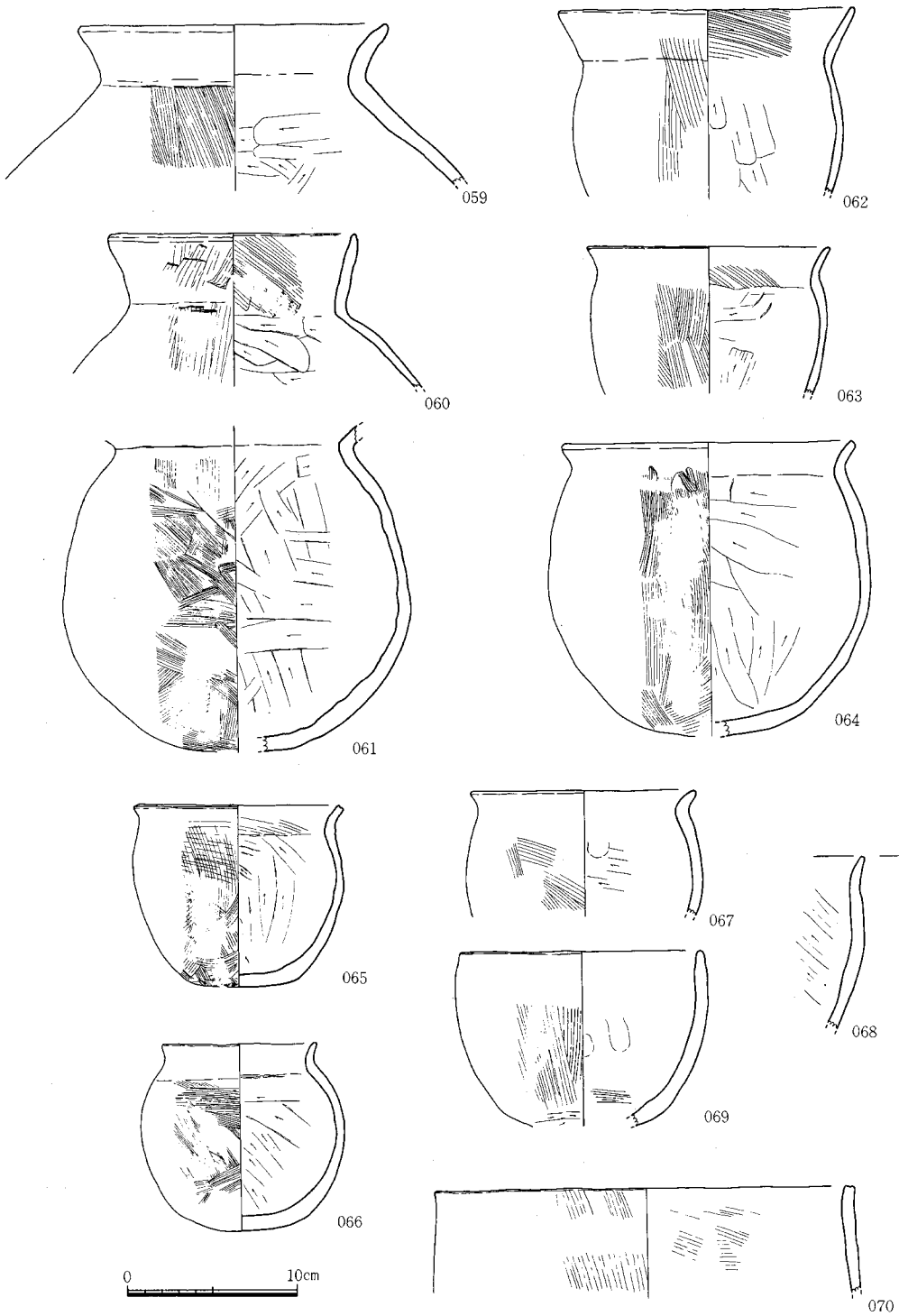


第91図　SC0400、炉跡実測図（1/60、1/30）

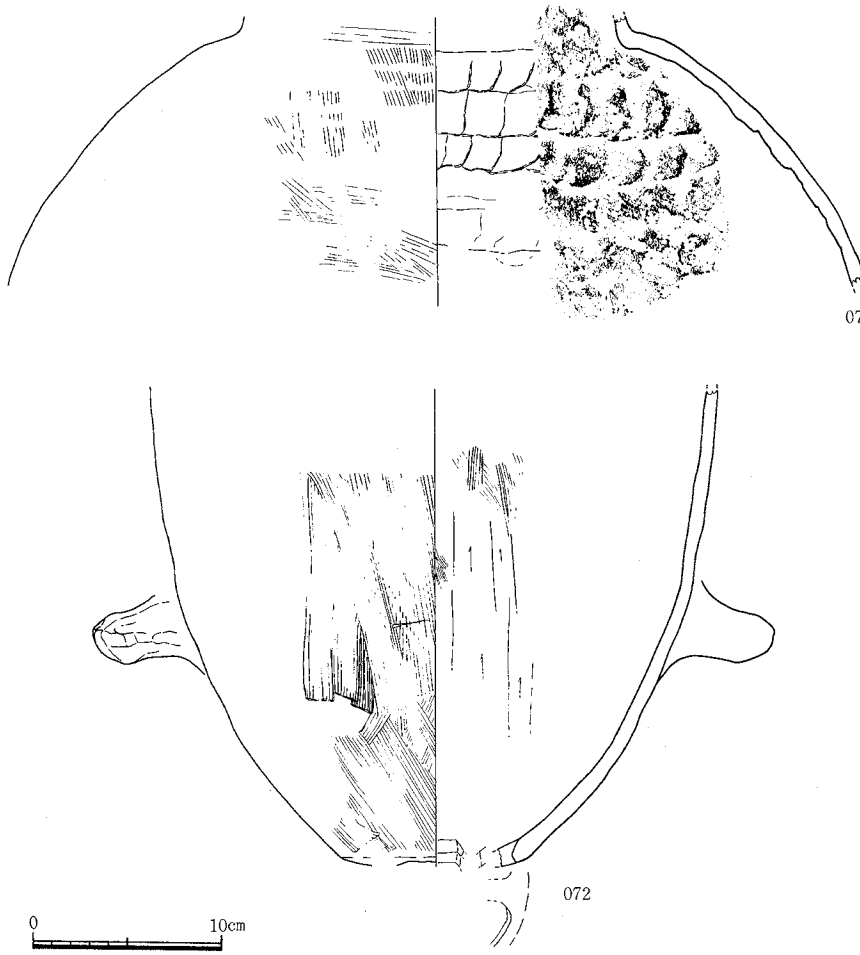
る。057は外面は胴部を縦方向に擦過状の刷毛目調整を施す。器面は成形時の凹凸があるものの平滑である。胴部は右上り気味に縦方向に強く削り上げる。口縁部は左方向の削り調整ののち横ナデを施す。約1/2弱が残存する。砂粒を多く含む。灰色かかった淡橙色を呈し外面には黒斑がみられる。器面の残りがよく固い。058は胴部外面は上半を斜方向、下位を横方向に刷毛目調整を施す。胴部内面は斜方向の削り調整である。口縁部は横ナデを施す。内面で胴部と稜をなし、砂粒を多く含む。橙色を呈す。下半にはわずかに煤が付着し、灰色がかる。059の外面は頸部から胴部に縦方向の刷毛目調整を施す。胴部内面には横方向の削り調整を施す。頸部付近は粗れており調整は不明である。口縁部は内外面とも胴部調整のあと横ナデをなす。口縁部の約1/2弱と胴部がわずかに残存する。砂粒を多く含む。淡橙色を呈す。060の胴部外面には縦方向の刷毛目調整が頸部から下方に施される。胴部内面は強い削り調整で口縁部と稜をなす。調整痕が丸みを帯びており、鋭く湾曲した工具によるものと思われる。口縁部外面は縦方向に、内面は左上がりに刷毛目調整を施し、内外面ともその後に横ナデを施す。刷毛目調整は、いずれも丁寧で装飾的である。胴部上部が残存する。内外面ともに淡灰橙色を呈す。061は外面に粗



第92図　SC0400出土遺物実測図１（1/4）



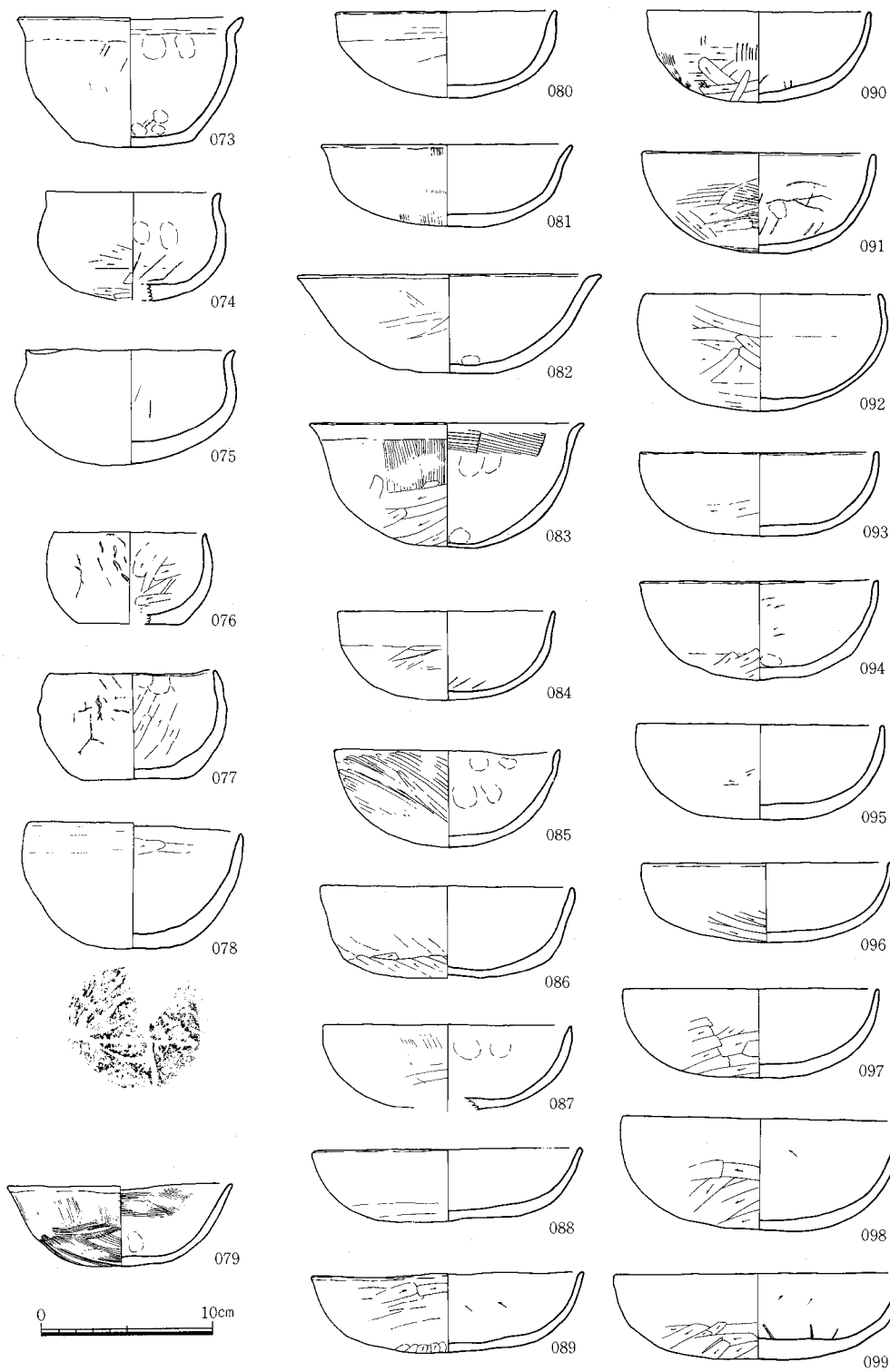
第93図　SC0400出土遺物実測図２（1/4）



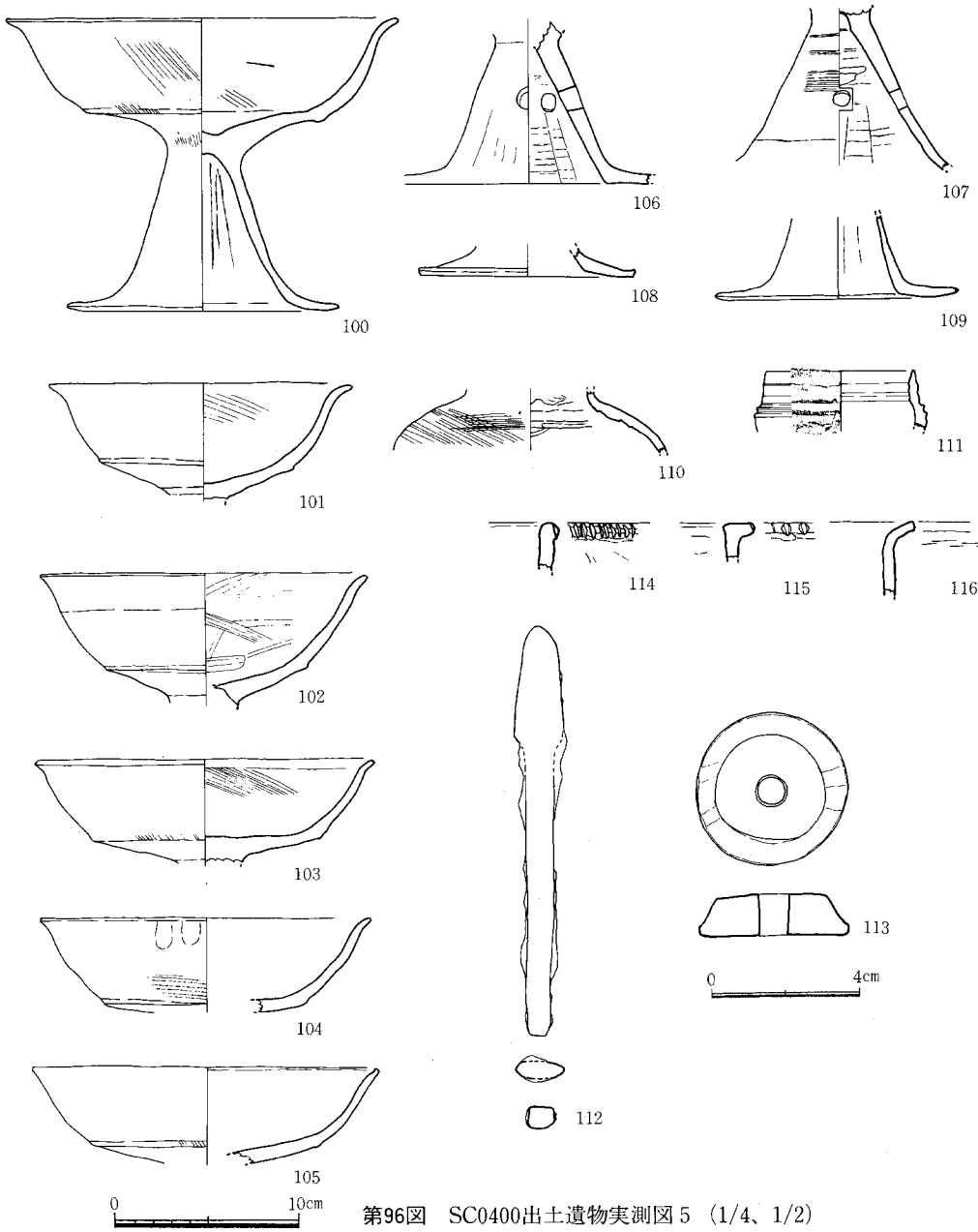
第94図　SC0400出土遺物実測図3 (1/4)

い刷毛目調整を施す。胴部内面は右上りの粗い削り調整で、中位は横方向に施す。内面はナデ調整である。1/3より復元した。内外面とも橙色がかった灰褐色を呈す。外面中位にはわずかに煤が付着する。062の外面は口縁部下半から胴部まで刷毛目調整を施す。胴部内面は縦方向の削り調整である。頸部直下に粘土帯接合痕がみられる。口縁部外面はナデ、内面は刷毛目調整を施す。淡橙色を呈す。063の外面には縦方向の刷毛目調整を施し、口縁部を横ナデ、内面は口縁部に斜方向の刷毛目調整を施し、後に胴部を縦方向に削る。1/3強より復元した。淡黄色を呈し、外面胴部と口縁部内面には煤が付着する。064の胴部外面には刷毛目調整を施す。胴部内面の上位は削り調整で、下半は縦方向の刷毛目調整である。口縁部は内外面とも横ナデを施す。約半分が残存する。砂粒を多く含む。淡灰褐色を呈す。外面にはわずかに煤が付着する。065の

底部は平底状を呈す。胴部外面は刷毛目調整を横方向、縦方向のあと斜方向に施す。内面は口縁部に左上りの斜方向の刷毛目調整を施したあと胴部上半を斜方向、下半を縦方向の削り調整を施し、口縁部との境に稜をなす。口唇部は面取りする。淡橙色を呈し外面は胴部下位、内面は上位が暗灰褐色を呈す。外面には煤が付着する。066の胴部外面は上位から中位を横方向、下位を斜方向の刷毛目調整を施す。胴部内面は中位より下を右上りの斜方向、上位を横方向の削り調整を施す。口縁部外面は横ナデを施す。橙色を呈す。外面胴部と内面上部には煤が付着する。067の胴部外面は斜方向の刷毛目調整を施す。胴部内面は右上りの斜方向の削り調整である。口縁部は横ナデを施す。1/3強が残存する。砂粒を多く含む。内外面ともに淡黄色を呈す。外面にはわずかに煤が付着する。068の胴部外面は調整不明。胴部内面は右上りの斜方向の削り調整である。口縁部はナデか。外面は灰色を内面は灰茶褐色を呈す。069は直行する鉢である。胴部外面は縦方向の刷毛目調整を、底部には削り調整を施す。胴部内面は右上りの削り調整をナデ消している。1/3弱が残る。黄白色を呈す。外面には煤が付着する。070は甑の口縁部と思われる。外面は縦方向の刷毛目調整のあと口縁部に横ナデを施す。内面は斜方向の刷毛目調整のあと縦方向の削り調整を施し、口縁部は横ナデで、口唇部は面取りをし、わずかに外反する。内外面ともに橙色を呈す。外面には黒斑がみられる。071は甕で、頸部が絞まり、口縁部が開くものと思われる。外面は縦方向の刷毛目調整のあと部分的に横ナデを施す。内面には約3㎝ごとに粘土帯接合痕がはっきり残る。外面は黄白色、内面は灰白色を呈す。1/7弱より復元したため傾き、径ともに疑問が残る。072は甑で口縁を欠く。外面は縦方向の刷毛目調整を施し、内面は上部のみ刷毛目調整を施す。底部はごくわずかに残り放射状の多孔を呈すと思われる。淡橙色を呈す。073から099は鉢形の土器である。073から075はわずかに外反する口縁をもつ。073は内外ともにナデ調整を施し一次調整は不明である。灰色がかった淡白色を呈す。底部にわずかに稜を成し平底状である。074は外面下半に横方向の削り、上半に横ナデを施す。内面底に木口痕が残る。明橙色を呈す。1/4から復元した。075は内外面ともにナデ調整痕が残る。外面は橙色、内面は黄白色を呈す。076から078は口径の割に深く、口縁部がわずかに内傾する。076は手ずくね状で、外面に粘土の隙間によるひびが入る。内面には指圧痕がみられる。底部は緩い稜を成し平底状である。淡橙色を呈す。底1/3から復元した。077も手ずくね状で外面にひびが入り、底部は平底状で刷毛目調整がみられる。内面は削り状の調整痕と指圧痕が見られる。底部が3/4残る。078は口縁部を横ナデし、内面は擦過状の調整痕がみられる。外面は1次焼成を受け黄色がかり粗れる。底部には木葉痕が残る。砂粒を多く含み灰色がかった黄白色を呈す。口縁部特に内面1.5㎝は輪状に暗褐色を呈す。ほぼ完形品である。079から089は浅く開き気味の器形を呈す。079は外面上部を縦方向ののち下部を横方向の刷毛目調整を施す。口縁部は横ナデである。内面は口縁部が横方向の刷毛目調整である。外内面ともに橙色を呈す。080は口縁部で緩やかな稜を成す。器面は粗れており調整不明。橙白色を呈し所々橙を呈す。081は外面口縁部を



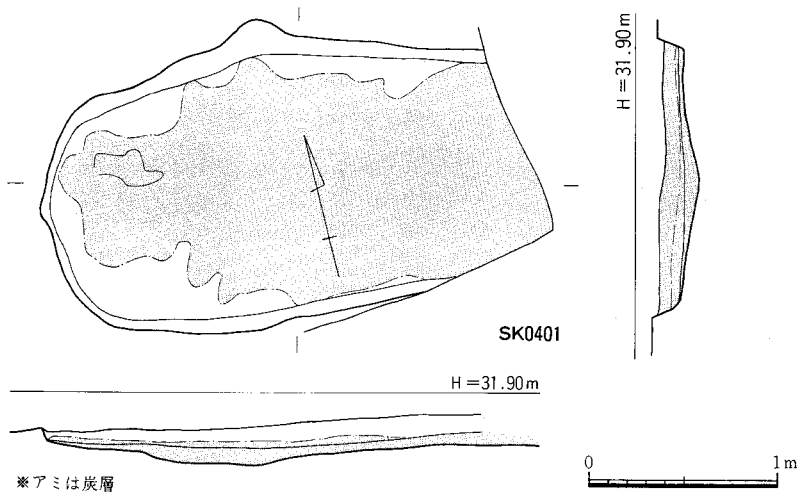
第95図　SC0400出土遺物実測図４（1/4）



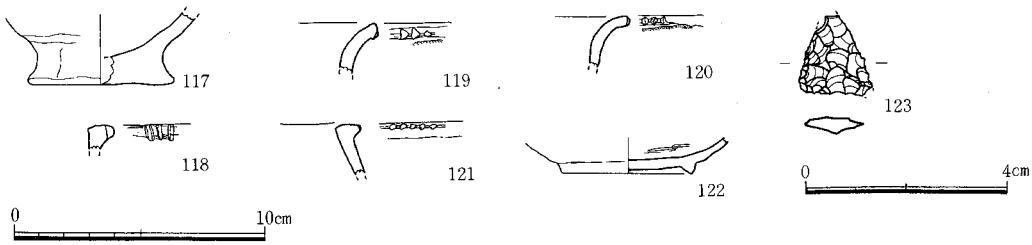
第96図　SC0400出土遺物実測図５（1/4、1/2）

縦方向毛目調整ののち横ナデ。体部から底部は削りを施す。内面はナデ調整である。橙色を呈す。1/4から復した。082は口縁部をわずかに開く。内外面ともにナデ調整で１次調整は不明である。黄色を帯びた橙色を呈す。砂粒を微量含む。083は口縁部がやや外反し深めである。外面上部を縦方向の後横ナデ、下部から底部を横方向の削り調整を施す。内面は口縁部を横方向の

刷毛目、体部はナデ調整を施す。外面は淡橙色を、内面は黄淡橙色を呈す。砂粒を少量含む。084は口縁部外面を横ナデ、体部を横方向の削り調整を施しその境は不明瞭な稜を成す。内面はナデ調整である。橙色を呈す。085は外面を斜方向の削り調整を施す。内面はナデ調整である。全体に粗れている。淡黄橙色を呈す。086は内外面口縁部を横ナデ、体部下部に横方向の削りを施す。その境には不明瞭な稜がある。内面体部はナデ調整であるが、削り調整の痕跡も見られる。淡橙色を呈す。1/2から復元した。087は外面口縁部を縦方向の刷毛目調整を施し、体部削り調整を施す。内面はナデ調整である。外面は橙色を呈し、内面は淡橙色を呈す。砂粒をほとんど含まない。1/2から復元した。088は口縁部に横ナデ調整を施し、内面は体部におよぶ。全体に器面が粗れている。淡橙色を呈し、砂粒をほとんど含まない。口縁部を1/4欠く。089は外面上部が横方向のヘラナデ状の削りを施す。底部は削り調整である。内面は口縁部を斜方向のナデ、体部はナデ調整である。橙色を呈し、内面の底は淡灰色を呈す。砂粒をほとんど含まない。口縁部を1/4欠く。090は外面上部を縦方向の刷毛目調整を施し口縁部は内外面とも横ナデを施す。下部は削り調整を施す。内面には木口痕が残るがナデ調整である。外面は赤茶た橙色を呈し、内面は橙色を呈す。091は口縁部を横ナデ、外面を横方向の削り調整を施す。内面はナデ調整で、底に木口痕がある。橙色を呈す。092は外面を横方向の擦過状の削り調整で平滑、内面はナデ調整である。外面は橙色を呈し、内面は口縁部の1部が橙色を呈す。器壁が薄く砂粒を多く含む。093は口縁部が横ナデ調整、外面を横方向の削りを施す。内面はナデ調整である。橙色を呈す。094は口縁部が横ナデ調整である。他は粗れており不明。淡黄橙色を呈す。095は調整不明、橙色を呈す。096は口縁部を横方向のナデ、外面は横方向の削り内面はナデ調整である。淡橙色を呈す。砂粒をほとんど含まない。097は口縁部を横方向のナデ、外面を横方向の削



第97図　SK0401実測図（1/40）



第98図　その他の遺物実測図（1/3、2/3）

り、内面はナデ調整を施し底に木口痕が残る。淡橙色を呈す。098は外面に横方向の削りを施す。内面は斜方向のナデ調整である。外面底部は赤褐色で2次焼成によると思われる。他は淡橙色を呈す。099は口縁部を横ナデ、外面に横方向の削りを施す。内面はナデ調整で木口痕が残る。淡橙色を呈す。100から109は高坏である。100は全体を横ナデ調整で仕上げる。杯部屈曲部に斜方向の刷毛目調整が残る。脚部内面には横方向の削り調整を施す。淡橙色を呈す。101は全体に横ナデ調整を施し、内面に斜方向の刷毛目がわずかに残る。外面は茶褐色から淡橙色を呈し、内面は淡橙色を呈す。102は外面を横ナデ、内面はナデ調整である。淡黄白色を呈す。砂粒をほとんど含まない。103には外面屈曲部に斜方向、下部に縦方向の、内面に斜方向の刷毛目調整痕が残る。橙色を呈す。104は横ナデ調整である。外面は橙色を呈し、内面は灰白色を呈す。1/4弱より復元した。105は粗れにより調整不明。淡黄白色を呈す。1/2弱から復元した。106は内面に横方向の削り調整、焼成後の穿孔を3ケ所に施す。橙色を呈す。107は外面を横ナデ、内面に削り調整を施す。穿孔は1ケ所である。淡橙色を呈す。108は横ナデ調整で、1/3弱から復元した。淡黄白色を呈す。109は調整不明である。淡橙色を呈す。1/2弱から復元した。110は壺で外面に刷毛目調整が残る。内面は削り調整で粘土帯接合痕が残る。111は須恵器で把手付き椀と思われる。体部に波状文を施す。112は鉄製品であるが錆のため詳細は不明。113は滑石製の紡錘車である。114は刻目突帯文、115は亀ノ甲タイプ、116は板付II式の甕である。

（2）　土坑

SK0401（第97図）　東側が調査区外に出る。隅丸長方形の浅い土坑で、粉状の炭がつまる。遺物は出土していない。

（3）　その他の遺物（第98図）

117は深鉢の底部で縄文時代晩期のものと思われる。118は刻目突帯文土器で口唇部を面取りする。119、120は弥生時代前期の甕、121は亀ノ甲タイプの甕である。122は瓦器椀の底部である。123は黒曜石製の石鏃で0.63gを測る。

5　4区の調査

1）概要

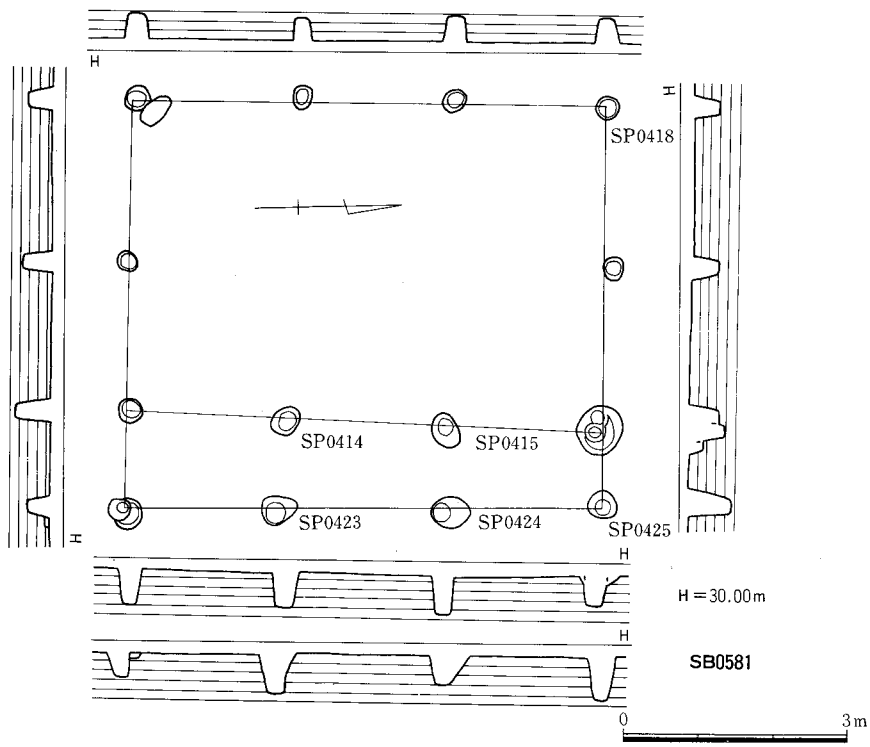
4区は遺跡群の中央北側に位置し、清末遺跡に近い。道路・用水路および田面の削りに伴ない2459㎡を調査した。調査地点は耕作土、床土の直下が黄色土または砂礫となり、おもに黄色土部分に遺構が広がる。また、丁度調査区に並行して旧河川が走る。北側にピットが集中する箇所があり、掘立柱建物が5棟立ち、その北側には浅い溝が旧河川から走る。土坑3基を検出した。南側部分には製鉄に関連する遺構3基を検出した。5区の同種の遺構と関連するものと思われる。この2カ所以外では遺構はまれである。

2）遺構と遺物

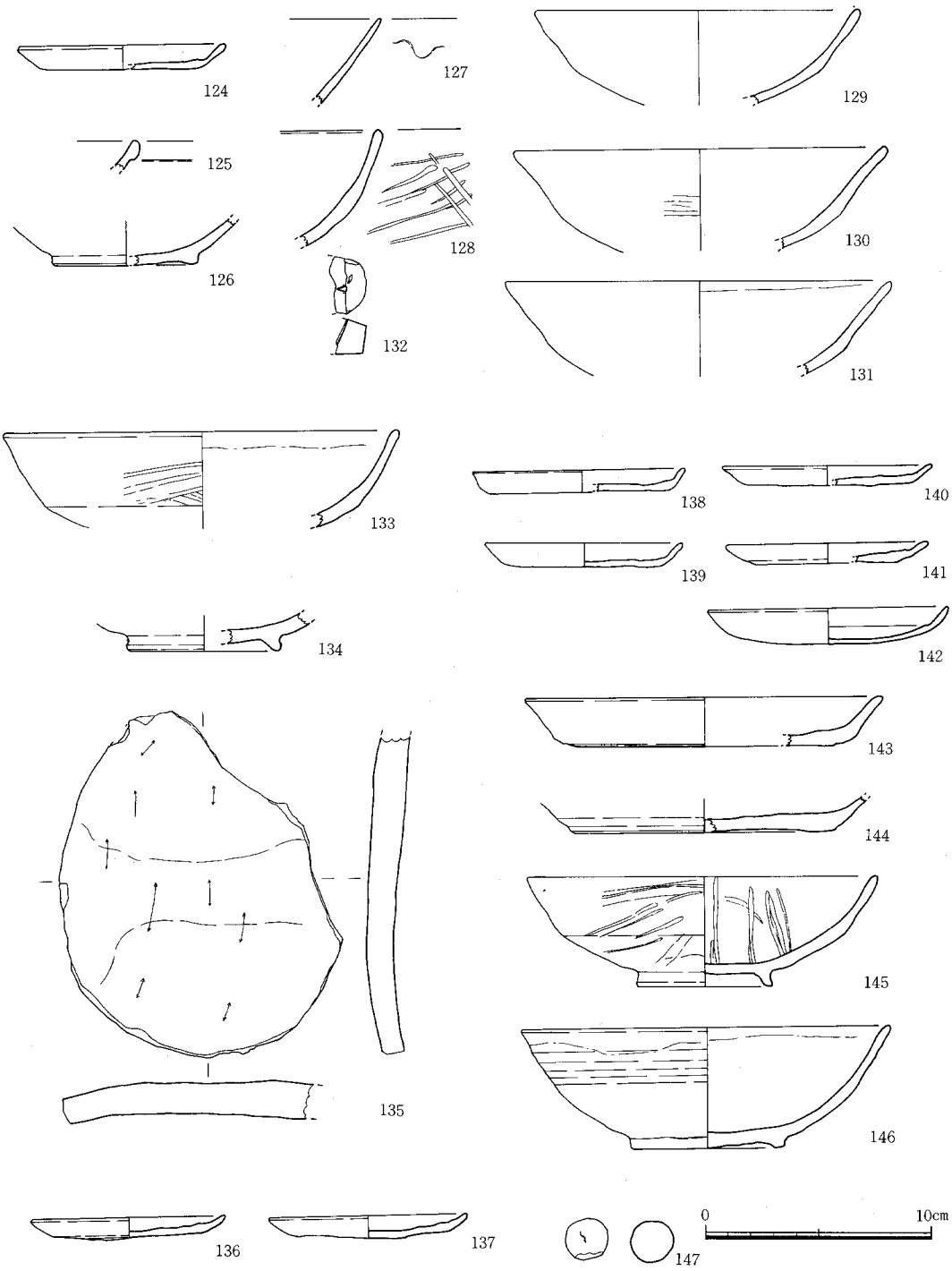
（1）　掘立柱建物

調査区北側にピットを多数集中して検出し、重複する4棟の掘立柱建物を確認することができた。シルト質の黄色土層に掘り込み、やや粘質の黄茶褐色土を埋土とする。

SB0581（第99図）　2間×3間で東側に1面の庇が付く南北棟である。建物方位は磁N－4°－Eである。梁行実長は420cm（14尺）、柱間は210（7尺）でほぼ等間隔である。庇柱は身舎から120cm（4尺）ほど張り出す。桁行実長は630cm（21尺）、柱間は210cm（7尺）でほぼ等間隔で



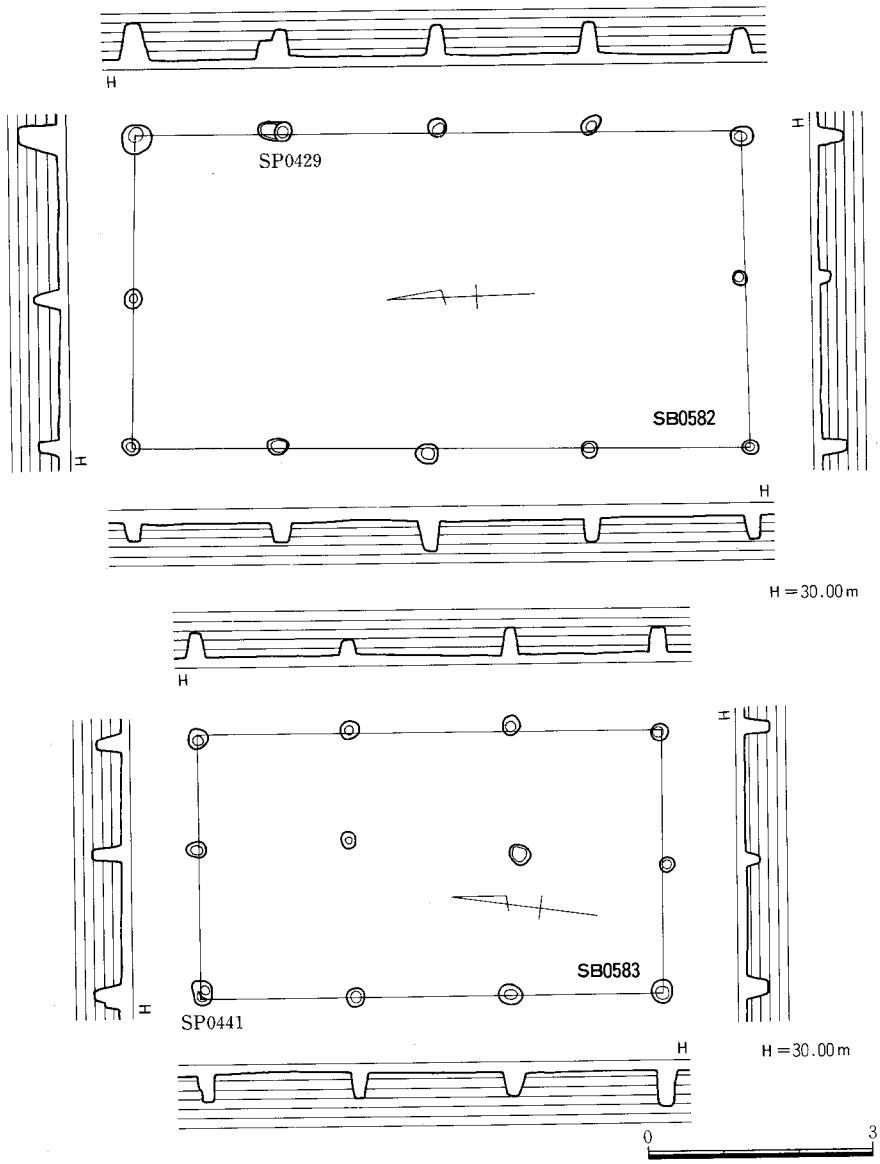
第99図　SB0581実測図（1/100）



第100図　SB0581出土遺物実測図（1/3）

ある。柱掘形は円形で径30－40cm、深さ30－50cmを測る。庇柱と身舎の柱に規模の差はない。SB0582と方位、柱筋を同じにし、桁柱が互いの仲間に入り重なる。遺物は全ての柱穴から土師皿片等が比較的多く出土している。残念ながら出土状態を確認できなかったが、SP425からは完形に近い瓦器椀などが出土している。SP0423の底には135が敷かれていた。

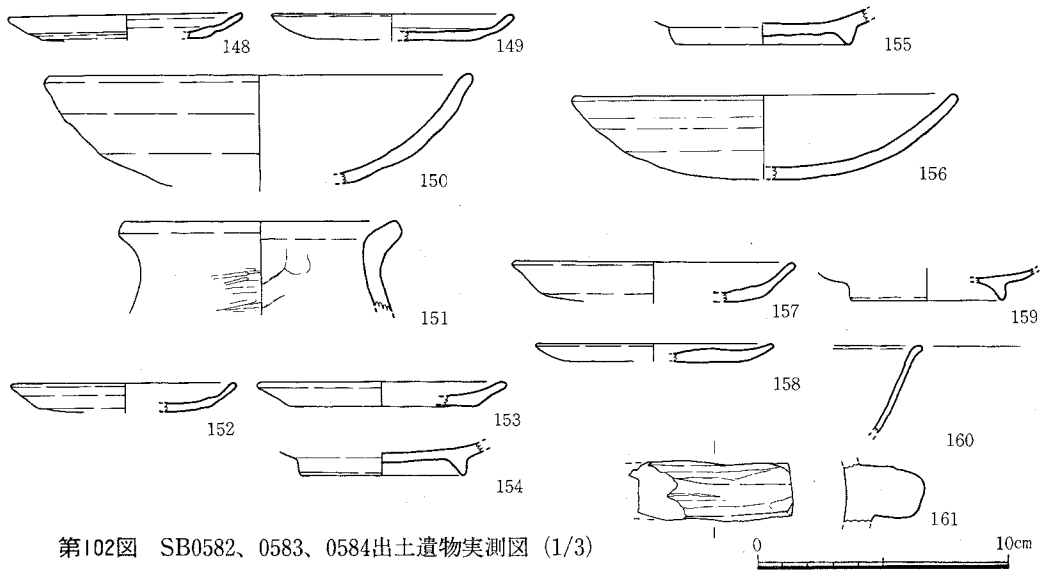
出土遺物（第100図）　124～126はSP0414より出土した。124は土師皿で1/4から復元した口径は9.2cm、器高1.1cmを測る。淡橙色を呈す。底はヘラ切りの可能性がある。125は白磁でわずかに緑色かかった灰白を呈す。126は瓦器椀で器面調整は不明である。内面は暗茶褐色、外面は茶褐色を呈す。1/4弱より復元した。127はSP0415より出土した白磁椀である。釉は体部下部まで施され、口縁部外面には垂れた釉が厚い。わずかに緑がかった灰白色を呈す。胎土は黄白色できめ細かい。128－132はSP416から出土した。128～131は瓦器椀である。128は内外面とも横方向のミガキが施され外面には仕上げに粗に暗文風に施される。黒色を呈す。1/4が残るが歪みが大きい。129は研摩調整と思われる。内面には暗文風のヘラナデ痕が、口縁部外面に横ナデの痕跡が残る。黒色を呈す。1/4からの復元口径は14.4cmを測る。130は淡灰白色を呈し、口縁部のみ灰色を呈す。1/4弱からの復元口径は16.6cmである。131は研摩調整である。淡橙色を呈し、口縁部は内外面約８㎜が黒色を呈す。1/4からの復元口径17.2cmである。132は滑石製製品である。上面中央がふくらむ円柱形を呈する。1/2弱が残存し、直径2.5cm程度になるものと思われる。中央には斜方向に径３㎡の穿孔がある。133はSP0418から出土した瓦器椀で、外面上部は黒色、下部は茶褐色、内面は淡黄白色呈す。器面調整は不明瞭だが外面に暗文風の研摩痕が残る。1/4強からの復元口径は17.5cmである。134、135はSP0423から出土した。134は瓦器椀の底部である。黄白色を呈す。1/3からの復元である。135は大甕の胴部片を楕円形に打ち欠いたもので、長軸15.4cm＋α、短軸12.3cm＋α、厚さ1.5cmを測る。外面には煤が付着する。ピットの底に敷かれていた。136、137はSP　424から出土した土師皿である。いずれも回転ナデで内面ナデ調整でヘラ切り底の可能性がある。また、内面に煤が付着する。136は口径8.6cm、器高1.0cmを測り、全体は黄白色、所々橙色または黒色を呈す。底に簾状圧痕が残る。137は口径8.9cm、器高1.1cmを測り、淡橙色または暗褐色を呈す。底に板目圧痕が残る。138～147はSP0425からの出土である。138～142は土師皿である。138はヘラ切りの底に板目圧痕が残る。1/2弱からの復元口径は9.45cmである。淡黄橙色を呈す。139は板目圧痕が残る。橙色を呈し、1/3からの復元口径は8.75cmである。140は底に簾状の圧痕が残る。淡橙色を呈し、1/4弱からの復元口径9.3cmを測る。141には底に板目圧痕が残る。淡橙色を呈し、1/3からの復元口径9.0cmを測る。142は瓦器皿である。器面調整は不明。底に細かい板目圧痕または木目状の擦過痕がある。1/3から復元した口径は10.7cm、器高1.6cmである。内面は灰色、外面は黒色を呈す。143、144は土師器の坏である。145は黄白色を呈し、1/4弱からの口径15.8cmを測る。144は糸切りで、板目圧痕を残す。1/3からの復元である。145、146は瓦器椀である。145は研磨調整で内面に暗文風のヘラ調整を



第101図　SB0582・0583実測図（1/100）

施す。1/2ほど残る脚部より復元した口径は15.4cm、器高4.9cmである。146は口縁部外面に回転ナデによる稜を成す。灰白色を呈し、口縁部のみ黒色である。3/4が残存し口径16.3cm、器高5.4cmを測る。147は土製の玉で不整球形を呈す。淡橙色を呈し、一部に煤状のものが付着する。

SB0582（第101図）　2間×4間で建物方位は磁N－4°－Wである。梁行実長は420cm（14尺）、柱間は南側で東から190cmと230cm、北側で220cmと200cm。桁行実長は東側が800cm、西側



第102図　SB0582、0583、0584出土遺物実測図（1/3）

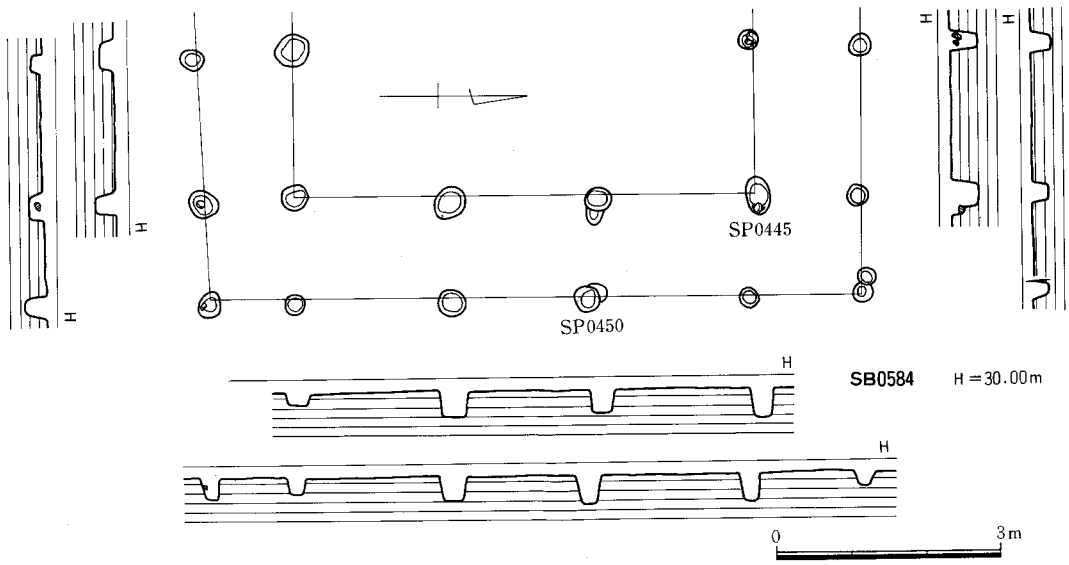
は820cmとやや短い。柱間は西側で北から200cm、200cm、210cm、210cmである。柱掘形は円形で径20～40cmでSB581よりやや小さい。深さ15～50cmを測る。遺物は9つのピットから少量出土してる。

出土遺物（第102図）　148～151はSP0428から出土した。148、149は土師皿である。148は内面ナデでヘラ切りである。1/3強からの復元口径は9.2cm、器高1.0cmを測り、淡橙色を呈す。149は底に簾状の圧痕を残す。1/4からの復元口径は9.5cm、器高1.0cmを測り淡橙色を呈す。150は瓦器椀で1/4からの復元口径は16.9cmを測る。淡橙色～灰白色を呈す。151は甕の口縁部で、ナデ調整で砂粒を多く含む。1/4からの復元口径は11.2cmを測る。淡灰褐色を呈す。152～154はSP429からの出土である。152、153は土師皿である。152は内面ナデ調整、底はヘラ切りである。1/4弱からの復元口径は8.8cm、器高1.1cmを測り、淡橙色を呈す。153は内面ナデ調整で、1/4からの復元口径は9.8cmを測る。淡橙色を呈す。154は瓦器椀の脚部で橙白色を呈す。1/2弱からの復元である。

SB0583（第101図）　2間×3間で建物方位はN－4°－Eである。総柱の可能性もある。梁行実長は北側で330cm、南側で350cm、柱間は南側で東から180cmと150cmとずれる。桁行実長は東側が610cm、西側は600cmである。柱間は東側で北から200cm、210cm、200cmである。柱掘形は円形で径20～30cmである。深さ20～40cmを測る。遺物は少量出土してる。

出土遺物（第102図）　155はSP0441から出土した土師器の坏で1/4からの復元である。156は土師器の丸底坏でヘラ切り、内面研摩調整である。1/2弱からの復元口径は15.3cmを測る。

SB0584（第103図）　西側が調査区外に広がる。3間×1＋α間で少なくとも3面に庇が付く。



第103図　SB0584実測図（1/100）

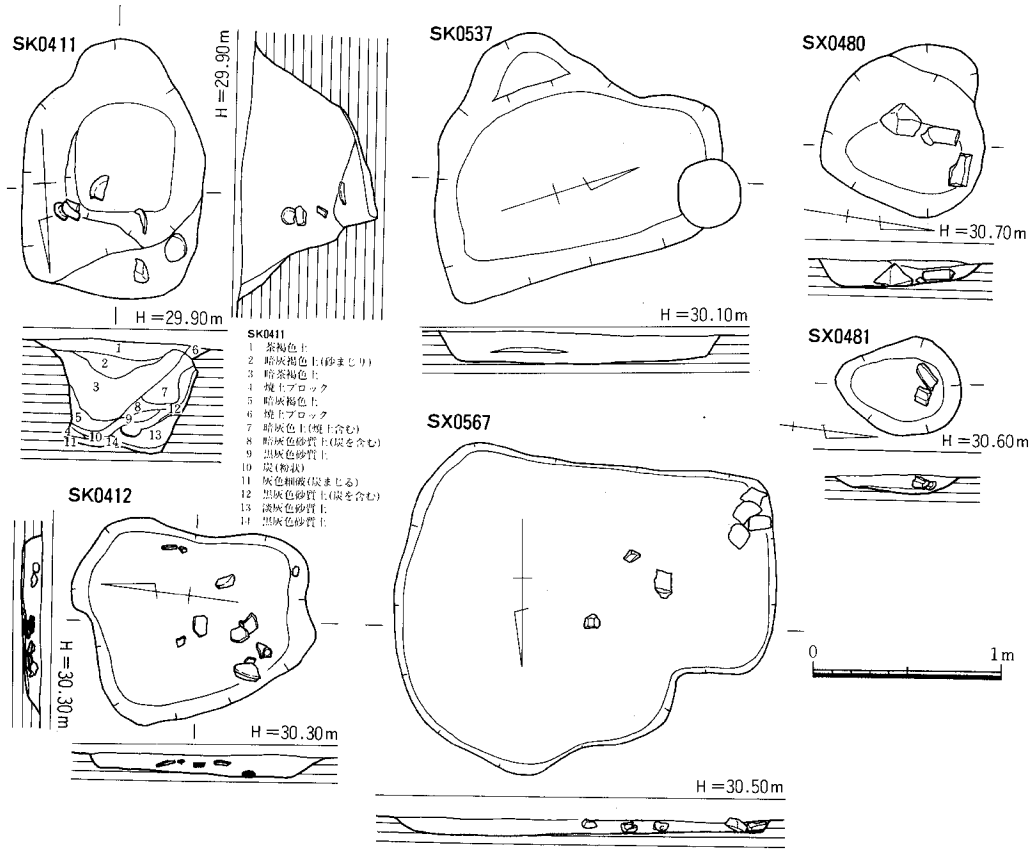
建物方位はN－3°－Eである。南北実長は620cm、柱間は北から210cm、200cm、210cmである。東西長は1間分で2.1cmを測る。庇柱は身舎から120cm～140cmほど離れる。柱掘形は円形で径30～40cm、深さ20～40cmを測る。庇柱と身舎の柱に規模の差はない。

出土遺物（第102図）　157～160はSP0445からの出土である。157、158は土師皿で、いずれも器面が粗れている。157は1/4弱からの復元口径11.3cmを測り、外面橙色、内面暗褐色を呈す。158は1/3からの復元口径9.5cmを測り、淡橙色を呈す。159は瓦器椀で1/4からの復元である。160は青磁碗でにぶい緑色を呈す。2次焼成のためか釉が剝げる。161はSP0450から出土した石鍋の鍔である。一方（右側）は面を成す。左側は欠けるが、上下方向の穿孔がみられる。煤が付着する。

（2）　土坑

SK0411（第104図）　長辺138cm、短辺94cm、深さ72cm測る隅丸長方形の土坑である。中位に炭層が広がり、床は北に傾く。完形に近い遺物の他にも土師器の細片を含む。

出土遺物（第105図）　162～169が出土した。162は土師皿である。内面ナデ、底に簾状の圧痕が残る。口径9.6cm、器高1.3cmを測り、淡橙色を呈す。163～166は土師器の坏である。163は内面ナデ調整で、煤が付着す。底に縄目状の圧痕が残る。1/3からの復元口径は15.8cmを測る。164は糸切り底で淡橙色を呈す。1/3からの復元口径15.6cmを測り、淡橙色を呈す。165は内面ナデ調整、糸切り底である。淡黄橙色を呈し、炭化物が付着する。口径13.3cmを測る。166は内面ナデ調整、縄目状の圧痕が残る。淡橙色を呈し、口径16.1cmを測る。167は瓦器碗で口縁部と内面が黒色、外面は灰白色である。1/3からの復元口径17.4cmを測る。168は白磁碗である。釉は淡

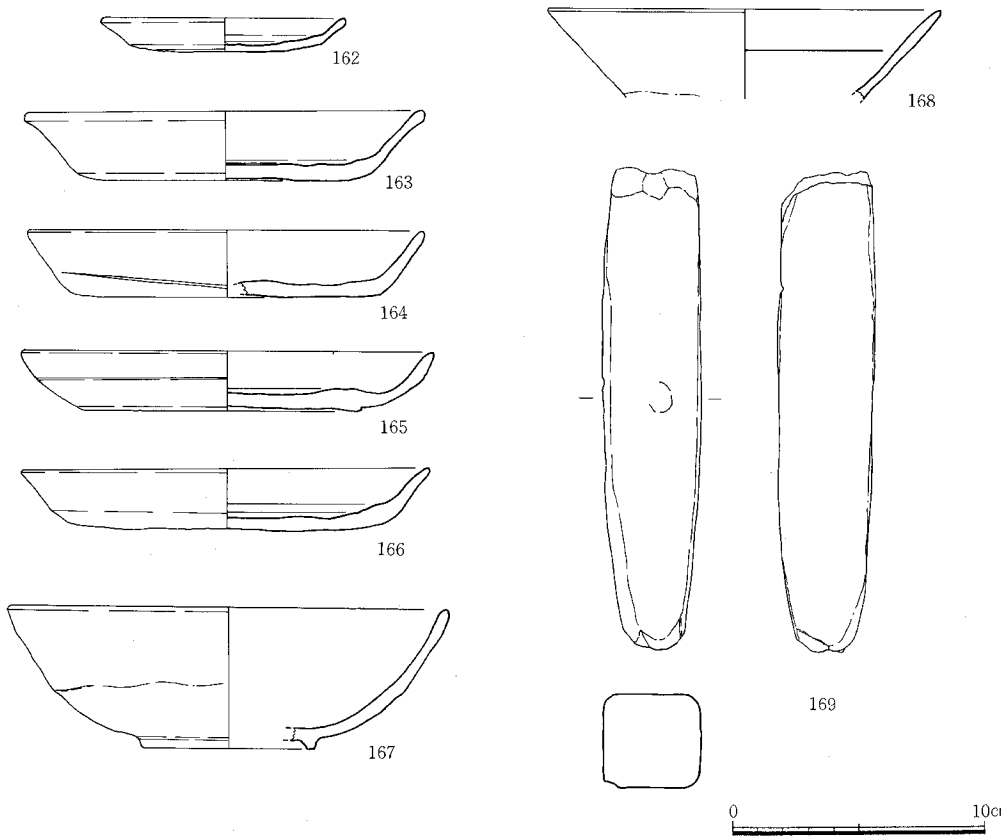


第104図　SK0411・0412・0537・0567、SX0480・0481実測図（1/40）

い緑灰白色で、胎土は灰白色を呈す。内面に細い沈線を施す。外面に粗い貫入が入り、体部は露胎である。1/4からの復元口径15.5cmを測る。169は方柱形状の土製品の5㎜大までの砂粒を非常に多く含み、黄白色を呈す。

SK0412（第104図）　不整形の土坑で長軸116cm、短軸90cm、深さ12cmを測る。砂地に堀込み、茶褐色の粘質土を埋土とする。

出土遺物（第106図）　170は須恵器の鉢である。171は土師質の甕である。内面に擦過痕、口唇部に削り状の痕跡が残る。外面に煤が付着し暗褐色、内面は灰褐色を呈す。172は土師器の坏で内面ナデ調整で、糸切り底で板目圧痕が残る。橙白色を呈し、煤が付着する。1/3からの復元である。173～176は白磁碗である。173、174、175は釉、胎土ともに黄白色を呈し、細かい貫入が入る。173、175の下部は露胎である。175は内面に沈線が入る。176は釉は淡緑色、胎土は淡灰色を呈す。内面は釉を輪状に掻き取り、外面下部は露胎である。畳付には剝げた釉が付着する。177、178は滑石製の石鍋である。外面には煤が付着する。やや歪んだ1/4からの復元口径は22.



第105図　SK0411出土遺物実測図（1/3）

8cmである。178は使用のためか内面が平滑である。歪んだ1/4からの復元である。

SK0537（第104図）　楕円形の土坑で長軸154cm、短軸93cm、深さ16cmを測る。

出土遺物（第106図）　179は瓦器碗で内面は研摩外面は削り状の調整痕が残る。黒色を呈す。180は滑石性製の石鍋の底で、外面に煤が付着する。

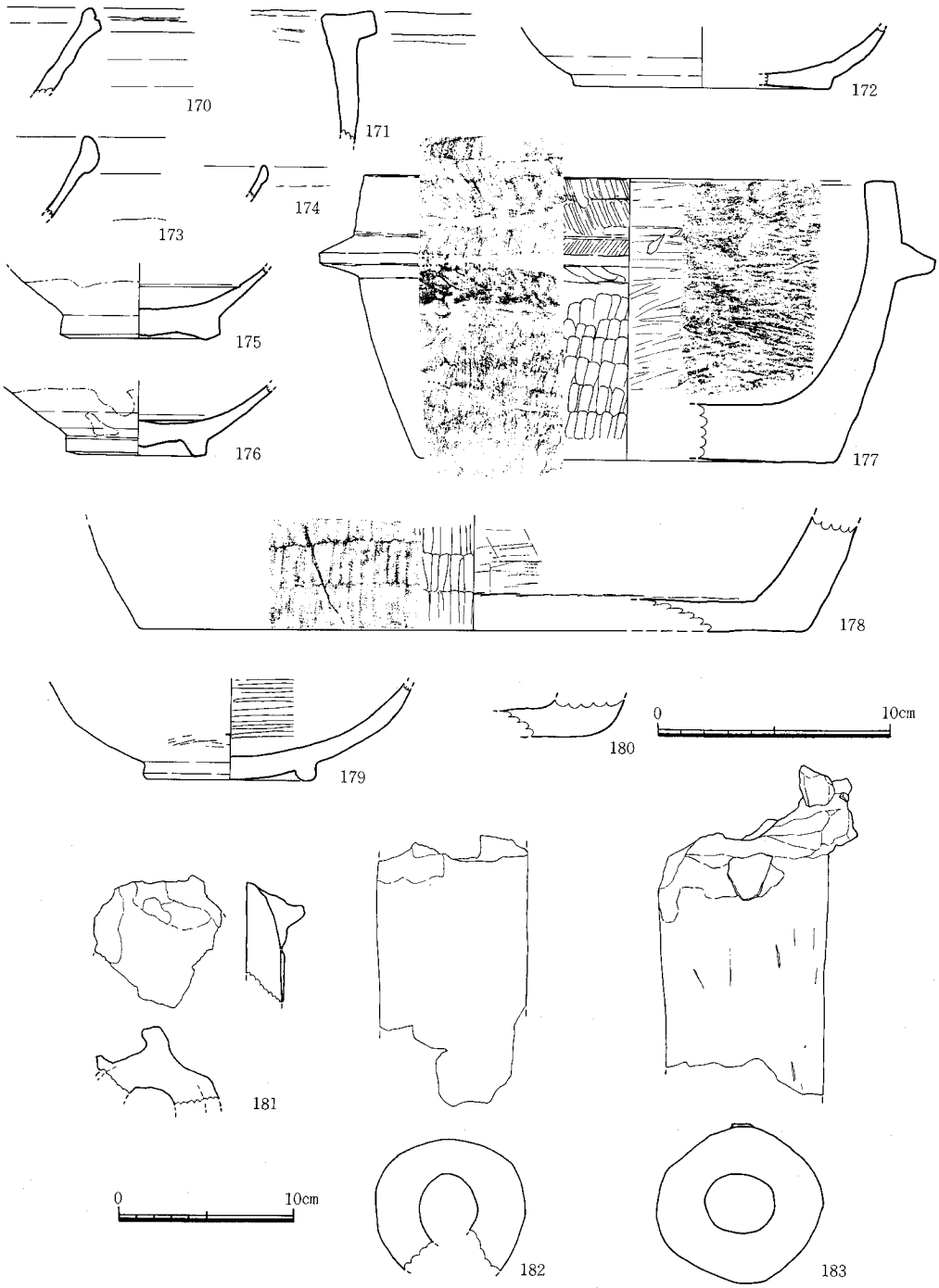
（3）　溝

SD0564、0565（付図）　　淡黄茶色土を埋土とする浅い溝状の遺構で検出し難かった。遺物は古代または中世土器の細片を含む。

SD0566（付図）　旧河川から掘立柱建物の北を走る浅い溝である。淡黄茶色土を埋土とし、検出し難かった。白磁、瓦器、土師皿等を少量含むが細片である。時期的には掘立柱建物と同じ可能性があるが、どれほど機能があり、関連があったかは疑問である。

（4）　製鉄関連遺構

SX0480、0481、1567（第104図）　いずれも黄褐色土上のくぼみに炭混じりの茶褐色土が溜まる。鞴の羽口やガラスが付着する礫、鉄滓が出土しており、製鉄関連の遺構を考えたが壁に焼



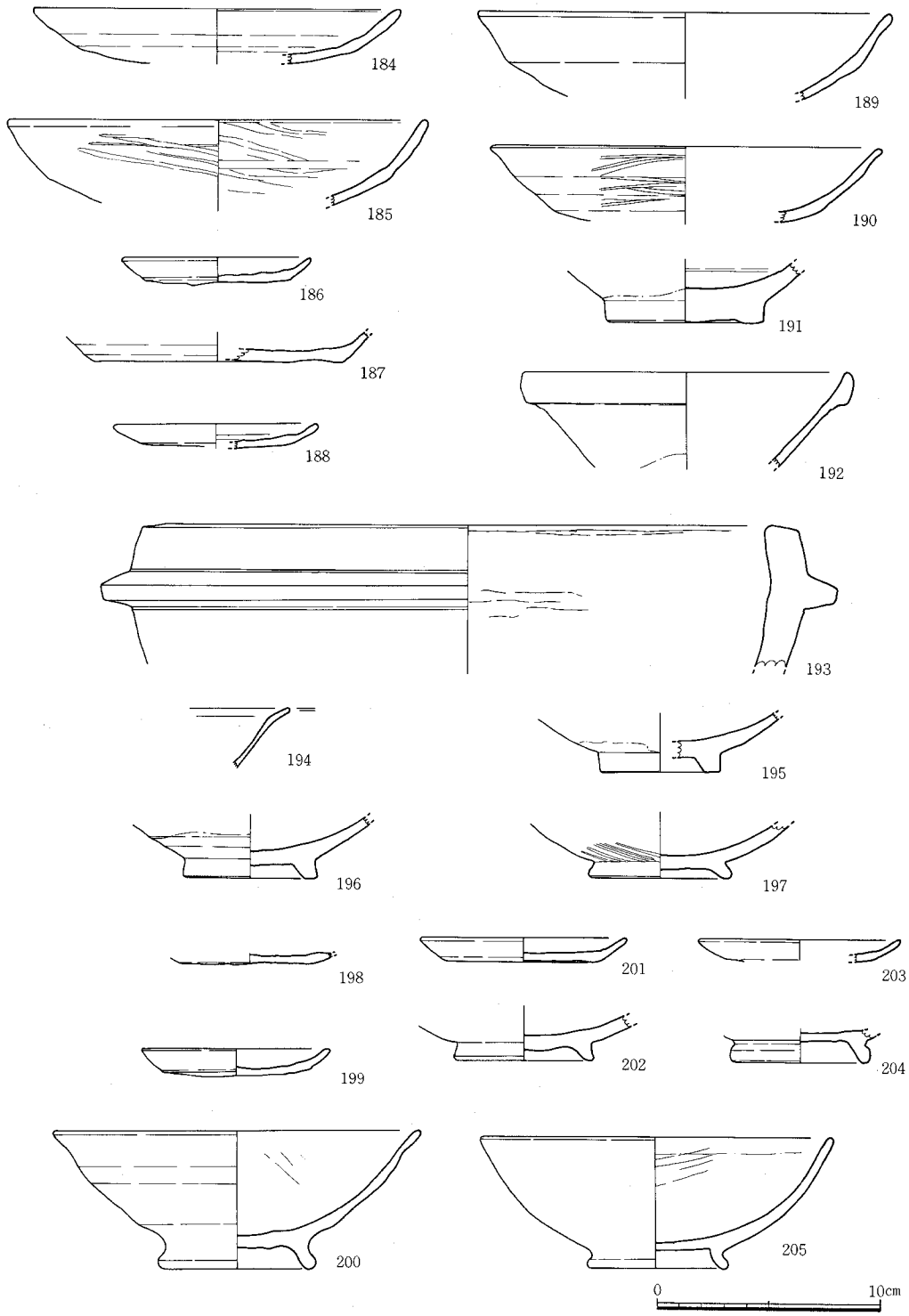
第106図　SK0412・0537、SX0480・0481・0567出土遺物実測図（1/3、1/4）

けた面がなく、炉とは考え難い。また、それぞれの羽口が接合しており、散乱した製鉄炉関連遺物がくぼみに入り、後世の削平をまぬがれたものではないかと思われる。

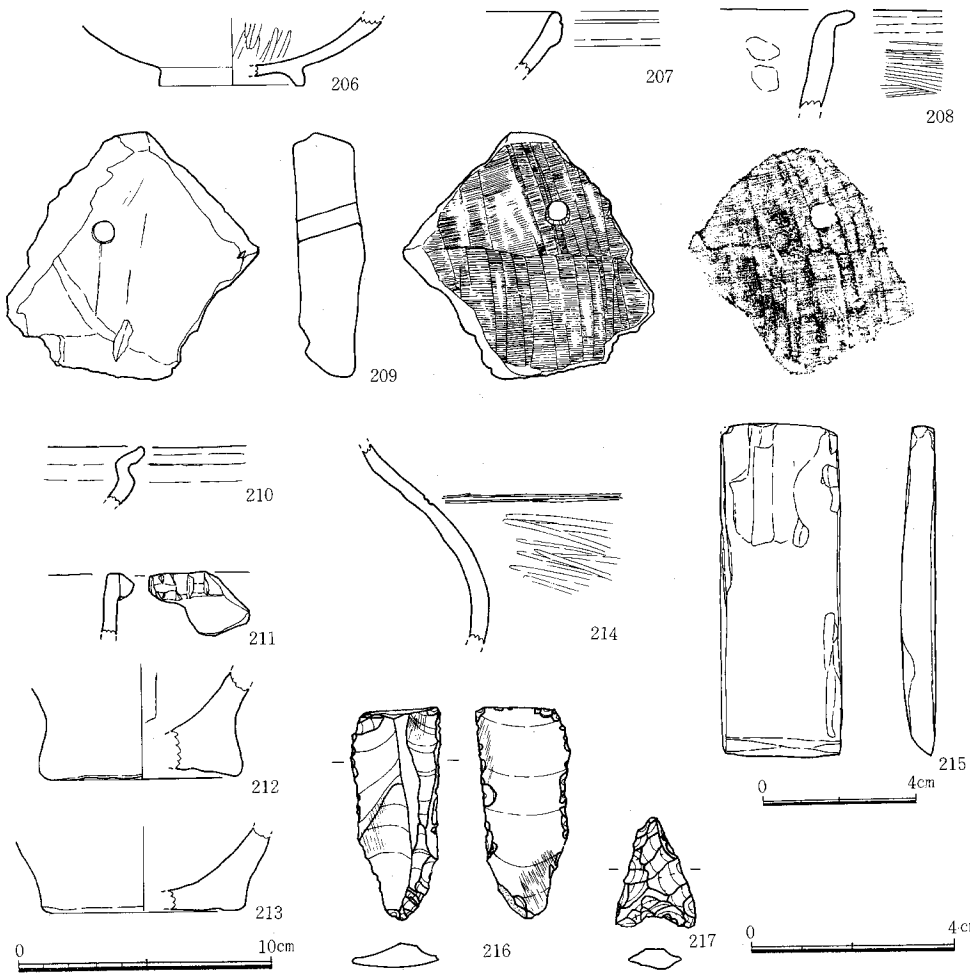
出土遺物（第106図） 181はSK0567からの出土で鉄滓が付着する。182はSK0480とSK0481のものが接合している。ガラス質が付着し、径8.5cm、内径3.4cmを測る。183はSK0480とSK0476のものが接合している。鉄滓、礫がガラス質により付着する。径9.5cm、内径3.1cmを測る。

（5） ピット出土の遺物 （第107図）

184は土師器で丸底の坏である。ヘラ切りで外面は淡橙色、内面は灰白色を呈す。1/6からの復元口径16.2cm、器高2.4cmを測る。185は瓦器碗で内面を研摩、外面は回転ナデのあと部分的にヘラナデを施す。口縁部および内面は灰色、外面は灰白色を呈し煤が付着する。1/6からの復元口径18.6cm、器高3.8cmを測る。186は土師皿で内面はナデ調整、底はヘラ切りで板目圧痕が残る。淡橙色を呈し、口径8.4cm、器高1.2cmを測る。187は土師器の坏で糸切り底で板面圧痕が残る。外面は橙色、内面は黄灰色を呈す。1/4からの復元である。188は土師皿で内面はナデ調整。ヘラ切りと思われる。橙白色を呈し、1/3からの復元口径は4.2cm、器高は1.1cmを測る。189は瓦器碗である。1/3からの復元口径は18.6cmを測る。190は瓦器碗である。口縁部外面が重ね焼きのため暗灰色、他は灰色を呈す。1/4弱からの復元口径は17.6cmを測る。191は白磁碗の底である。釉はわずかに緑色を帯びた灰白色、胎土は灰白色である。192は白磁碗である。釉はごくわずかに緑色を帯びた淡灰色、胎土は灰白色を呈す。外面下部は露胎である。1/6からの復元口径は16cmを測る。193は滑石製の石鍋である。歪んだ1/5の破片からの復元口径は29.4cmを測る。内外面に炭化物が付着する。194、195は白磁碗でSP0533から出土した。194は釉がわずかに緑色を帯びた淡灰白色を、胎土は灰白色を呈す。195の釉はごくわずかに緑色を帯びた白色を呈す。下部は露胎である。196の釉は緑色を帯びた白色を呈す。脚部は露胎である。1/3からの復元である。197は椀の脚部で外面黄白色、内面灰褐色を呈す。瓦器と思われる。198～200はSP0540から出土した。198、199は土師皿である。198は内面ナデ調整、底は板目圧痕を残し、ヘラ切りと思われる。橙白色を呈す。199は内面ナデ調整、底はヘラ切りで板目圧痕が残る。口径8.3cm、器高1.2cmを測る。淡橙色を呈す。200は土師器の椀である。調整不明。橙白色を呈す。復元口径は16.3cm、器高6.2cmを測る。201～205はSP0542より出土した。201、202はヘラ切り底の土師皿で橙白色を呈す。201は板目圧痕が残る。1/4弱からの復元口径は9.2cm、器高1.1cmを測る。202は1/3からの復元口径は9cm、器高1.1cmを測る。203は瓦器椀で外面淡茶色、内面淡橙色を呈す。脚部に炭化物が付着する。204は椀の脚部である。内面は研摩調整で、橙白色を呈す。土師器と思われる。205は椀で瓦器と思われる。内面には研摩を施す。外面は橙白色、内面は口縁部が黒色、他は灰白色を呈す。2mm大までの砂粒を多く含む。砂粒の動きは外面で左から右である。残存する脚部からの復元口径は15.8cmを測る。



第107図　ピット出土遺物実測図（1/3）



第108図　その他の遺物実測図（1/3、1/2、1/1）

（6）　その他の遺物（第108図）

206は瓦器椀で内面は研摩調整が暗文風に残る。灰色から淡灰色を呈す。1/3からの復元である。207は白磁碗で、釉はわずかに緑色を帯びた灰白色を呈す。粗な貫入が入る。208は甕の口縁部である。209は滑石製の石製品である。石鍋等の再加工品と思われる。穿孔が1カ所あり、破断面で磨かれた部分がある。210は縄文晩期の浅鉢の口縁部である。黒色摩研土器で粗製化したものと思われる。211は刻目突帯文土器である。ヘラ状の工具による細く深い刻み目を施す。外面は茶色でナデ調整、内面は淡橙色である。212は深鉢の底部である。外面底は削り、上げ底になる。外面は淡橙色から橙色、内面は暗茶色を呈し木口状の痕跡がみられる。1/3からの復元である。213は弥生時代前期の甕の底部と思われる。外面茶色がかった橙色、内面茶褐色を呈す。214は弥生時代前期の壺の肩部から胴部である。外面肩部には2本の沈線を施し、研摩調整である。淡橙色から淡茶色を呈す。215は粘板岩製の片刃石斧である。216・217は黒曜石である。216は縦長剥片の両長辺に微細剥離を施す。217は石鏃で1.53gを測る。

6　5区の調査

1）概要

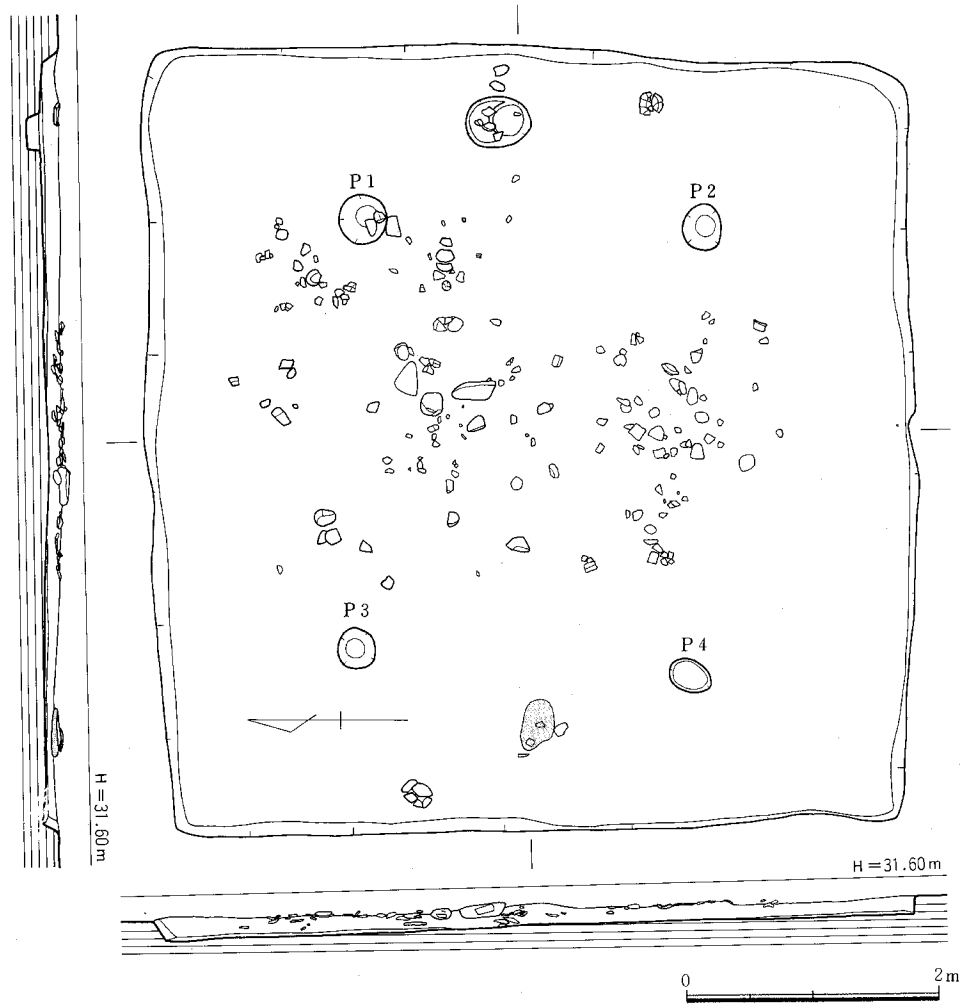
5区は4区の南側に位置し、道路・用水路・排水路建設及び田面の削りに伴い約5190㎡を調査した。遺構は耕作土直下の黄褐色土上で確認した。北端では一部礫が露出する。調査区北側の中央部分には現水田造成時のものと考えられる段落ちが認められた。標高は北端で30.7m、南端で31.5mを測る。遺構は調査区の北側に集中し、南側では南端を除いては確認し得なかった。古墳時代の竪穴住居、中世の掘立柱建物・土坑・溝・製鉄関連遺構等が検出した主な遺構である。

2）古墳時代の遺構と遺物

（1）竪穴住居

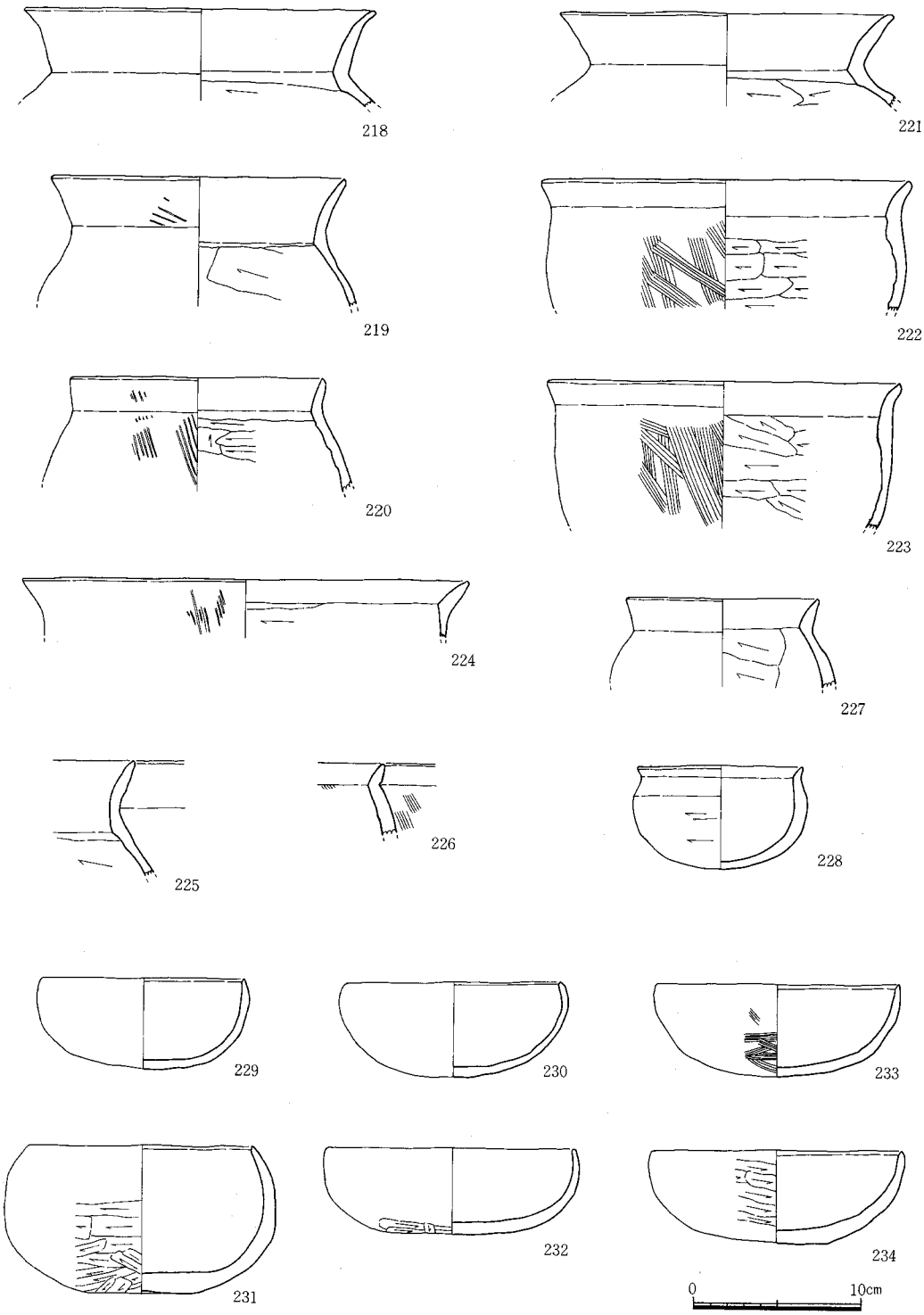
SC0606（第109図）　調査区の南端で検出した。南北6.10m、東西6.20mを測り、ほぼ正方形の平面プランを呈する。壁の残存高は10～15cmと遺存状態はよくない。主柱は4本柱でP1－P2間及びP3－P4間は2.70m、P1－P3間は3.40m、P2－P4間は3.55mを測り、長軸を東西方向に有する柱穴配置となる。柱穴の径は30～40cmで、深さはP1が42cm、P2が39cm、P3が47cm、P4が35cmを測る。東壁沿いのほぼ中央には径50cm、深さ9cmの浅い土坑が設けられる。また西壁のほぼ中央から55cm離れた位置に焼土が径20～40cmの広がりをもって認められた。出土遺物からも看取されるように竈が存在した可能性が高い。覆土はやや砂質がかった暗茶褐色で黄褐色の砂質土、少量の炭化物が混じる。遺物は床面より5～10cm浮いた状態で大半が出土した。

出土遺物（第110・111図）　218～242は土師器、243～250は須恵器である。218～221・225・227は甕。このうち218・219・221・225は口縁部を「く」字状に外反させる。いずれも外面及び口縁部内面はナデ、体部内面はヘラ削りを施す。218は復元口径20.6cmを測る。口縁端部を外方へやや引き出す。219は復元口径17.4cmを測る。外反の度合いは緩い。221は復元口径19.4cmを測る。丁寧なナデで仕上げる。225は外反度の緩い短い口縁部を有する。220は張りのない体部からほぼ上方へ短く伸びる口縁部を有する。復元口径15.0cmを測る。外面は刷毛目を荒くナデ消す。口縁部内面はナデ、体部内面はヘラ削りを施す。222～224は甑である。222・223は鉢とも考えられるが外面に炭化物の付着が認められることや口径の法量などからここでは甑としておく。222・223の復元口径はそれぞれ22.0・21.2cmを測る。ともに口縁部内外はナデ、体部外面は刷毛目、内面はヘラ削りを施す。224は復元口径26.6cmを測る。口縁部内外は丁寧なナデ、体部内面はヘラ削りを行なう。226・228は鉢。226は「く」字状に短く外反する口縁部を有する。口縁部内外はナデ、体部の外面は刷毛目、内面は擦過で仕上げる。228は半球状の体部から短く外反する口縁部をもつ。復元口径9.8cm、器高6.1cmを測る。内面及び口縁部下までは丁寧なナデ以下はヘラ削り。229～240は椀である。口縁部の形状から内湾するもの（229～232）、直立気

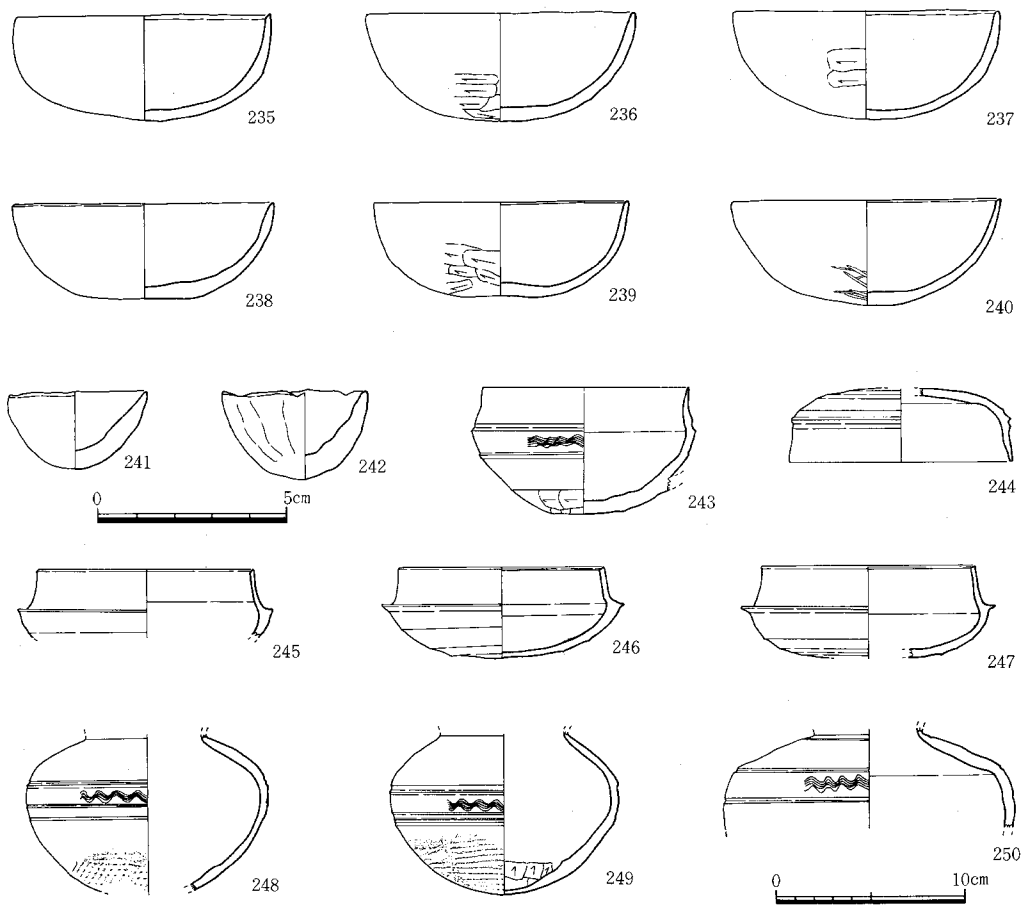


第109図　SC0606実測図（1/60）

味に伸びるもの（233～235）、外方にやや開くもの（236～240）に分類できる。内湾するものは外面をヘラ削り、内面をナデで仕上げるが、230は丁寧なミガキ風のナデを施し、内外面に黒色顔料を塗布する。231は大型品である。直方に伸びるものは外面に刷毛目・ヘラ削り、内面にナデを施す。233の外面には赤色顔料の塗布が認められる。外方に開くものは外面をヘラ削り、内面をナデで仕上げる。240は外面体部下半にミガキを施し、外面に黒色顔料を塗布する。埦の焼成は全体的に堅固である。241・242は手捏ね土器である。共に埦を模したものと考えられ、指ナデで仕上げる。243はジョッキ形土器である。復元口径11.0cm、器高6.8cmを測る。座りの悪い底部を有し、胴部は内湾気味に外方へ開く。頸部はやや内傾し、短く立ち上がる口縁部へと



第110図　SC0606出土遺物実測図1　(1/4)



第111図　SC0606出土遺物実測図２（1/2、1/4）

続く。把手は下部にその痕跡を残す程度で、大半を欠失する。削り出しの突帯間には波状文を施す。外面胴部下半以下は手持ちのヘラ削り、他は回転ナデを施す。外面口縁部、頸部の一部及び内底部には自然釉がかかる。244は坏蓋で、復元口径12.0cmを測る。口縁部は緩く外反し、端部は平面を成す。口縁部内外は回転ナデ、天井部は回転ヘラ削り、内面はナデ。245～247は坏身である。それぞれ復元口径は11.4、10.9、11.4cmを測る。246・247の口縁端部は凹面を成し、内傾する。いずれも外面底部から体部下半は回転ヘラ削り、内底部はナデ、他は回転ナデを施す。248～250は甕である。いずれも破片資料で孔部を欠失する。248・249は玉葱状の体部で、胴部中位に波状文を配する。外面胴部下半に平行叩き目が見られ、他は回転ナデを施す。ただし249の内底部には手持ちのヘラ削りが認められる。250は前二者に比して肩の張りが大きい。沈線間に波状文を配し、回転ナデで仕上げる。

3）中世の遺構と遺物

（1） 掘立柱建物

調査区の北側にピットが集中し、その中でも更に集中する箇所が幾つか見られる。各ブロックに建物の存在が看取されたが、まとめきれなかったものも多い。

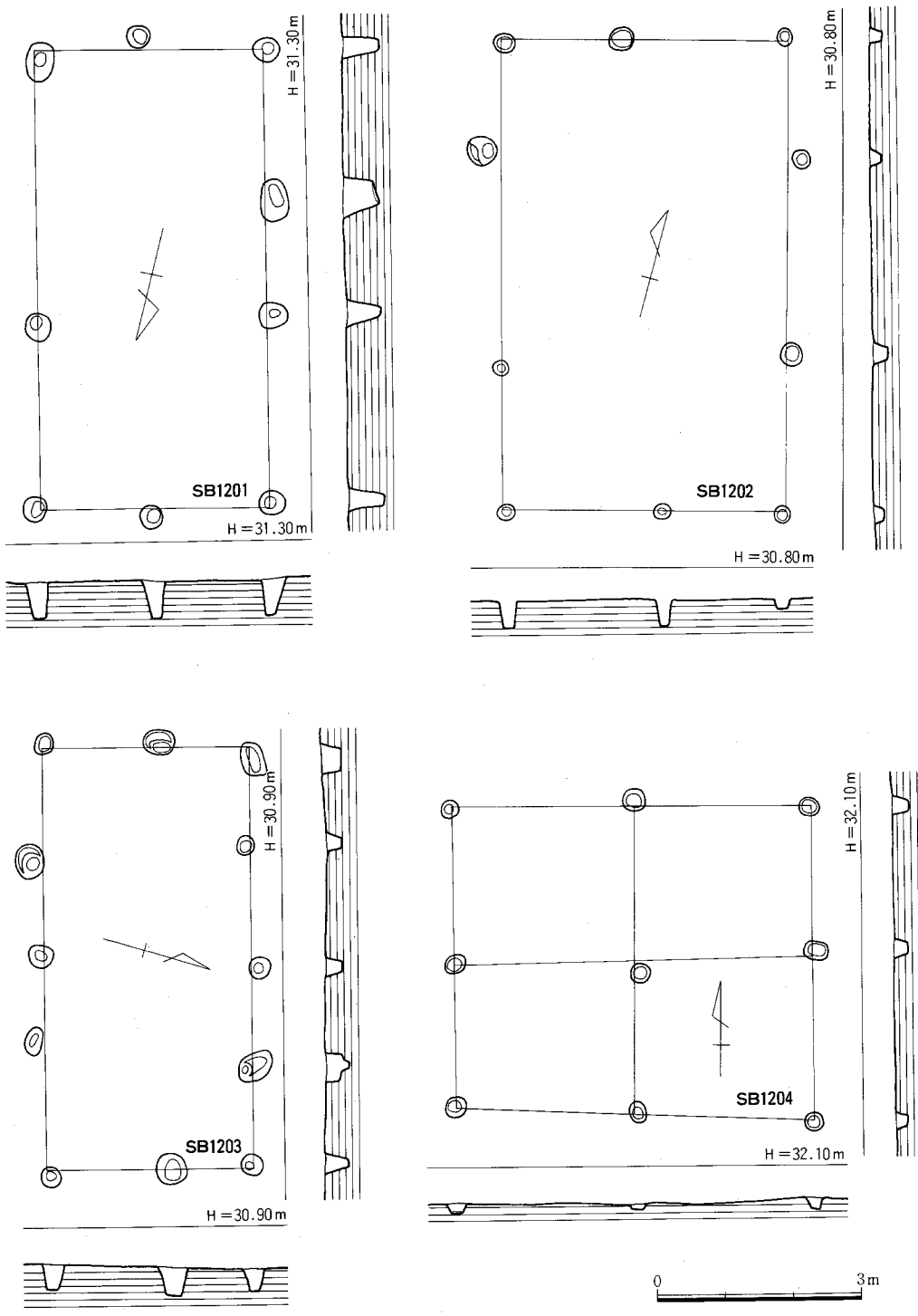
SB1201（第112図） 調査区の北西隅において検出した主軸方向をN－14°－Wにとる2間×3間の側柱建物である。梁間は全長3.4m、桁行は全長6.6mを測る。柱穴は円形又は楕円形で、径35～55cm、深さ25～55cmである。東側桁行の南から2番目の柱穴は精査に努めたが、未検出に終わった。覆土はしまりのある黄灰色土を主体とする。出土遺物は回転糸切り底の土師器小皿等の細片が少量である。

SB1202（第112図） 調査区の北側において検出した。SB1201とほぼ同じく主軸方向をN－15°－Wにとる。2間×3間の側柱建物で、ピット群が集中して見られた調査区中の北端に位置する。梁間は全長4.2m、桁行は全長6.9mを測る。柱穴はほぼ円形で、径25～40cmで、深さ18～42cmである。桁行の柱間は中央が3.0mとやや広い。覆土は茶褐色土を主体とする。出土遺物は回転糸切り底で板状圧痕を有する土師器小皿等の細片が少量である。

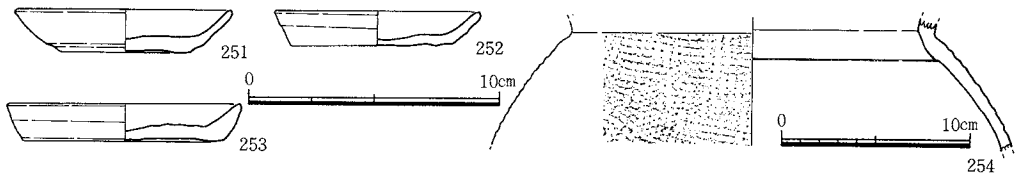
SB1203（第112図） SB1202の南側約5mにおいて検出した2間×4間の側柱建物である。主軸方向はN－74°－Eで、SB1201・1202とほぼ直交する。梁間は全長3.0m、桁行は全長6.0mを測る。柱穴は円形又は楕円形で、径30～55cm、深さ24～42cmである。柱間は1.2～1.8mと不揃いである。覆土は茶褐色土を主体とする。

出土遺物（第113図） 251～253は土師器小皿である。251は復元口径8.4cm、器高1.7cm、底径5.0cmを測る。外面及び内面体部は横ナデ、内底部はナデ、外底部は回転糸切りで板状圧痕は認められない。胎土には金雲母片を含み、色調は淡茶褐色を呈する。252は口径8.0cm、器高1.4cm、底径6.4cmを測る。外面及び内面体部は横ナデ、内底部はナデ、外底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。胎土・色調は251に同じ。253は口径9.1cm、器高1.5cm、底径7.8cmを測る外底部は回転糸切り。全体に磨滅著しく、板状圧痕の有無等は不明である。胎土・色調は251に同じ。254は須恵器甕で、253と同一の柱穴からの出土である。長円形の体部より口縁部を外反させる。外面には格子目のタタキが施されるが、頸部は一部ナデ消される。内面の頸部には回転ナデ、体部には板状工具による回転ナデが施される。色調は暗灰色を呈する。

SB1204（第112図） 調査区の南端で検出した。主軸方向をN－88°－Eにとる東西棟の2間×2間の総柱建物である。SC0606の南側約5mに位置する。梁間は全長4.4m、4.6mを測り、東側がやや長い。桁行は全長5.3mを測る。柱穴はほぼ円形で、径25～35cm、深さは10～24cmを測る。SC0606と同様に遺存状態は悪く、削平の時期を窺う目安となろう。柱間は2.1～2.7m。覆土は暗茶褐色土を主体とする。遺物は西側の妻柱からのみ出土しており、回転糸切り底の土師器小皿等の細片が少量である。



第112図　SB1201・1202・1203・1204実測図（1/100）



第113図　SB1203出土遺物実測図（1/3、1/4）

（2）　土坑

調査区の北側において散漫に検出したが、全体に遺物の出土量は少ない。以下25基を報告する。

SK0608（第114図）　SB1203の南側に位置する。不整な楕円形を呈し、長径1.93m、短径1.34m、深さ0.44mを測る。断面は半円状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、上層には炭化物を少量含む。

出土遺物（第119図255）　土師器小皿である。口縁部を欠失し、残存高1.7cm、復元底径6.8cmを測る。外面体部及び内面には横ナデを施す。外底部は回転糸切りで、板状圧痕は認められない。胎土には金雲母片を少量含む。他に土師器・瓦器の細片が出土した。

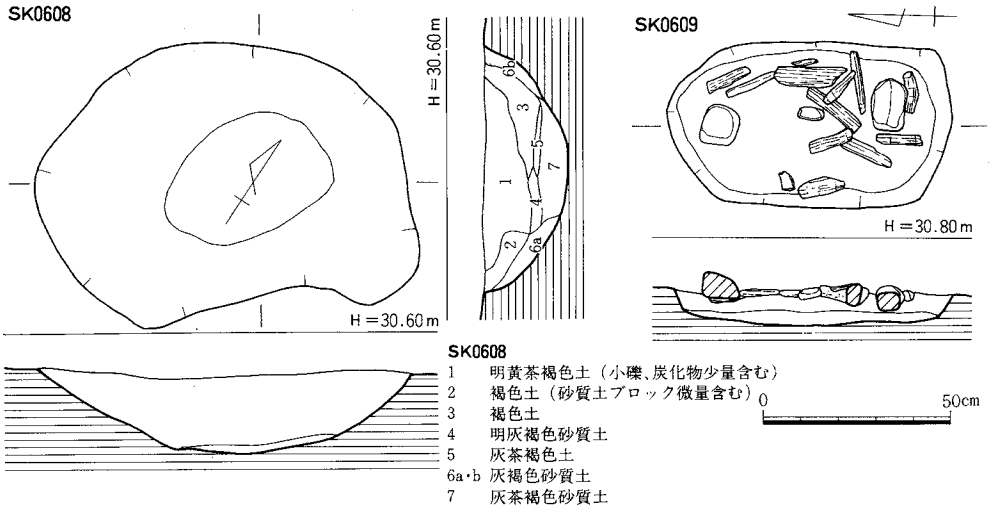
SK0609（第114図）　調査区の中央北側に位置する。不整な隅丸長方形を呈し、長さ0.75m、幅0.44m、深さ0.10mを測る。床面より数cm浮いて不規則に置かれた状態で木炭が出土した。又南北両端には10～15cmの礫が各１個認められた。なお、焼壁は確認されなかった。土器等の出土遺物はない。

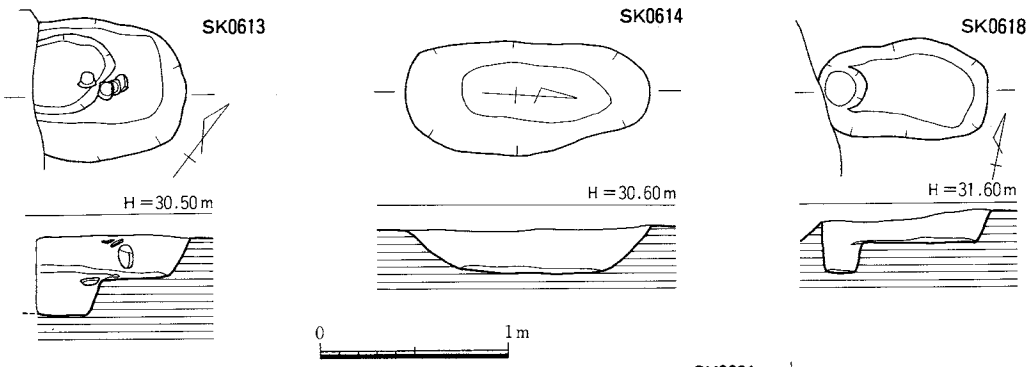
SK0613（第114図）　SK0609の南西約３mに位置する。南側を溝によって切られる。残存で長さ0.81m、幅0.77m、深さ0.23mを測る。南側には深さ0.23mの掘り込みを有する。断面は逆梯形を呈する。

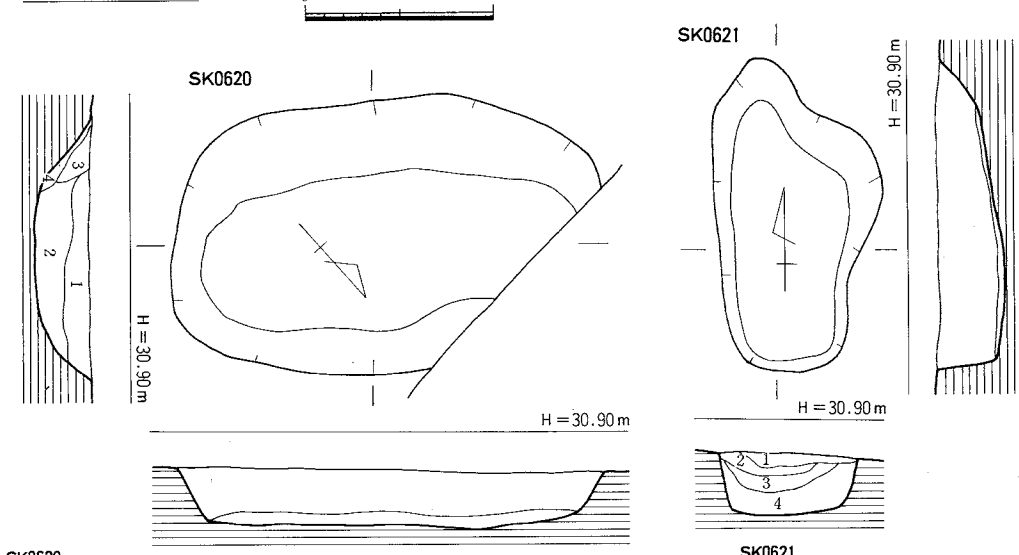
出土遺物（第119図256～258）　256は土師器小皿である。ほぼ完形に近く、口径9.1cm、器高1.5cm、底径8.0cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。上層より出土。257は土師器坏である。復元口径12.0cm、器高2.6cm、底径8.8cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。掘込み中からの出土。256･257ともに金雲母片、白い砂粒を含む。258は龍泉窯系青磁碗である。外面体部に鎬蓮弁を施す。釉色はオリーブ色。他に土師器坏・白磁の細片が出土した。

SK0614（第114図）　SK0613の西約２mに位置する。南側でSK1007を切る。不整な楕円形を呈し、長径1.30m、短径0.61m、深さ0.23mを測る。断面は逆梯形を呈する。覆土は茶褐色土である。

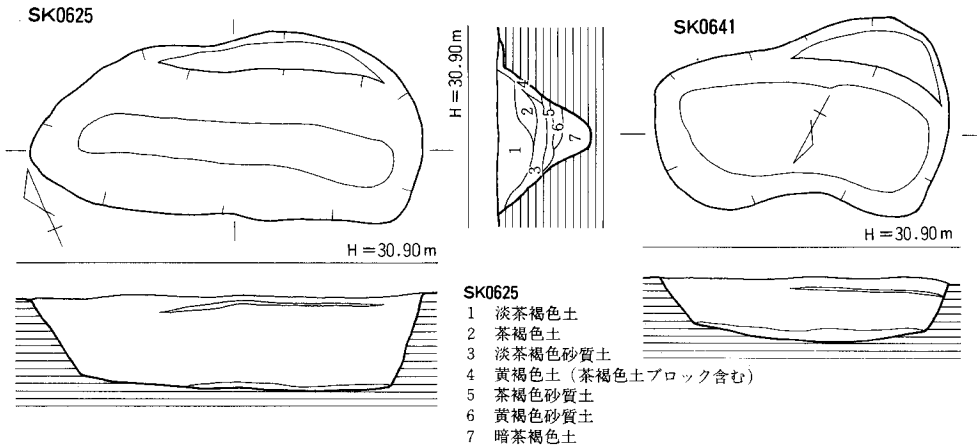
出土遺物（第119図259）　土師器坏である。復元口径11.8cm、器高2.0cm、底径4.4cmを測る口縁端部はやや外反し、尖り気味におさめる。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。底面

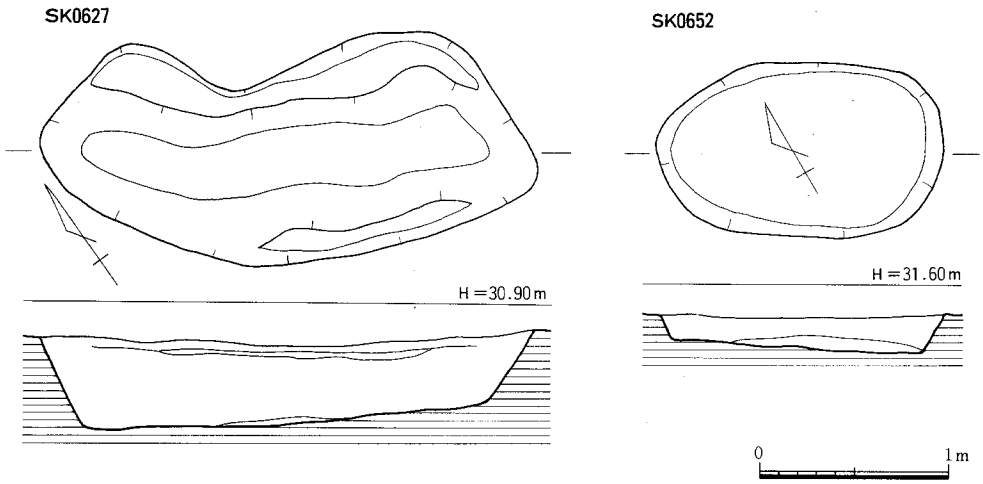


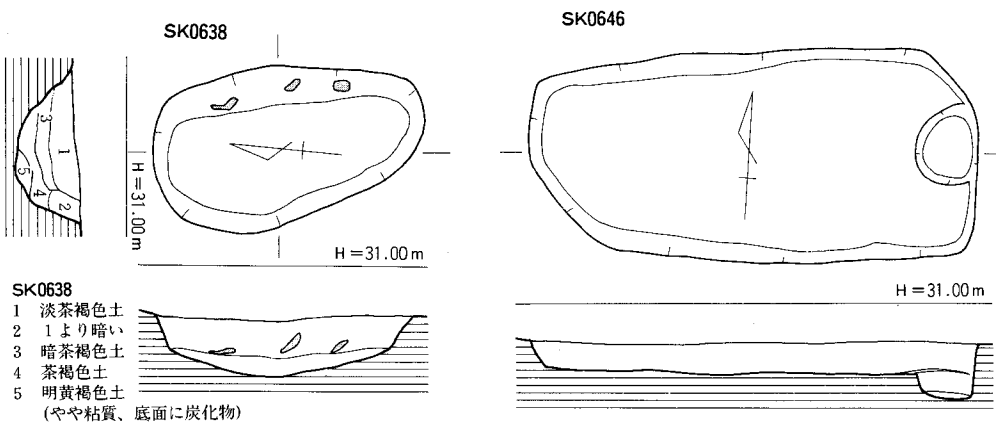




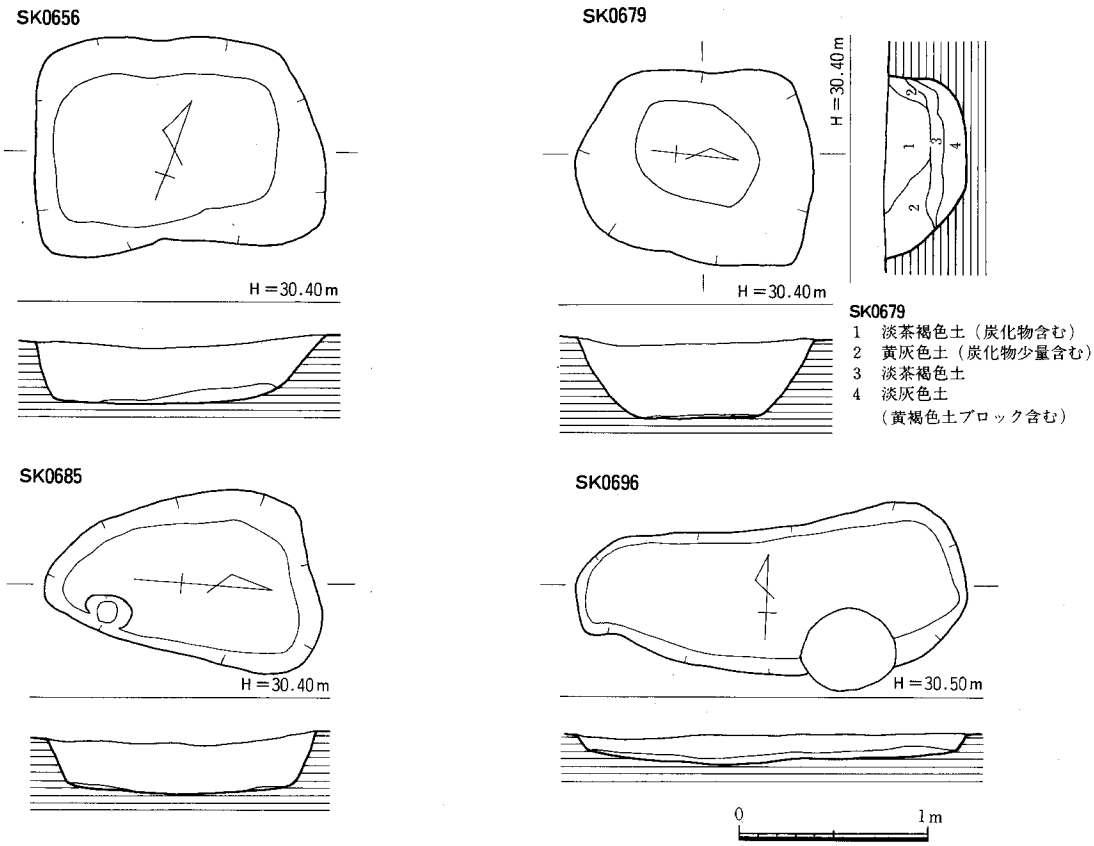
第114図　SK0608・0609・0613・0614・0618・0620・0621実測図（1/20、1/40）







第115図　SK0625・0627・0638・0641・0646・0652実測図（1/40）



第116図　SK0656・0679・0685・0696実測図（1/40）

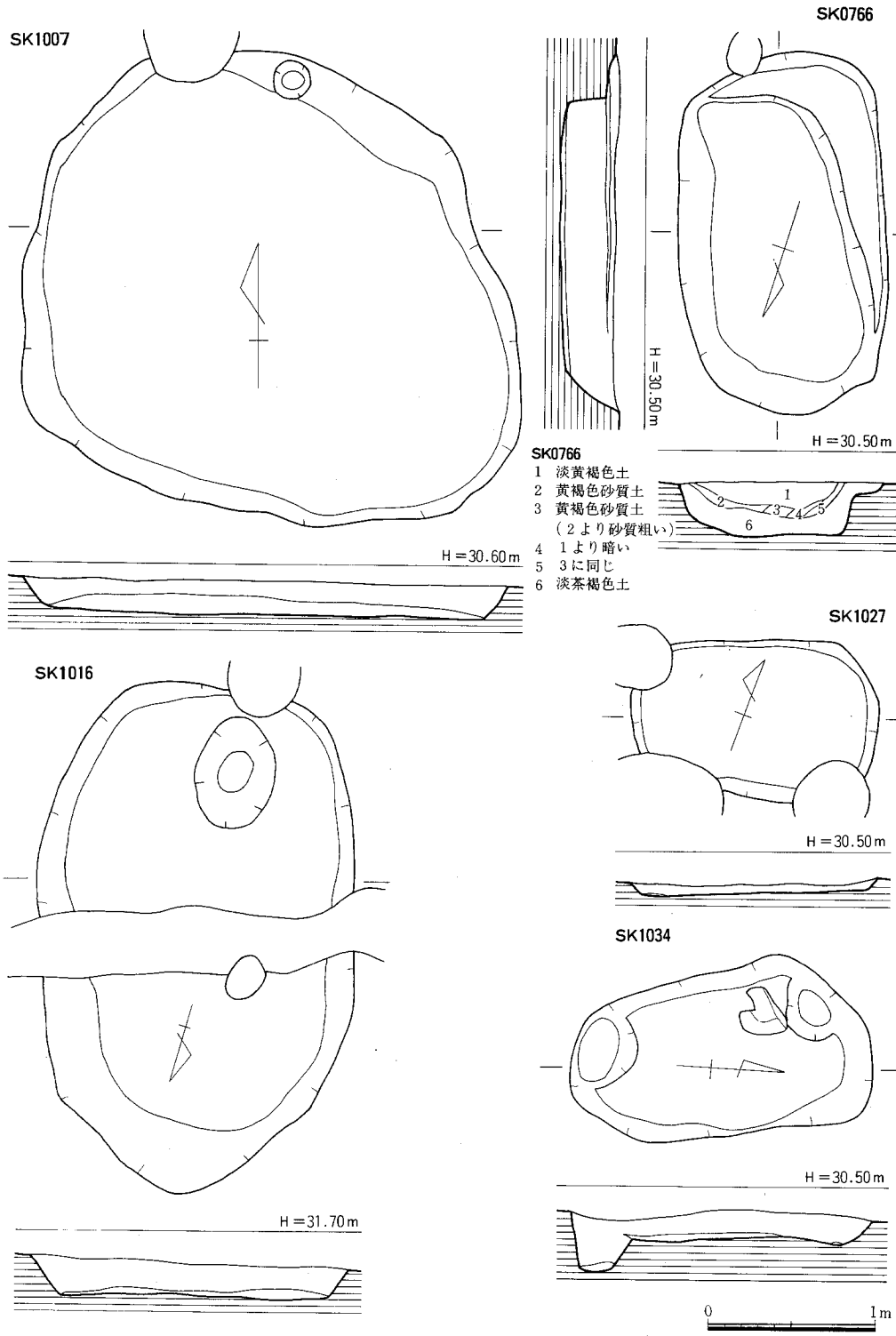
から約10cm浮いて出土した。他に土師器小皿・白磁の細片が出土している。

SK0618（第114図）　調査区中央北寄りに位置し、西側をSD1114によって切られる。不整な隅丸長方形を呈し、残存で長さ0.87m、幅0.54m、深さ0.17mを測る。西側には深さ0.16mのピット状の掘り込みがある。断面は逆梯形を呈する。

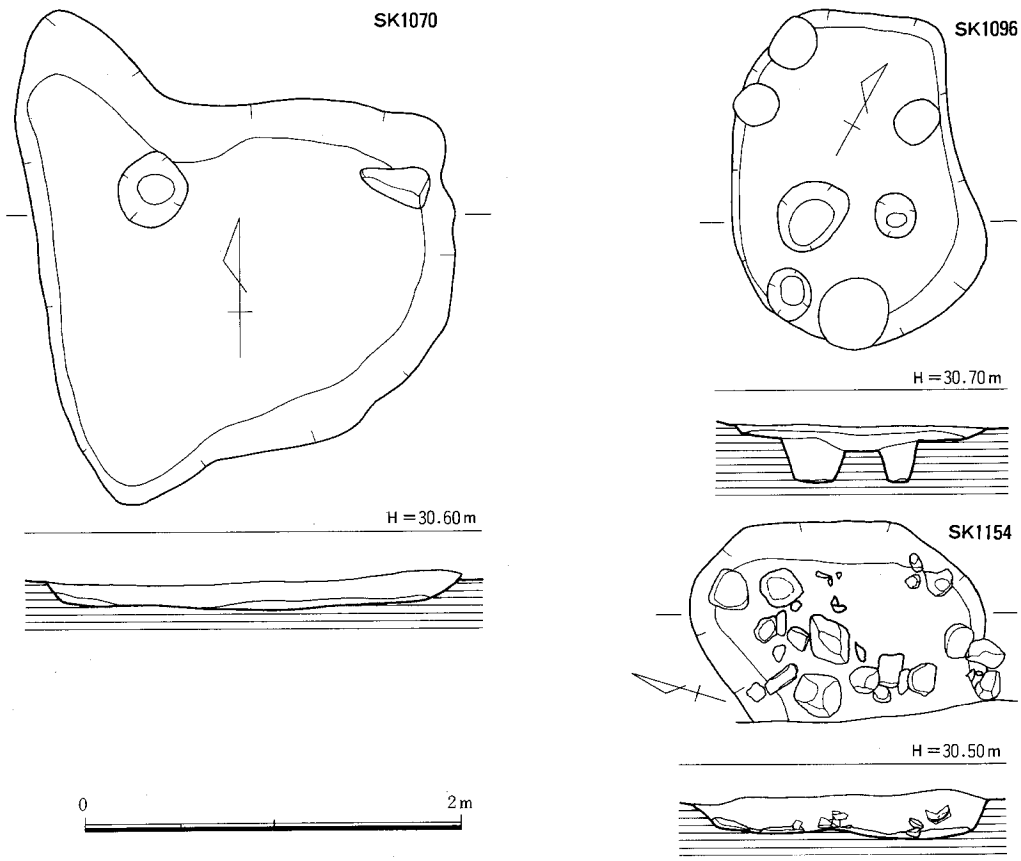
出土遺物（第119図260・261）　260・261は土師器小皿である。260はほぼ完形で、口径8.8cm、器高1.7cm、底径6.5cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。261は復元口径8.9cm器高2.0cm、底径6.1cmを測る。回転糸切り底で、板状圧痕を有する。ともに胎土には金雲母片を混じえる。他に土師器・磁器の細片、径３cm程の鉄滓が１個出土している。

SK0620（第114図）　調査区の北端に位置し、北側は調査区外に延びる。隅丸の長方形を呈する。幅1.46m、深さ0.29mを測り、長さは2.3m程になると考えられる。断面は逆梯形をなす。遺物は土師器の細片が少量である。

SK0621（第114図）　SK0620の南東約２mに位置する。北側に開き、やや突出する。長さ1.66



第117図　SK0766・1007・1016・1027・1034実測図（1/40）



第118図　SK1070・1096・1154実測図（1/40）

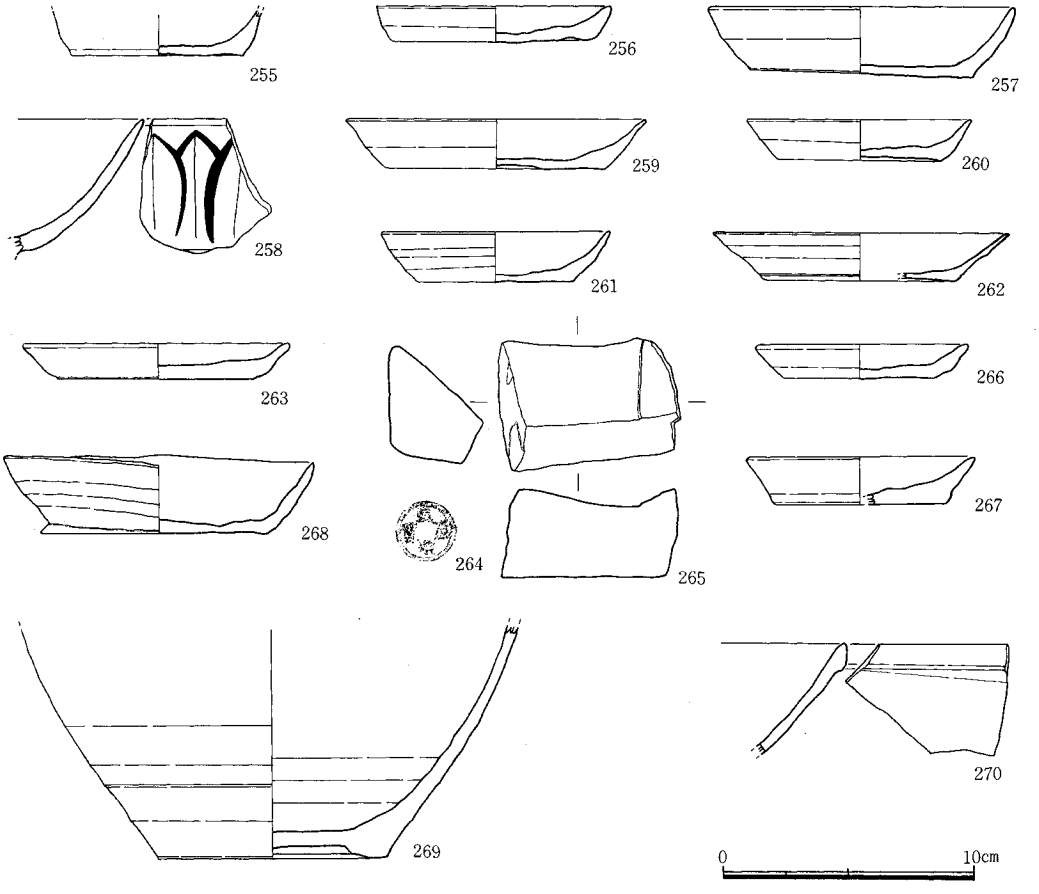
m、幅0.90m、深さ0.35mを測る。底面は南側に緩く傾斜する。遺物は土師器の細片が数点出土したにとどまる。

SK0625（第115図）　SK0621の南西約６mに位置する。長さ2.05m、幅1.01m、深さ0.50mを測る不整な隅丸長方形の土坑である。南側に狭い平坦面を有し、中央に向かってすぼむ。遺物は土師器の細片が少量である。

SK0627（第115図）　SK0625の北西約1.5mに位置する。北側中央部で緩く屈曲する。南北に狭い平坦面を有し、長さ2.61m、幅1.11m、深さ0.45mを測る。覆土は茶褐色土を主体とする。遺物は土師器の細片が少量である。

SK0638（第115図）　SB1201の南西約2.5mに位置する。長さ1.45m、幅0.86m、深さ0.34mを測る。断面は半円状を呈する。底面には部分的に炭化物が、又東壁面には焼土が認められた。

出土遺物（第119図262）　土師器坏である。復元口径11.8cm、器高1.7cm、底径7.6cmを測る。



第119図　SK0608・0613・0614・0618・0638・0646・0679・1007・1154出土遺物実測図（1/3）

口縁部は外方へ開き、端部は尖り気味におさめる。外底部の切り離し技法は不明瞭。外面には赤色顔料の塗布が認められる。周防系であろう。他に白磁・染付の細片が少量出土している。

SK0641（第115図）　SK0638の西約６mに位置する。不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.54m、幅1.06m、深さ0.35mを測る。南側に平坦面を有する。覆土は明黄灰褐色土を主体とする。遺物には土師器・白磁の細片が少量ある。

SK0646（第115図）　調査区の北東に位置する。長さ2.38m、幅1.13m、深さ0.16mを測り東壁際に深さ0.14mのピット状の掘り込みを有する隅丸長方形の土坑である。覆土は淡黄褐色土を主体とする。

出土遺物（第119図263）　土師器小皿である。復元口径10.4cm、器高1.4cm、底径7.8cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。胎土には金雲母片を含む。他に土師器の細片が少量出土している。

SK0652(第115図)　SK0646の西約10mに位置する。楕円形を呈し、長径1.53m、短径0.94m、深さ0.18mを測る。断面は逆梯形をなす。遺物は土師器の細片が少量である。

SK0656(第116図)　調査区の北側西寄りに位置する。隅丸長方形を呈し、長さ1.52m、幅1.09m、深さ0.32mを測る。断面は逆梯形をなす。遺物は土師器小皿・龍泉窯系の青磁の細片がある。

SK0679(第116図)　SK0656の南約２mに位置する。不整な隅丸方形を呈し、長さ1.26m、幅1.02m、深さ0.42mを測る。覆土の上層には炭化物を含む。

出土遺物(第119図264・265)　264は銅銭である。銭名は「皇宋通寶」で、初鋳年代は1039年である。265は砂岩製の砥石である。不整な台形を呈し、４面を砥面として利用する。他に土師器小皿・埦の細片が出土している。

SK0685(第116図)　SK0685の南約0.5mに位置する。長さ1.48m、幅0.96m、深さ0.26mを測る。南東隅に深さ0.15mのピット状の掘り込みを有する。覆土は茶褐色土を主体とする。遺物には土師器・瓦質土器・染付等の細片がある。

SK0696(第116図)　SK0679の西約２mに位置する。長さ2.08m、幅0.86m、深さ0.14mを測る不整な隅丸長方形の土坑である。遺物は土師器の細片が少量である。

SK0766(第117図)　SB1202の南東に隣接する。不整な隅丸長方形を呈し、長さ2.16m、幅1.23m、深さ0.34mを測る。西側から南側にL字状の平坦面を有する。遺物には板状圧痕を有する回転糸切り底の土師器小皿・須恵質土器・陶器等の細片がある。

SK1007(第117図)　SB1203の南約７mに位置する。不整な円形を呈し、長径3.25m、短径2.75m、深さ0.21mを測る。断面は浅皿状を呈する。覆土は茶褐色土を主体とし、炭化物を少量含む。

出土遺物(第119図266～268)　266・267は土師器小皿である。266は復元口径8.3cm、器高1.3cm、底径6.2cmを測る。267は復元口径9.0cm、器高2.0cm、底径6.8cmを測る。ともに外底部は回転糸切りで、板状圧痕はない。268は土師器坏で歪みが著しい。復元口径12.3cm、器高3.1cm、底径8.8cmを測る。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。他に土師器・白磁・青磁の細片が出土している。

SK1016(第117図)　SK1007の南西に位置する。中央部を東西にはしるSD1006に切られる。長さ3.40m、幅1.88m、深さ0.18mを測る。覆土は茶褐色土を主体とする。遺物には板状圧痕のない回転糸切り底の土師器小皿・坏・白磁・青磁の細片がある。

SK1027(第117図)　SK1016の北西約５mに位置する。南西隅をSK1034に切られる。隅丸の長方形を呈し、長さ1.49m、幅0.94mを測る。深さは７cmと浅い。遺物は板状圧痕のない回転糸切り底の土師器小皿等の細片が少量である。

SK1034(第117図)　北側でSK1027を切る。長さ1.81m、幅1.04m、深さ0.18mを測り、南北に

各1個ピット状の掘り込みを有する。遺物は板状圧痕のない回転糸切り底の土師器小皿の細片が少量である。

SK1070(第118図)　調査区の中央西側に位置する。西壁が南北に突出する不整形な土坑で東西2.21m、南北2.67m、深さ0.16mを測る。遺物は土師器・青磁・滑石製品の細片が少量である。

SK1096(第118図)　SK1007の南東に位置する。不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.76m、幅1.34m、深さ0.14mを測る。断面は浅皿状をなし、底面にはピット状の掘り込みを有する。遺物は板状圧痕のない回転糸切り底の土師器小皿等の細片が少量である。

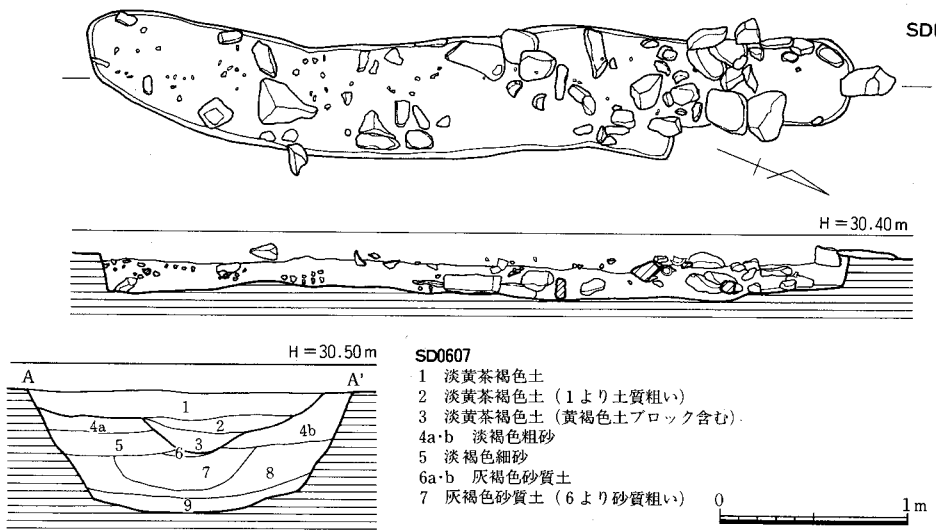
SK1154(第118図)　調査区の中央西端に位置する。西側をSD0610に切られる。残存で長さ1.56m、幅1.06m、深さ0.25mを測り、礫層に掘り込まれる。底面には凹凸が見られる。覆土は淡黄色灰色土を主体とする。

出土遺物(第119図269・270)　269は施釉陶器である。畳付き内まで施釉され、釉色は茶オリーブ色を呈する。畳付きには目跡が認められる。270は玉縁の口縁部を呈する白磁碗である。釉色はくすんだ白色。他に土師器埦・瓦器等の細片、径3～10cm程の鉄滓が10数点出土している。

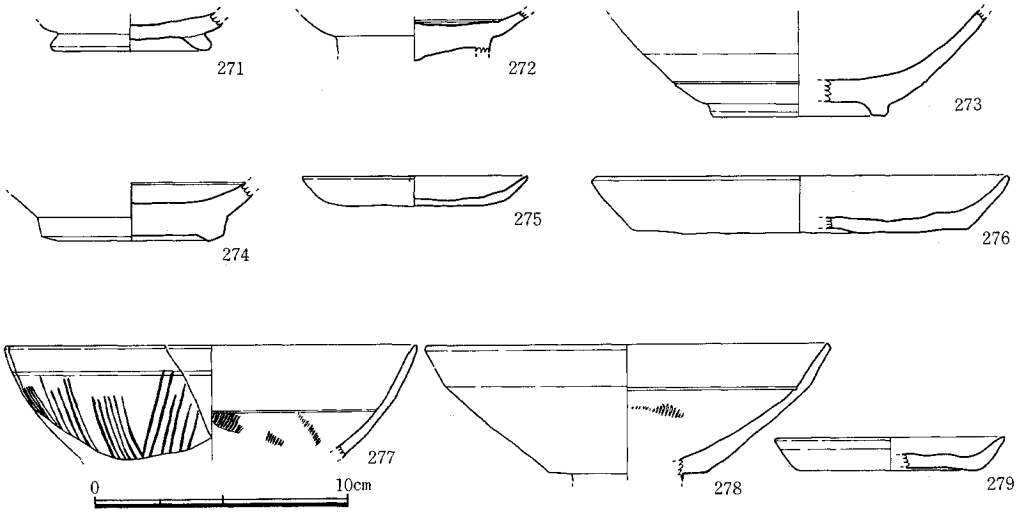
(3)　溝

SD0607(第120図)　調査区の中央西側に位置する。東西方向にはしるが西端で南に矩形に短く折れる。トレンチの土層より数度の掘り直しが観察されたが、調査は最終に掘削された溝にとどめた。幅0.8～2.2m、深さ0.2～0.4mを測る。

出土遺物(第121図271～274)　271は土師器埦である。復元底径6.0cmを測る。外底部には×印のヘラ記号が見られる。272・274は白磁碗である。272は内底部見込みに太い沈線状の段を有する。灰白色の釉が高台外面までかけられる。274は復元底径6.0cmを測る。幅広の高台をもち、



第120図　SD0607土層断面、SD0610実測図(1/40)



第121図　SD0607・0610・1006出土遺物実測図（1/3）

内底部見込みに沈線を有する。釉色は黄味がかった白色を呈する。体部外面及び底部は露胎。273は青磁碗である。復元底径6.8cmを測る。体部外面下半には沈線を１条有し、内底部見込みには目跡が認められる。釉は淡緑色を呈し、高台畳付部はカキ取られ露胎となる。

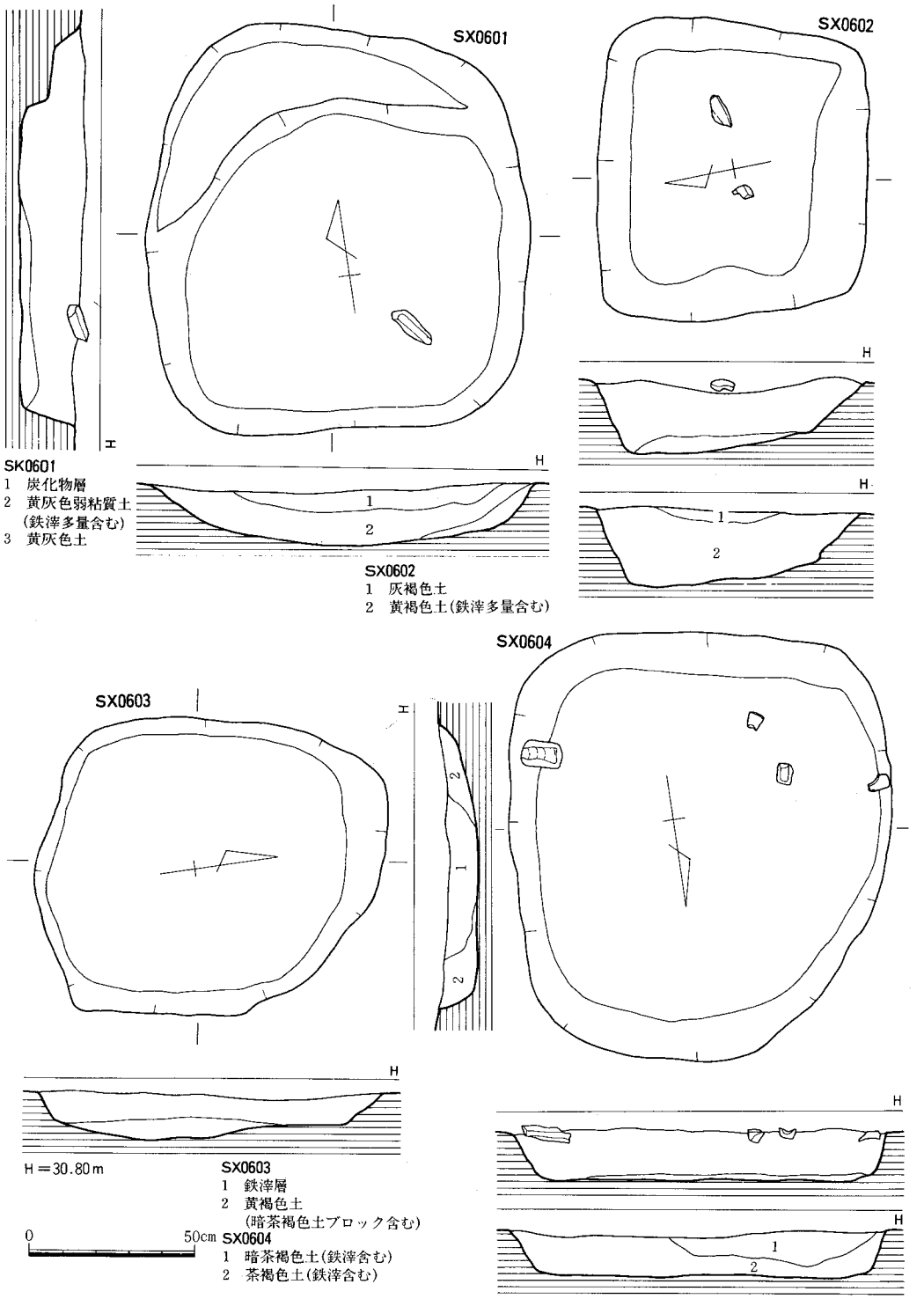
SD0610（第120図）　SD0607の西約４mに位置し、長さ4.08m、幅0.67m、深さ0.22mを測る。覆土中には投棄された拳大～人頭大の礫が見られ、また焼土が散在して観察された。

出土遺物（第121図275～278）　275は土師器小皿である。復元口径8.8cm、器高1.2cmを測る。外底部はヘラ切りで板状圧痕を有する。276は土師器坏である。復元口径16.4cm、器高2.3cmを測る。外底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。277・278は青磁碗である。277は復元口径16.3cmを測る。体部外面には片彫り風の放射状の沈線、内面には細かい櫛目を有する。釉色は淡オリーブ色を呈する。278は復元口径15.8cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、上位で内側にやや屈曲する。屈曲部の内面には沈線が施される。また沈線下位には細かい櫛目を有する。高台脇まで淡灰青色の釉が施される。

SD0628　調査区の北西に位置する。北西端は調査区外に延びる。長さ8.9m、幅0.45～0.70m、深さ0.15m前後を測る。断面はU字形を呈する。覆土は暗茶褐色土を主体とする。遺物は土師器の細片が数点出土したにとどまる。

SD0629　SD0628の南東に0.3mの空閑地を挟み位置する。長さ10.5m、幅0.35～0.70m、深さ0.10～0.15mを測る。断面形・覆土・遺物の内容はSD0628に同じ。

SD1006　調査区の中央北寄りに位置する。南西－北東方向にはしり、長さ7.7m、幅0.25～0.35m、深さ0.10mを測る。断面は逆梯形を呈する。



第122図　SX0601・0602・0603・0604実測図（1/20）

出土遺物(第121図279)　土師器小皿である。復元口径9.0cm、器高1.3cm、底径7.4cmを測る外底部は回転糸切りで板状圧痕は認められない。胎土には金雲母片を含む。

SD1114　SD1006の南に位置する。北東方向から北西方向に矩形に屈曲し、北西端は短く二又に分かれる。幅0.25～0.55m、深さ0.1m前後を測る。断面は逆梯形。遺物は回転糸切り底の土師器小皿等の細片が少量である。

SD1125　SD1114の西に位置する南北方向の溝である。長さ10.1m、幅1.0m、深さ0.15mを測る。断面は逆梯形を呈する。遺物には土師器・白磁・青磁の細片がある。

(4)　製鉄関連遺構

調査区の北東隅において多量の鉄滓、鞴羽口等の遺物を出土する土坑及び溝を確認したが、調査所見からはこれらが製錬炉あるいは鍛冶炉といった直接的な鉄・鉄器生産の遺構とは考えられない。ここでは関連遺構としてとりまとめ、報告を行なう。

SX0601(第122図)　やや不整な隅丸方形を呈する土坑である。北側にL字状の平坦面を有する。長さ1.22m、幅1.16m、深さ0.18mを測り、断面は浅皿状をなす。鉄滓は2層に集中して見られた。焼壁・焼土等は確認されなかった。出土鉄滓の総重量は16.4kg。

出土遺物(第123図280～283)　280・281は瓦器椀である。280は底径7.6cmを測る。やや幅広の低い高台を貼り付ける。器面は荒れ調整は不明。281は底径5.8cmを測る。外側に開く低い高台を貼り付ける。内面はヘラミガキを施すが、外面は不明。280・281ともに外面及び内底部見込みに鉄分の付着が認められる。282・283は鞴羽口。282は復元径10.1cm、復元孔径5.2cmを測る大型品である。283は復元径8.2cm、復元孔径3.4cmを測る。外面には鉄分の付着が認められる。共に胎土には砂粒を多く混じえる。他にも細片の羽口が出土している。

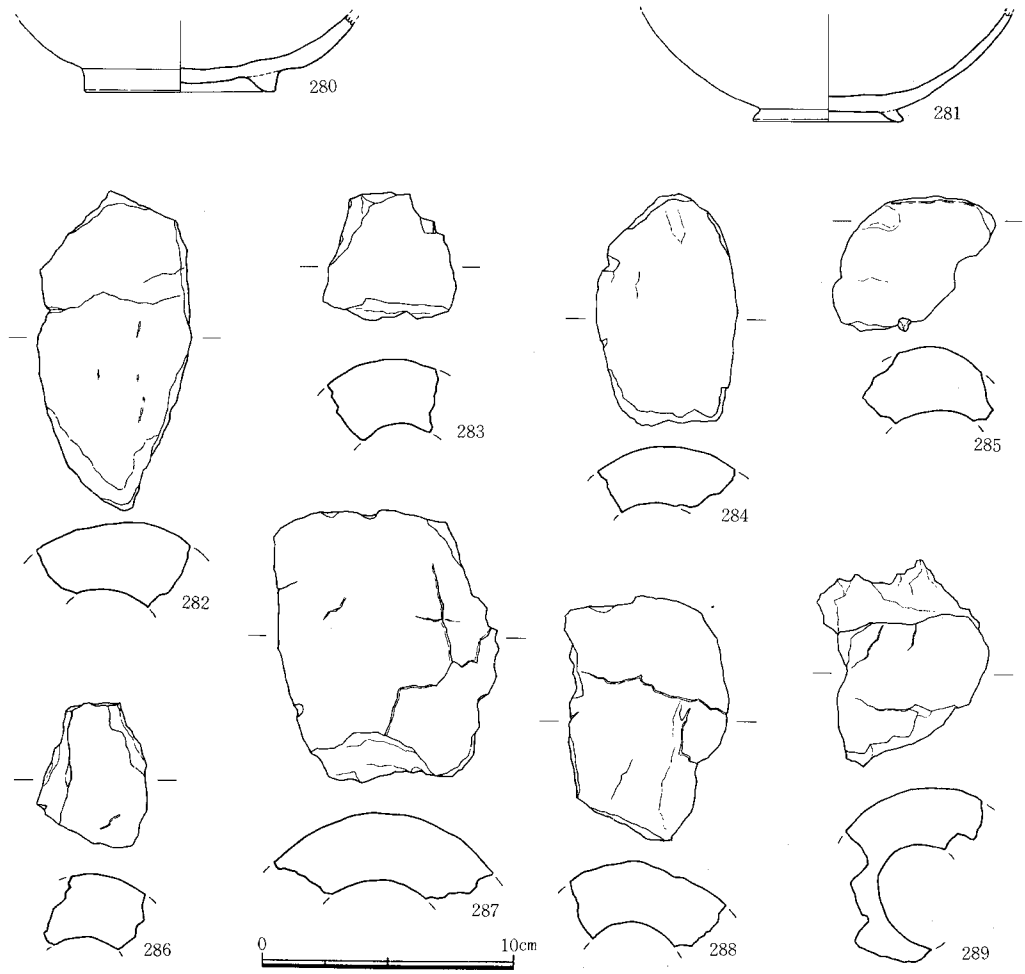
SX0602(第122図)　SX0601の西1.8mに位置する隅丸方形の土坑である。長さ0.91m、幅0.81m、深さ0.24mを測る。断面は逆梯形を呈するが、底面は北に傾斜する。焼壁・焼土等は認められなかった。覆土には多量の鉄滓を含み、その総重量は8.9kg。

出土遺物(第123図284・285)　共に鞴羽口である。284は復元径8.4cm、復元孔径4.4cmを測る。外面の一部は二次的加熱によって淡黒灰色に変色する。285は端部の破片資料で、先端には鉄分及び溶解物の付着が認められる。共に胎土に多量の砂粒を含む。

SX0603(第122図)　SX0601の北に位置する不整な隅丸方形の土坑である。長さ1.05m、幅0.89m、深さ0.10mを測る。断面は浅皿状を呈する。焼壁・焼土は認められない。出土した鉄滓の総重量は4.6kg。土器・鞴羽口等の遺物は出土していない。

SX0604(第122図)　SX0603に東接する。長さ1.31m、幅1.14m、深さ0.11mを測る不整な隅丸方形の土坑である。断面は逆梯形を呈する。同様に焼壁・焼土は認められず、多量の鉄滓が出土した。その総重量は10.1kg。

出土遺物(第123図286・287)　共に鞴羽口である。286は復元径6.8cm、復元孔径3.6cmを測る。



第123図　SX0601・0602・0604・0605出土遺物実測図（1/3）

287は復元径10.4cm、復元孔径5.8cmを測る大型品で外面の一部は淡灰色に変色する。

SX0605　SX0604の東約3.5mに位置する溝である。北端は調査区外に延びる。長さ6.5m、幅0.4～0.7m、深さ0.15m前後を測る。南端でやや屈曲し、幅広になる。断面は緩いU字形を呈する。覆土は淡黄褐色土で、鉄滓を含む。出土鉄滓の総重量は10.9kg。

出土遺物（第123図288・289）　共に鞴羽口である。288は復元径9.4cm、復元孔径3.8cmを測る。強い二次的加熱により灰褐色に変色する。289は端部と考えられる。先端部には鉄分・溶解物が充填する。復元径8.2cm、孔径4.0cmを測る。内外の大部分が淡灰色に変色する。

7　小結

今回の調査で確認された中世の遺構の大半は出土遺物よりおおよそⅠ期（11世紀末～12世紀中頃）、Ⅱ期（12世紀後半～14世紀前半）の2期に区分できる。以下この区分に拠って主要な遺構の時期的位置付けを行ないたい。

Ⅰ期の遺構としては4区の北側に位置する掘立柱建物群（SB0581・0582・0583・0584）が該当する。出土遺物はヘラ切りの土師器や瓦器埦が主体を占める。いずれの掘立柱建物も柱筋が重複しており、同時期の存在は考えられない。また柱穴掘方の重複関係は認められないことから直接的な前後関係を把握することはできないが、SB0581はヘラ切りと回転糸切りの土師器が共伴しており、当群中では後出する建物であると考えられる。

Ⅱ期には大方の遺構が収まる。1区ではピットの集中がみられ、6棟の掘立柱建物を確認した。柱穴掘方の出土遺物は少量であるが、回転糸切りの土師器のみが出土することや、周辺の他の遺構の遺物と照合しても当期におくことは消極的ながらも妥当であろう。SB0375は白磁碗（Ⅳ－1a類）や土師器法量から12世紀後半代の先行する建物と思われる。また同区の井戸（SE0016）は瓦質の擂鉢から14世紀前半代の所産と考えられ、後出する建物に伴う遺構であろう。2区においては2条の比較的規模の大きな溝を検出した。SD0381は出土遺物が少量であるが、龍泉窯系の青磁碗（Ⅰ－5a類）より埋没時期を13世紀後半から14世紀前半に求めておきたい。SD0382の出土遺物は時期的な幅が広い。12世紀後半代に位置付けられる東播系の鉢もみられるが、白磁皿（Ⅸ－1b類）や小型化の進んだ土師器坏よりその埋没時期を14世紀前半までと考える。5区は1区に類似した遺物の内容を呈する。4棟の掘立柱建物を確認したが、SB1203のみに図化し得る遺物が出土している。土師器の法量より13世紀代の建物と思われる。他の土坑・溝からも当期に該当する遺物が少量ながら出土している。ただ当区南端に位置するSB1204は北側の遺構群と隔絶しており時期的な差異を示しているのかもしれない。

また4・5区において製鉄関連の遺物を出土する遺構（SX0480・0481・0567・0601～0605）を確認した。SX0601より11世紀末～12世紀代の瓦器埦が出土している。いずれの遺構も近接して営まれており、ある程度まとまった時期の所産であろう。鉄滓の分析（付論参照）の結果、製錬・精錬滓が含まれており、付近に直接的な生産遺構の存在した可能性が確然高い。

最後に周辺遺跡の調査成果をふまえ、結びとしたい。北接する清末遺跡群（第2次調査）においてはⅡ期に該当する大規模な集落が確認されており、時期的推移が明確にまとめられている[1)]。それによると12世紀中頃に大型建物群が造営され、12世紀後半以降には集落の成立・展開が14世紀前半まで確認されている。また大型建物群とともに周辺土地開発を担ったと考えられる大溝が12世紀後半には掘削されている。安通遺跡におけるⅠ期の掘立柱建物群は大型建物群に先行するもので興味深い。Ⅱ期の遺構群のありかたは小規模ながらも清末遺跡のそれとほぼ一致しており、新たな土地開発によって成立した集落の周辺的様相を示すものと考えられる。

註1　長家伸「Ⅴ－8．まとめ」『入部Ⅲ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集）福岡市教育委員会　1992

付　論　　安通遺跡出土鉄滓の金属学的調査

大　澤　正　己

概　　要

安通遺跡の中世（11世紀末～12世紀）に属する土坑及び溝より出土した鉄滓５点を調査して次の点が明らかになった。

中世の廃棄土坑及び溝（一種の芥溜）５基より出土した鉄滓は、砂鉄製錬滓から鉄素材の成分調整を行なった精錬鍛冶滓（大鍛冶的作業）までが混在してた。精錬鍛冶滓には赤熱鉄材の鍛打によって派生（表面酸化膜）した鍛造剝片が付着しており、確実に鍛造作業までの確認がとれた。土壙周辺で製鉄炉と鍛冶炉の存在が推定される。

なお、製鉄原料の砂鉄は、従来福岡平野でみられる低チタン含有酸性砂鉄よりチタン（Ti）が多く、製錬滓の二酸化チタン（TiO_2）として8.37%（従来品２～４%）という高値であった。この高値チタン砂鉄（砂鉄中のTiO_2として４～６%）の使用現象が何に由来するのか今後の研究課題となってくる。

１．いきさつ

安通遺跡は、福岡市早良区大字東入部に所在する古墳時代中期頃から中・近世にわたる複合遺跡である。当遺跡内の11世紀末から12世紀に属する５基の廃棄土坑及び溝より出土した鉄滓の専門調査を福岡市教育委員会より要請されたので金属学的調査を行なった。

２．調査方法

２－１．供試材

Table.１に調査に供した５点の鉄滓の履歴を示す。

Table.１　供試材の履歴と調査項目

符号	試　料	出土位置	計測値		調査項目				鉄滓出土量 (kg)
			大きさ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	CMA調査	化学組成	
YDR-１	ガラス質滓	SX0601	100×70×30	230	○			○	16.4
2	鉄滓	SX0602	40×40×20	60	○			○	8.9
3	〃	SX0603	70×35×20	60	○	○	○	○	4.6
4	〃	SX0604	70×40×25	100	○	○		○	10.1
5	〃	SX0605	60×45×23	135	○			○	10.9

2－2．調査項目

(1) 肉眼観察

(2) 顕微鏡観察

(3) ビッカース断面硬度

(4) CMA（Computer Aided X-ray Micro Analyzer）調査

(5) 化学組成

3．調査結果と考察

(1) YDR-1：ガラス質鉄滓

① 肉眼観察

表皮は黒褐色を呈し、滑らか肌に気泡を散発させるガラス質の多い滓である。裏面は炉材粘土との反応痕を有し、炉底に溜まった形で形成された楕円形の塊である。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の①～⑤に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質中に、①にみられる様な半還元砂鉄粒子、②③にある還元された金属鉄の錆化物のゲーサイト（Goethite：α-FeO・OH）、更には④⑤の白色粒状金属鉄や白色微結晶で樹状晶を呈するマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）らから構成される。製錬時の排滓に分類されよう。

③ 化学組成

Table. 2に示す。鉄分が少なくてガラス質の多い滓である。全属鉄（Total Fe）は25.97%に対して、金属鉄（Metallic Fe）が0.29%、酸化第1鉄（FeO）は12.39%、錆化鉄が組織中に認められた様に、かなり含有されて22.95%の割合となっている。ガラス質成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$)は多くて57.8%含む。砂鉄特有元素はガラス質滓としては多くて二酸化チタン（TiO_2）が3.25%、バナジウム（V）0.12%で製錬滓に分類される。他の随伴微量元素は通常レベルで酸化マンガン（MnO）0.20%、酸化クロム（Cr_2O_3）0.278%、硫黄（S）0.014%、五酸化燐（P_2O_5）0.22%、銅（Cu）0.001%であった。

(2) YDR－2：鉄滓（精錬鍛冶滓）

① 肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈し、粗鬆肌に木炭痕を残し、かつこれに鍛造剝片を付着する。ガラス質主体の滓であるが金属鉄を含有していた為に鉄錆を多く発していた。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の⑥～⑧に示す。鉱物組成はガラス質のみで酸化鉄の結晶は認められなかった。⑦⑧は表皮の錆化鉄に付着した鍛造剝片である。鉄塊状の赤熱鉄材より鍛打によって剝落した厚手で凹凸をもつ酸化膜から、鉄鋌状に成形されて平坦面を有する薄手剝片までが存在する。厚

さは、厚いもので100μ、薄手で30μ程度であった。鍛造剝片によって鍛打作業の実証と鉄素材成形工程が推定できる。なお、鍛造剝片は酸化鉄なので鉱物組成はヴスタイト（Wüstite：FeO）である。該品は精錬鍛冶滓に分類される。

③　化学組成

Table. 2に示す。顕微鏡組織では、鉱物組成としてガラス質スラグと鍛造剝片の検出のみであったが、全鉄分（Total　Fe）が47.60%と多く、又、ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は26.63%と少ない。供試材は検鏡試料と化学分析試料で偏析があったと考えられる。鉄分のうち、酸化第1鉄（FeO）が24.13%に対して酸化第2鉄（Fe_2O_3）が41.13%と多く錆化鉄の多い事を表わしている。この錆化鉄や鍛造剝片には砂鉄特有成分は含まれないので二酸化チタン（TiO_2）は少なく0.59%、バナジウム（V）0.03%と低減する。他の随伴微量元素は前述のYDR-1鉄滓より低目傾向を呈する。精錬鍛冶滓の成分系である。

(3)　YDR-3：鉄滓（精錬鍛冶滓：多種鉱物集結鍛冶滓）

①　肉眼観察

本品は単一鉄滓でない。製錬滓や鍛冶滓、木炭、鍛造剝片らが再結合した滓である。表裏共に赤褐色の鉄錆に覆われ、木炭痕と共に粗鬆な肌をもつ。精錬鍛冶滓であろう。

②　顕微鏡組織

Photo. 2に示す。①は白色粒状のヴスタイトが大量に晶出した精錬鍛冶滓本来の晶癖である。②は製錬時の炉底滓にみられる鉱物組成で淡灰白色多角形のウルボスピネルと白色粒状小結晶のヴスタイトから構成される。③は木炭の木目が鉄分を取り込み、外周部はゲーサイト（Goethite：α-FeO・OH）が認められる。④は錆化鉄で鉄中に淡灰白色のウルボスピネルを包含する。又、外周部にはスラグを付着し、ウルボスピネルとヴスタイトが晶出している。⑤⑥は鍛造剝片が錆化鉄中に捲込まれているのが認められる。⑦はヴスタイトの凝集部を示す。⑧はウルボスピネル結晶の周辺がヴスタイトに変化する様子が伺われる組織である。以上の如く、多様な組織を呈する鉱物の集合体が本鉄滓である。

Photo. 6に顕微鏡試料断面の5倍で撮ったマクロ組織を示す。多孔質で緻密な組織でない事が判るであろう。多種鉱物集結鍛冶滓とも云うべき特殊な鉄滓である。精錬鍛冶滓に分類すべきであろう。

③　ビッカース断面硬度

Photo. 2の⑥～⑧に硬度圧痕写真を示す。⑥は鍛造剝片の硬度で硬さは478Hvである。鍛造剝片の鉱物組成は、酸化鉄のヴスタイト（Wüstite：FeO）であって、文献硬度値が450～500Hvであるので、その範囲に収まっている。鍛造剝片の鉱物はヴスタイトと同定できる。

⑦は、ヴスタイトが大きく成長した結晶の硬度測定結果である。値は417Hvで、文献硬度値[①]を若干下まわるが、ヴスタイトとみてよかろう。

⑧はウルボスピネルの硬度圧痕である。硬度値は824Hvと硬質となる。ウルボスピネルの文献硬度値はないが、マグネタイト（Magnetite：FeO_4）が500～600であり、これにチタンが固溶するので、この程度の値は呈するものと考えられる。

④ CMA調査

Photo. 4 にウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）の分析を行なった特性X線像を示す。SE（2次電子像）は分析対象個所を表わす。分析元素の存在は、白色輝点の集中度によって判別する。ウルボスピネルは化学式が$2FeO \cdot TiO_2$で表わされる様にFeとTiの化合物である。不定形結晶のウルボスピネルは鉄（Fe）とチタン（Ti）に白色輝点が集中する。白色粒状のヴスタイトには、鉄（Fe）にのみ白色輝点が認められ、チタン（Ti）には痕跡程度の白色輝点である。ヴスタイトはFeOが化学式（示性式）であるので、この様な結果となってくる。又、該品の始発原料が砂鉄なので、砂鉄特有元素のバナジウム（V）の検出もあった。これにクロム（Cr）も固溶される事が判明した。白色輝点は弱くチタン（Ti）と重なる。一方、ウルボスピネルとヴスタイトの粒間には、暗黒色ガラス質スラグが介在し、ここはガラス質成分の硅素（Si）、アルミ（Al）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）らに白色輝点が検出された。

次に、Photo. 5 には凝集ヴスタイトの特性X線像を示す。ヴスタイトには鉄（Fe）と酸素（O）に白色輝点が集中し、FeOである事を提示してくれる。極く微量のチタン（Ti）はヴスタイトに含有されて、該品が砂鉄系であることを教えてくれる。

⑤ 化学組成

Table. 2 に示す。全鉄分（Total Fe）は45.15%に対して金属鉄（Metallic Fe）が0.37%、酸化第1鉄（FeO）23.27%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）38.17%の割合である。錆化鉄が多い。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は25.06%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）は4.66%、バナジウム（V）0.25%であり、顕微鏡組織の鉱物組成を勘案すると精錬鍛冶滓に分類される。酸化マンガン（MnO）は、鍛冶滓としては高めの0.30%、酸化クロム（Cr_2O_3）も多くて0.594%であった。硫黄（S）0.036%、五酸化燐（P_2O_5）0.32%らも高めであった。多種鉱物集結滓であるので、此の様な不純物元素は多くなったと考えられる。

(4) YDR-4：鉄滓（製錬滓）

① 肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈し、粗鬆肌に木炭痕を残した緻密質鉄滓の炉内残留滓である。裏面は黒褐色を呈し、局部的に鉄錆を発している。

② 顕微鏡組織

Photo. 3 の①～⑤に示す。鉱物組成は淡灰白色多角形のウルボスピネルと白色粒状のヴスタイト、この結晶粒内には茶褐色微小結晶のウルボスピネルを析出する。これに淡褐色木ずれ状

のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）、基地の黒褐色ガラス質スラグらから構成される。砂鉄製錬滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度

Photo. 3 の④⑤に硬度圧痕測定写真を示す。⑤はヴスタイト結晶で硬度値は473Hvである。ヴスタイトの文献硬度値は、前述した様に450～500Hvの範囲なので、この範疇に収まる。⑥はウルボスピネルで、硬度値は847Hvである。これもウルボスピネルと同定できる。砂鉄製錬滓と同定される。

④　化学組成

Table. 2 に示す。炉内残留滓の鉄分の多い滓である。全鉄分（Total Fe）は46.83%に対して金属鉄（Metallic Fe）は、0.60%、酸化第1鉄（FeO）38.61%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）23.19%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は25.495%であり、このうち塩基性成分（$CaO+MgO$）が3.19%と高めである。更に砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）が8.37%と福岡平野内では従来あまりみられない高さであり、バナジウム（V）0.32%が含まれていた。砂鉄製錬滓に分類できる。又、酸化マンガン（MnO）も0.38%と当遺跡内出土滓で最高値を呈していた。他の随伴微量元素らは大差なく酸化クロム（Cr_2O_3）0.455%、硫黄（S）0.026%、五酸化燐（P_2O_5）0.33%、銅（Cu）0.001%であった。

(5)　YDR-5：鉄滓（精錬鍛冶滓）

①　肉眼観察

表皮は茶褐色を呈し、滑らか肌に木炭痕を残す椀形滓の破片である。鍛冶炉の炉底に堆積形成された滓で、裏面は高温のため青灰色に変色した炉材粘土を付着する。精錬鍛冶での排出滓に分類される。

②　顕微鏡組織

Photo. 3 の⑥～⑧に示す。鉱物組成は、白色柱状のヴスタイト、灰色長柱状結晶のファイヤライト、基地は暗黒色ガラス質スラグらから構成される。精錬鍛冶滓の晶癖を示す。

③　化学組成

Table. 2 に示す。鉄分は多く、全鉄分（Total Fe）が52.85%、金属鉄（Metallic Fe）が0.11%、酸化第1鉄（FeO）54.82%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）14.48%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は27.65%が含まれる。二酸化チタン（$TiO_2$）は1.26%、バナジウム（V）0.07%で低値となり精錬鍛冶も末期近くの排出滓であろう。酸化マンガン（MnO）も低値となり0.09%、酸化クロム（Cr_2O_3）0.131%、硫黄（S）0.018%、五酸化燐（P_2O_5）0.34%、銅（Cu）0.001%であった。

4．まとめ

安通遺跡の中世に属する5基の廃棄土坑及び溝より約51Kgの鉄滓が出土した。この鉄滓の中には、砂鉄製錬滓があり、更には荒鉄から鉄素材（鉄鋌状、棒状半製品）を造りだす成分調整で排出された可能性をもつ精錬鍛冶滓まであった。製鉄原料は砂鉄系であるが、古代の福岡平野で多くみられた従来品（TiO_2：2.0～4.0%）よりチタン分が高くて（TiO_2：8.37%）異質であった。古代から中世への技術革新のあった産物としての表われであろうか。

外径8～10cm、内径4～5cmの大型羽口の検出もあった。鍛錬鍛冶用は内径2～3cm止まりであって、今回出土品は製錬か精錬用であろう。前者の製錬用の可能性が強いが、鉄滓中にガラス化したものがあり、かつ、多種鉱物の集結した滓が存在するところから、精錬鍛冶も、古代と異なる技術展開が想定されそうである。

更に、精錬鍛冶滓には鍛打作業で赤熱鉄材表面から剝落した鍛造剝片が検出された。この鍛造剝片の厚みと形状を観察すると、精錬工程は、荒鉄の表面未調整(剝片は厚手で凹凸をもつ)時から鉄鋌状半製品（平坦で薄手の剝片）までの鍛造経過が想定できた。鍛造剝片の検出は、遺構内での鍛打鍛冶作業を実証する重要遺物と考えられる。

一方、精錬鍛冶は、数回以上の繰返し作業であり、これに伴なって排出鍛冶滓も成分変動をもつものである。例えば、原料中のチタン（Ti）とバナジウム（V）の含有量は製錬滓→精錬鍛冶→鍛錬鍛冶→製品となると漸次減少してゆく。故にTi/Fe、V/Feの比をとって相関関係をみたのがFig. 1である。この成分系は地域や遺跡の作業内容によって或るまとまりを持ち、45°の直線上に分布する傾向がある[②]。

これを元にしてFig. 1をみてみると、YDR-4とYDR-1は砂鉄製錬滓で、45°直線の右上にシフトし、YDR-3が初期精錬鍛冶滓となり、YDR-2は45°直線左下へ移動して末期精錬鍛冶滓と位置ずけられる。YDR-5も末期精錬鍛冶滓であるが、こちらは製造履歴が異なる可能性をもち、45°直線から大きく外れている。

なお、グラフ中の他の試料は羽根戸地区の古墳供献鉄滓や製鉄遺跡出土品の分析結果である。それぞれ製造時期や履歴が異なるので相関は無さそうである。

注

① 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

符　号	硬度測定対象物		硬度実測値	文献硬度値※1
	Fayalite ($2FeO \cdot SiO_2$)	※2	560,588	600～700Hv
	磁　　鉄　　鉱	※2	513,506	530～600Hv
	マ ル テ ン サ イ ト	※2	641	633～653Hv
	Wüstite (FeO)	※3	481,471	450～500Hv
	Magnetite (Fe_3O_4)	※4	616,623	500～600Hv
	白　　鋳　　鉄	※5	563,506	458～613Hv
	亜共析鋼 (c：0.4%)	※6	175	160～213Hv

※1　日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968他。
※2　滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物　7C末～8C初
※3　兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛冶滓　4C後半
※4　新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製錬滓 Ulvösplhel 平安時代
※5　大阪府東大阪市西之辻16次調査出土鋳造鉄斧　古墳時代前期
※6　埼玉県大宮市御蔵山中遺跡鉄鏃　5C中頃

② ㈠拙稿「松丸製鉄遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『城井谷Ⅰ』築城町文化財調査報告書第2集　福岡県築城町教育委員会　1992

㈡拙稿「長者原田迎遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『長者原田迎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集　日田市教育委員会　1992

㈢拙稿「矢部奥田遺跡・矢部古墳群A・堀越遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『矢部奥田遺跡』岡山県埋蔵文化財報告23　岡山県古代吉備埋蔵文化財センター　1993

㈣拙稿「津山市内遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査」『大畑遺跡』（津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告7）津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集　津山市教育委員会　津山市土地開発公社　1993

謝辞

本稿作成に当って新日鉄TACセンター藤田亮輔氏と東田輝男氏に大変お世話になった。ここにお礼申し上げます。

Table. 2　化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metalic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe	注
YDR 1	安通	1次5区 SX0601	ガラス質滓製錬系	11末～12C	25.97	0.29	12.39	22.95	39.57	9.96	3.99	0.94	2.34	0.965	0.20	3.25	0.278	0.014	0.22	0.38	0.12	0.001	57.765	2.224	0.1251	①
2	〃	〃 SX0602	精錬鍛冶滓	?	47.60	0.08	24.13	41.13	20.08	4.60	0.56	0.29	0.735	0.365	0.10	0.59	0.119	0.024	0.15	0.74	0.03	0.001	26.63	0.559	0.0123	〃
3	〃	〃 SX0603	精錬鍛冶滓	?	45.15	0.37	23.27	38.17	16.99	5.44	1.05	0.65	0.530	0.400	0.30	4.66	0.594	0.036	0.32	1.17	0.25	0.001	25.06	0.555	0.1032	〃
4	〃	〃 SX0604	砂鉄製錬滓	?	46.83	0.60	38.61	23.19	16.26	5.10	2.20	0.99	0.655	0.290	0.38	8.37	0.455	0.026	0.33	0.23	0.32	0.001	25.495	0.544	0.1787	〃
5	〃	〃 SX0605	精錬鍛冶滓	?	52.85	0.11	54.82	14.48	18.55	5.54	1.84	0.69	0.710	0.320	0.09	1.26	0.131	0.018	0.34	0.10	0.07	0.001	27.65	0.523	0.0238	〃
HAN-1	羽根戸古墳群	B群5号墳	砂鉄製錬滓	6C末～7C前半	48.45	0.16	53.11	10.02	20.16	3.99	3.43	1.12	1.07	0.313	0.27	1.88	0.259	0.021	0.380	0.07	0.425	0.002	30.083	0.621	0.0388	②
P-861	羽根戸古墳群	南E-7号墳前庭部上層SK01	〃	6C中～後半	45.4	—	47.5	12.07	24.32	5.82	4.20	1.05	—	—	0.22	1.62	0.057	0.044	0.14	T·C 0.16	0.20	0.003	35.39	0.779	0.0356	③
J-881	羽根戸古墳群	E群3号墳羨道	砂鉄製錬滓	7C前半	48.0	—	53.5	9.09	20.00	4.33	5.66	0.94	—	—	0.25	2.24	0.06	0.036	0.14	TC 0.08	0.18	0.005	30.93	0.644	0.0466	④
2	〃	〃	〃	〃	45.4	—	53.2	5.73	22.00	4.51	4.88	1.58	—	—	0.31	2.42	0.09	0.018	0.019	0.05	0.23	0.006	32.97	0.726	0.0533	〃
3	〃	〃	〃	〃	46.5	—	46.6	14.62	10.66	3.22	1.77	1.40	—	—	0.83	17.14	0.57	0.065	0.024	0.14	0.63	0.007	17.05	0.366	0.3686	〃
4	〃	〃	鍛錬鍛冶滓	〃	51.2	—	54.9	12.13	23.50	5.23	2.00	0.66	—	—	0.10	0.19	0.05	0.054	0.25	0.15	0.010	0.007	31.39	0.613	0.0037	〃
8	〃	N群第27号	砂鉄製錬滓	〃	47.8	—	51.8	10.76	19.70	4.49	2.93	1.06	—	—	0.21	1.92	0.12	0.027	0.032	0.08	0.27	0.005	28.18	0.589	0.0401	〃
9	〃		〃	弥生終末～奈良	59.0	—	37.4	42.7	10.80	2.27	1.90	0.49	—	—	0.15	1.12	0.08	0.028	0.10	0.14	0.17	0.007	15.46	0.262	0.0189	〃
HND1	羽根戸	羽根戸区域管理予定地内試掘 T-217出土 1991.12.13	砂鉄製錬滓	?	28.70	0.15	25.50	12.48	41.38	11.60	2.03	0.94	1.63	0.280	0.23	2.93	0.060	0.013	0.26	0.03	0.16	0.001	57.86	2.016	0.1020	⑤
2	〃	〃	〃	?	45.50	0.27	51.44	7.50	23.90	6.62	2.43	0.79	0.073	0.135	0.31	3.92	0.173	0.009	0.28	0.02	0.22	0.001	33.948	0.746	0.0861	〃
X-851A	羽根戸	1号製鉄炉	砂鉄製錬滓	平安時代？	60.9	—	56.3	24.47	8.92	3.19	1.39	0.58	—	—	0.18	1.92	0.20	0.004	0.27	0.11	0.28	0.005	14.08	0.231	0.0315	⑥
851B	〃	〃	〃	〃	28.8	—	17.75	21.38	38.1	9.98	1.39	0.75	—	—	0.13	1.17	0.051	0.042	0.093	0.85	0.18	0.005	50.22	1.743	0.0406	〃
853	〃	SH-15(土坑)	精錬鍛冶滓	奈良～平安·鎌倉	67.3	—	65.7	23.21	4.68	2.36	0.67	0.50	—	—	0.12	1.17	0.26	0.004	0.090	0.093	0.12	0.005	8.21	0.121	0.0173	〃
854	〃	SD-5(溝)	砂鉄製錬滓	平安	47.8	—	45.3	21.39	16.90	6.52	2.80	1.29	—	—	0.22	1.95	0.044	0.010	0.17	0.19	0.26	Nil	27.51	0.575	0.0407	〃
855	〃	SD'-5(〃)	精錬鍛冶滓	〃	67.3	—	54.8	35.4	2.88	2.17	0.12	0.85	—	—	0.19	1.25	0.28	0.014	0.19	0.15	0.38	0.005	6.02	0.089	0.0185	〃
856B	〃	SD-6(〃)	砂鉄製錬滓	古墳後期～平安·鎌倉	55.2	—	24.9	51.3	10.48	4.25	1.05	1.04	—	—	0.21	3.19	0.080	0.065	0.28	0.19	0.25	Nil	16.82	0.304	0.0577	〃
858	〃	G-Ⅶ攪乱	鍛錬鍛冶滓	?	58.6	—	45.6	33.2	11.80	4.62	1.11	0.50	—	—	0.077	0.83	0.22	0.009	0.21	0.21	0.12	0.005	18.03	0.307	0.0141	〃

Table. 2 の注

① 大澤正己「安通遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『入部Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集　福岡市教育委員会　1993

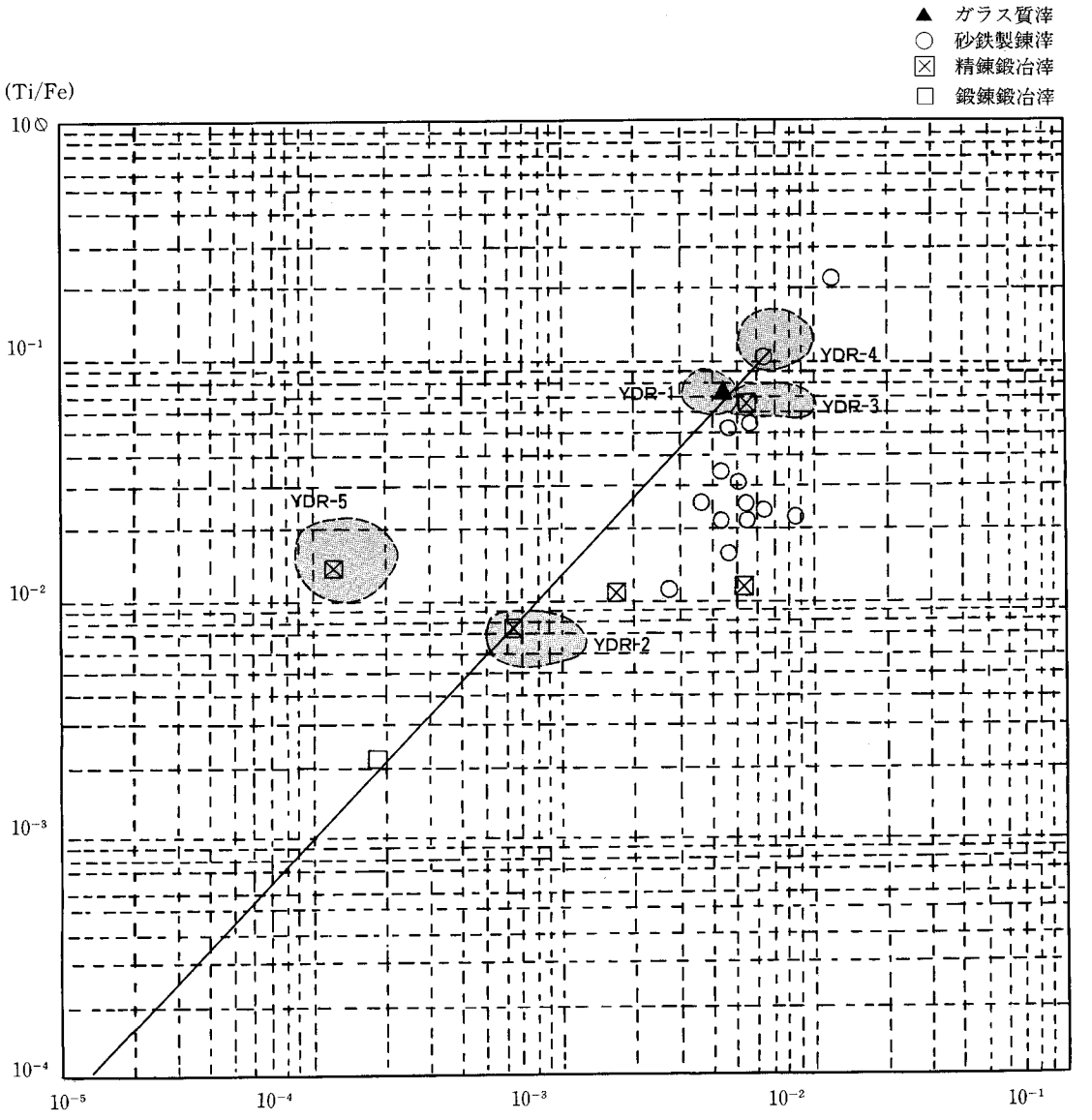
② 大澤正己「羽根戸古墳群出土鉄滓の金属学的調査」『羽根戸古墳群(4)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第347集　福岡市教育委員会　1993

③ 福岡市教育委員会　山崎龍雄氏調査　昭和61年10月18日に現地にて鉄滓預り

④ 福岡市教育委員会　横山邦継氏・宮井善朗氏調査　昭和63年5月2日重留発掘事務所にて鉄滓預り

⑤ 福岡市教育委員会　横山邦継氏調査　平成3年12月11日現地にて鉄滓預り　羽根戸区画整理予定地内試掘T-217出土　1991.12.3

⑥ 大澤正己「羽根戸遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『羽根戸遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集　福岡市教育委員会　1986



・点線囲みの5点が安通遺跡出土遺物
・他のプロットは羽根戸関連遺物
・Table. 2の数値のTi/T. Fe 、 V/T. Feが基礎データ
・網目区域は安通遺跡関係　製鉄遺跡で製作された鉄素材・鉄器があればこの領域に収まる可能性をもつ

Fig. 1　安通遺跡出土鉄滓のTi. V相関図

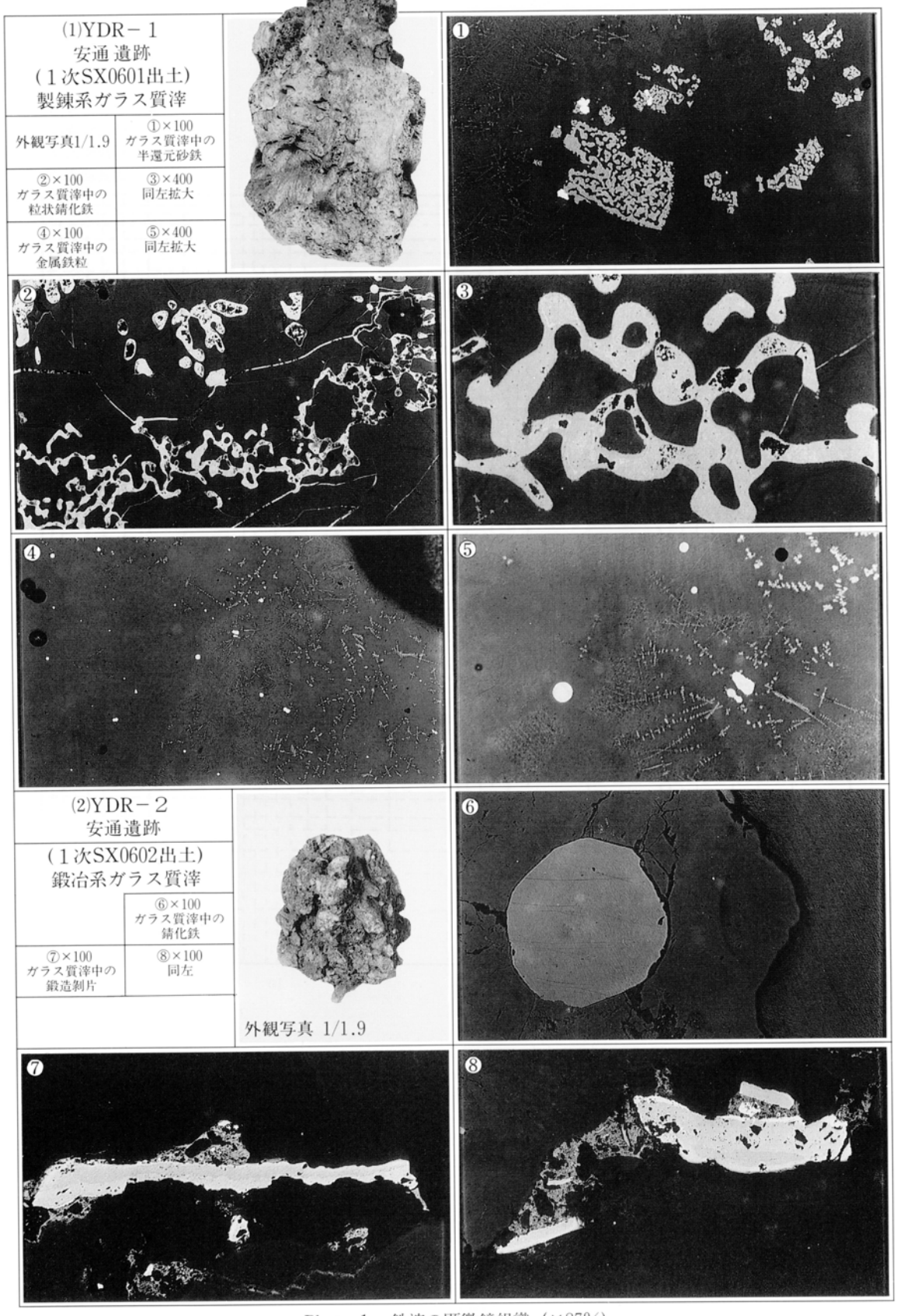
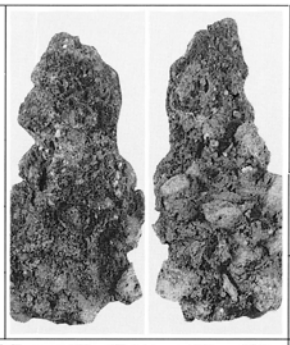
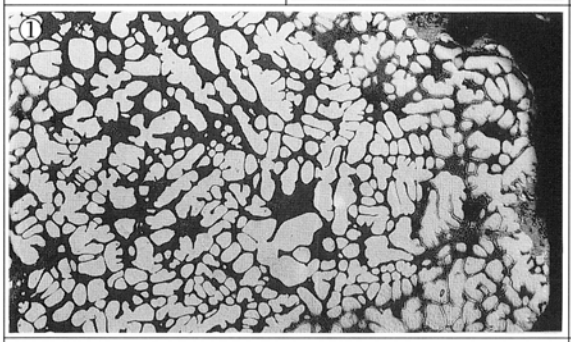
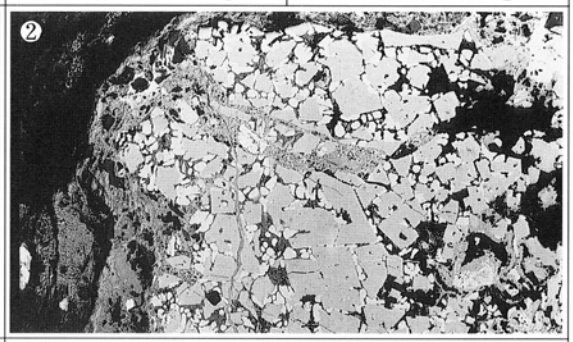
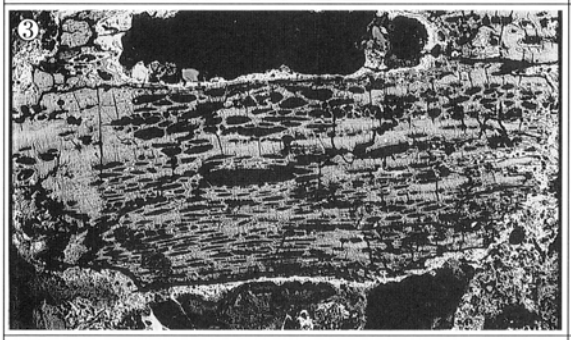


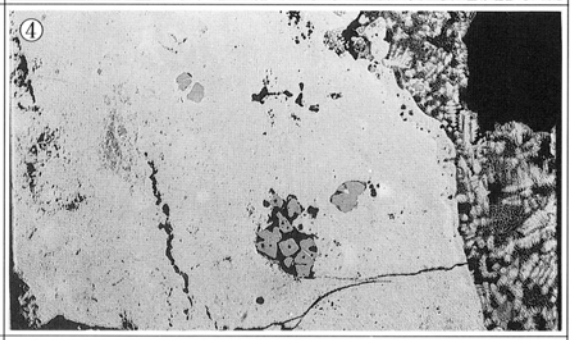
Photo. 1　鉄滓の顕微鏡組織（×87%）

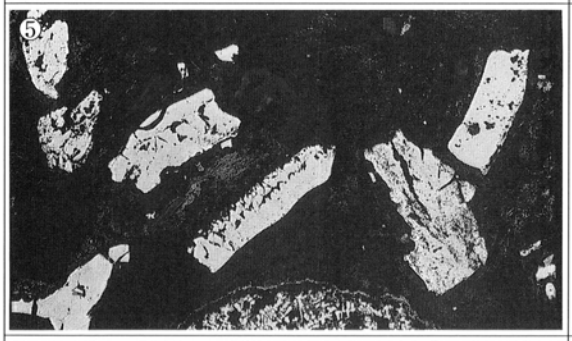
⑶YDR－３ 安通遺跡 （１次SX0603出土） 多種鉱物集結鍛冶滓 （精錬鍛冶滓） 外観写真 1/1.9		①×100 精錬鍛冶滓 Wüstite：FeO	②×100 砂鉄製錬滓 Ulvöspinel：2FeO･TiC2
		③×100 木　炭	④×100 錆化鉄介在物含む Ulvöspinel：2FeO･TiO2
		⑤×100 鍛造剝片	⑥×200 鍛造剝片硬度圧痕 478Hv　荷重100ｇ
		⑦×200 Wüstite 硬度圧痕 417Hv　荷重100ｇ	⑧×200 Ulvöspinel 硬度圧痕 824Hv　荷重100ｇ

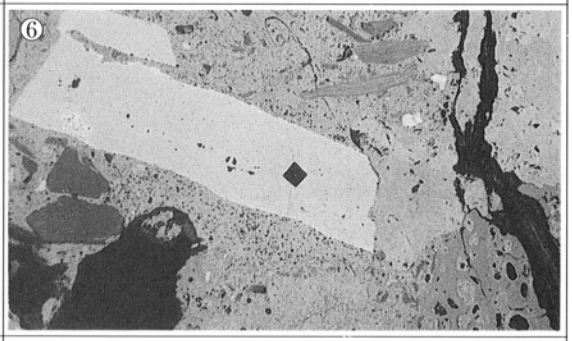


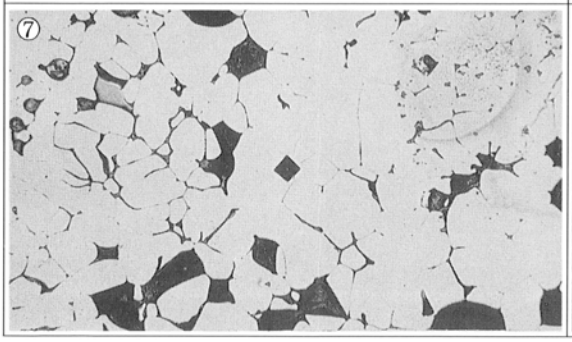












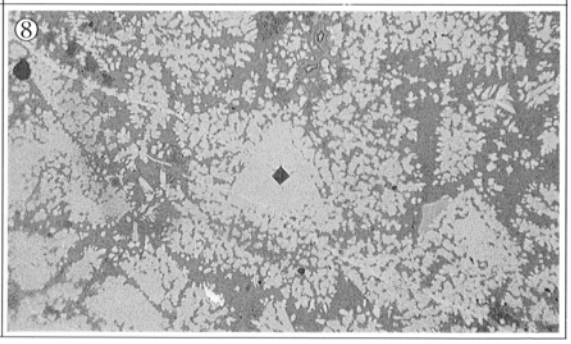


Photo.２　鉄滓の顕微鏡組織（×87%）

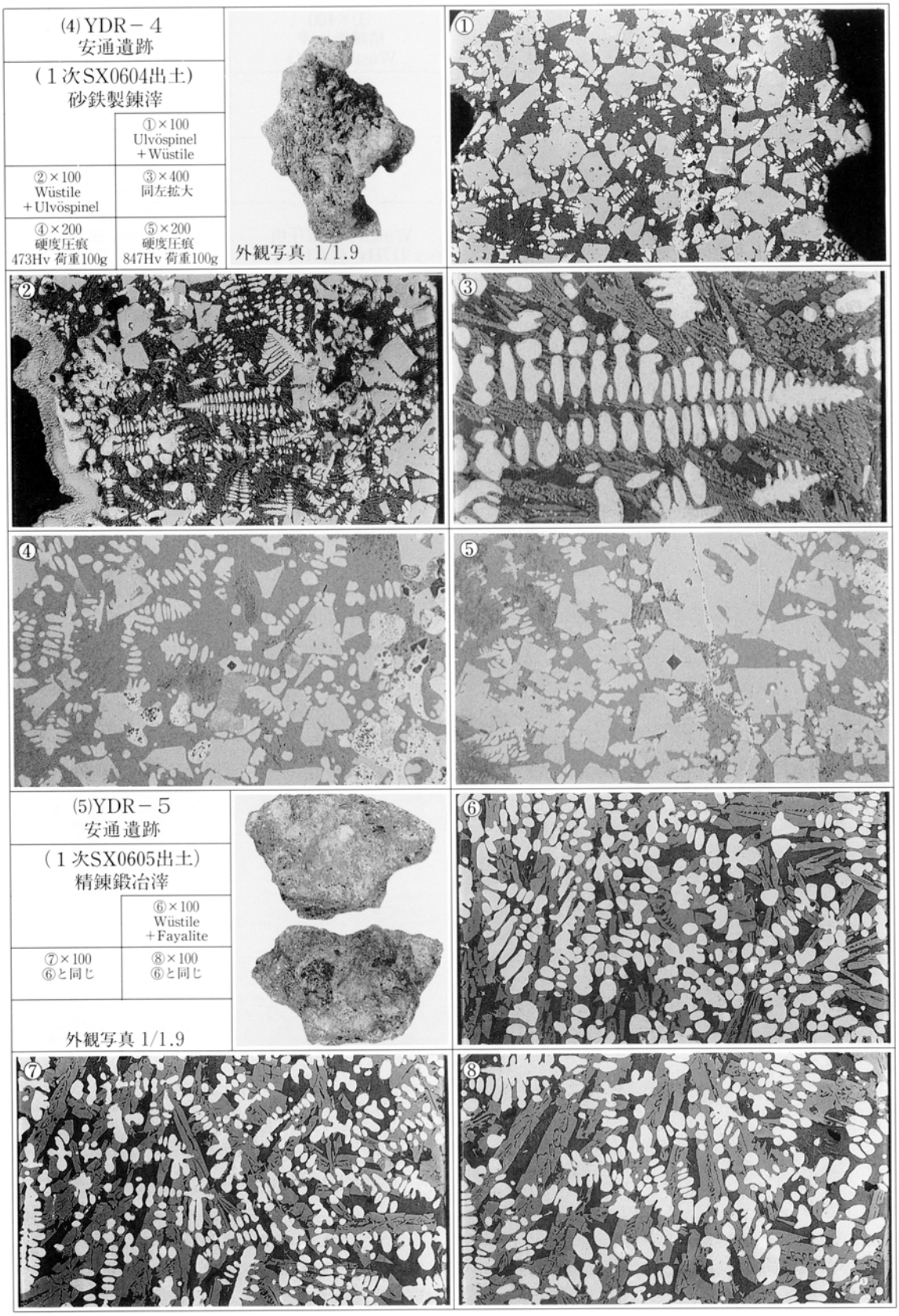
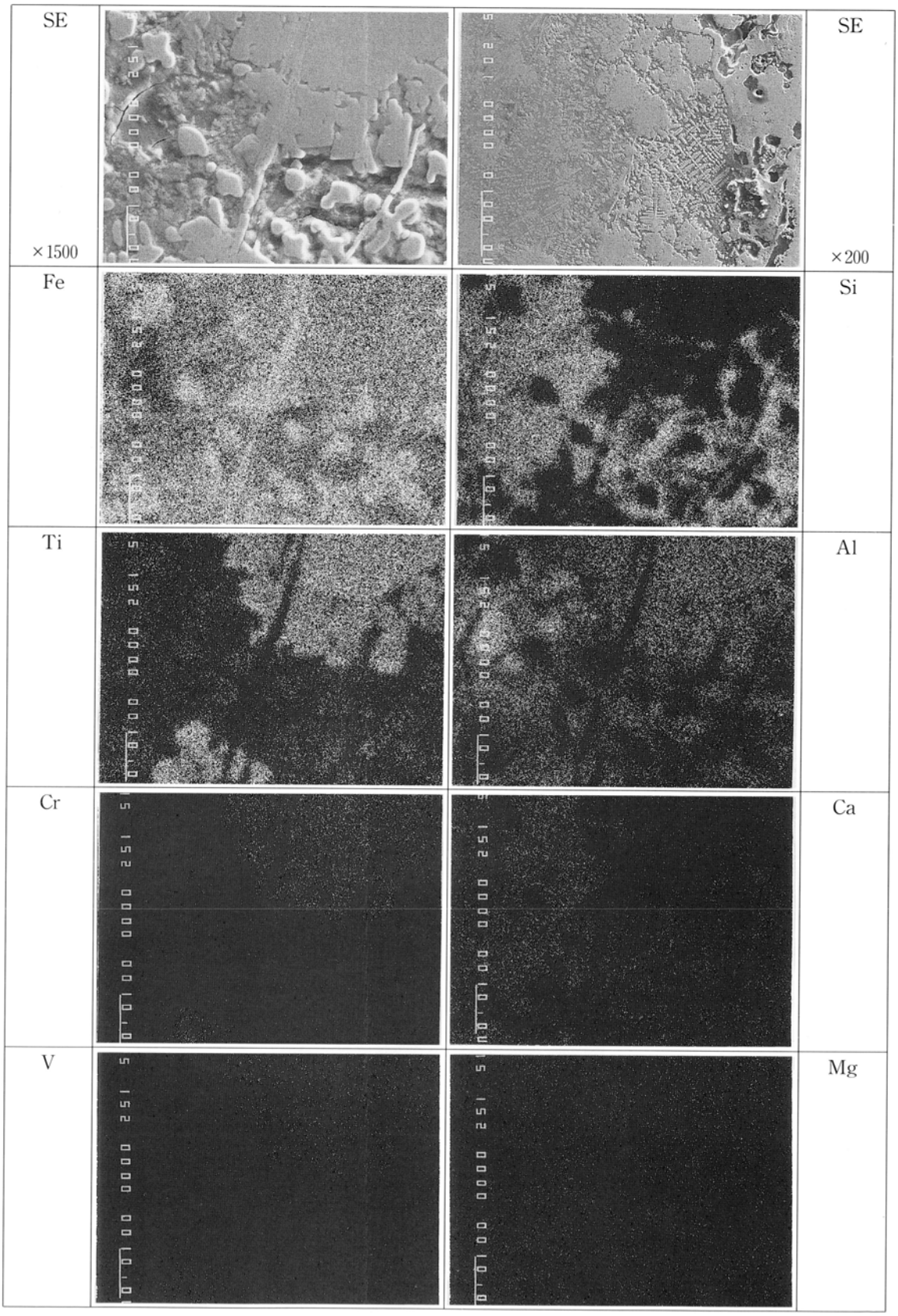


Photo.3　鉄滓の顕微鏡組織（×87%）



Phpto. 4　多種鉱物集結鍛冶滓(YDR－3)中のウルボスピネルの特性X線像（×61%）

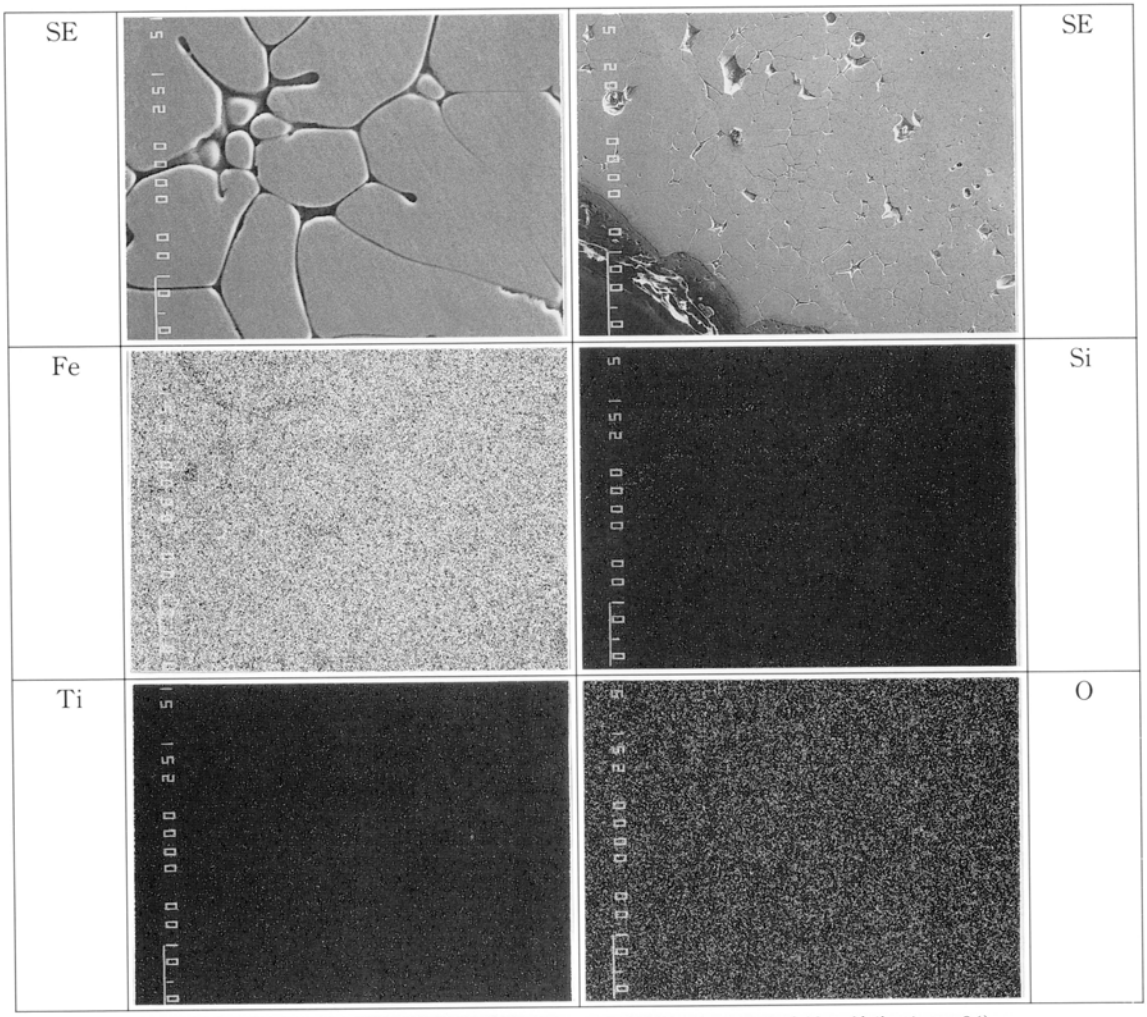
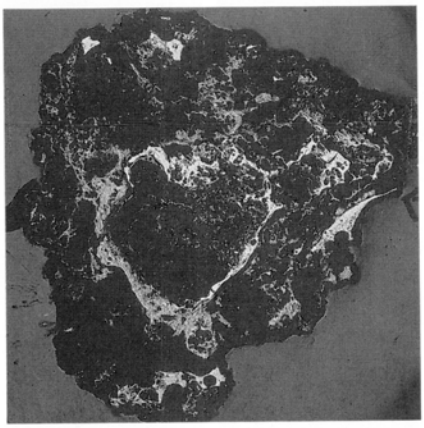


Photo.5　多種鉱物集結鍛冶滓(YDR－3)中のヴスタイトの特性X線像（×61%）



(×5)

Photo.6　多種鉱物集結鍛冶滓(YDR－3)のマクロ組織（×49%）

図　　版

1．清末遺跡群第 3 次調査全景　2．東入部遺跡群第 2 次調査 8 区全景

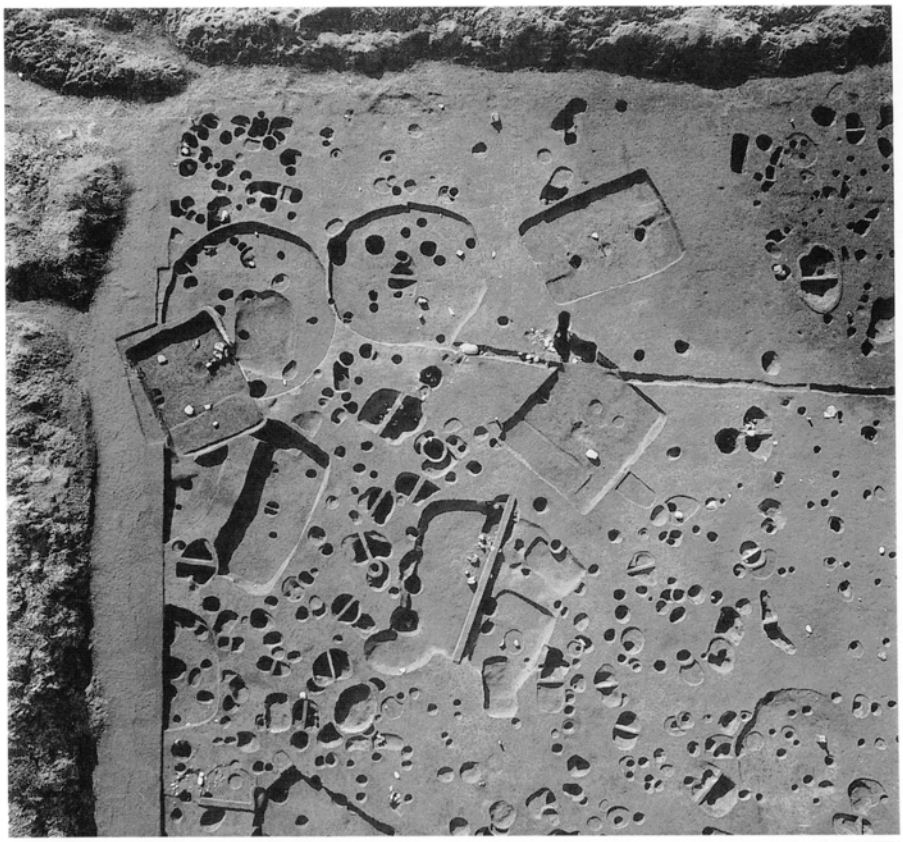
1

2

岩本遺跡　1．全景（南から）　　2．全景（東から）

岩本遺跡　1．全景（上空から）　2．東北部（上空から）

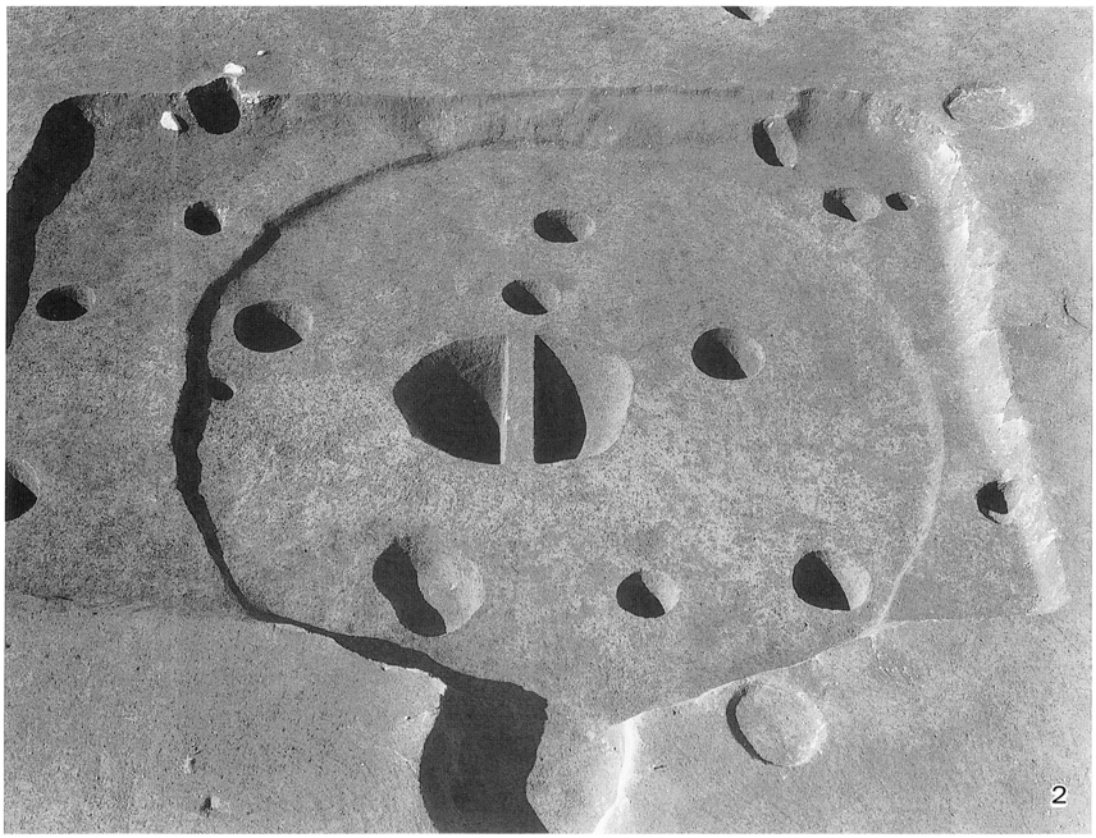
図版 4



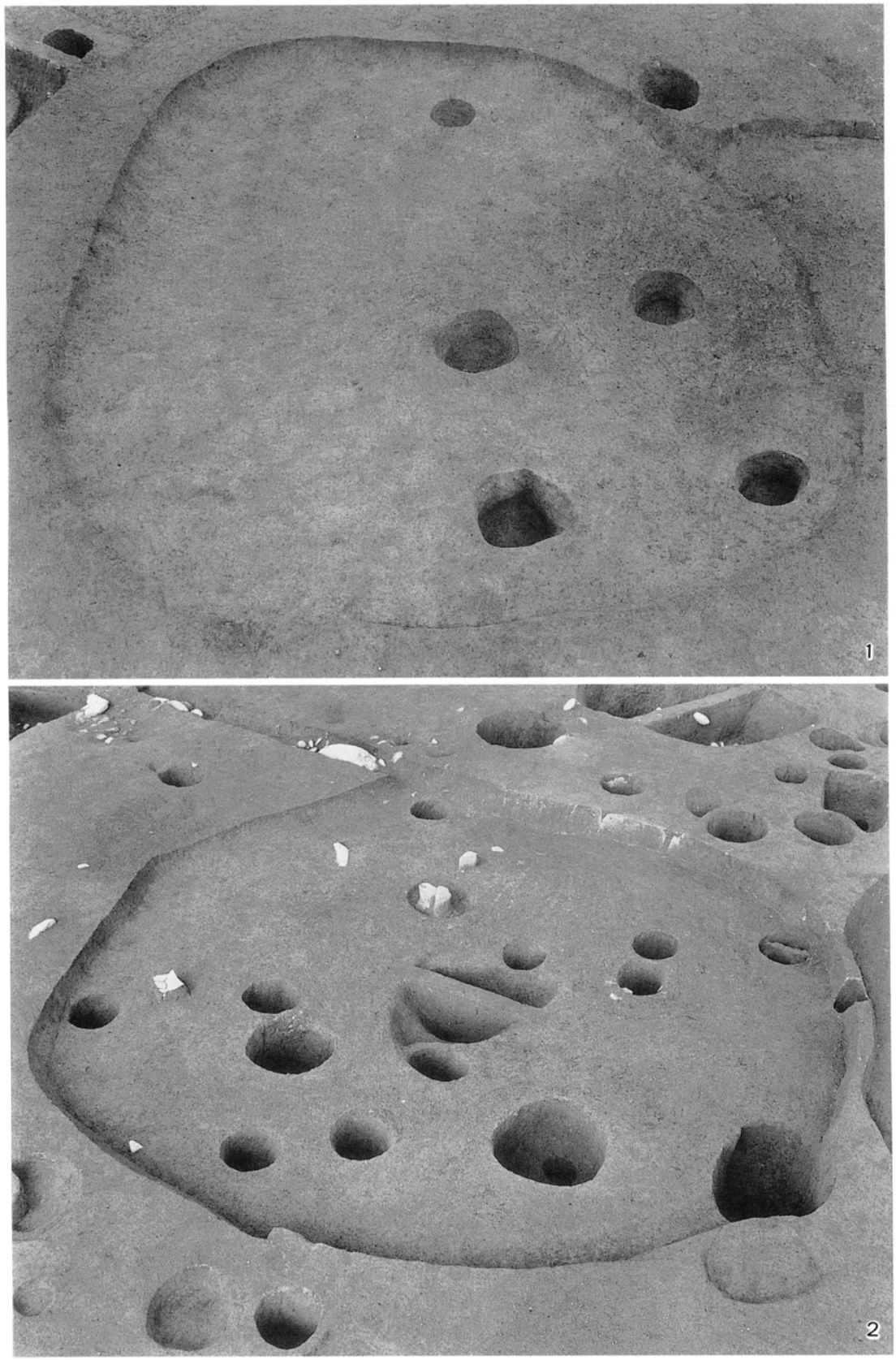
1

2

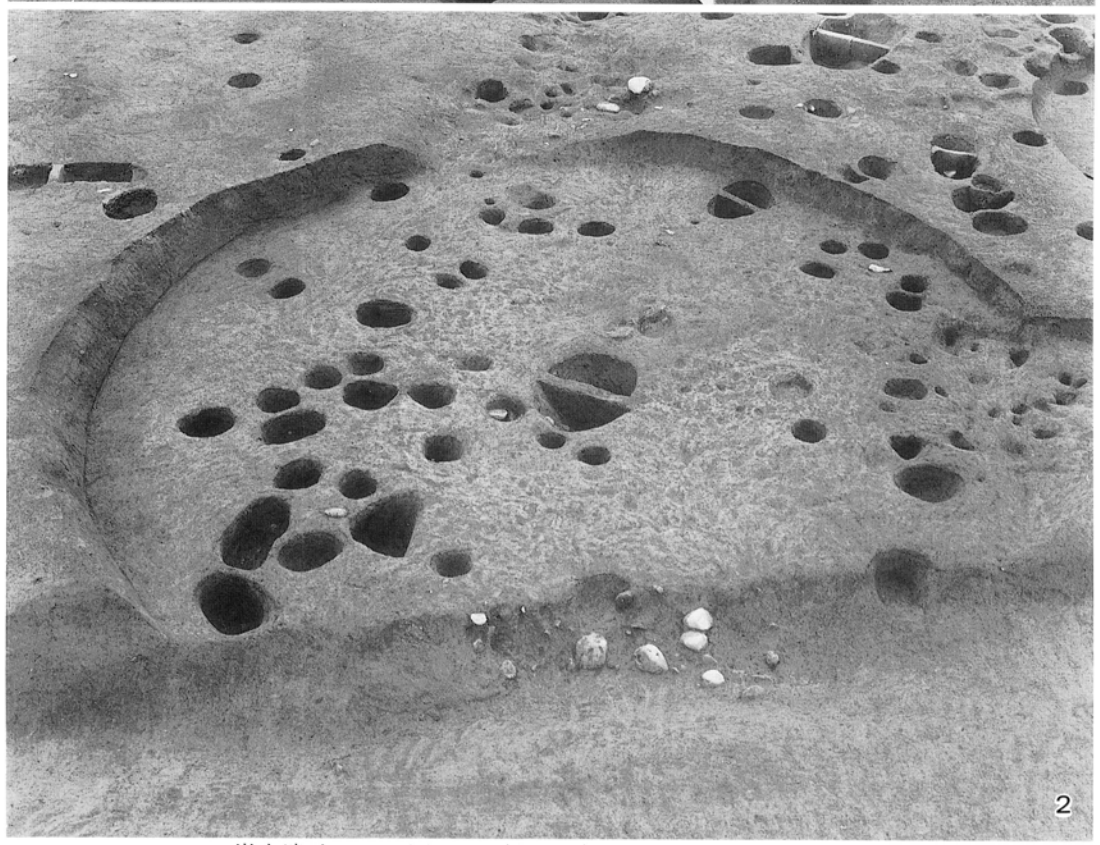
岩本遺跡　1．西北部（上空から）　2．東南部（上空から）



岩本遺跡　1．SC0508(西から)　2．SC0511・0512(東から)

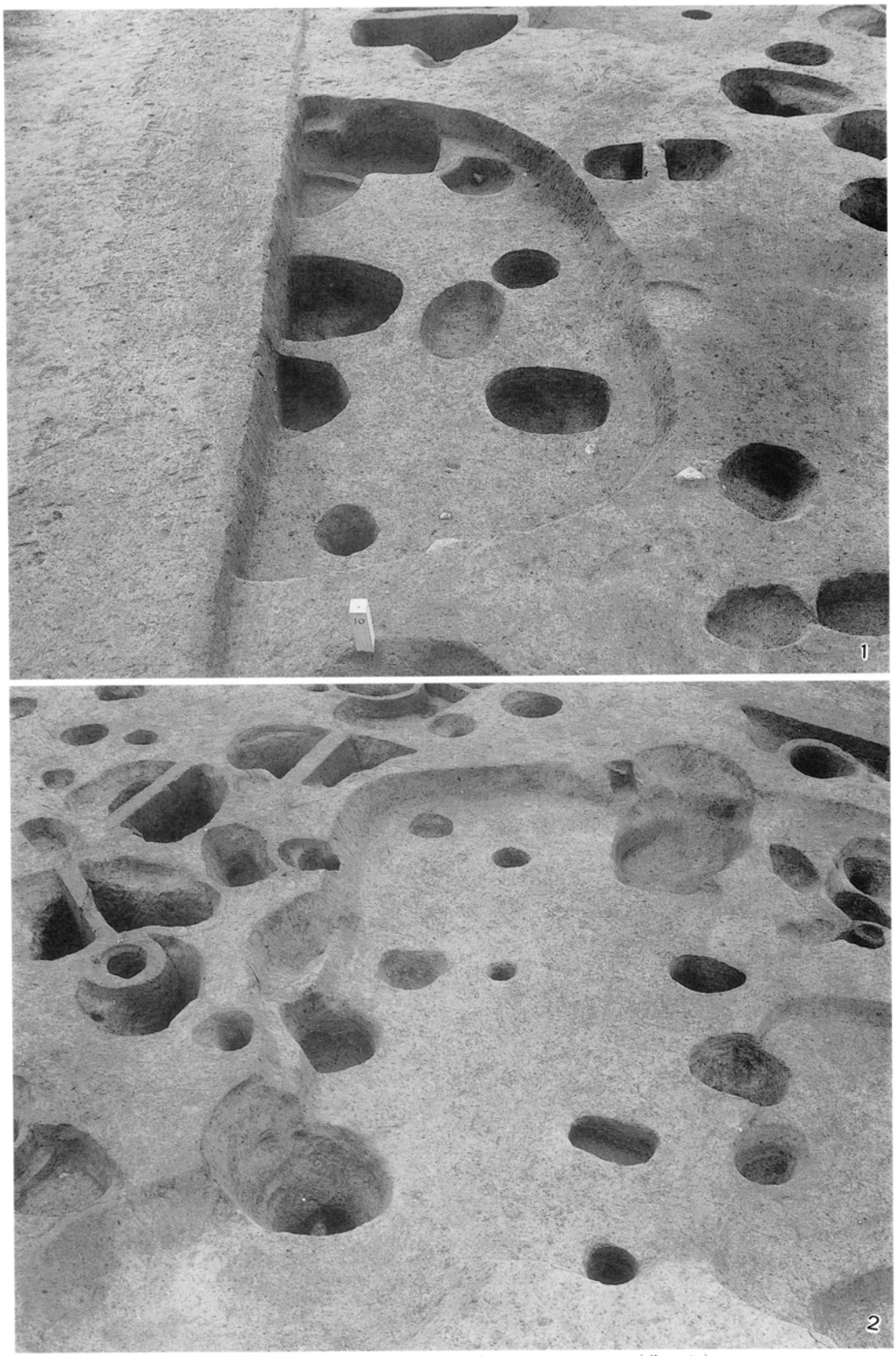


岩本遺跡　1．SC0513（南から）　2．SC0514（南から）

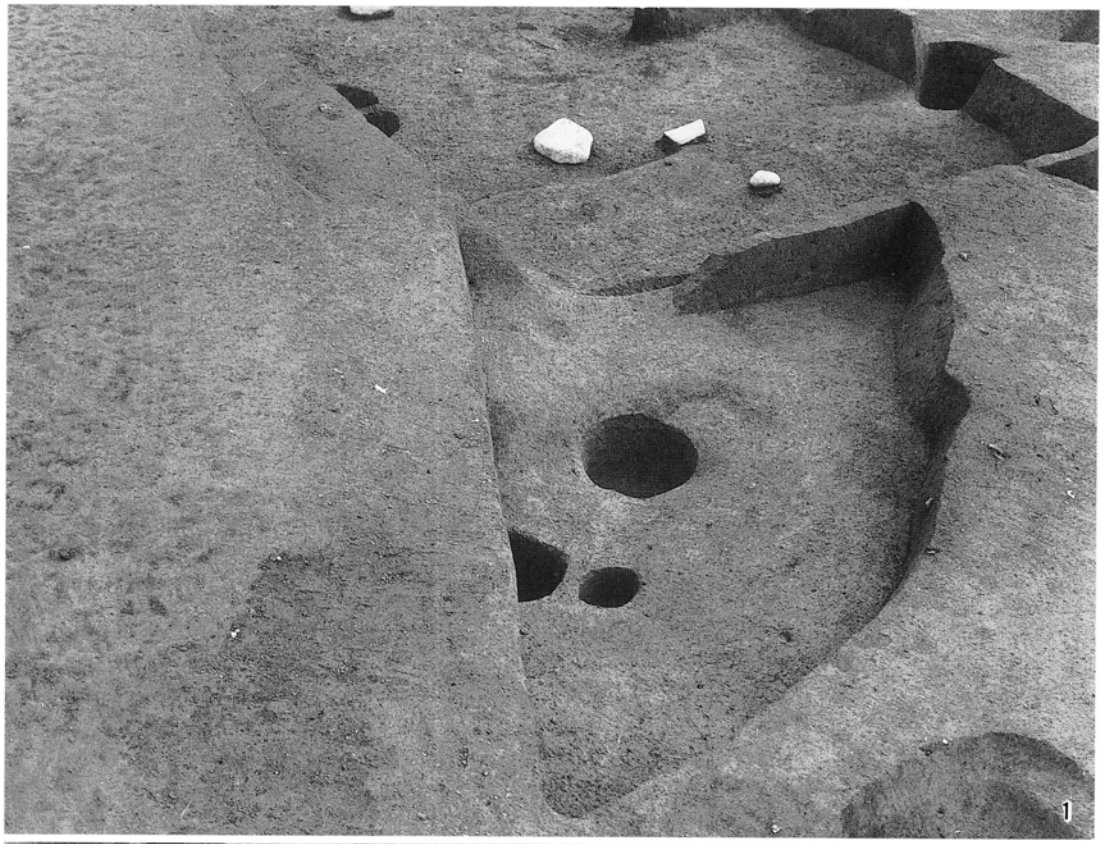


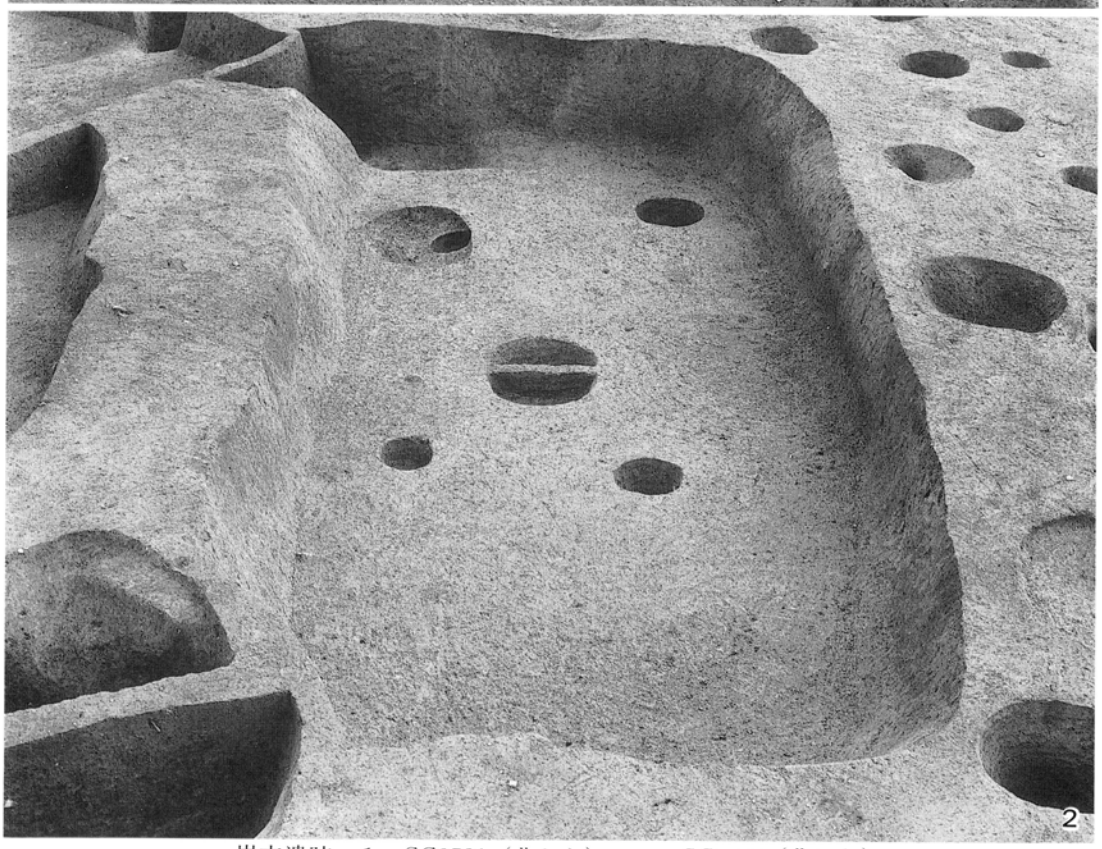
岩本遺跡　1．SC0515（南から）　2．SC0518（北から）

図版 8



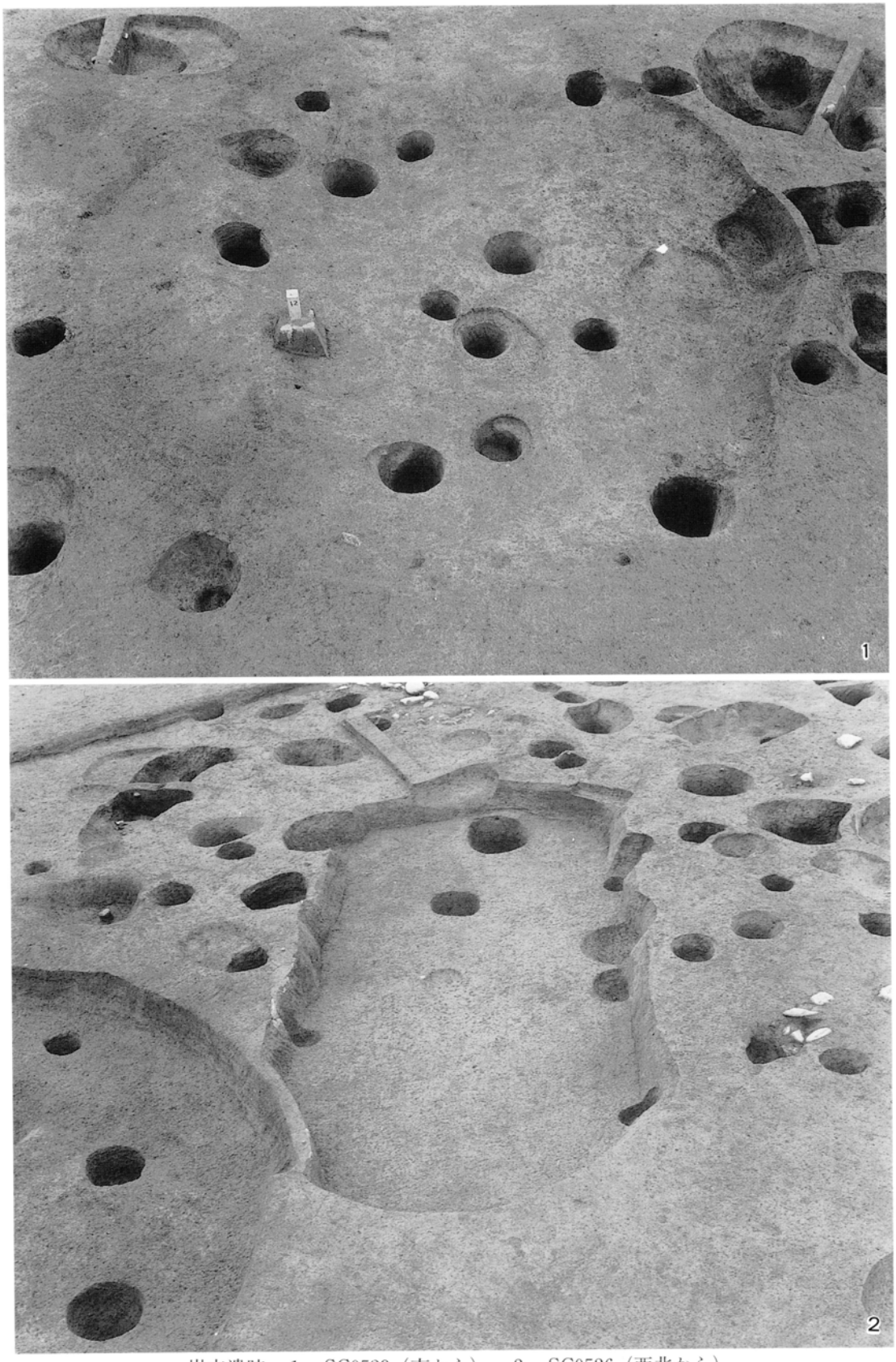
岩本遺跡　1．SC0519（北から）　2．SC0520（北から）



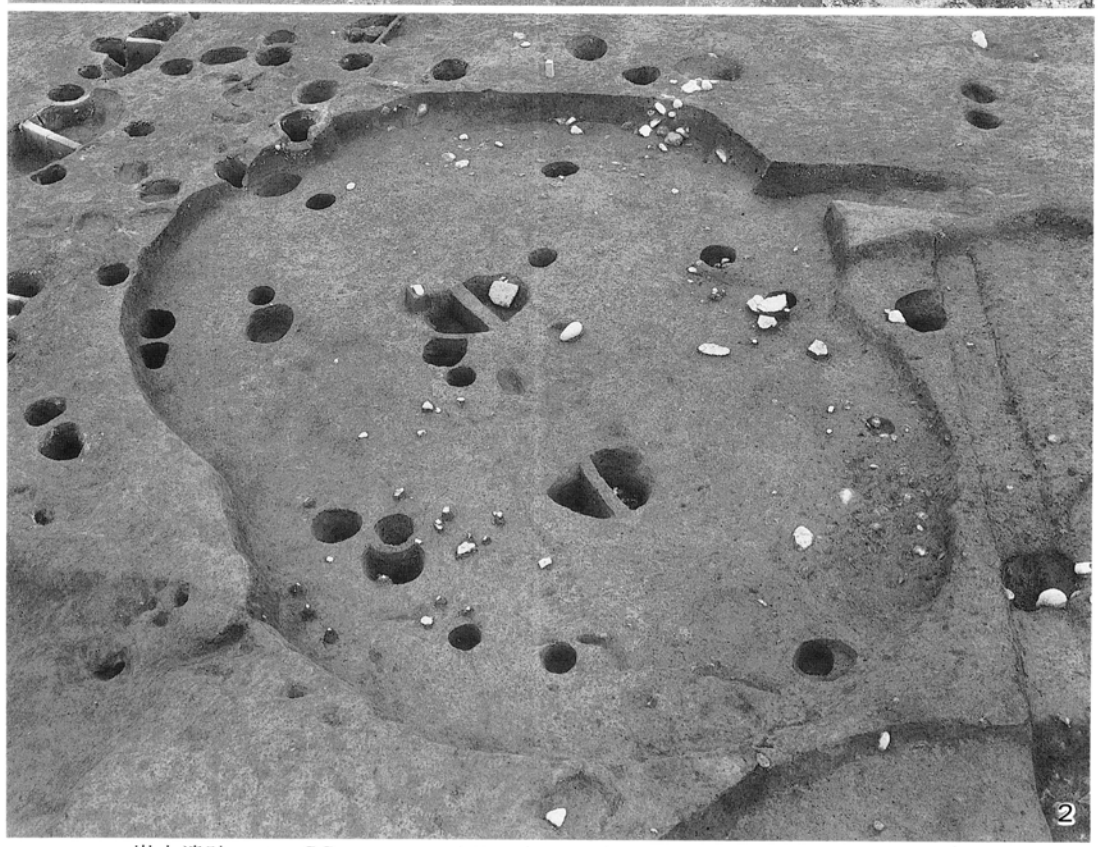


岩本遺跡　1．SC0521（北から）　2．SC0522（北から）

図版10

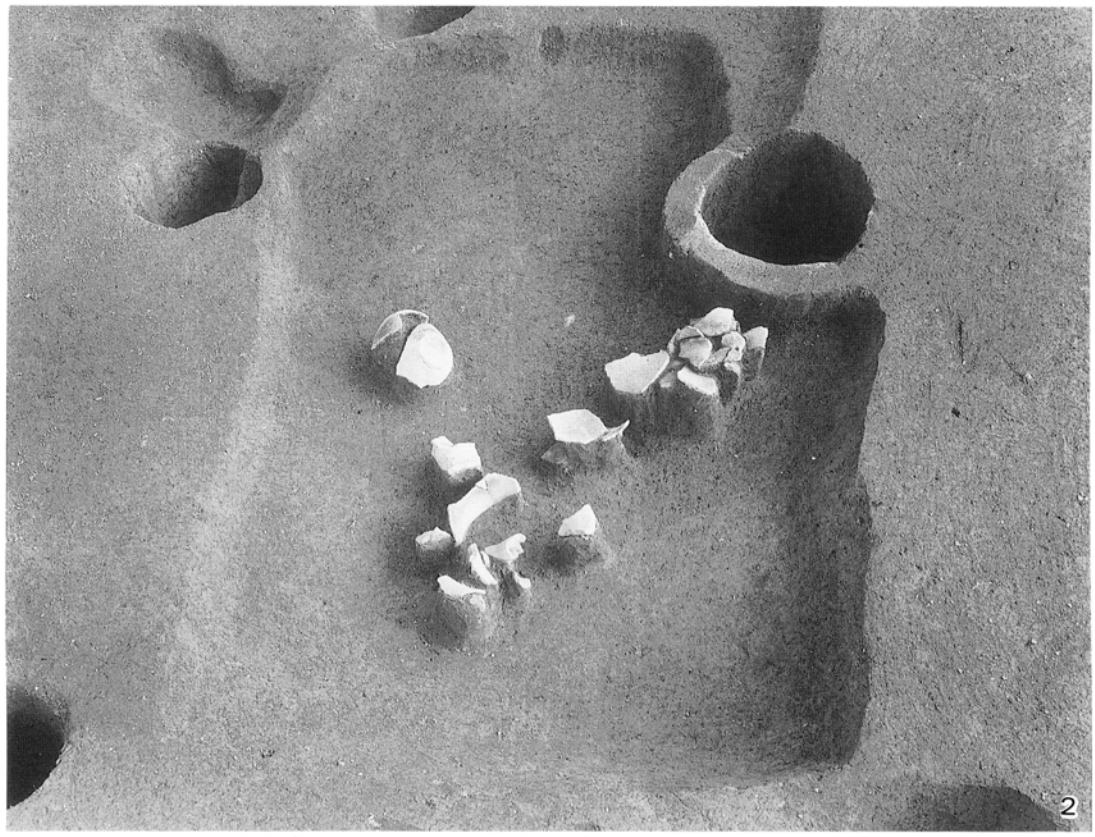


岩本遺跡　1．SC0523（南から）　2．SC0526（西北から）

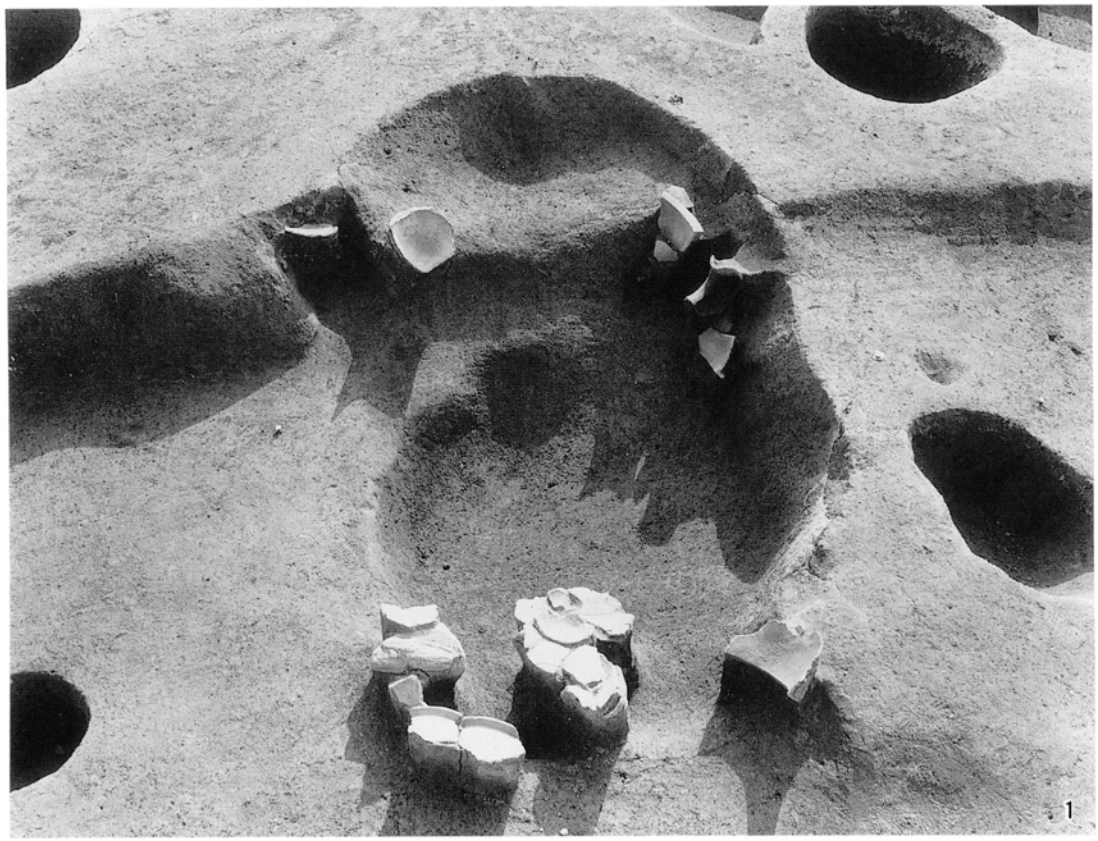


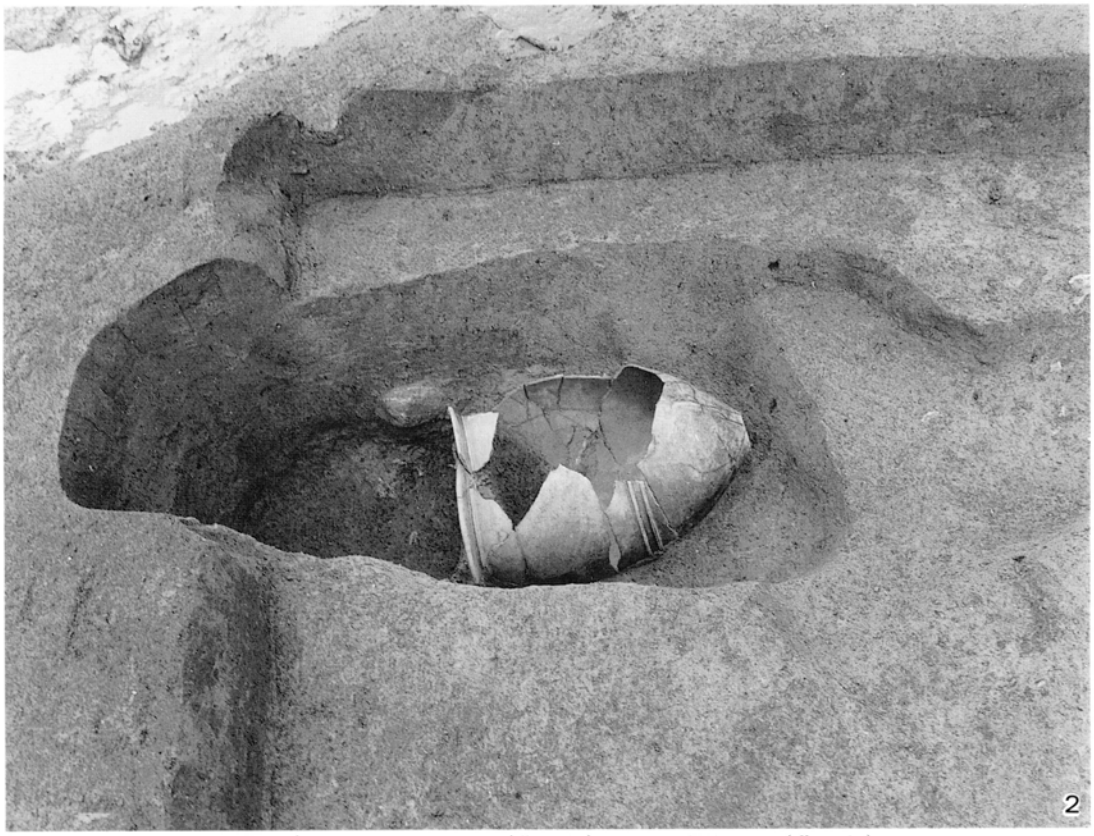
岩本遺跡　1．SC0528・0529周辺（北から）　2．SC0528・0529（北から）

岩本遺跡　1．SC0534（南から）　2．SK0204（南から）

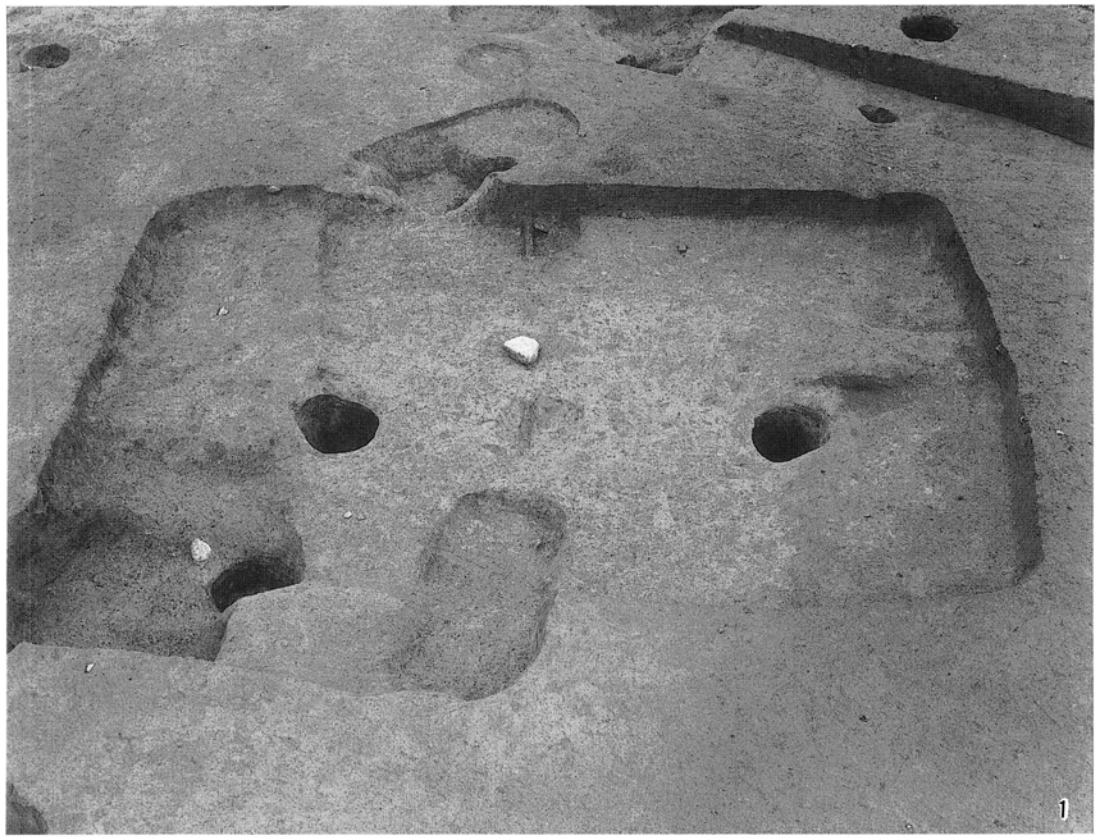


岩本遺跡　1．SK0427（東から）　2．SK0434（西から）

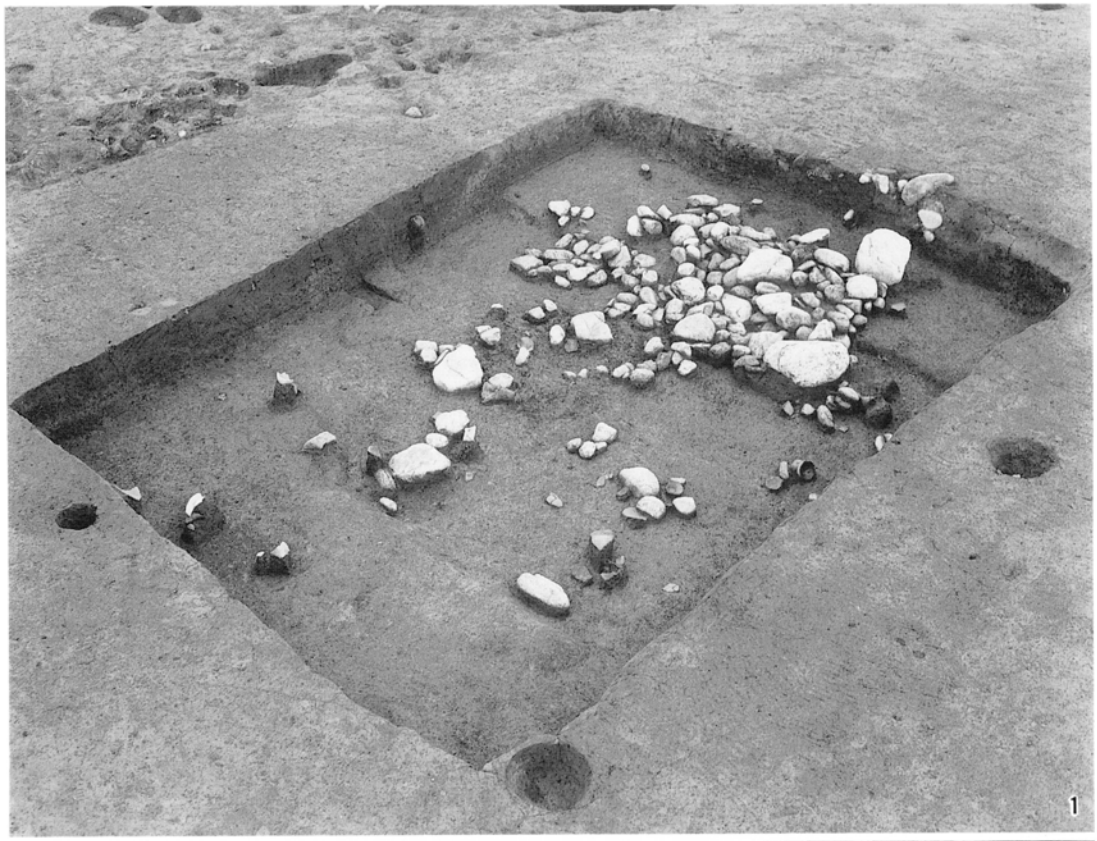


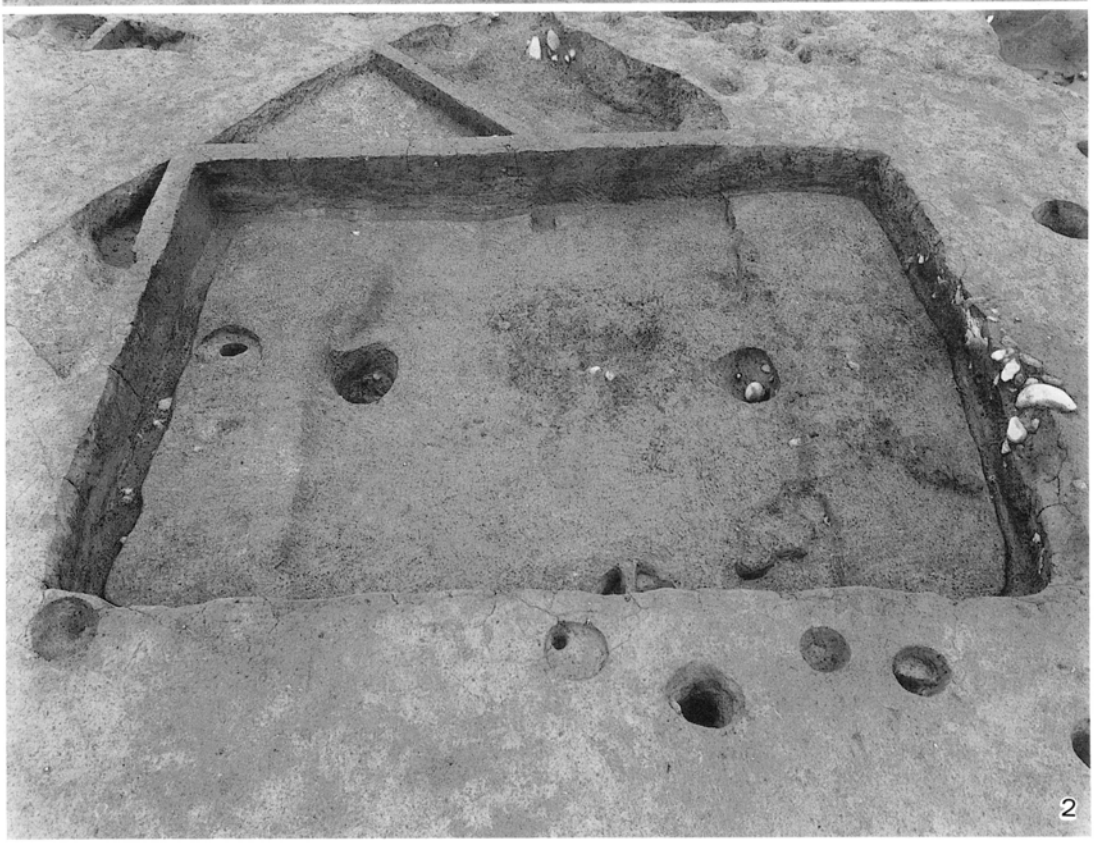


岩本遺跡　1．SK0451（北から）　2．SX0533（北から）

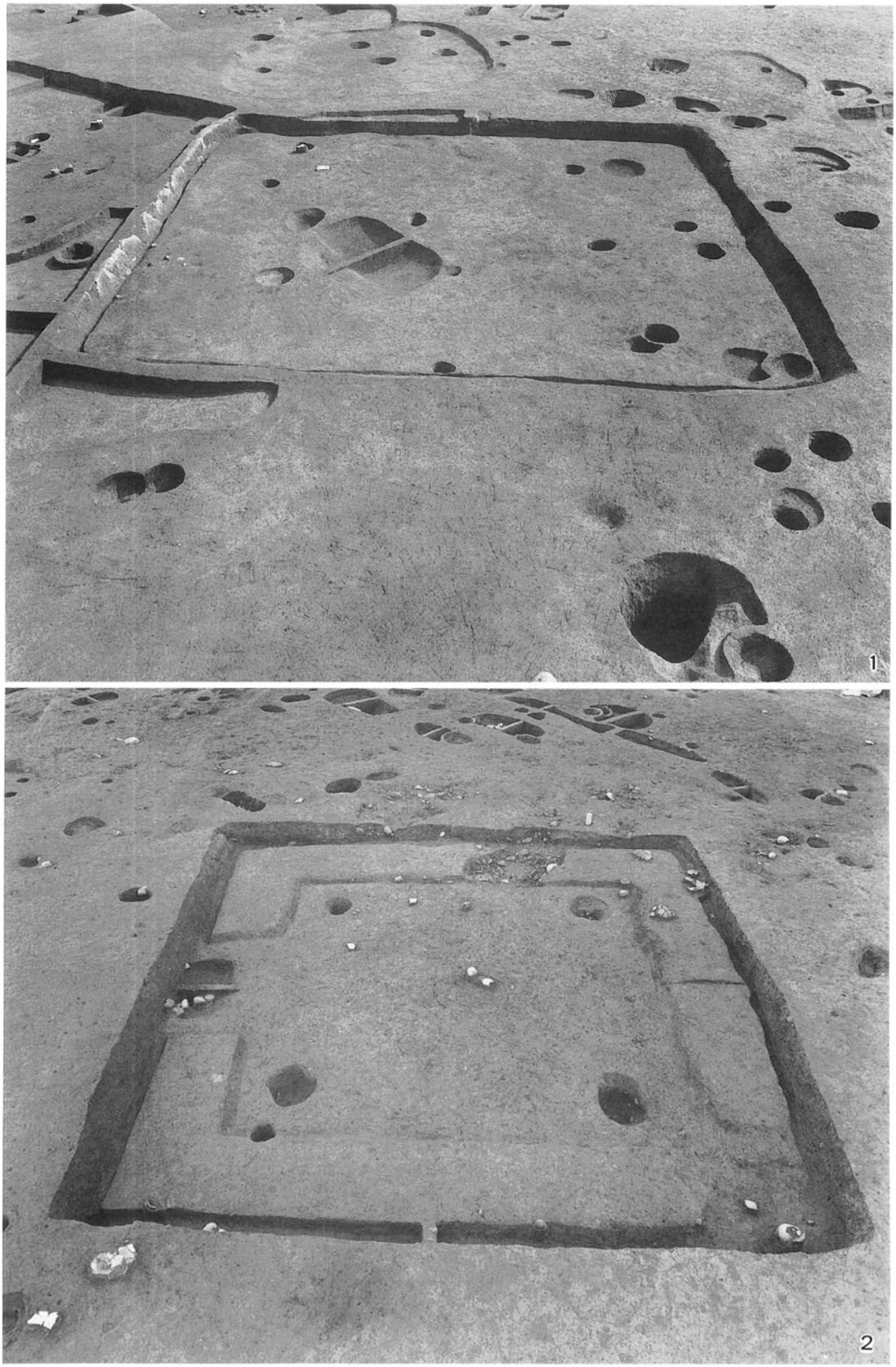


岩本遺跡　1．SC0501（北から）　2．SC0502（西北から）



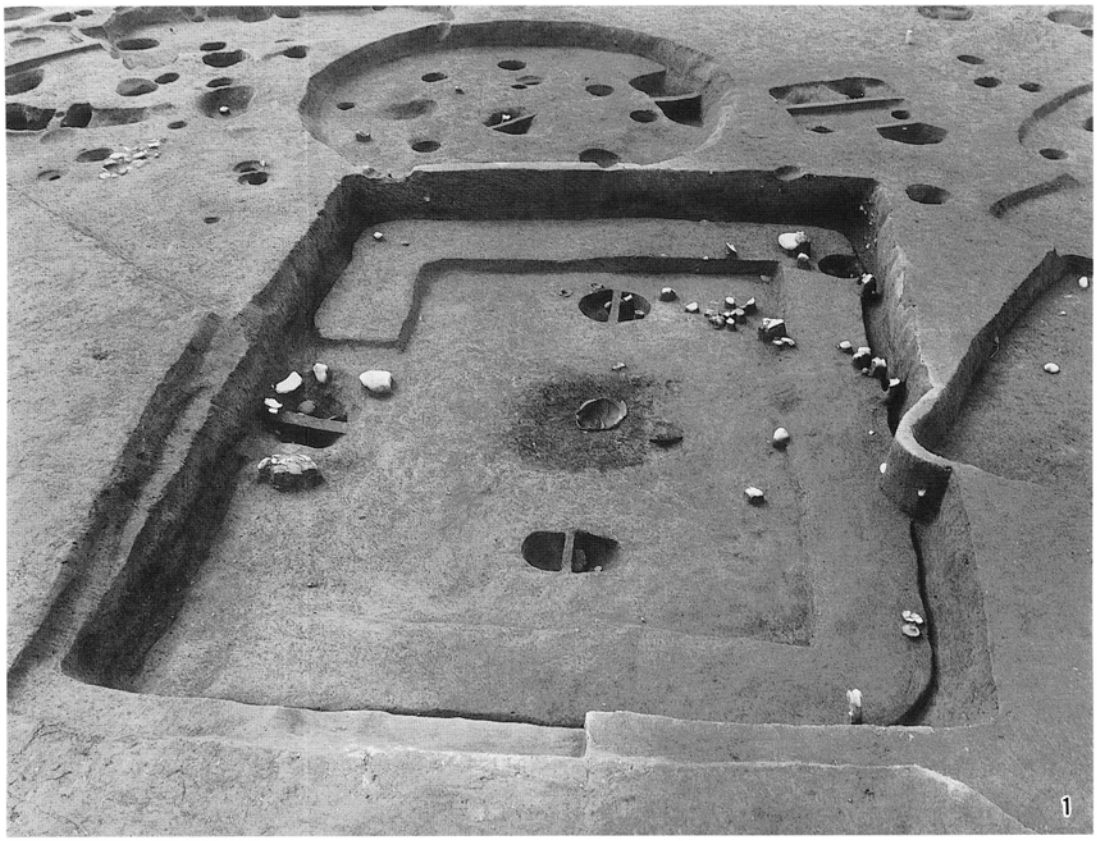


岩本遺跡　1．SC0503（南から）　2．SC0503・0527（東から）



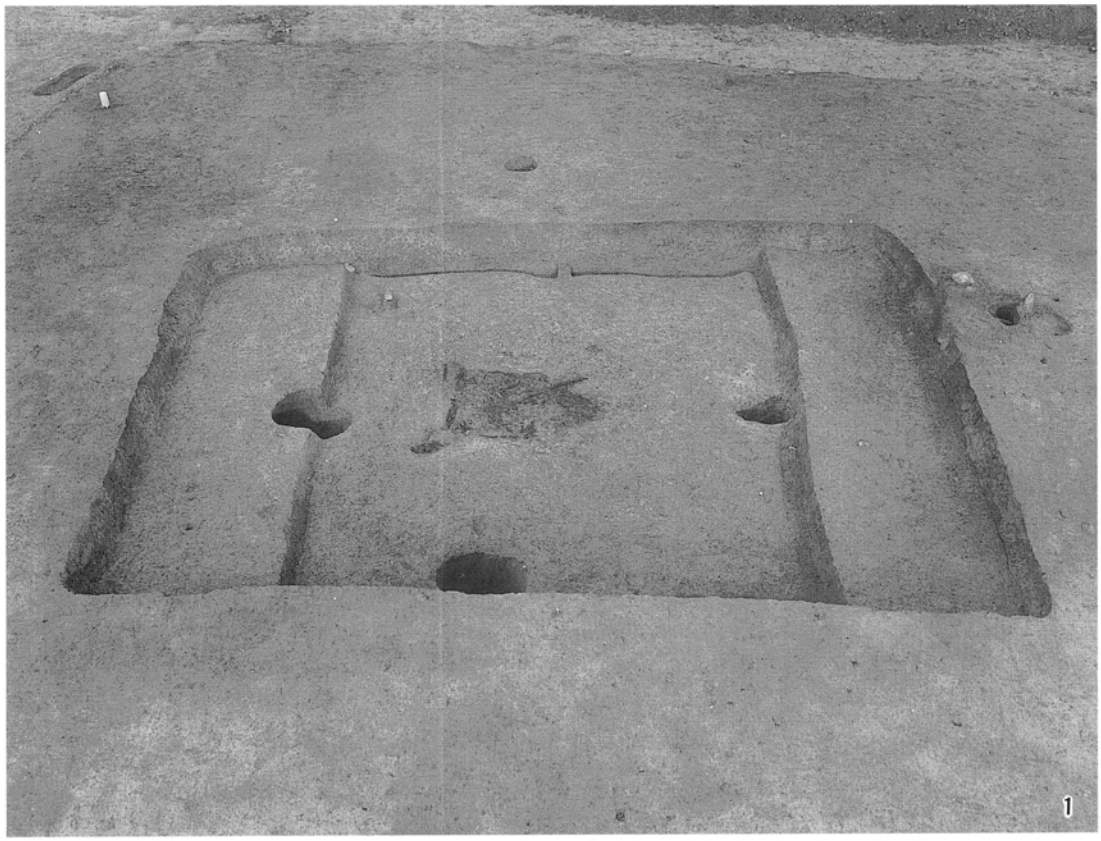
岩本遺跡　1．SC0504（西から）　2．SC0505（北から）

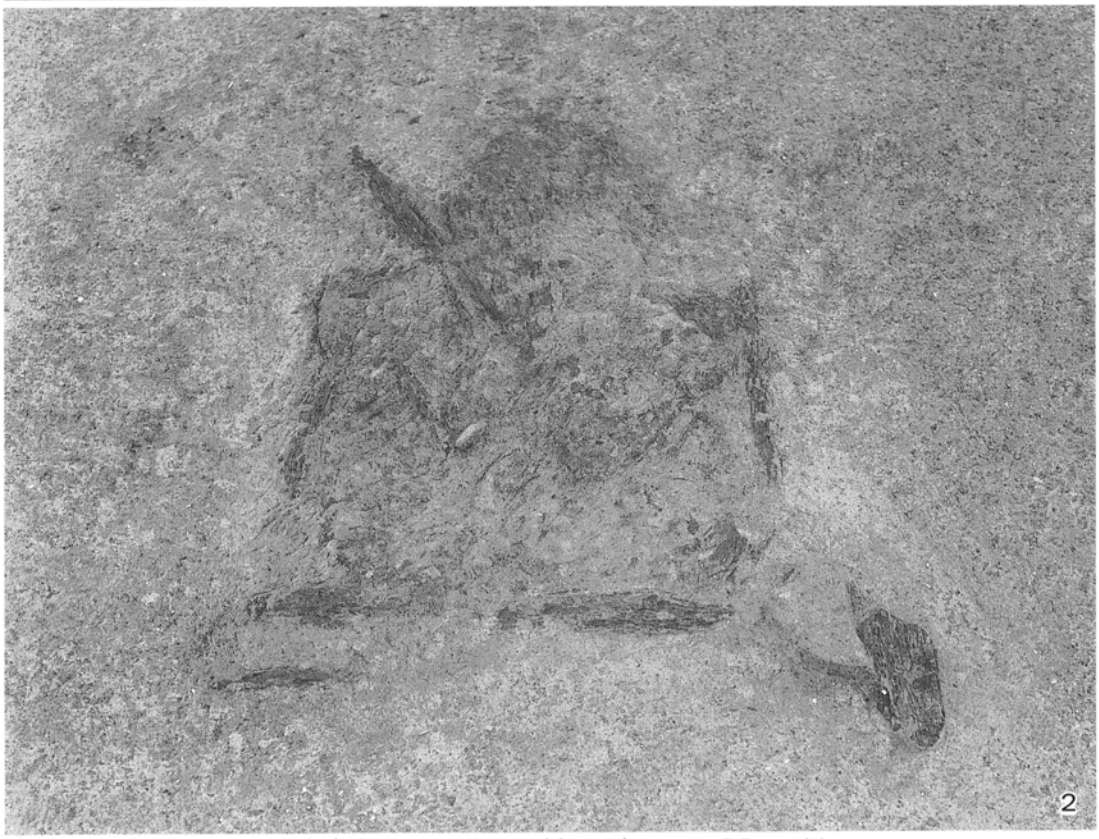
岩本遺跡　1．SC0503・0505（南東から）　2．SC0506（南から）



岩本遺跡　1．SC0507（東から）　2．SC0507炉（炭化物除去後）

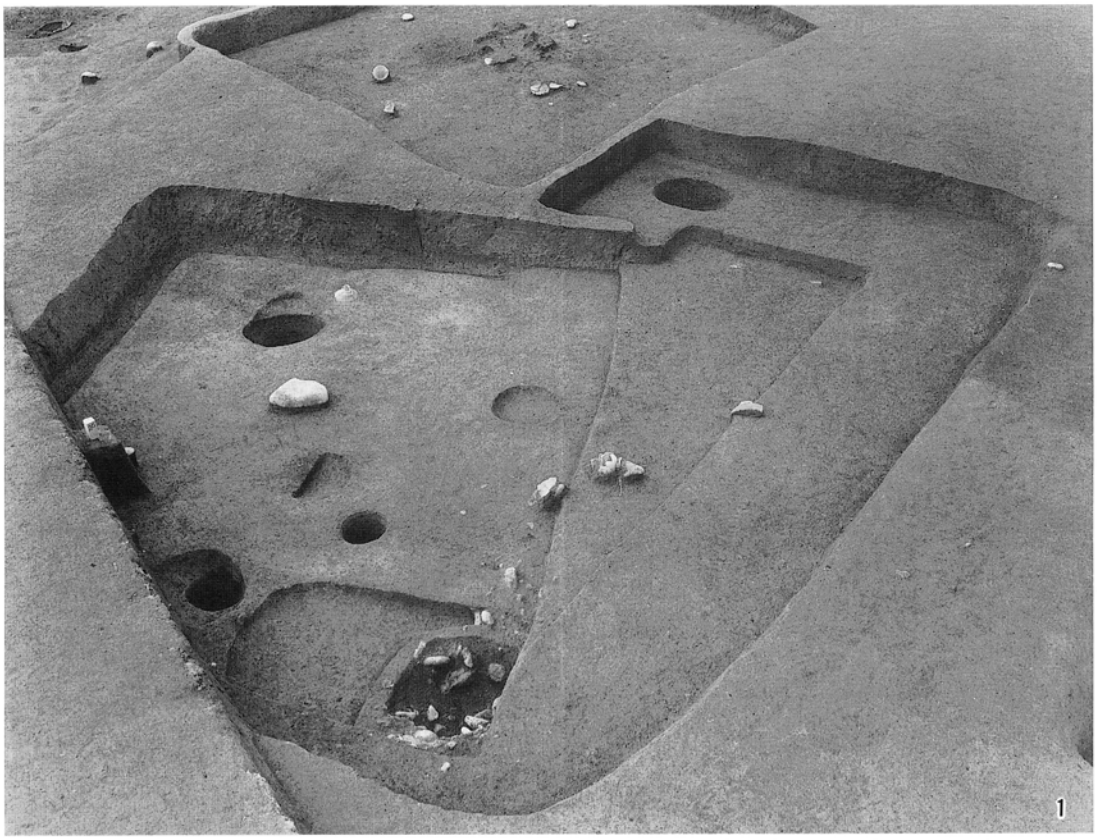
岩本遺跡　1．SC0509（北から）　2．SC0510（南東から）

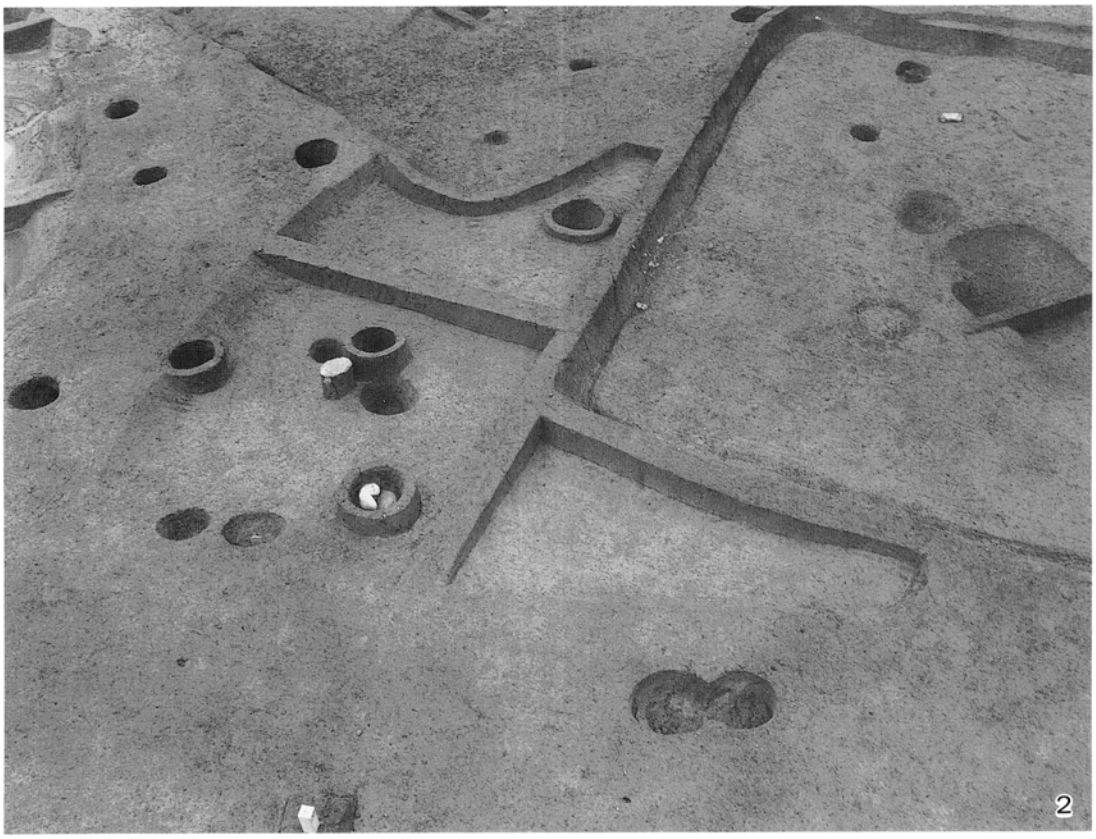




岩本遺跡　1．SC0516（南から）　2．SC0516炉

岩本遺跡　1．SC0517（北東から）　2．SC0507・0509・0517・0524・0525（北から）

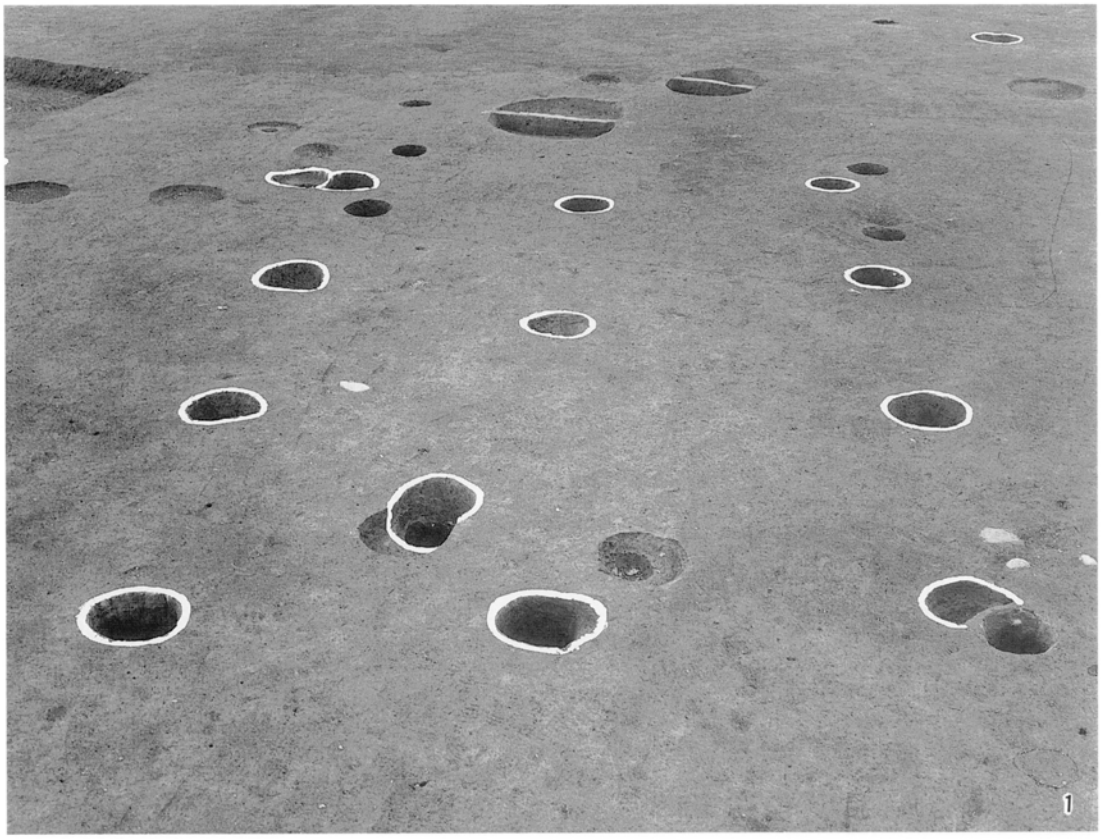




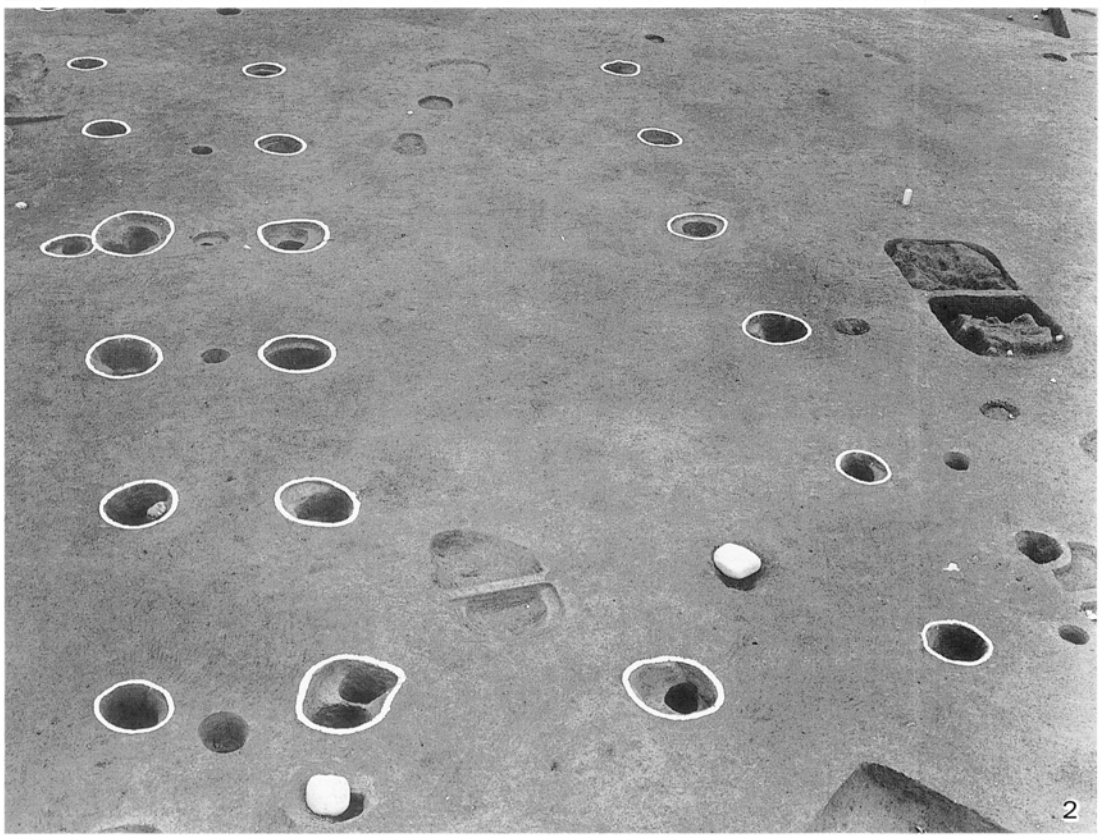
岩本遺跡　1．SC0524・0525（北から）　2．SC0532（西から）

岩本遺跡　1．SK0205（西から）　2．SK0365（北から）

岩本遺跡　1．Ⅰ群掘立柱建物全景（南から）　2．SB0211（北から）

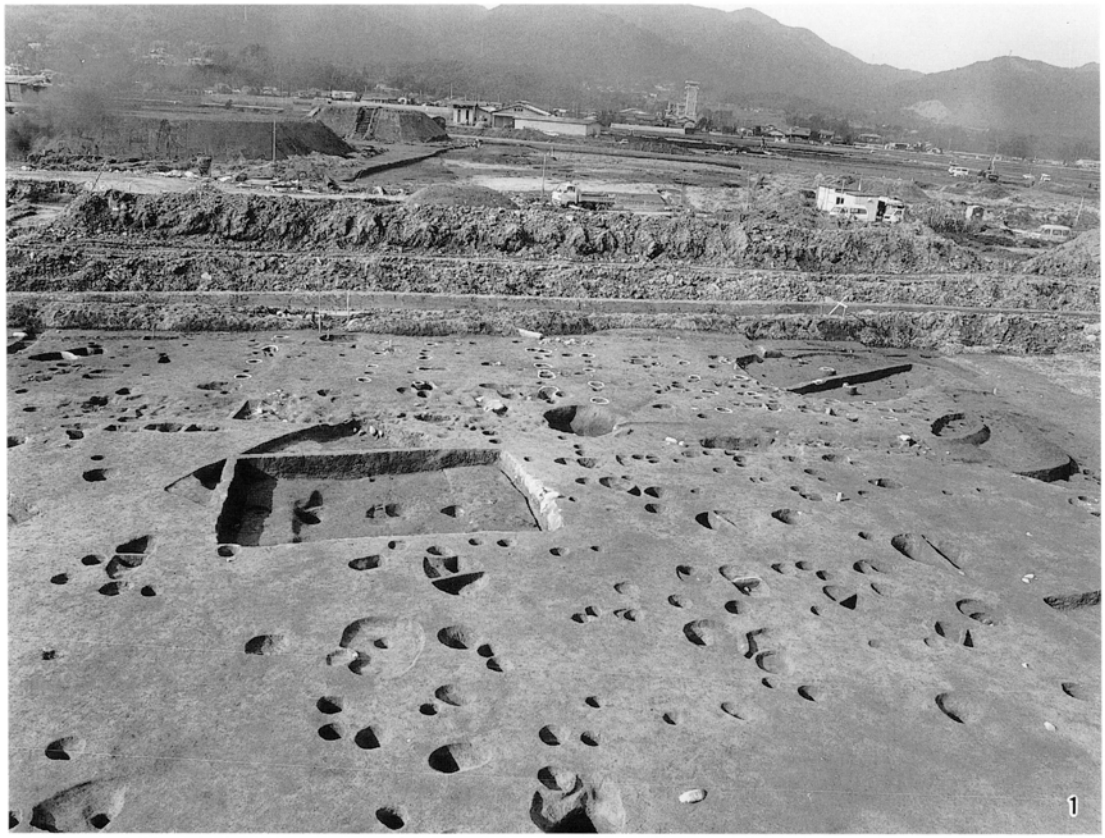


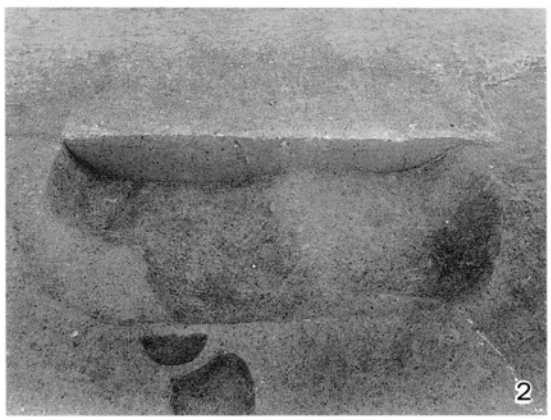
岩本遺跡　1．SB0212（西から）　2．SB0213（西から）

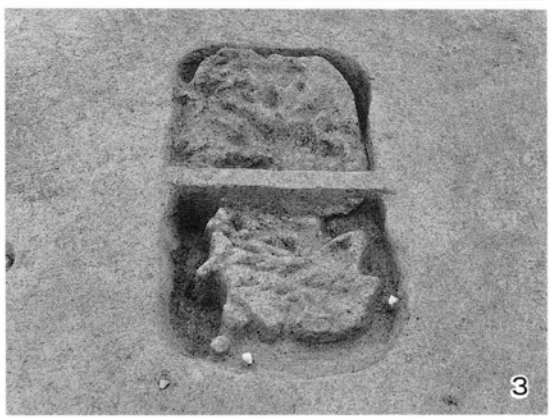


岩本遺跡　1．SB0214（南から）　2．SB0215（南から）

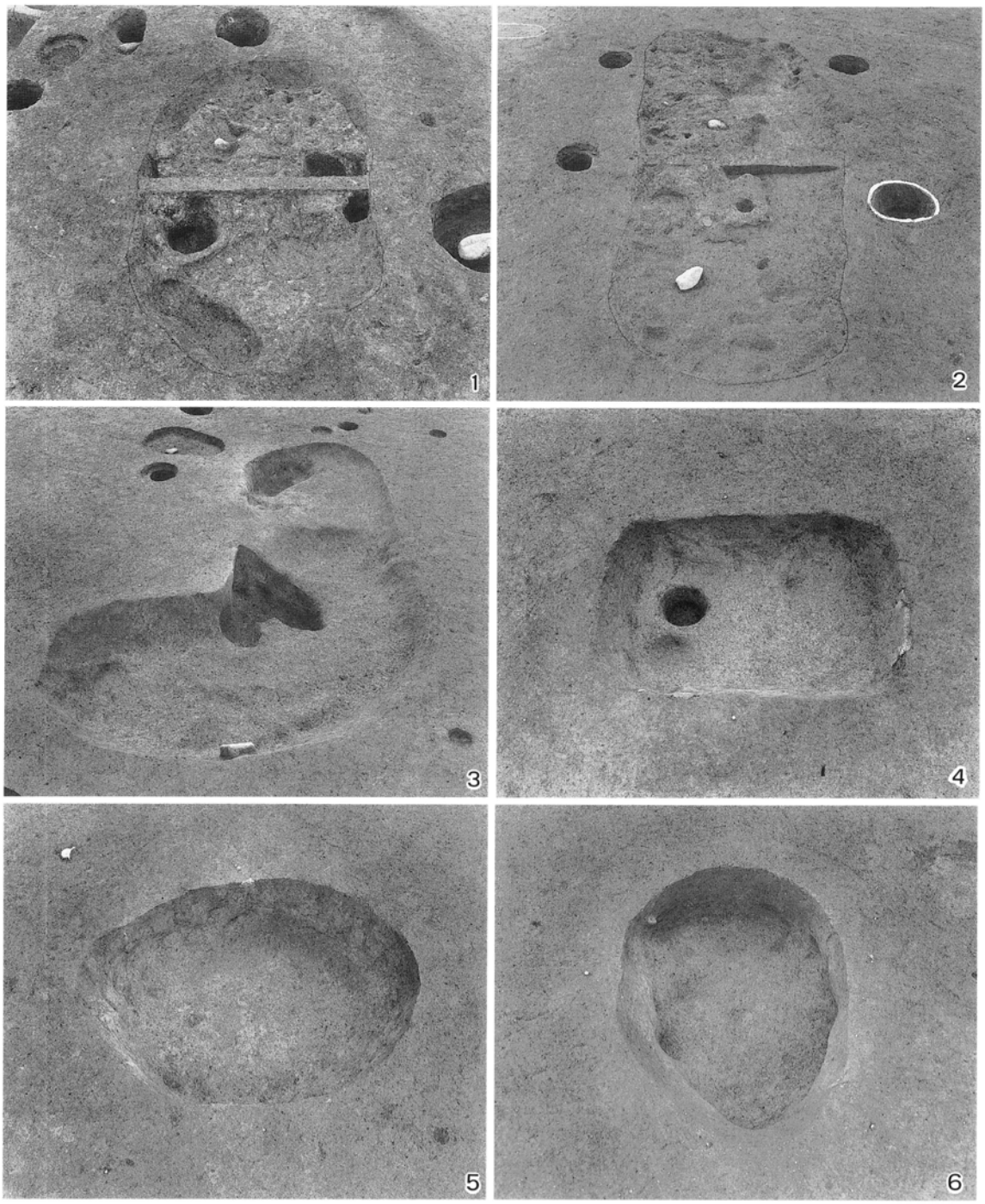
図版28





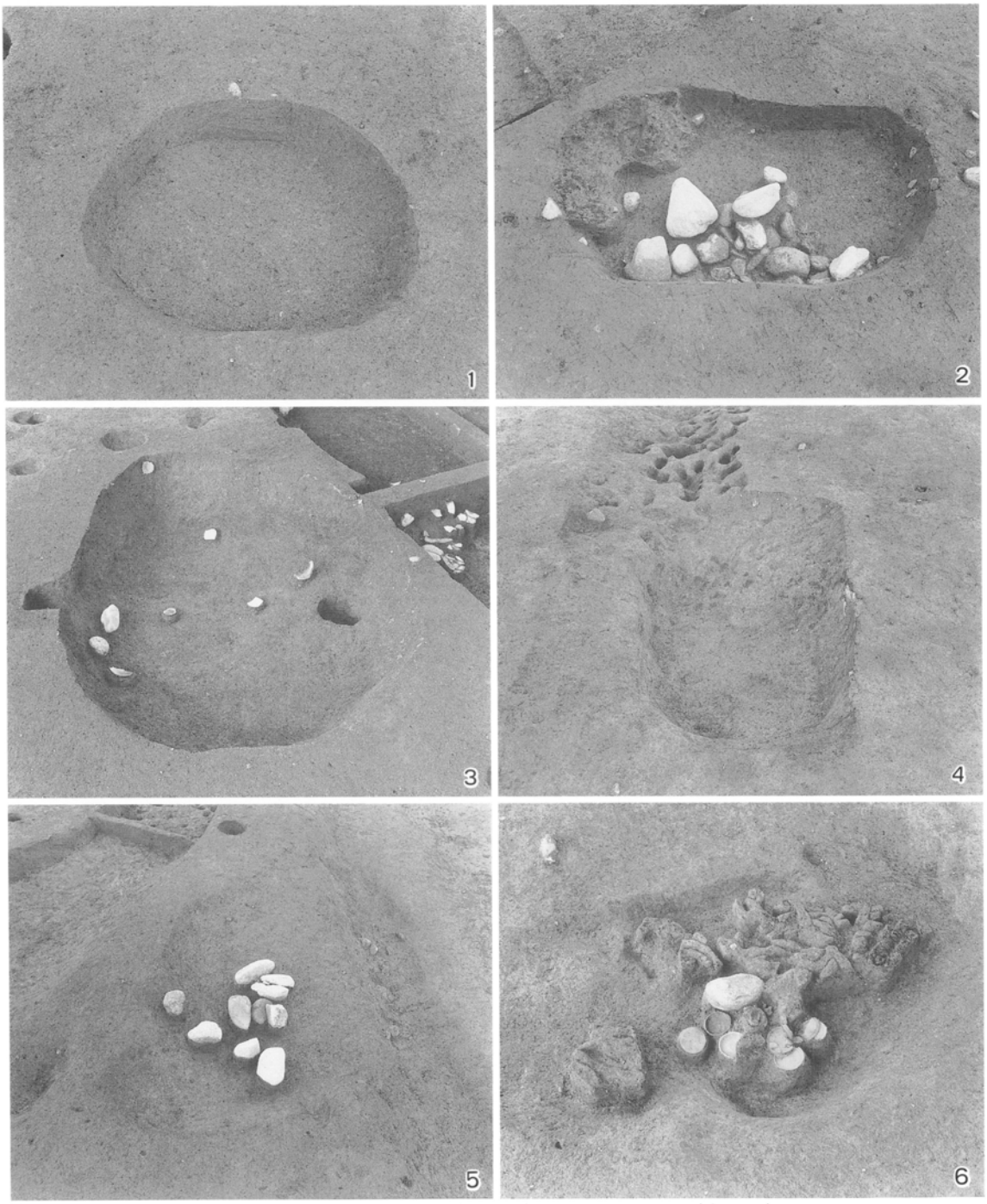


岩本遺跡　1．II群掘立柱建物全景（東から）
2．SK0001（西から）　3．SK0002（南から）



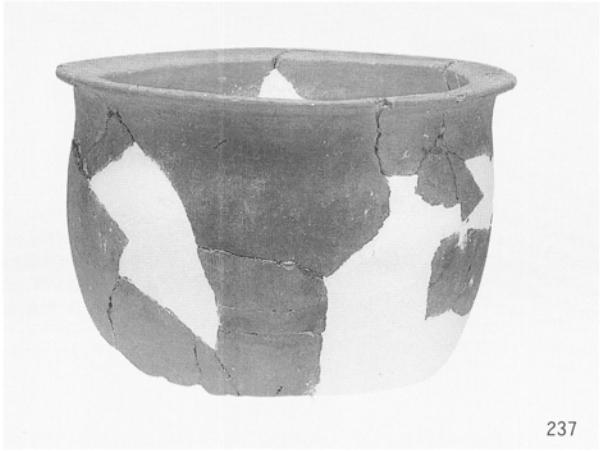
岩本遺跡　1．SK0003（南から）　2．SK0004（南から）
3．SK0005（北から）　4．SK0006（南から）
5．SK0007（西から）　6．SK0008（南から）

図版30

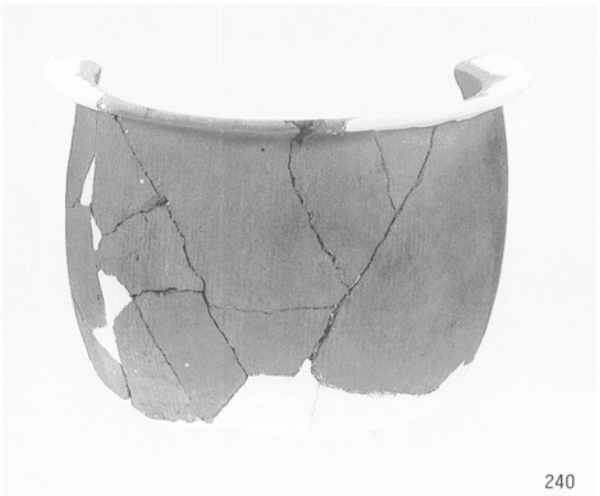


岩本遺跡　1．SK0009（南から）　2．SK0011（東から）
3．SK0021（南から）　4．SK0201（東から）
5．SK0203（東から）　6．SK0433（東から）

018


237

238


240

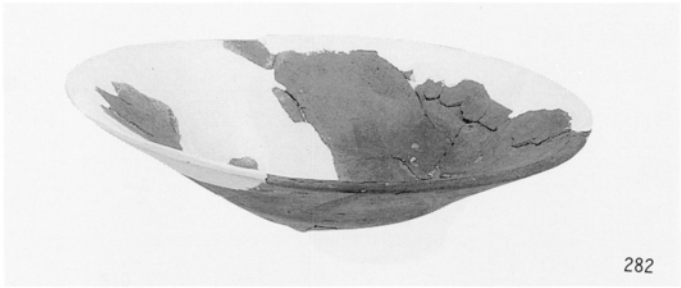
239

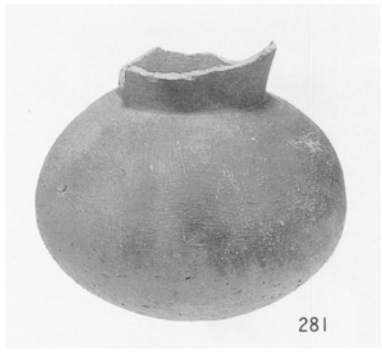
242

243

岩本遺跡出土遺物Ⅰ

279


282


281

290

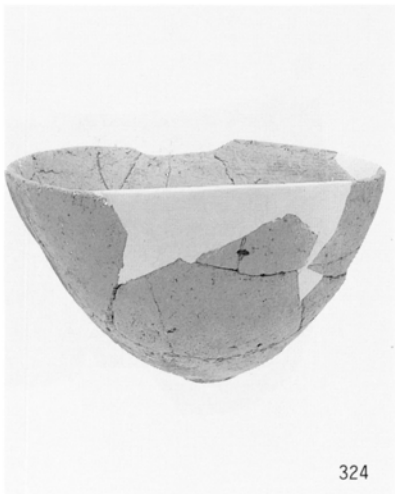
308

307

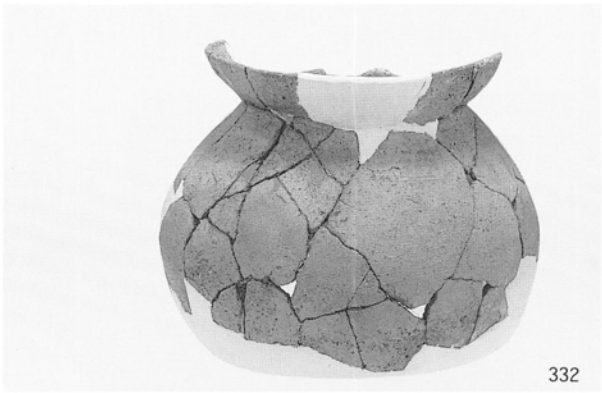
270

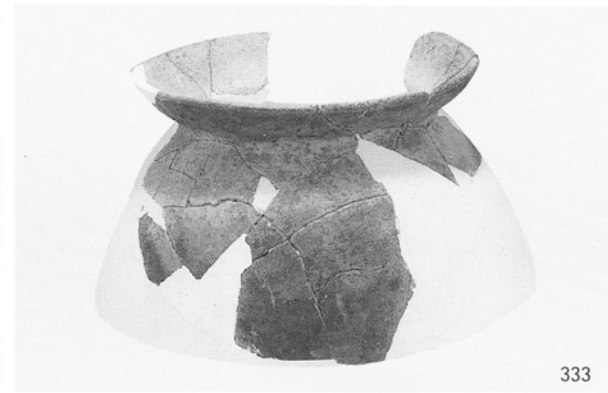
322

323

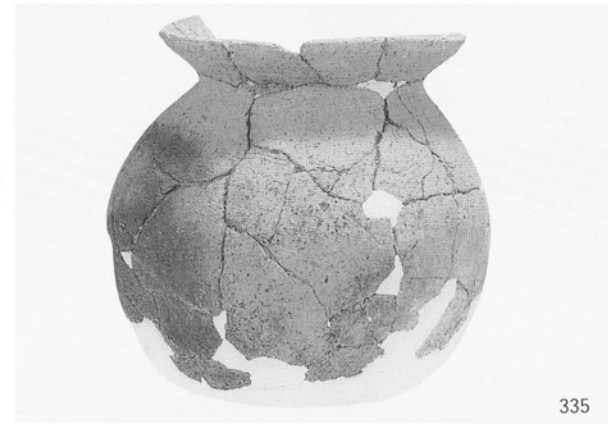

324

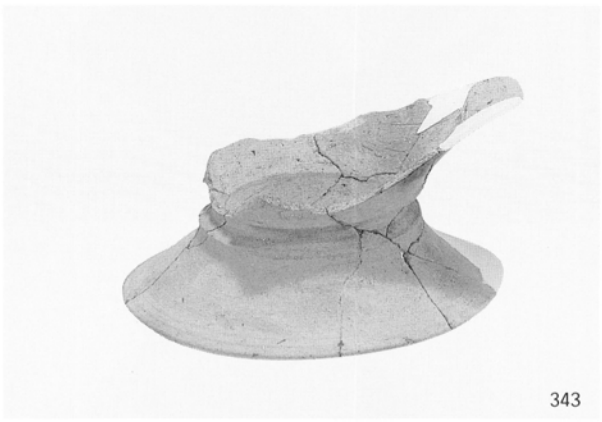
岩本遺跡出土遺物II


332


333

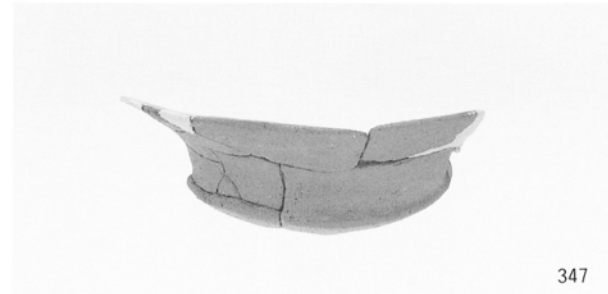
338

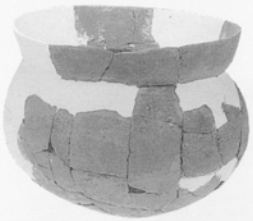

335


343

342

345

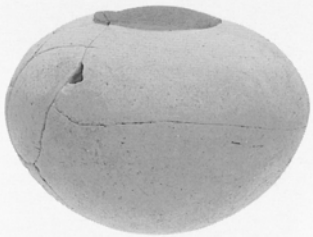

347

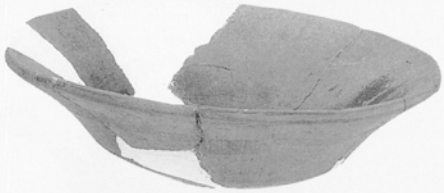

356

354

372

414


412

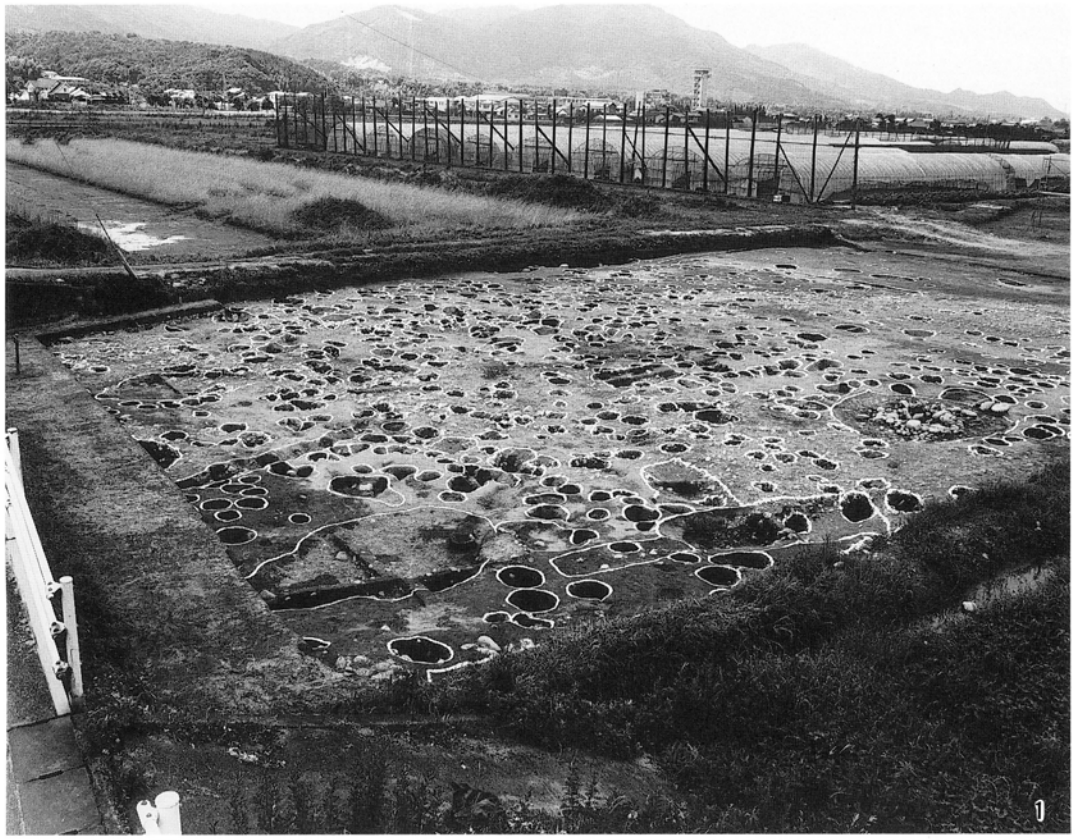

415

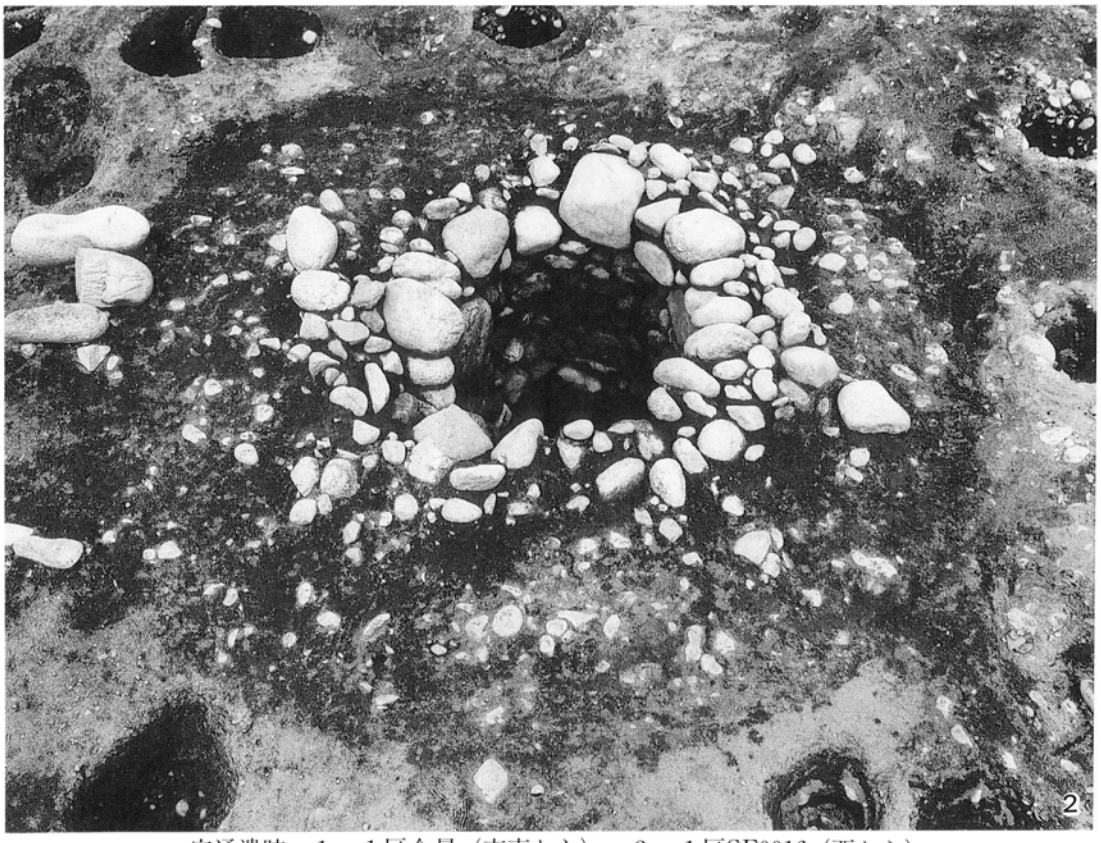
416

417

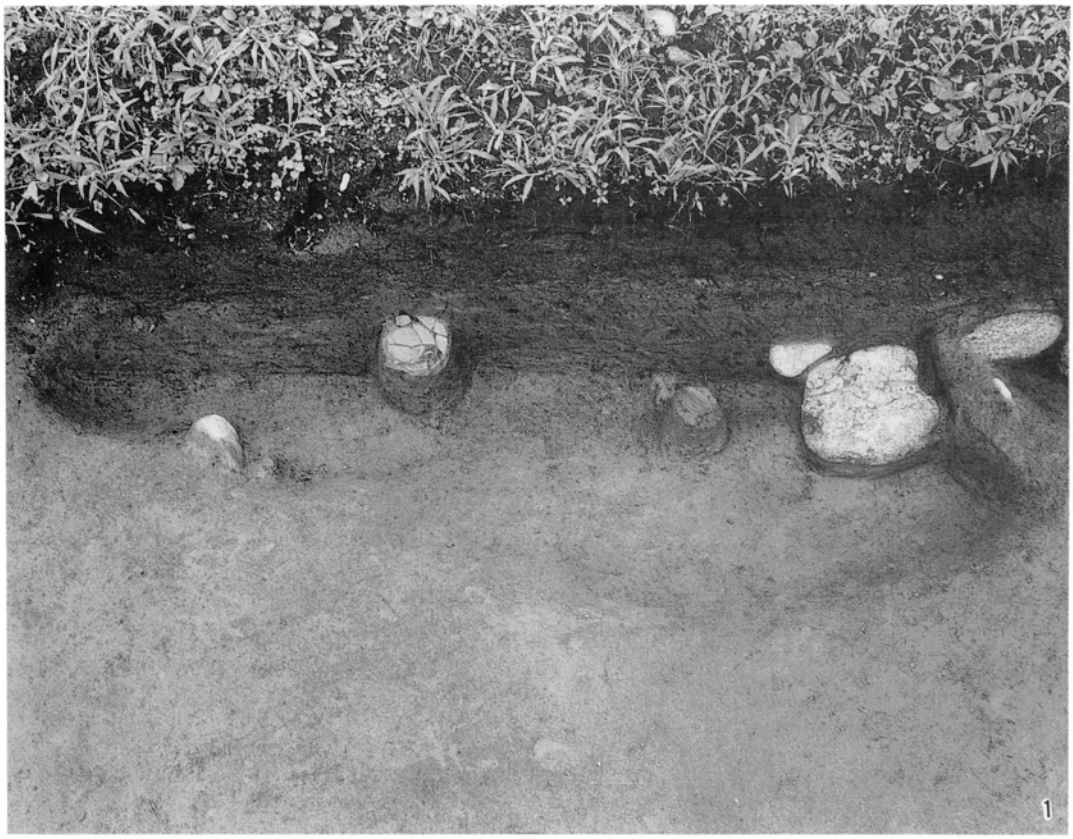
439

岩本遺跡出土遺物IV

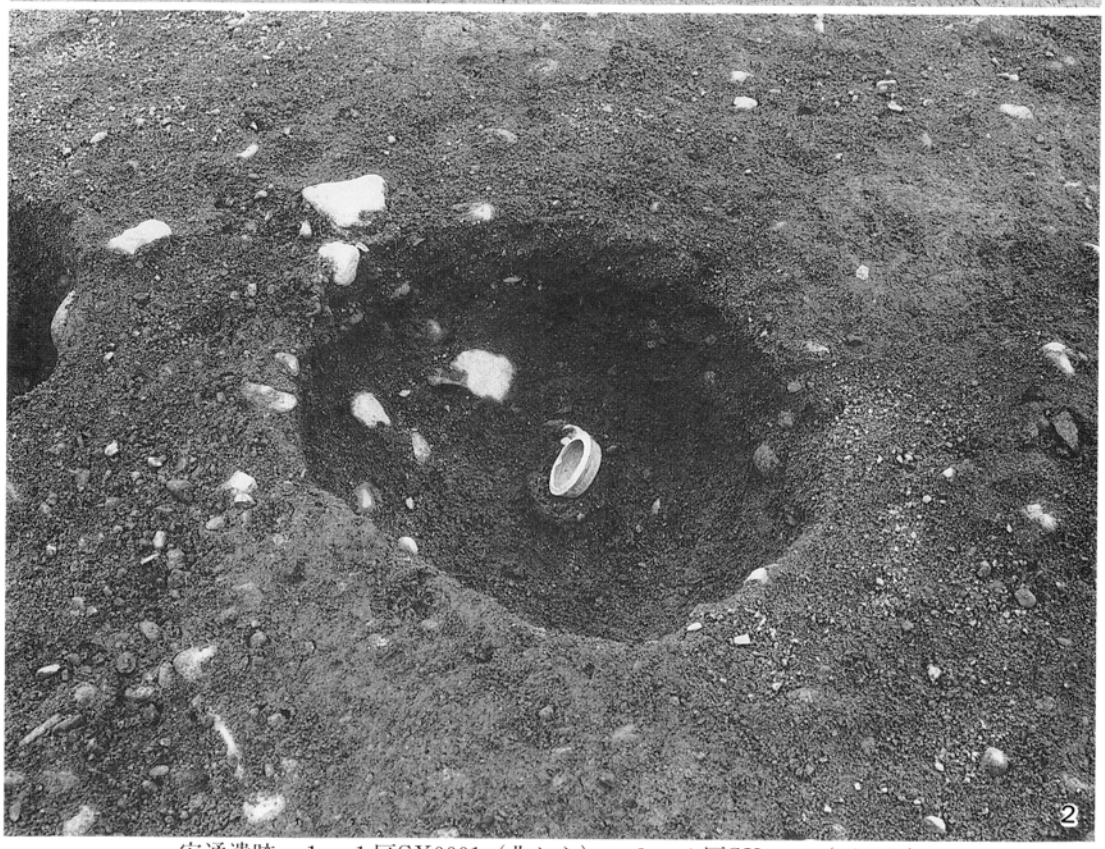




安通遺跡　1．1区全景（南東から）　2．1区SE0016（西から）



安通遺跡　1．1区SK0015（東から）　2．1区SK0017（西から）

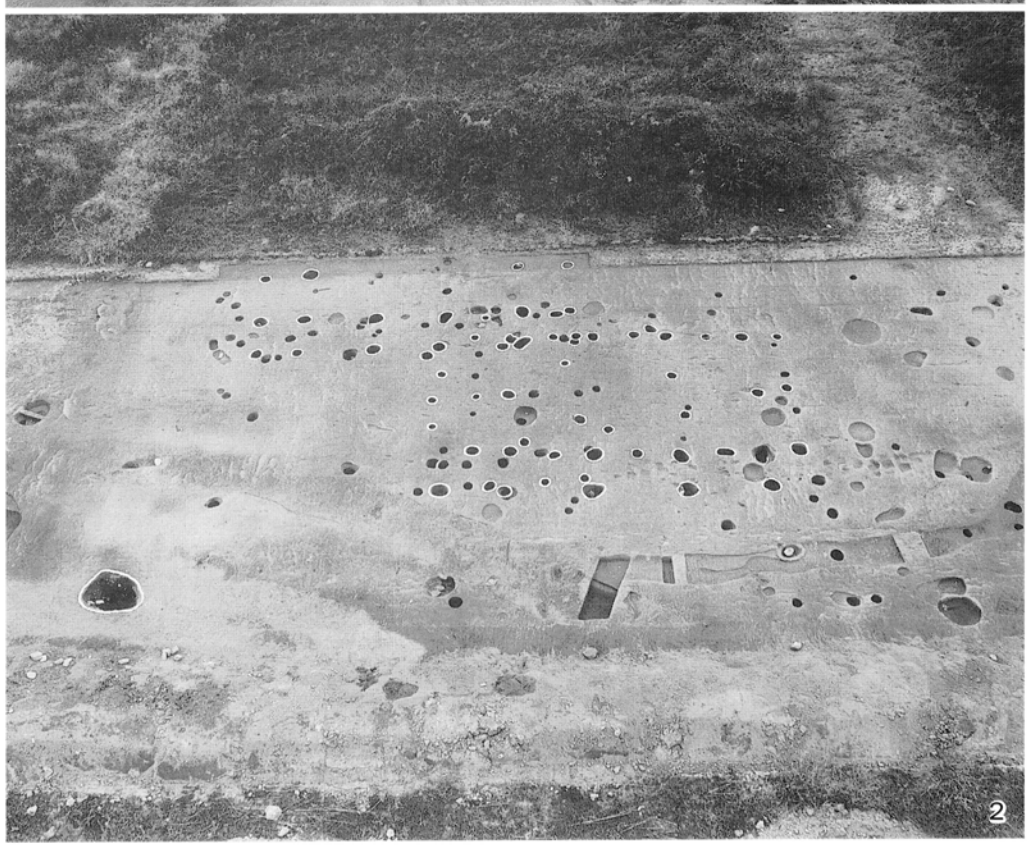


安通遺跡　1．1区SX0001（北から）　2．1区SX0006（西から）

安通遺跡　1．1区SX0010（東から）　2．2区全景（南から）

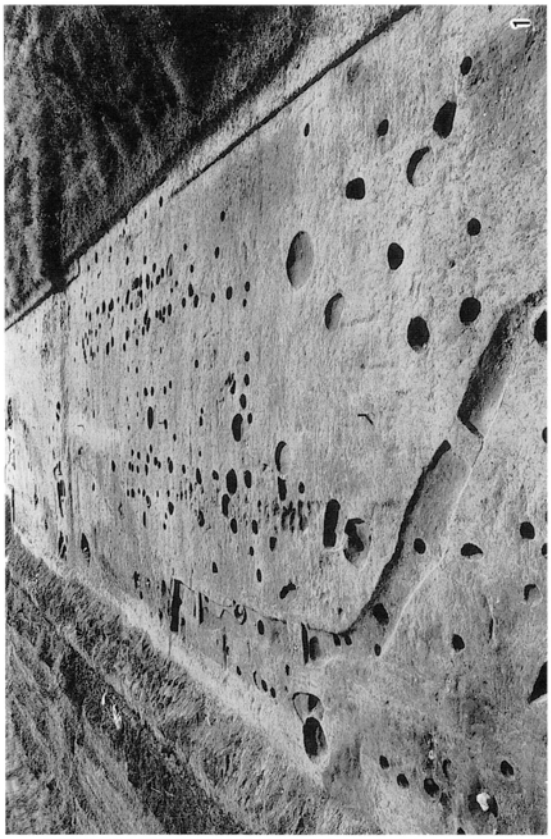
安通遺跡　1．3区全景（北から）　2．3区SK0401（西から）

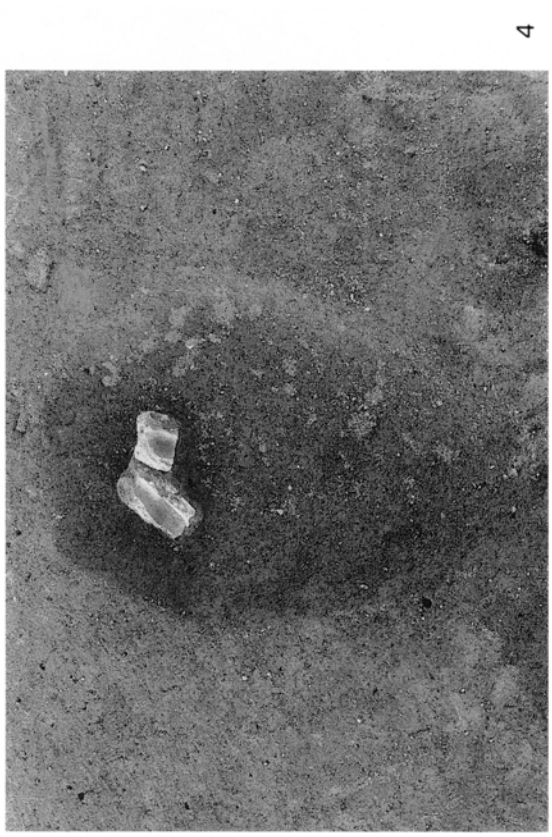
安通遺跡　1．3区SC0400（西から）　2．3区SC0400（西から）



安通遺跡　1．4区全景（南から）
2．4区掘立柱建物群（SB0581～0584）（東から）

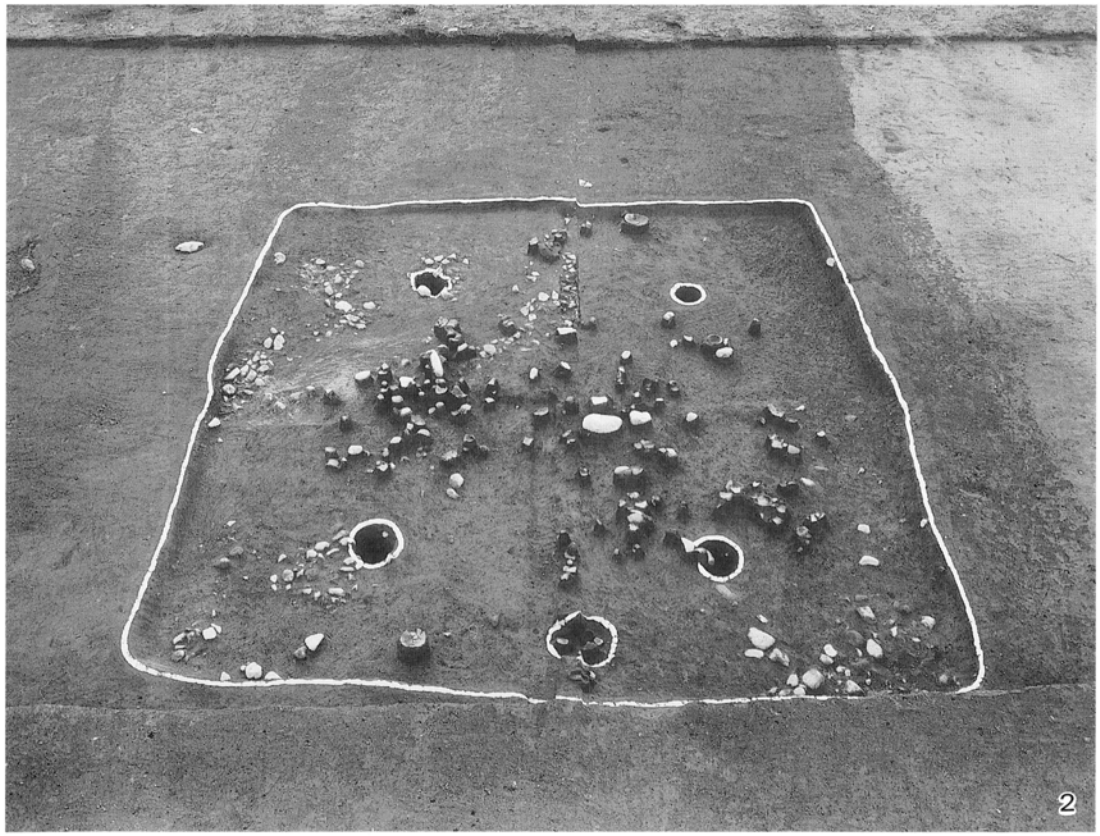
図版42





安通遺跡　1．4区掘立柱建物群（SB0581～0584）（北から）
2．4区SK0411（北から）　3．4区SK0412（北から）
4．4区SX0481（南から）

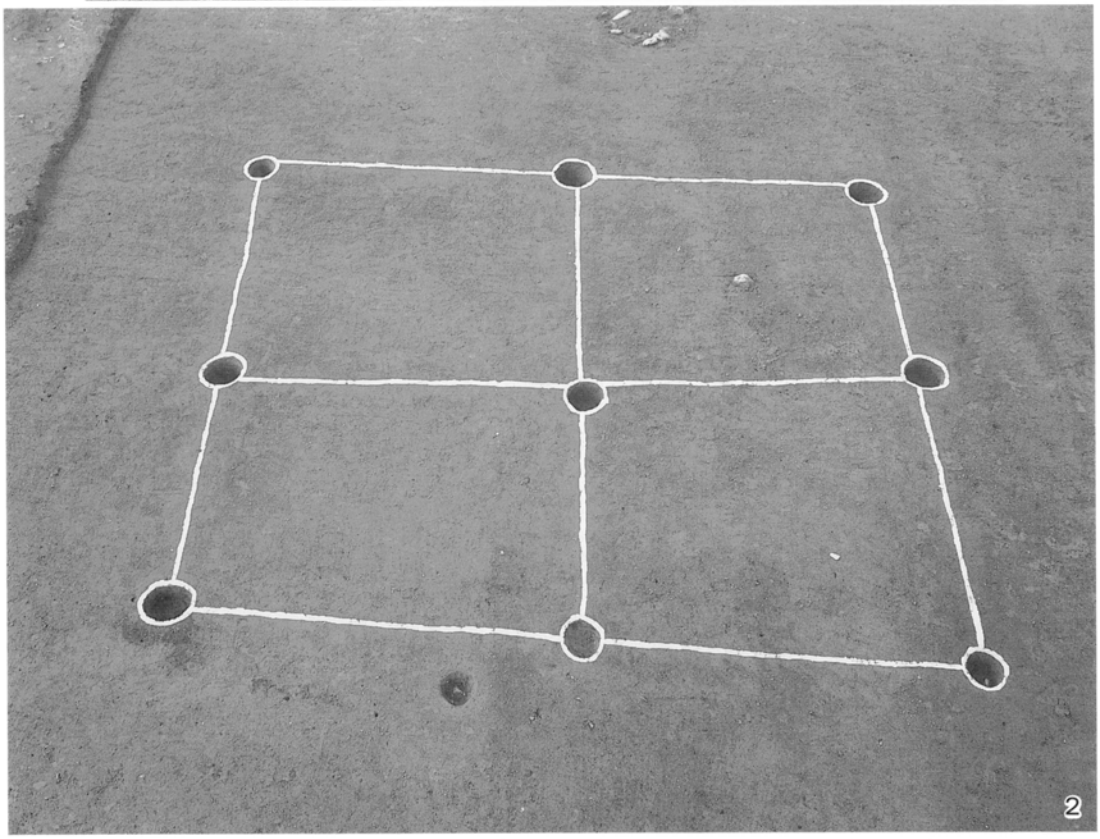
1



2

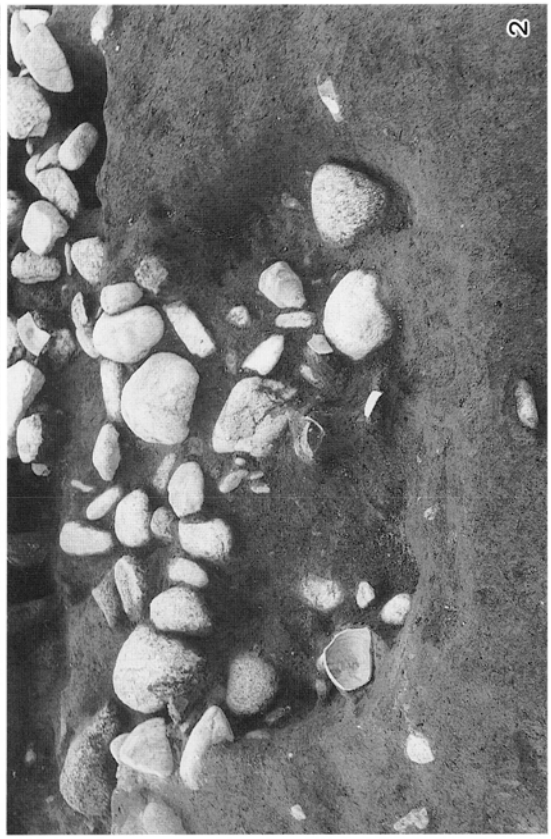
安通遺跡　1．5区全景（北から）　2．5区SC0606（東から）

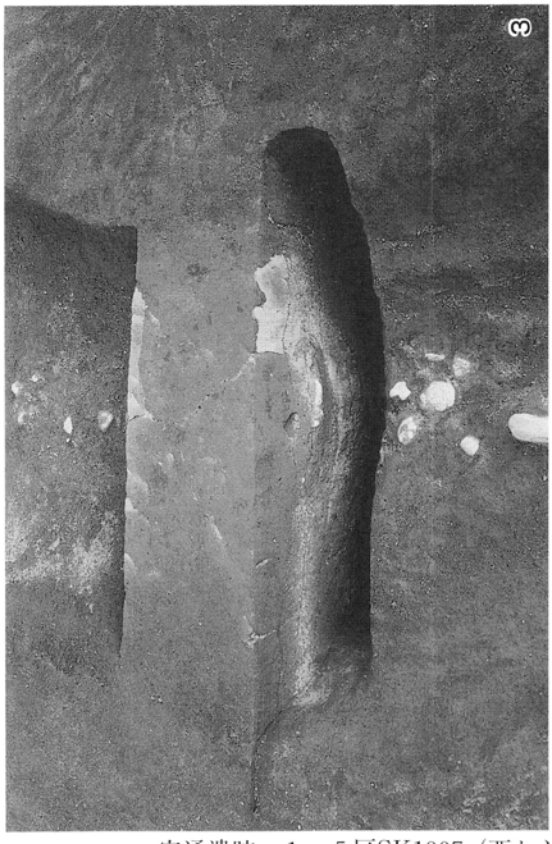
1

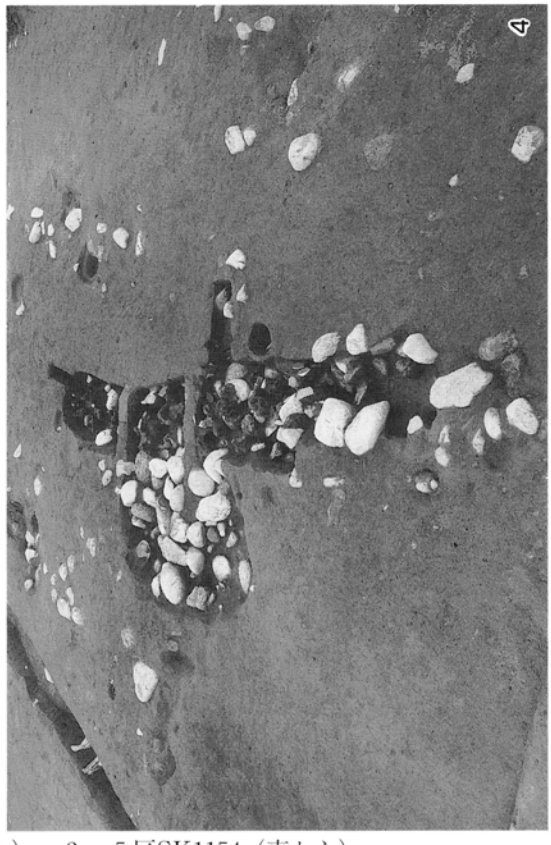


2

安通遺跡　1．5区SB1201（上空から）　2．5区SB1204（南から）

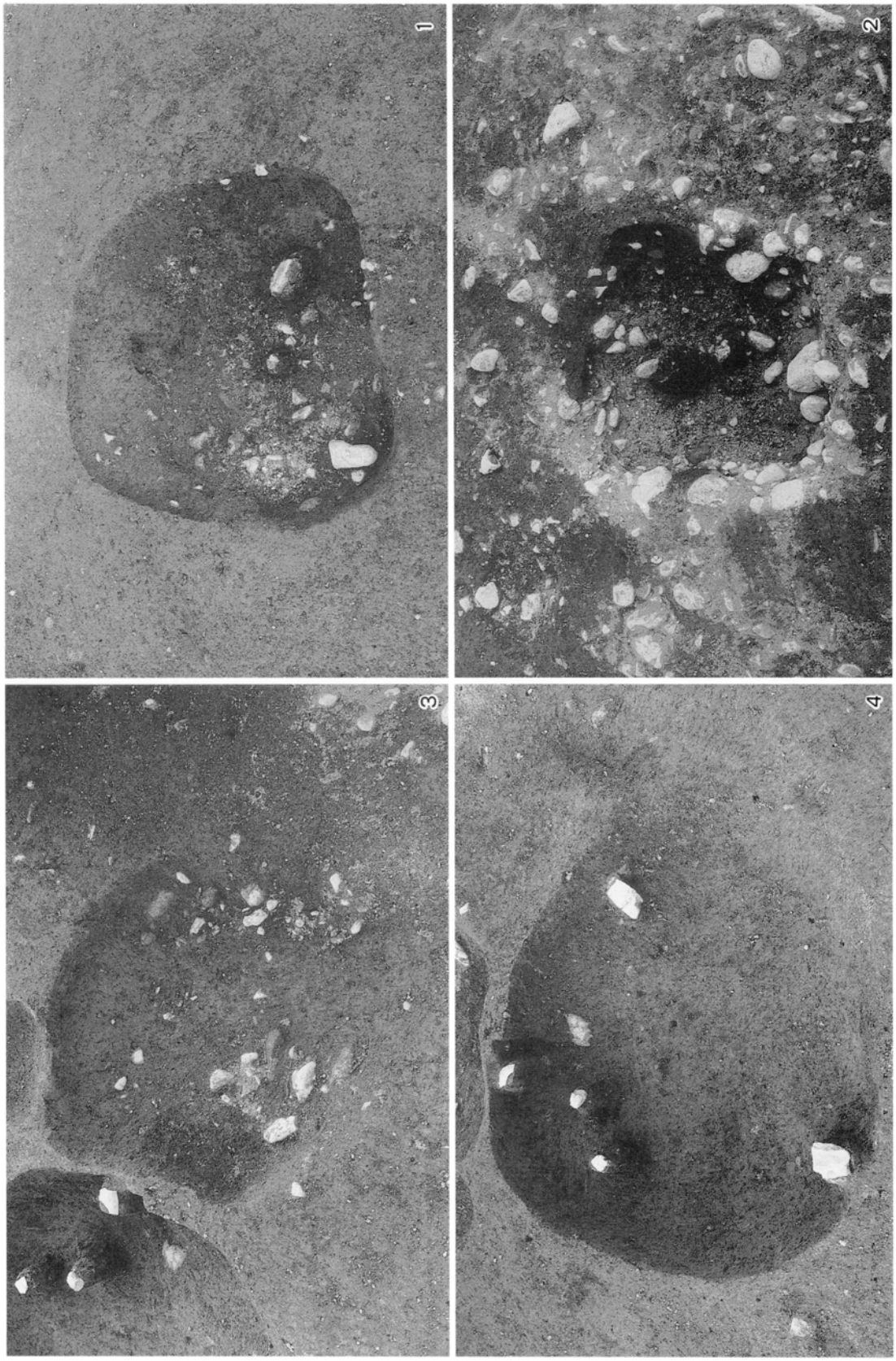






安通遺跡　1．5区SK1007（西から）　2．5区SK1154（東から）
3．5区SD0607土層（西から）　4．5区SD0610（北から）

図版46

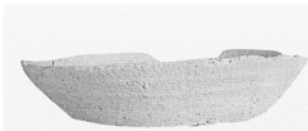


安通遺跡　1．5区SX0601（南から）　2．5区SX0602（西から）
3．5区SX0603（北から）　4．5区SX0604（東から）

009

011

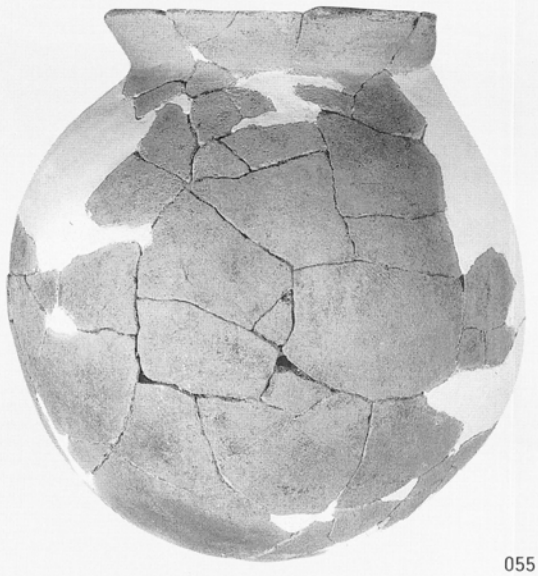
019

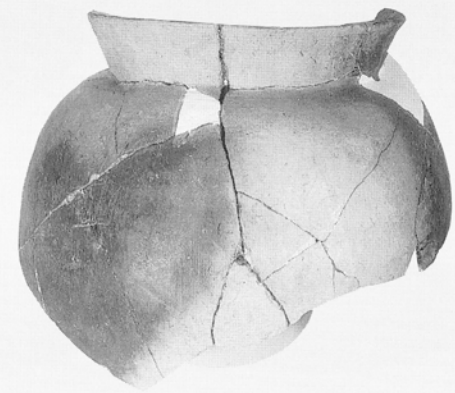

020

024

025

027


055


057

058

072

安通遺跡出土遺物Ⅰ

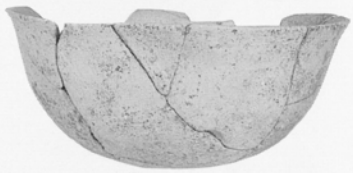
064

065

066

073

079


083

096

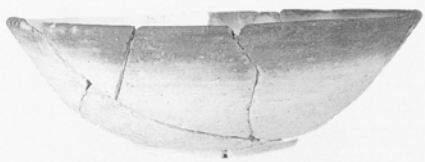
097

101

136

139

145


146

147

162

163

165

166

175

176

安通遺跡出土遺物II

177

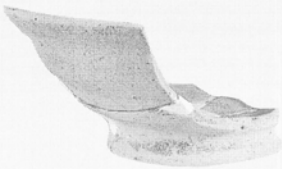
178

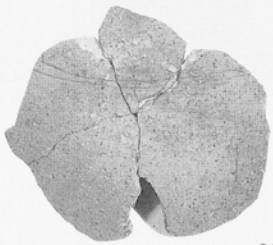
186

192

193

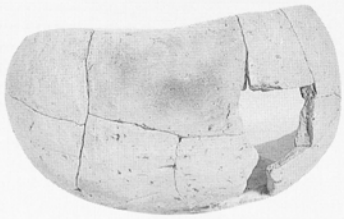
196


200


214

222

230


231

235

239

241

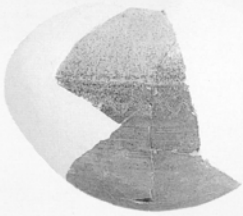
242

243

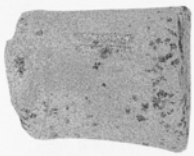
244

246

247


249

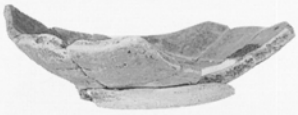
250


265

269

274

277


280

282

284

285

283

286

287

288

289

福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集

入　部　Ⅳ

1993．3．31
発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
印　刷　アド印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南5丁目20－20